

博士論文

〈1919～1945〉日本男性作家に築き上げられた中国女性像
——ジェンダー・主体性・ポストコロニアリズム

二〇二二年三月

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

WANG Yang

立命館大学審査博士論文

〈1919～1945〉日本男性作家に築き上
げられた中国女性像
——ジェンダー・主体性・ポストコロ
ニアリズム

(The Images of Chinese Females
Constructed by Japanese Male Writers
from 1919 to 1945:
Gender, Subjectivity, Post-colonialism)

2021年3月

March 2021

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program: Major in Humanities

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

オウ ヨウ

WANG Yang

研究指導教員：中川 成美 教授

Supervisor: Professor NAKAGAWA Shigemi

目次

【凡例】

序章

第一章 古典・欧米・娼婦——「東洋趣味」者の獵奇と想像

第一節 絡み合う漢詩文とエドガー・アラン・ポー

——谷崎潤一郎「西湖の月」における躰小姐像を手がかりに

第二節 「宋金花」像からみた重層的対立性をめぐって

——芥川龍之介「南京の基督」論

第三節 芥川龍之介「奇怪な再会」論

——日清戦争・近代化を背景にした「狂女」の生成

第二章 都市・自覚・革命——旅行者の観察と体験

第一節 激動する一九二〇年代を生きる中国女性像

——芥川龍之介「湖南の扇」論

第二節 「芳秋蘭」の虚と実

——横光利一『上海』における女性共産黨員をめぐって

第三節 「北京」の女性像・女性的北京像における二重性

——阿部知二『北京』を中心に

第三章 暴力・「姑娘」・「女兵」——従軍者の記録と歪曲

第一節 戦時下文学に塑像された「姑娘」たち

——石川達三・火野葦平・上田広を中心に

第二節 挟撃される「身体」

——田村泰次郎「肉体の悪魔」と丁玲文学における女性黨員を比較して

第三節 女性視点による中国「女傑」

：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
92	79	79	67	54	41	41	29	20	7	7	1

——武田泰淳「廬州風景」論

第四章 「新女性」・Shanghai・〈脱構築〉——居留者の回想と展望

第一節 阿部知二の〈上海もの〉における「新女性」

——関露・田村俊子との関連性を手がかりに——

第二節 武田泰淳の上海女性イメージにおける〈混血性〉

——「閨姑娘」から「陸淑華」へ——

終章

注釈

参考文献

初出一覧

謝辞

………	………	………	………	………	………	………	………	………
166	164	160	146	139	128	117	117	106

【凡例】

本論において断りが無い限り、谷崎潤一郎のテキストの引用は全て『谷崎潤一郎全集』（中央公論新社、二〇一五年五月）と二〇一七年二月）による。『西湖佳話』の引用は Kindle デジタル版、墨浪子著「西湖佳話」による。エドガー・アラン・ポー関連のテキスト引用は全てエドガー・アラン・ポー著、小川高義訳「アッシャー家の崩壊／黄金虫」（光文社、二〇一六年五月二〇日）による。芥川龍之介のテキストの引用は『芥川龍之介全集』（岩波書店、一九九五年十一月）と一九九八年三月）による。横光利一『上海』の引用は岩波書店版（二〇〇八・二）に、『上海』以外の横光利一のテキストの引用は『定本横光利一全集』（河出書房新社、一九八一・六）と一九九九・一〇）による。小林多喜二「党生活者」の引用は『現代日本文学大系』⁵⁵ 宮本百合子 小林多喜二集』（筑摩書房、一九六九・一〇）による。阿部知二のテキストの引用は『阿部知二全集』第二卷（河出書房新社、一九七四年六月）と一九七五年七月）による。石川達三「生きている兵隊」や上田広「黄塵」の引用は『戦争の文学 1』（東都書房、一九六五年）による。火野葦平「花と兵隊」の引用は『日本現代文学全集 8 7 丹羽文雄・火野葦平集』（講談社、一九六二年四月）による。上田広「鮑慶郷」の引用は『現代日本文学大系 9 1 現代名作集（一）』（筑摩書房、一九七三年三月）による。田村泰次郎のテキストの引用は秦昌弘・尾西康充編『田村泰次郎選集』（日本図書センター、二〇〇五年四月）による。丁玲のテキストの引用は『丁玲全集』（河北人民出版社、二〇〇一年十二月）によるが、日本語訳は拙訳となる。「霞村にいた時」のテキストは丁玲作、岡崎俊夫訳『霞村にいた時 他六篇』（岩波書店、一九五六年十月五日）による。武田泰淳のテキストの引用は『武田泰淳全集』（筑摩書房、一九七八年一月）と一九七九年七月）による。

旧字を適宜に新字に改めた。断りのない傍線部は筆者による。また、本論のなかで筆者は「支那」や「支那人」など今日的に見ると不適切な用語を用いる箇所があるが、原文を尊重したうえで、当時の文脈を再現するために使用しているのである。

序章

一、研究背景・問題提起

明治維新を経て、日清・日露戦争の勝利によって資本主義強国の仲間入りをしたことは、日本の対外拡張の重要な一環となる海外航路・線路―なかんずく中日間のルート―の開拓に拍車をかけた。それに伴う中国旅行ブームに数多くの名高い日本人作家が触発されて自然、風俗、社会、歴史、政経など中国の多方面にわたる見聞録、紀行文、随筆や小説などを大量に書き残している。それらは作家たちが中国に足を踏み入れる前に創作した中国題材の作品とともに、相応の文学的価値を持っているばかりか、中日交流史の研究にも大いに寄与している。それらのほとんどは日本男性作家が描いた（中国もの）であるがその中で、「中国女性像」は中国像・中国言説の骨子として浮上してくる。ここで、「中国女性」という存在は文学創作に先立って「女性（性）」／「男性（性）」、「中国人」／「日本人」という二項対立にある二重の他者になることが考えられる。一方において、「中国女性」はテクスト成立の際に「書く・語る主体」＝作者に対して「書かれる・語られる客体」として再び他者化されたうえに、テクストそれぞれの歴史的・文化的・社会的コンテクストによって作者または（しばしば作者の分身である）主人公、視点人物と「支配」／「被支配」、「上流階級」／「下流階級」、「消費する」／「消費される」など多様な構図をなして重層的な他者になる可能性がある。したがって、日本男性作家によって構築されたテクストにおいて、この重層的な他者性を備える中国女性イメージを分析・解明することの必要性が大きいことは言うまでもない。

ところが、今まで中国を題材とする日本近現代文学作品に関する先行研究を遡ってみると、以下のような流れが判明する。まず、日本人研究者の論著を繙いておく。二十世紀六十年代末から七十年代初にかけての著書に『近代日本文学における中国像』（村松定孝・紅野敏郎他編、有斐閣、一九七五年）、『日本人にとつての中国像』（竹内実著、春秋社、一九六六年・岩波書店、一九九二年八月二十日二版）が挙げられる。『近代日本文学における中国像』は「明治・大正文学における中国像」、「昭和（戦前・戦中）文学における中国像」や「戦後の文学における中国像」の時間順による三部に大別して、明治維新から中国の「文化大革命」まで有名な作家、学者による中国に関する論述、小説や詩歌などを全面的に取り扱ったことは評価すべきところだが、テクストの引用に社会背景の紹介と評論を加えた点だけという点は物足りないと言わざるを得ない。中国文学研究者竹内実の論文集『日本人にとつての中国像』に組み込まれた「昭和文学における中国像」という論文は主に昭和初期から戦後までの中国を題材とする日本文学を整理して緻密に考察したうえで、「革命的中国像」、「空白的中国

像」、「贖罪的中国像」とそれぞれ戦前・戦中・戦後の中国像の特色を結論づけている（岩波書店版、一八四頁）。八十〜九十年代に入り、川西政明氏『わが幻の国』（講談社、一九九六年十一月）は、上海、北京、揚州、南京などの中国都市の歴史の変遷を辿りつつ、都市イメージが中日両国のテクストの中でいかに表象されてきたかをまとめている。祖父江昭二氏『近代日本文学への射程―その視角と基盤と―』（未来社、一九九八年九月）の第一部「近代日本の文学と朝鮮・中国」は日本近代文学の流派を問わぬテクストからみた帝国主義とアジア主義の混在に目が届いているものの、詳らかなテクスト分析に欠けている弱点があることは否めない。川村湊氏は『異郷の昭和文学―「満州」と近代日本』（岩波書店、一九九〇年十月）、『文学から見る「満州」―「五族協和」の夢と現実』（吉川弘文館、一九九八年十一月）の二作の中に客観的なテクスト分析と論述で、過去の日本の植民地だった「満州」は近代日本文学によってどのような描出され、誤読されてきたかをあぶり出している。和田博文氏は『言語都市・上海―1840-1945』（藤原書店、一九九九年九月）で、上海を日本近代文学のテクストによって構築された言語表象としてとらえ、日本人の中にある上海イメージは実在の都市上海の存在に由来したわけではなく、テクストにおける上海から生じたのだと主張している。

和田氏の着眼点を受け継いだかのように、中国人研究者趙夢雲氏や劉建輝氏はそれぞれ『上海・文学残像―日本人作家の光と影』（田畑書店、二〇〇〇年五月）と『魔都上海―日本知識人の「近代」体験』（講談社、二〇〇〇年六月・筑摩書房、二〇一〇年八月、増補版）を前後して上梓した。中国の歴史・文化・社会背景への理解、把握のうえで優位性を有する両氏は、歴史的・文化的コンテクストから日本文学を観照する視点を提供している。また、中国像を考察している以下のような学位論文が数えられる。李雁南氏は博士論文『近代日本文学中的「中国形象」』（『近代日本文学における中国像』、筆者訳、暨南大学、二〇〇五年）において、形象学の視座から、テクスト分析の方法で一八六八年から一九四五年にいたるまでの日本文学における中国像の変遷史を明治・大正・昭和時代に大別して整理している。中国像の変遷を包括的に論じる意味で評価すべき集大成だが、中国像の包摂範囲が広すぎて、論述の主軸が特定しておらず「総花的」などところがあることは否めない。李雁南氏以降の日本近現代文学における中国像に関する博士論文は一人か二人の作家に限定する傾向にある。例えば、陳雲哲氏は『跨界的想象与无界的书写』、『越境の想像と限らない描写』、筆者訳、吉林大学、二〇一〇年）のなかで、李雁南氏の研究を細分化したかのように、「中国像」、「中国趣味」と「オリエンタリズム」の本質を再検討したうえで、それまでの研究に見落とされた谷崎潤一郎と芥川龍之介のテクストを解説して、谷崎と芥川の中国像にある本質的な相違を浮き彫りにした。また、于天祎氏『芥川龍之介文本中的中国情结研究』

（『芥川龍之介文学の中国コンプレックスについて』、筆者訳、山東大学、二〇〇七年）、卢茂君氏（『井上靖的中国題材历史小説探究』、『井上靖の中国題材の歴史小説研究』、筆者訳、吉林大学、二〇〇八年）、王璐氏（『谷崎潤一郎与中国』、『谷崎潤一郎と中国』、筆者訳、吉林大学、二〇一二年）などが数えられる。その中国像研究のなかで、張艶傑氏（『芥川龍之介筆下的中国女性形象』、『芥川龍之介の描く中国女性像』、筆者訳、福建師範大学、二〇〇九年）、白洪宇氏（『探析芥川龙之介作品中的中国女性形象』、『芥川龍之介の作品からみる中国女性像』、筆者訳、遼寧師範大学、二〇一三年）や、韓歆氏（『芥川龍之介作品中的女性形象』、与作家的中国情结』、『芥川龍之介作品中の女性像と作家の中国コンプレックス』、東北師範大学、二〇一六年）のように、特定の作家の作品にある中国女性像に関する数篇の修士論文が出現するようになった。だが、修士論文の特性上、研究範囲や射程などのうえで不毛を呈していたうえに、とりわけ芥川龍之介に集中する偏りも明らかである。

要するに、近現代日本文学における中国女性像に対するアナライズは往々にして「中国像」というやや漠然としたタームへの分析に取り込まれるか不問に付されるかまたは一人か二人の作家の作品を中心とする傾向が強い。しかしながら、冒頭にも述べたように、日本男性作家の描く中国女性像に照明をあてることは、中日文化交流史の断片をつなぎ合わせることに役立つだけでなく、中日両国のジェンダー研究に新たな視角を提示することも期待できる。したがって、本研究は「中国女性像」を今までなされてきた「中国像」研究から独立させて、それなりの足場を新しく作り固めようとしている。一方において、興味深いことに、例えばこれまで盛んに研究されてきた谷崎潤一郎、芥川龍之介、横光利一や阿部知二という四人の作家の中国旅行には明らかに関連性や継承性が見られる。谷崎潤一郎の中国旅行やそれにより生み出された「中国もの」に刺激されて芥川龍之介は訪中を実現したと言えるが、小説「南京の基督」の結末に加えられた谷崎への謝辞からもその一端を伺える。それから、芥川龍之介のアドバイスで横光利一が上海に足を運んだことを、横光はエッセイにおいて明記している。また、阿部知二が横光利一に対するライバル意識から北京に行ったことは、彼の評論や横光との書簡により見て取れる。それに加えて、この四人の作家が全員文化学院で教鞭をとった経験をもつ。さらに、例えば阿部知二は生涯六回も中国行きの経験があるため、その「中国もの」も自ずと創作時期の差異によって一定の変化を見せてきた一方で、その中国行きは中日戦争という重要な歴史的コンテクストを挟んでいる。すると、日本近代の男性作家に描出された中国女性像はいかなる屈折した変化をたどってきたか、それが中日全面戦争といかに連動しているかなどの問題点が浮上してくる。それゆえに、本研究はそうした問題点の解決にも向けて、ある特定の作家ではなく、中日全面戦争を包摂する時間帯を軸に、ことに互いに影響関係をもつ作

家の作品を考察していく。

二、研究方法

上述した問題点を考慮に入れて、本研究は一九一九年前後から一九四五年前後までに発表された、一九一九から一九四五までを作中の時間背景とする、中国体験をもつ日本男性作家による代表的小説におけるヒロイン或は主要人物の中国人女性像を研究対象とする。したがって、小説の発表された時間が選定した範囲を少し逸するものもあるが、作中の時間背景が範囲内にあるため取り扱っていく。一九一九から一九四五までの時間帯を選定したのは、一九一九年が第一次世界大戦が終結した年であり、近代的意識や思想に覚醒し、主体的に女性運動を担う女性を輩出した、中国女性の転機とも言える五四運動が繰り広げられた年でもあるからである。また、一九四五年は言うまでもないが、中国と日本両国にとって戦争が終結する重要な転換点である。この時期の中国女性史を簡単に紐解くと、一九〇三年出版された金天翮『女界鐘』を中国におけるフェミニズム思想史の里程碑として、五四運動前後女性解放に関する課題が未曾有の注目を集めるようになった。五四時期の女性運動の特徴として、「女性権利への追求が重層的で複眼的であること」、「五四時期の青年たちは身を持って急進的な方法で女性が国民としての権利を得ようとしたこと」や、「国民—国家、女性—国家、女国民—権利の關係に対して新たな認識を獲得したこと」が挙げられる。一九二〇年代に入ると「新女性」という呼称が出現して、「思想や追求のある、生計能力をもつ」、つまり伝統的専業主婦と著しく異なる特質を有する女性たちをさす。彼女らはある程度まで女性の自尊や自立した精神をあらわしたため、時代発展の申し子とされていた。三〇年代の中日戦争時期になると、「新女性」たちはさまざまな形で戦争に身を投じたばかりか、より広い範囲で女性権利のために奔走していたのである。そのなかの一部の女性は革命者或は戦闘員になるにつれて、「女戦士」というような概念も流行するようになってきた^三。さらに、男性作家に限定する理由は、作品からみると中国人女性を主要人物とするものが女性作家より圧倒的に多いうえに、前述したように、男性作家が描いた女性像がもっと複雑な問題点を孕んでいることにある。なお、小説の虚实混交という特質から、それに作家の想像力や人物像を構築する能力が十分に発揮できるため、小説を主な研究文体とする。

つまるところ、本研究は中国女性が日本男性文学のテクストにおいていかに語られて変貌してきたのか、戦争といかなる連動関係にあるのか、日本の男性作家たちが構築したディスクール、エクリチュールのなかにどれほどの能動性や主体性が獲得できるのかなどを同時代の中国史料や中国文学作品とを比較しながら究明して

みる。言うに及ばず、男性作家の中国女性認識においてそれぞれの独自性があるが、本研究は彼等の中国女性認識がほかの作家、文学に影響されたり、時代や歴史と連動したりする部分に重きを置いている。また、「満州文学」や「台湾文学」はそれぞれ研究上の独自性や特殊性から本研究においては割愛しておく。それと同時に、歴史学や社会学研究も視野に入れて、ジェンダー・スターディーズやポスト・コロニアリズムの理論を基盤に、テキスト分析や中日（欧米）比較文学などの方法で研究を進めていく。

三、章節構成

本研究は全体的に通時的に、作家が中国との関係性（例えば中国に行った際の身分、目的や、中国を見る視線など）により、四章を立てたうえで、各章においてもなるべく発表された時間順を追って各節を配置している。

谷崎潤一郎や（中国に行く前の）芥川龍之介という「東洋趣味」者の中国女性像を第一章とする。第一節では一九一八年の中国旅行から結実した谷崎潤一郎「西湖の月」（『改造』、一九一九年六月）における「酈小姐」像を手がかりに、そこにおける漢詩文とエドガー・アラン・ポー文学との対決と融合を考察する。続いて、第二節において、谷崎「秦淮の夜」に触発された芥川龍之介「南京の基督」（『中央公論』、一九二〇年七月）の「宋金花」像にある重層的な対立構図や、モーパッサン文学との影響関係について分析する。また、第三節では「南京の基督」と類似する構図をもっている「奇怪な再会」（『大阪毎日新聞』、一九二一年一月〜二月）にある「お蓮」像や、彼女を（狂女）に追いやった近代化や戦争を検討する。本作内の時間背景は日清戦争直後であり、つまり本研究が設定した時間軸からはみ出したが、「南京の基督」との緊密な関係性からあえて取り上げる。

第二章は中国に赴いた後の芥川龍之介、芥川のアドバイスで上海に旅した横光利一や、横光へのライバル意識から北京行きをした阿部知二という三人の旅行者の観察や体験を取り扱う。第一節では湖南長沙を舞台に、芥川龍之介の中国体験に基づいた「湖南の扇」（『中央公論』、一九二六年一月）における「含芳」と「玉蘭」という二人の湖南女性を中心に、二人の女性像にある主体的意識や革命的情熱を炙りだしたうえで、それと都市「湖南」との関連性をも顕在化させる。第二節において、横光利一『上海』（『改造』、一九二八年十一月〜一九三一年十一月）にある国際都市上海で活躍している女性共産党員「芳秋蘭」のモデルを検証したうえで、そういった女性革命者の造形における真実性と虚構性について分析して、「芳秋蘭」像を捉え直す。第三節では阿部知二『北京』（第一書房、一九三八年四月）を中心とする（北京もの）における中国女性「鴻妹」、「楊素清」や

「少女」のイメージの生成、機能を考察して、それと北京表象の関係性を解明する。

第三章は中日戦争下の中国戦場を背景にした、従軍作家や兵隊作家らの記録と回想を取り上げる。第一節は従軍作家として南京へ赴いた石川達三『生きてゐる兵隊』（『中央公論』、一九三八年三月号）、兵隊作家火野葦平の杭州を舞台とする『花と兵隊』（『東京朝日新聞』、一九三八年十二月二十夕〜一九三九年六月二十四夕）や、兵隊作家上田広の山西省を背景にした「鮑慶郷」（『中央公論』、一九三八年八月）、「黄塵」（『大陸』、一九三八年十月）における日本軍に「姑娘」と呼ばれた現地中国女性像を抽出して、そのような「姑娘」イメージの現実性、独自性を解明する。第二節では戦後の言論自由を背景に発表された、田村泰次郎が彼の山西省の従軍体験に基づいて創作した「肉体の悪魔」（『世界文化』、一九四六年九月）における女性黨員「張沢民」を、中国女性作家丁玲の演劇「重逢」（「再会」、筆者訳、一九三七年八月）のヒロイン「白蘭」や小説「我在霞村的時候」（「霞村にいた時」、『中国文化』、一九四一年六月）のヒロイン「貞貞」と比較して再検討する。第三節では武田泰淳がその安徽省での従軍経歴に基づいて日本人看護婦の視点を借りて書き上げた「廬州風景」（『才子佳人』収録、東方書局、一九四七年十一月）に登場する中国人看護婦「楊さん」からみた中国文学にある「侠女」イメージや武田の身近にある「女傑」イメージを考察する。

第四章では第三章の従軍者たちの目線と異なる、一九四五年中日全面戦争が終息する直前まで国際都市（上海）に滞在していた阿部知二や武田泰淳が代表する日本人居留者（民）の記憶や展望を取り上げる一方で、この二人の作家の従来の日本男性作家が築き上げてきた中国女性像に対する（脱構築）の試みをも論じる。第一節において、一九四三年の秋から一九四五年四月まで阿部知二の二回の上海滞在に執筆のヒントを得られた「緑衣」（『新潮』、一九四六年一月）や「陸軍宿舎」（「改造」、一九四六年三月）における「李媚」や「曹小姐」像の成立を捉え返す。第二節では、「中日文化協会」に勤めていた武田泰淳の三人の中国女性「同僚」をモデルにした、「月光都市」（『人間美学』、一九四八年十二月）の天主教徒「閻姑娘」、「才女」（『随筆中国』第二号初出）が発行年月未詳、後に一九四七年十一月に東方書局発行の『才子佳人』に収録）にある有能な職業女性「周女士」や「女の国籍」（『小説新潮』、一九五一年十月）の混血児「私」こと「陸淑華」イメージを解読することにより、そうした上海女性像と都市上海、戦争との関係性を究明したうえで、武田泰淳の（上海もの）における方法としての（混血）や（多元）を検討する。

第一章 古典・欧米・娼婦——「東洋趣味」者の猟奇と想像

第一章は漢文学の教養と欧米文学の深い造詣を兼備するところにおいて共通している谷崎潤一郎と芥川龍之介の中国を題材にする作品を取り上げる。「西湖の月」は谷崎の一回目の中国旅行により生み出された小説であるのに対して、中国へまだ足を踏み入れていない芥川の「南京の基督」は谷崎の中国旅行から直接に触発されて創作された小説である。また、「南京の基督」に前後して発表された芥川「奇怪な再会」はそれと同様に中国人娼婦をヒロインとしている。

第一節 絡み合う漢詩文とエドガー・アラン・ポー——谷崎潤一郎「西湖の月」における麗小姐像を手がかりに

大正時代に活躍していた日本知識人の一部は、近代化の急速な発展に伴い、失いつつある「精神的故郷」を幼少時から熟読してきた漢文学を通じて中国という土地に見出そうとしたのである。しかも中国と日本をつなぐ鉄道や航船が日に日に便利になるにつれて、大正時代の知識人は次から次へと中国の旅に出たが、谷崎潤一郎はまさにそうした渡航者の一人に数えられる。一九一八年十月から十二月までのまる二ヶ月に渡る谷崎の中国行は、北京、漢口、九江、南京、蘇州、上海、杭州をカバールすると同時に、「才子佳人」の逸話を誇る江南地区に集中した。そして、この旅から結晶した作品として、紀行文「蘇州紀行」、「廬山日記」、「秦淮の夜」、戯曲「蘇東坡」、エッセー「支那劇を観る記」、「支那の料理」、「支那趣味と云ふこと」、「奉天時代の李太郎氏」、小説「西湖の月」、「或る漂泊者の俳」、「天鵝絨の夢」、「鮫人」、「鶴唳」などがある。以上の作品群はエッセイ「支那趣味と云ふこと」にちなんで谷崎潤一郎の「支那趣味」シリーズとされてきた。

なかならずく、小説「西湖の月」は最初に「青磁色の女」というタイトルで一九一九年六月『改造』に発表されてまもなく、同年九月に一度改稿され『近代情痴集』に収録された。その後、また修正を加えられて一九四七年『私』に収録された。そのような谷崎の改稿過程に着目することにより、宮内淳子氏は「谷崎が第二稿で行ったことは、小姐の自殺の理由を記して、そして「西湖を愛し西湖畔で夭折した蘇小小と麗小姐を重ね合わせた」と示唆的に指摘している¹⁾。また「麗小姐」のような谷崎の描くところの中国人女性に関して、西原大輔氏は谷崎が中国の文化を「静的なもの」とみなしただけに中国女性は「生きた対話の相手」ではなく「風景の一部として一方的に鑑賞される存在」でしかないと論断しているが、筆者も賛同する²⁾。一方において、

中国の研究者李雁南氏は「西湖の月」をそれと同じく西湖を舞台にする小説「天鵝絨の夢」と比較しながら、谷崎の描き出した「江南」の虚構性を打ち出し、西湖を静かに流れた少女の「身体」に対する描き方を通して両作品の異同性を論じた¹³。さらに、「少女」と「病」に着眼しつつ、陳玲氏は「子供でもなく「性的身体を持たない「少女」と「病」の関係性を解釈しようとしてしている¹⁴。要するに、「躰小姐」は中国古典文学、とりわけ明清文学にありがちな「才子佳人」文化の表象と捉えられ、所謂「東洋趣味」をあらわす典型的な存在として解読されてきた。

しかしながら、「西湖の月」発表の二年後に、谷崎は一九二二年一月の『中央公論』に寄稿した随筆「支那趣味と云ふこと」の中で以下のように感慨深く告白している。

横浜へ移転して来て、活動写真の仕事をし、西洋人臭い街に住まい、西洋館に住んで居ながらも、私のデスクの左右にある書棚の上には、亜米利加の活動雑誌と共に高青邱や呉梅村が載って居る。私は仕事や創作の為に心身が疲れた時、屢々それらの雑誌や支那人の詩集を手にとって見る。モーシヨン・ピクチュア・マガジンや、シャドオ・ランドや、フォオトオ・プレエ・マガジンなどを開く時、私の空想はハリウッドのキネマ王国の世界に飛び、限らない野心が燃え立つように感ずるが、さて一度高青邱を繙くと、たった一行の五言絶句に接してさえ、その閑寂な境地に惹き入れられて、今迄の野心や活発な空想は水を浴びたように冷えてしまう。

すなわち、「高青邱や呉梅村」の詩集に代表される漢文学は「亜米利加の活動雑誌」が象徴する欧米文化に對置されて、欧米文化によって「燃え立つ」「野心」や「空想」を「閑寂な境地」に導く存在である。こうして、谷崎の中に絡み合う中国古典文化と欧米文化の実態が余すところなく表出されている。そうした精神的葛藤は、「西湖の月」の直後に発表された「鮫人」（「中央公論」、一九二〇年一月〜十月）の「林真珠」像における東西融合の「混血」的性格によって端的に反映されている。それに、「林真珠」の登場は「躰小姐」像に固定化した、谷崎の「東洋趣味」の内実を読み直す可能性を提供したと思われる。さて、本稿は「西湖の月」における「躰小姐」イメージを再検討しつつ、その成立と漢文学、欧米文学との関連性、また漢文学と欧米文学に対する谷崎の矛盾心理がこの女性像にどのよう投射したのかを説明してみたい。そのうえで、ジェンダーの視座からこの江南女性像に内在するバイヤスについて分析しておく。

一、差異化された「麗小姐」像——方法としての漢詩文

「西湖の月」において「麗小姐」の初登場は以下のように描き出されている。

言うまでもなく彼らの服装も亦、北方に比べれば濃厚で絢爛である。金魚が遊いで居るような、と言う形容詞はよく聞く言葉だが、彼等の服装は全く金魚だ。金魚がぎらぎらと鱗を水に光らせつつ遊いで居るのだ。おまけに中国では体格の小柄な女を貴しとする風があつて、婦人は一体に唐子人形の如くチョコココした小さいのが多いのだから、尚更金魚と言う形容が当てはまる訳だ：：毒々しく燃え立つような衣裳の中に、その女だけはたった一人瀟洒とした薄い青磁色の上衣を着けて、白繻子の靴を穿いて居るのが、金魚の中に変わり色の緋鯉が一尾交つたようなすがすがしい感じを与える。

つまり、江南女性の「濃厚で絢爛」な姿が「金魚」のように「私」の目に映るのである。ここにある「金魚」が主に江南女性の「小柄な」体格に対する喩えだと語り手は強調しているが、中華民国成立初期という時代的コンテクストを考慮に入れると、「チョコココした」という形容詞はまだ纏足したままの江南女性の歩く姿をほのめかしているよう。それを谷崎の紀行文「秦淮の夜」にある「水浅黄の木綿の上着を着た、色の黒い、金魚のように目玉の飛び出た、厚い唇の反り返った、何処となく鈍重な気分に充ちた顔立ち」というような秦淮河畔の妓女の顔の大写しとリンクさせて考えると、ここでの「金魚」は皮肉な意味合いを持つ負のイメージへの比喩と言わざるを得ない。なおかつ、金魚が中国に発祥する「觀賞魚」であることは、江南女性にある「觀賞性」Ⅱ「見られる」性格を増幅させることになる。

かくして、周りの「金魚」に引き立てられたまま、「私」は「金魚の群れ」に混じつた「緋鯉」のように、「目立って美しく感ぜられる」「令嬢風の女」を発見したが、後文で分かってくるように、ここで登場する女性はいずれ「麗小姐」である。「麗小姐」が擬せられる「緋鯉」は漢詩文で頻繁に使われてきた動物イメージであり、とりわけ「西湖の月」にも触れられた詩人白樂天は「緋鯉」のイメージを愛用したが、例えば「陴湖緑愛白鷗飛、灘水清憐紅鯉肥」（「酔後走筆酬劉五主簿長句之贈兼簡張大賈二十四先輩昆季」）、「紅鯉二三寸、白蓮八九枝」（「草堂前新開一池、養魚種荷、日有幽趣」）、「朝盤鱸紅鯉、夜燭舞青娥」（「松江亭携樂觀魚宴宿」）などの詩句が挙げられる。一方において、「西湖の月」で谷崎は「三潭印月」、「雷峰夕照」、「柳浪聞鶯」という「西湖十景」の

三景を取り上げたが、そのほかに花の下で緋鯉を見物するという「花港観魚」も「西湖十景」に数えられる。なおかつ、テクストの前半に出ている「西湖佳話」の第五卷「孤山隠跡」において、谷崎が慕う詩人林和靖は「書長無事、坐觀花港之魚」という趣味があるとされた。したがって、谷崎は以上のような漢詩文により「緋鯉」イメージを抽出したと推定できよう。が、「金魚」に比べると「緋鯉」はよい意味で使われているかのように見えるが、それも所詮中国の詩人や文人が愛用した動物の詩的意象であり、西湖の自然環境と緊密に関係した觀賞される「見られる」ものだと言いがたない。言い換えると、「濃厚で絢爛」な服装を着て「唐人形」の如くチョコチョコした小さい「江南女性」のなかで、「青磁色の上衣」に背の高い「酈小姐」は俗離れと差異化されたが、風景性においては変わりはない。例えば「西湖佳話」の第二卷「白堤政跡」のなかでこういうエピソードがある。杭州をたつた白居易は常に気が塞いだりしたため、周りの人はその原因を白居易が妓女「商玲瓏」に未練があると想定したが、白居易は彼らに対して以下のように返答したのである。

商玲瓏は思いやりがあるが、湖山を点景して、朝夕詩酒の興を添えるものにすぎない。彼女は既に行雲流水になり、気にかかるほどではないだろう。私が懐かしいのはただ南北の双峰、西湖にほかならない。(拙訳)

即ち、白居易にとって妓女「商玲瓏」は西湖の風景を背景として、それに結びついてはじめて存在する意味を持つ点景人物或は風景の一部でしかない。そのように「西湖」というトポスに置かれた女性像が風景化される傾向は同じ「西湖佳話」の第三卷「六橋才跡」にある蘇東坡の妾となった芸妓「朝雲」——「西湖の月」にもそれが一言触れられたが——にも見られる。そういう逸話に触発されてそれを一歩進めて敷衍したのが、谷崎が創作した戯曲「蘇東坡」にほかならない。ひいて、以上のような西湖に関する漢詩文にある女性像に烙印された「風景性」を、谷崎はそのまま継承して「酈小姐」イメージに盛り込んだと言える。後文で「練絹のよらかな柔かい波を顫わせて居る浅黄色の西湖の水と、爽やかな秋の朝の外氣とが、あるエツフェクトを其の容貌の上に加えて居たせい」で「酈小姐」の顔が「一層美しく感ぜられた」と同時に、「彼女はことさら自分の姿を湖山の風光の画面の中へ容れんが為めに「青磁色の上衣とズボン」を選んだかのように思われる描写は、「緋鯉」のような「酈小姐」と西湖風景との高度の融合性を見出そうとする谷崎の姿勢を裏づけている。それによって、本作の最初のタイトルが「青磁色の女」だった一つの理由は「青磁色の上衣とズボン」と西湖との一体性を示

唆でできることにあると考えられる。

二、脱古典化された「艷小姐」像——方法としてのエドガー・アラン・ポー

「緋鯉」のような「艷小姐」は「すつきりと華奢な姿」、「繊細を極めて居る」指、「鹿の脚のような」「優雅な楚々とした感じがある」「両脚、「きゃしゃ」な手首を持つ江南少女である。興味深いことに、「私」は「繊弱」に見える彼女と「神韻縹渺として風に吹かれて消えてしまいうような、弱々しい柳腰花顔の姿態」を持つ「中国式美人の典型」と意識的に区別しようとした。この「中国式美人の典型」の好例はほかでもなくテクストの結末で「私」が想起した「蘇小小」である。この結末においてはたしかに宮内淳子氏が述べたように、「蘇小小」は西湖にゆかりのある早世した「佳人」という意味で「艷小姐」と通底している。『西湖佳話』の「西泠韻跡」における「蘇小小」の容貌に関する描写には「碎剪名花為貌、細揉嫩柳成腰」という名句がある。『西湖佳話』にある「蘇小小」と「西湖の月」における「艷小姐」の容貌における最も顕著な差異は、前者は「柳腰花顔」で「満面容光」、つまり元氣いっぱい顔色がよいのに対して、後者は「やや卵黄色を帯びた冷めた青白い色をして居る」「皮膚をしている」「病的な美」を有しているところにある。ここで「艷小姐」にある「病的な美」は強調されて「蘇小小」イメージと相対化された理由を突き止めるために、「西湖の月」の改稿から繙かなければならない。

一九四七年三月全国書房発行の『私』に収録された「西湖の月」の定稿において、サマン作、堀口大学訳の「相伴」の終りの三連が削除されたことが既に宮内淳子氏の調査により判明した²⁰。それについて、宮内氏は「サマン詩抄」全体を引用しつつ、詩抄にある詩句が「西湖の月」、ことに江南少女が溺死する場面にある程度の影響を及ぼしていると論断した²¹。言い換えると、「西湖の月」における「艷小姐」イメージの成立は欧米文学に深く関与している可能性が高い。宮内氏の鋭い指摘に筆者も頷けるが、「西湖の月」の定稿におけるサマン詩の削除以降、本作は欧米文学の色合いを払拭されきった、いわゆる完全なる「東洋趣味」或は「支那趣味」小説として捉えられてきた。ところが、「西湖の月」において欧米文学の色合いは果たして微塵も残留していないのだろうか。

「西湖の月」のテクストのクライマックスに満ち溢れる不気味さや、既述した「艷小姐」の「病的な美」と結びつけて考えると、短い生涯にその文学で異彩を放ったアメリカ作家エドガー・アラン・ポーを想起させる。小林秀雄は早くも「ポオやボードレールの模倣は、谷崎氏の作品に、特にその初期の短篇に見られる……ポオ

は人も知る通り、異常な恐駭や、偏奇を愛した。谷崎氏も亦これらのものを愛した」と提示した。また、それに宮永孝氏は『ポーと日本 その受容の歴史』において、谷崎が「ポーを初めて知ったのは」「中学か第一高等学校の学生時分」だと推定して、彼が「少なくとも『黒猫』『陥と振子』『ベレニス』『リジニア』『ウイリアム・ウィルソン』『アッシャー家の崩壊』『アルンハイムの地所』『ランダーの別荘』『黄金虫』などを読んで』と述べている²⁵⁾。さらに、吉美顕氏は論著『谷崎における女性美の変遷―西洋文学との関係を中心として―』のなかで以下のように日本文壇に対するポーの影響に論及している。

明治中期からポーの探偵小説、病的な要素の小説は人々の関心を引いた。これは、ポーの翻訳の面では、量においても質においても大きく進んだと言える。このようにしてポーが日本の文芸思潮に取り込まれるようになった。これが、ポーに関する大正期の概観である。大正期のポーの文学の世界はもっと細分化的に研究され、外国文学として定着したのは、大正期に活動にした作家たち、佐藤春夫や谷崎潤一郎によってであり、この作家たちに大きな影響を与えている²⁶⁾。

要するに、明治中期以降の日本でポーの小説にある「病的な要素」は既に当時の作家たちの注目を集めて、それから大正期になると谷崎潤一郎を代表とする文学者に愛読され、しかも彼らの文学に「大きな影響を与えている」のである。さて、ポーにある「病的な要素」と谷崎「西湖の月」との関係性を考察する。

「西湖の月」の発表前後に、谷崎は「金色の死」(『東京朝日新聞』、一九一四年十二月四〜七日)、「魔術師」(『新小説』、一九一七年一月)、「活動写真の現在と将来」(『新小説』、一九一七年九月)、「白昼鬼語」(『大阪毎日新聞』「東京日日新聞」、一九一八年五月二十三日〜七月十日)などのテクストにおいてポーを取り上げている一方、彼が中国の旅に出る直前(一九一八年七月、八月)にポーの「アッシャー家の崩壊」(谷崎は「アッシャー家の覆滅」と訳したが)を翻訳して二回に分載した。だが、二回分の結末に谷崎が「今回はもつと沢山書くつもりで居たが、執筆の途中で風邪にかかったので、已むを得ずこんな短い物を載せることになった。次号には大いに奮発して沢山載せることにしよう」と気合をいれたように予告したが、翻訳は結局未完のままに終わったのである。では、完訳することができない「アッシャー家の崩壊」が残した余韻は谷崎の脳裏にいかん響いていったのだろうか。興味深いことに、ちょうど谷崎の訳文が途切れたところに、「アッシャー家の崩壊」の登場人物「私」の昔の親友だった「ロデリック・アッシャー」の様子は以下のように描き出されている。

顔色は死人のようだ。大きくて水をたたえたように光る目は、ほかに類がなかるう。いくぶん薄めの唇はきわめて血色に乏しいのだが、その描き出す曲線には格別の美しさがある。鼻は上品なユダヤ型ながら、そのわりに小鼻がふくらんでいる。すつきりした顎の輪郭は、すつきりしている分だけ気力に欠けるとも見られそうだ。

即ち、「私」の目に映った「アッシャー」は「上品なユダヤ型」の鼻をもちながら、「きわめて血色に乏しい」唇、「すつきりした」顎や「死人のよう」な顔色で病的状態にある。しかも彼の「蒼白な顔の色」は数日後「怪奇な白さを帯びていた」。そういう描写に呼応しているように、「艷小姐」は「希臘風の秀でた鼻」や「上品さがある」顔立ちをしているが、「青白いと言うより」「青さが濃いために少し黒ずんで居るくらい」の血色や、「病人じみた、昂らない、ぐったりと疲れたような趣のある」表情という「病的な美」の持ち主である。こうして、谷崎が訳し損なった「アッシャー家の崩壊」にある「病的な要素」は「艷小姐」像に取り入れられたと考えられる。また、「病的な要素」というのは、人物の「病的」な容貌以外に「病」そのものや「病的」な道具も包摂しているのだろう。宮内氏の調査により、谷崎は「西湖の月」の第二稿（『近代情痴集』、新潮社、一九一九年九月八日）や第三稿の結末で以下の内容を書き加えたのである——「艷小姐」は「肺結核に感染した」が、治療を断念して「阿片を呑んだ上に、望山橋のほとりから毒に痺れた体を清い水底へ沈めたのだそう」である。ここで二つの「病的な要素」はテクストの前面に押し出されているが、それはつまり「肺結核」と「阿片」である。

まず、以上羅列した谷崎の読んだことのあるポールの作品のなかで、「阿片」はしばしば登場する重要な道具である。例えば、小説「アッシャー家の崩壊」の冒頭で「これを見ていると魂にずっしりと重みがかかり、もし現世にたとえるものがあるとするとするなら、阿片の中毒者が夢から醒めきらず、いつもの現実に戻されることが苦々しく、目の前が晴れてしまふのが厭わしいとでも言うしかないような憂鬱を覚えていた」という、「アッシャー家の館」の陰鬱さを形容するくだりがある。また、小説「リジニア」において「阿片」は物語の構成や展開にとって不可欠な道具になった——まず「あの輝きは阿片が生み出す夢のように」という私がリジニアの絶世の美貌を賛美する比喩は伏線になり、リジニアの死後「私」は「阿片が病みつきとなり、その支配力に搦めとられていたので、私が為すことにも、人に命じることにも、そうした夢想から生じる色合いが出るようになった」

とあるばかりか、「阿片」の作用で「私」は死体の復活などを「幻視」したのである。ここで、「阿片」は妻の逝去による現実的苦痛をしずめる霊薬となった。総じて言うると、ポーの文学における「阿片」の表象する陰鬱性、幻覚性や、その鎮痛薬としての機能や死亡との至近距離性は、「西湖の月」で「酈小姐」が入水自殺に対する恐怖を抑える機能を持つ「阿片」とは異曲同工だといえよう。それに加えて、「酈小姐」が罹患した「肺結核」という疾病はまたポー文学の一つのキーワードである。例えば「リジア」、「モレラ」や「アナベル・リ」にはヒロインが肺結核にかかったと思しきふしが見られる^[10]。ポーが「肺結核」という病の文学化に抱く執念は、彼の周りにいる四人の重要な女性——母、愛人、養母、妻が相次いで肺結核で病死したことに由来したと目されてきた。このように、ポーの文学が特徴とする「病的な要素」は「酈小姐」像の成立に大きな影を落としたと思われる。

三、収斂・融合されたポーと漢詩文——「美女の死」と「永久性」

ポーは「病的な傾向、詩の音楽面」を備えるとともに、「美と頹廢、死の戦慄に満ちた作品で悪魔主義の始祖」^[11]でもあった。換言すると、ポー文学における「病的な要素」はほとんど死亡、特に若い美女の死亡と深く関わる。たしかに、「美女の死」はポーの短い文学生涯に渡る重要なモチーフとされてきた。それにポー自身も『詩作の哲学』(The Philosophy of Composition, 1846)においてこう述べている。

I asked myself-"Of all melancholy topics, what, according to the universal understanding of mankind, is the most melancholy?" Death-was the obvious reply."And when, "I said, "is this most melancholy of topics most poetical?" From what I have already explained at some length, the answer, here also, is obvious-"When it most closely allies itself to Beauty: the death, then, of a beautiful woman is, unquestionably, the most poetical topic in the world-equally is beyond doubt that the lips best suited for such topic are those of a bereaved lover."^[12]

以上の引用の下線部を日本語で拙訳して要約すると、死は美と緊密に関連する際にこそ最も詩的であるがゆえに、美女の死は疑いもなく一番詩意に富んだテーマになる。そういった文学的方法論を取り入れられた小説として、「ベレニス」(一八三五年)、「モレラ」(一八三五年)、「リジア」(一八三八年)、「アッシャー家の崩壊」(一八三九年)、「楕円形の肖像」(一八四二年)や詩「大鴉」(一八四五年)などが数えられる。さらに、「美

女の死」を具体的に表出する際に、ポーは死んだ美女をクローズアップする、つまり「死体凝視」という手法を愛用したのである。以下の引用は「アッシュヤー家の崩壊」にある「私」とアッシュヤーと一緒に彼の双子の妹「レディ・マドライン」の病死した遺体を仮埋葬した場面である。

しかし、われわれの視線が死者に落ちていたのは、わずかな時間だけである。見れば畏怖を感じずにいられた。若い盛りの女性を埋葬させることになった病は、重度の強硬症を伴う疾病の例に洩れず、胸元や顔にほんのり赤みが差したかのような偽装を見せていたのだし、また不審なまでに消えやらぬ笑みが唇にあるのだから、これが死んでいる顔だと思おうと恐ろしくもあつたのだ。

「私」が見た「レディ・マドライン」の死体は、「胸元や顔にほんのり赤みが差したかのような偽装」や唇にある「消えやらぬ笑み」からまだ生きているかのように見える。それと類似したくんだり「リジア」にも見受けられる。

私は意を決して、集中して、死体から目を離さずに見張っていた。どれだけ待ったのか、ついに謎に光を投げかける現象らしきものが生じた。もう間違いはない。ごく薄く、ほんのり染まったとわかるくらいの色が頬に出て、また瞼に埋もれていた微細な血管にも、わずかな色がにじんだ。

「私」に凝視された第二の妻「ロウイーナ」の死体も、「レディ・マドライン」の死体と同じように血色を取り戻したかのごとくどことなく生きている気配がする。それに対して、「麗小姐」の死体は以下のように大写しにされている。

両手を胸の上に組んで、安らかに身を横えて居る様子から判断するのに、恐らくは覚悟の自殺であろう。それにしても其の表情に微塵も苦悶の痕を留めて居ないのは、どう云う死に方をしたのであるか？ ひよっとしたら死んだのではなく、すやすやと眠って居るのかと思われるほど、その顔は穏やかに且生々しく輝いて居る。私は舷から出来るだけ外へ半身を乗り出して、屍骸の首の上へ自分の顔を持って行った。

溺死した「麗小姐」の顔は「すやすやと眠って居るのかと思われるほど」「輝いて居る」¹¹「生きて居るかのよう」に描き出された。そして「私」は彼女の死体を観察するためにわざわざ「半身を乗り出し」て「屍骸の首の上へ自分の顔を持って行った」のである。それは恐らく「ロウイーナ」や「レディ・マドライン」などにおけるポーの死体凝視の手法と無縁ではないだろう。そのようなポー的な方法がテクストの裏に稼働していることこそ、「東京某々新聞」の「特派員」である「私」が何回も会ってきて、しかも好感を抱く少女の死体を見た瞬間、それを凝視することに夢中になり、少しの恐怖も覚えなければ彼女を即時に救助しようともしない真意である。このクライマックスの描写が、「西湖の月」の底流である幻想性を余すところなく浮き彫りにしている。ただし、もう一つ看過できないのは、「麗小姐」が嵌めている「金の腕時計」が「未だに生きて時を刻んで居た」というところである。それが何を隠喩しているのかについては「西湖の月」と同様に西湖を舞台にして、「それに前後して発表された「天鵝絨の夢」を補助線とすればより明瞭になる。そのなかでも同じく山東少女の「死体」が西湖の湖面を流れていた場面があるが、その「死体」に対して語り手による以下の叙述がある。

こんな素晴らしい屍骸になるなら、「死」は「生」よりも遙かに望ましいことのようにさえ感ぜられました。彼女の姿に現れて居る「死」は、暗い淋しい灰色のものではなく、金剛石よりも美しい「永遠の光」を持った宝石なのです。¹²

要するに、西湖を背景に湖面を流れた「山東少女」の「死」にはある永久性を獲得できた。同様のことは西湖の水面に浮かんでいる「麗小姐」の死体にも適用できるのではないかと思われる。こうして、「ささやかな微かな針」が「チヨキチヨキと動いて行く」「麗小姐」の腕時計が依然として時間を刻み続けているのはそのまま西湖に早世したことによる永久性を意味しているのだろう。まさに李雁南氏が既に主張したように、「西湖の月」において女性の死体は永遠の美の象徴として描出されてい¹³る。また、エッセイ「活動写真の現在と将来」(「新小説」、一九一七年九月一日)において谷崎はこう強調している。

人間の容貌と言うものは、たとえどんなに醜い顔でも、其れをじっと見詰めて居ると、何となく其処に神秘的な、崇厳な、或る永遠な美しさが潜んで居るように感ぜられるものである。予は活動写真の「大映し」の顔を眺める際に、特に其の感を深くする。

以上の言説を「西湖の月」にリンクさせて考えると、「大映し」されたような「酈小姐」の顔ないし死体も凝視されることで、「金の腕時計」が表象している「或る永遠な美しさ」が見出されたように思われる。さらに、この「永遠な美しさ」|| 永久性を加味されたうえで、「美女の死」というポーの方法はテクストの結末における「薄命の佳人を悼む」漢詩文の言説に上塗りされて収斂されることになった。それを可能にしたのは、ポーが重要なテーマとした「美女の死」と中国の文人、詩人たちが生産、再生産し続けてきた「佳人薄命」にまつわる言説に、美しい女性が死んだという自明的な共通性が内在することである。のみならず、「私」に凝視された「酈小姐」の死体が「腕時計」により永久性を付与されたのに対して、「蘇小小」はそれまでの中国文学者による膨大な関連言説により西湖と深く関わる文化的記号として不滅的象徴性を持つようになったところで、二人の女性表象は通底している、つまり、ポーの方法と漢詩文の言説が統合されている。

むすびに

「支那趣味と云ふこと」のなかで、谷崎潤一郎は漢文学の教養を身につけたと同時に欧米文学や文化の洗礼も受けたことで彼の内部に生じた、両者の衝突、矛盾に対する思い悩みを告白している。この葛藤を抱え込みながら、谷崎は一九一八年に人生最初の異国旅行——中国の旅に出たからこそ、その後彼の発表した中国体験に基づいた作品は体験自体だけでなく、漢文学と欧米文学の対決をも内包しているはずである。「西湖の月」においてこの対決の実態は「酈小姐」という江南少女像を通して屈折しつつ展開されている。

まず、「酈小姐」の初登場した場面で彼女の服装や容貌は「緋鯉」という比喻によって同じ列車にいる江南女性と一線を画されたが、ここにある「緋鯉」イメージの形成に、女性像を風景化する傾向のある漢詩文、特に西湖に関連するものは大いに寄与したと思われる。だが、かくして「酈小姐」像が二回目ホテルのベランダに出現したときに、彼女と西湖の風景との融合性ひいて「西湖佳話」に代表される漢詩文との関連性が前面に押し出された一方で、「病的な美」をもって蘇小小を代表とする「柳腰花顔」という中国の古典文学によく見受けられるような図式的な美人表象と相対化されることになった。「酈小姐」の「病的な美」の背後に、谷崎が親しんだアメリカ作家エドガー・アラン・ポーの方法（論）は機能していると推定できる。そのうえで、ポーの方法はここから「酈小姐」イメージの塑像にあたっての主導的要素として、また小説のクライマックス——「酈小姐」の死体が西湖の湖面に浮かんでいる場面に至るまで「美女の死」というテーマや「死体凝視」という手法に

なり、「酈小姐」像を強力に映出することになる。それと同時に、「美女の死」というテーマに「永久性」を添付することにより、谷崎は「酈小姐」と「蘇小小」の死を一体化したうえで、ポーの文学的方法や漢詩文の言説をテクストの結末で統合しようとしていると考えられる。そのため、「西湖の月」が内包している「東洋趣味」或は所謂谷崎式の「オリエンタリズム」について検討する際に、ポーの文学的方法やテーマの介在性を一つの重要な主軸として看過できなくなる。

一方において、中国の古代文人が往々にして女性を「モノ」として賞玩したり、詠唱したりしたが^{〔註〕}、谷崎は彼が内面化した漢詩文にある女性言説を「酈小姐」像に取り入れたさいに、そうした中国文人の姿勢に内在する性別意識を剔抉することができなかったとしか言いようがない。また、いつも「見る」側にある男権文化は女性の身体を「水」、「芦」や「花」など自然性を備える「モノ」に喩えて、女性の身体を「自然」に客体化したりすることにより男性の支配地位を（再）確認しようとする^{〔註〕}。それを「西湖の月」と結び付けて考えるとき、「見られる」しかも「書かれる」側にある「酈小姐」像は「緋鯉」、「鹿」等の動物ひいては西湖の「風景」などに自然化されて、主体性を剥奪されたことにより、「書く」「見る」側にある書き手・語り手の男性性、支配性を（再）確認させることになった。さらに、ポーポワールはポーに築き上げられた「美女の死」に対して以下のように論及している。

都市や国家だけでなく、抽象的な観念的存在や制度も女の顔をしている：：男が自分の前に本質的な他者としておく（理想）、それを男は女性化する。（魂）と（イデア）である女は、また両者の仲介者でもある：：女はその触れることのできない燦然たる輝きのなかで崇められてまつられる。エドガー・ポーの青褪めた女の死者たちは、水のように、風のように、思い出のように、つかみどころがない。^{〔註〕}

ポーの文学における「青褪めた女の死者たち」は「つかみどころがない」＝実体性を持たない「抽象的な観念的存在」であり、（理想）でもあるという。その延長線上にあるのは、日本の男性作家が「女に勝手な夢を託したり、解釈したりしてきたが、彼らが描いた夢の女と現実の女性との距離の大きさこそが、男の内面の風景を絢爛たるものにした」という水田宗子氏の指摘である^{〔註〕}。谷崎潤一郎も水田氏のいう日本男性作家の一人として、己が愛読する漢詩文によって生み出された（西湖）というトポスに対する憧憬と幻想^{〔註〕}（理想）（勝手な夢）を私淑したポーの方法で「酈小姐」の「病的」な虚像に付与しているのではあるまいか。谷崎が「酈小

姐」を「見る」視線はポールの視座や方法を媒介としたため、「日本男性」／「中国女性」の権力関係の対立構図に、「欧米男性」／「中国女性」というもう一重の二項対立が重ね合わせられることになった。言い換えると、「日本」と「欧米」という二重に――厳密に言えばポールの方法＝欧米文学を主調低音にして構築された男性的ディスプレイのなかで、「中国女性」のイメージはそのディスプレイを構築した男性主体の（理想）、（夢）の拠り所或はそのものである。「西湖の月」のテクストは全体的に漢詩文的な情緒を漂わせているもの、中国女性像「艷小姐」の塑像は谷崎潤一郎の男性中心の独りよがりの姿勢を暴露しているばかりか、当時谷崎のなかにある、ポールの方法が表象する「欧米崇拜」が漢詩文を代表とする「東洋趣味」を凌駕し、引率している一面も現前化させた。最後に、「病的」で阿片を呑んだ中国女性「艷小姐」のイメージがアヘン戦争、日清戦争以来弱体化していった中華民国を表象した一方で、上述した対立構図は中華民国とそれを蚕食しつつある欧米列強と帝国日本の国家間の権力関係にも一致している。

第二節 「宋金花」像からみた重層的対立性をめぐって——芥川龍之介「南京の基督」論はじめに

「南京の基督」は芥川龍之介が中国へ足を運ぶ前年、つまり一九二〇年七月一日発行の雑誌「中央公論」第三五年第七号に掲載され、後に『夜来の花』『沙羅の花』『芥川龍之介集』に収められた、芥川の代表作の一つに数えられる作品である。小説の末尾に、芥川は「本篇を草するに当たり、谷崎潤一郎作「秦淮の一夜」に負う所尠からず。付記して感謝の意を表す」と明記していることから、中国行きへの関心が高まるなか、先輩である谷崎の先取りに刺激されて、その紀行文に触発されて「南京の基督」を創作した経緯は想像に難くないだろう。この点を手がかりに、橋浦洋志氏は芥川の「金花」が谷崎の「花月楼」をイメージしながら、「宗教的な美感」を付与された女性像と捉えている¹²⁰。それに対して、西原大輔氏は芥川が谷崎の作品に「多くの創作上のヒントを求めたこと」を認めつつも、文末の注釈は「この作品を読み解く上で、あまり重要なものではない」と強調している¹²¹。筆者の管見によると、両氏の以上の指摘にはまだ一考を要するところがあるが、それについてには後述に譲る。

一方、この小説に関する論考の量は膨大だが、以下のような三種類に大別できる。第一、発表直後の一九二〇年七月十五日と十七日に南部修太郎に宛てた二通の手紙を中心に展開されてきた評価である。その書簡の公表は、ヒロインの梅毒が結果的に「完治」か¹²²「潜伏」か¹²³について検討、再検討する「梅毒関連」論の続出に拍車をかけることになった。第二、宋金花に表象される「信仰」・「無知」や、それと日本旅行家が象徴する近代知識人の理性との関係性についての考察である。例えば、「南京の基督」では作者の「自己肯定・自己正当化が為され」て、「自己欺瞞の要素が払拭し切れない」¹²⁴と結論づけている栗栖真人氏の論や、「南京の基督」を「懐かしいばかりの人間の優しさ」がもつとも強くにじみでている作品だ¹²⁵と捉えている笠井秋生氏の論が挙げられる。第三、比較文学の視座から小説の射程を新たに広げようとする論考の中で、「金瓶梅」など中国の古典文学や、「欧米文学との関連性を論じるものが挙げられる」¹²⁶。にもかかわらず、今までの研究を遡ってみたところ、中国娼婦「宋金花」をヒロインにした小説を、ジェンダー・スターディズの地平に据えて解説しようとする論文は数少ないようである。それゆえ、本節は以上まとめた研究史を振り返りながら、ジェンダー、ポストコロニアリズムそして比較文学の角度より、「宋金花」像における衝突性や彼女と作中の男性人物像——日本旅行家、日米混血児——との関係性を捉え返してみる。

一、中国娼婦／日本旅行家

前述したとおり、西原氏は「南京の基督」と「秦淮の夜」との関連性について、「南京の基督」の「核心にかかわる部分は、谷崎作品とは全く関係がない」^[26]と論断した。しかしながら、「この頃世間が騒がしいのでお客が無くて困って居る」^[27]と言っている少女「花月楼」の可憐な姿も、「客がおびおび遊びに来ないようになった」ため家計が「一日毎に苦しくなっていく」^[28]、窮地に陥る十五歳の「宋金花」と二重写しになった。それに、「花月楼」の「可憐なる媚びに対して、報ゆる術を知らないのが悲しかった」「私」と、「宋金花」の純粹無垢なところを可愛がって翡翠の耳環を贈与したり、彼女の無知に同情したりする「日本の旅行家」に共通する姿勢が見て取れる。言い換えると、「宋金花」／「日本の旅行家」からみた「売春する中国娼婦」／「買春する日本旅行家（知識人）」という対立構図は、取りも直さず「秦淮の夜」における「花月楼」対「私」の関係性にも当てはまるだろう。さらに、外国人の旅行者と異国女性（とりわけ娼婦）との関係性について、ポーボワールは『第二の性』においてこう述べている。

旅行者が訪れた国を理解する鍵を女に求めるのはよくあることだ。一人のイタリア女やスペイン女を腕に抱いているとき、男はイタリアやスペインの味わい深い本質を手にしたように感じる。「新しい街につくと、私はいつもまず売春宿に行くことにしている」と、あるジャーナリストは言っていた。アンドレ・ジイドにとって、シナモン入りのチョコレートがスペイン全体を発見させてくれるものなら、ましてや、エキゾチックな唇との接吻は、恋する男に一つの国を、その国の植物、動物、伝統、文化ともにまるごとゆだねてくれるだろう。女が表すのはその国の政治制度や経済的な豊かさではない。女はその肉体の柔らかな肉の部分と神秘的なマナを同時に体現しているのだ。ラマルチーヌの『グラジェラ』からピエール・ロチの長編小説やポール・モランの短編小説まで、外国人がある地域の魂を自分のものとしようとするのは女とおしてである。^[29]

要するに、異国で美女探しをして彼女らの肉体を「占有」したり、消費したりすることを通して、その地区ないし国家の神髄を把握し、または占領したかのような達成感を追い求めることは男性旅行家の動機付けだと言える。それはそのまま植民地主義の論理に通じると思われよう。しかもそういった理論は「上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに来た」日本の旅行家が十五歳の「金花の部屋に物好きに一夜を明かした」

エピソードにも通用できる。したがって、中国人研究者孔月氏が既に鋭く指摘したように、「旅行家」(男性)が「娼妓」(女性)の部屋を訪れるという構図は「つまり、「中国人女性の性を買うことであ」り、「列強諸国が中華民国に植民地的侵略を果たそうとする欲望を表象している」^[29]。

また、「宋金花」が終始自分の一室に閉じこもる設定に関して、牧野陽子氏は彼女の部屋が「時代の流れから取り残され、外の俗世界とも隔絶している」と認識している^[30]。一方で、鷺只雄氏は芥川は小説の「舞台」の「限定」を通して、「周到巧妙にボロを出す危険を回避」^[31]すると論述している。確かに、芥川が未だに見ていない中国南京を舞台とする小説を論じるにあたり、鷺氏の指摘は一理があると思えざるを得ない。ただし、そうした設定をジェンダーの視座で考え直すと、男性の旅行家が世界中を探索し、多彩な文化を満喫することで外部世界に積極的に関与するの引換えて、ヒロインが狭小な空間に閉鎖され、自分の内在性に封印されるという相対化された構図を読み取れよう。すなわち、旅行家／ヒロイン＝運動的・能動的／静止的・受動的、消費／被消費、超越的／内在的という重層的な二項対立が浮き彫りになっている。

さらに、部屋の壁にかかる受難のキリスト像に酷似する外国人の客に恍惚として身を委ねた翌日、梅毒が治ったと気付いた瞬間一夜を共にした外国人をキリストと信じ込みはじめたヒロインはいかにも感情に走りがちで、短絡的な思考回路の持ち主である。それと相対化されるのは、南京の基督によってヒロインの病が癒されたという不思議な話を聞かされた日本の旅行家は即座にヒロインの信じる基督の正体に思いあたり、「真実」を伝えるかどうか迷っていたところである。そういう対比はまた感性的・無知的なヒロイン／理性的・知的な旅行家という二項対立を浮かび上がらせてきた。だが、「おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであるか。それとも黙って永久に、昔の西洋の伝説のような夢を見させて置くべきだろうか」という日本の旅行家の苦悩から、孔月氏は日本旅行家の「まなざし」が「帝国日本の優位性に支えられており、被植民地の憐れな少女を見下す立場にある」と結論づけている^[32]。孔月氏の見解に筆者も賛同しているが、要するに、そういった旅行家の上から目線の背後に、科学知識を身に付けた先進国の男性が、後進国の近代科学に無縁な娼妓の運命を握っているかのような傲慢や、憐憫・同情に擬装された高みの見物の偽善が確認できる。

二、無知／理知

既述したとおり、日本旅行家の最後の自問によって、中国娼妓／日本知識人＝感性的・無知／理性的・理知の二項対立が浮上してきたのである。小説の結末は理性の優位性を暗喩したか、それとも無知であるゆえの幸福を

ほのめかしたのかについて、先行論は色々論争してきた。だが、「藪の中」など多義的なオメガを書き残した芥川龍之介の作品だからこそ、「南京の基督」の結末を開放的な仕掛けと見なしてもよいではないだろうか。即ち、理性／感性の二項対立を優劣性のない対称的なものとみなすことが可能である。なぜかというところ、「南京の基督」をリアリズムの小説として読むと、日本旅行家とヒロインはそもそも異なる次元で生きている人間である。前述した旅行家／ヒロイン運動的・能動的／静止的・受動的、消費／被消費、超越的／内在的という重層的な二項対立の成立を可能にするのは、旅行家はまず資本主義の強国に伍した近代日本から来た、ある程度の経済力を有する知識人であるという自明的な事実である。それに反して、「宋金花」は近代以降のアヘン戦争、日清戦争を経てきた弱体化しつつある中華民国の下層娼婦でしかない。彼女は飽食暖衣さえ保障されていなくて、極端な貧困にあえいでいるのである。ここで今日的にマズローの欲求段階説を借りていうと、経済的安定性、良い健康状態の維持、良い暮らしの水準などを包摂する「安全の欲求」さえヒロインはまだ満たされていないため、人間欲求の低次元にとどまっているとしか言いようがない^[25]。したがって、近代的・科学的教育に無縁な彼女にとって、基本的な飽食及び健康こそ生存の原動力であり、ひいては幸福感の源でもある。彼女は生そのものにすがりついて、感性や無知によってしか生きていけないのではあるまいか。それに対し、明治維新がもたらす近代文明の恩恵を被った日本の旅行家がヒロインより人間欲求の高次元に達せばこそ、理性、科学や技術への追求こそよりよい生活に繋がると彼は信じているに決まっている。それゆえ、健康が戻ったと信じ込んだ「宋金花」は自分の見た「現実」に満足していて、旅行家の憂慮を知らないのに対し、旅行家は自分の握っている「事実」で思い悩んでヒロインの幸福を感じできないことになった。それを一方においてマルクスの説いた、道徳・芸術・宗教などを包摂する上部構造は経済の仕組み下部構造に規定されるといいう下部構造決定論によっても解釈できる^[26]。即ち、経済的・物質的基盤が異なるヒロインと日本の旅行家は、上部構造としての行動論理がかけ離れるのも当たり前だろう。要するに、それぞれヒロインと日本の旅行家に相応しい生き方或は行動論理としての無知・感性と理性の対立を、芥川は決着をつけないままパラレルな関係に放置したと思われる。

三、中国／西洋 1、中国娼婦／キリスト教

「宋金花」像における相対性は彼女と日本の旅行家との関係性により看取できるのみならず、その人物造形・

設定そのものにも明らかに存在する。まずは娼婦であると同時にキリスト信者である身分における矛盾を取り上げねばならない。芥川は早くも「クリスト売春婦の梅毒を癒す。——売春婦自身の話。」というメモを残しているが、それは「南京の基督」の着想と思われてきたのである。宮坂覚氏は「このメモには比較文学的問題を含んでいると思われるが、現在のところ不詳」と注釈をつけているが、同論考の中で「宋金花」を「罪と罰」のソーニヤと関連付けて、聖なる売春婦の系譜に位置づけている¹⁵⁵。それに対し、「宋金花」からみた宗教的奇跡の要素の源を、西原大輔氏はフローベルの「聖ジュリアン」に見出そうとしている¹⁵⁶。「クリスト」、「梅毒」というキーワードや諸家の先行論からすると、芥川の着想は西欧文学に関わる可能性が高いと推定できる。フローベルが芥川に及ぼした影響は言うまでもないが、彼の弟子であるモーパッサンにも言及しなくてはならない。この二人の作家の師弟関係について、芥川が『文芸的な、余りに文芸的な』において「僕はこの頃フロオベールのモオパスサンを教えるのにどのくらい深心を尽くしたかを知った。(彼はモオパスサンの原稿を読んでやる時、連続した二つの文章の同じ構造であるのさえやかましく言った。)」と触れている。のみならず、芥川はエッセイや評論などで何度もモーパッサンの名前を挙げている——「ド・モオパスサンは、敬服しても嫌いだ。た。今でも二三の作品は、やはり読むと不快な気がする。」(『仏蘭西文学と僕』)や、「モオパスサンは氷に似ている。もつとも時には氷砂糖にも似ている。」(『侏儒の言葉』)というような評価こそ、芥川龍之介が彼と同じように短編小説に優れたモーパッサンの作品をどれほど読み込んだかを傍証しているのではないか。モーパッサンはさまざまな娼妓像を数多くの作品に登場させるが、なかんずく最も世に名を馳せるのはフローベルにも「間違い無く後世に残る傑作」¹⁵⁷と絶賛された「脂肪の塊」(一八八〇年)である。そのなかに以下のような興味深いくだりがある。

鐘の音が聞こえてきた。洗札を知らせる鐘だ。太った娼婦には子どもがひとりいて、イブトの農家にあずけてあつた。せいぜい年に一度会いに行く程度で、ふだんは子どものことなど考えたこともなかったのに、これから洗札を受ける子どもがいるのだと思うと、わが子にたいする愛情が激しく胸に込みあげてきて、なんととしても洗札式に立ちあつてみたくなつた……伯爵夫人は……すかさず尋ねた。「いかがでしたか、洗札式は？」

太つちよの娼婦はまだ感動がさめやらぬ様子で、人々の顔つき、態度から、教会のたたずまいにいたるまで、なにもかもしやべつた。そして、こうつけ加えた。「とつてもいいものね、たまにお祈りするのって」

要するに、「洗礼を知らせる鐘」により子どもへの愛情を喚起されたり、洗礼式に深く「感動」したりする「太った娼婦」には敬虔な信仰者である一面が見られる。なおかつ、彼女が最終的にプロイセン軍の士官と寝ることを不本意ながら承知したのも、「神の意志を解きあかしたり、その裁断を推しはかたりしながら話しつづけた」修道女の言葉は「いきり立ち、抵抗をつづける娼婦の心に少しづつ変化をもたらした」²³からである。かのように、「南京の基督」におけるクリスチャン「売春婦」は強い宗教意識を持つ「太った娼婦」を彷彿とさせることから、「脂肪の塊」が「南京の基督」の金花像の生成にヒントを与えたとさえ言えなくもない。

にもかかわらず、「クリスト」が中国南京を背景として、中国「売春婦」と結びつく際には、根本的な変質が要求されるに決まっている。一つ目の変質は「売春婦」像における「土着化」・「中国化」にほかならない。中国少女「宋金花」は「たった一人の父親を、一杯でも余計好きな酒に飽かせてやる事を楽しみにしていた」とともに、「亡くなった母親に教えられた」信仰を「ずっと持ち続けている」のである。それはほかでもなく『孝経』、『列女伝』から明清小説や戯曲などにいたるまでの、中国の伝統典籍が称揚し続けてきた孝道だろう。つまり宮坂氏が分析したように、「金花の人間構造の主要部分を、底深い部分で支配しているのは」「孝道」であり、金花にある「いなおり」を「支えていたのは孝道」である²⁴。

ところが、ヒロインの孝道は逆に彼女の信仰の基盤に揺さぶりをかけて、二つ目の変質をもたらすことになった。既述したとおり、ヒロインのキリスト信仰は逝去した母から継承したものであるため、それは宮坂氏が指摘したように「主体的決断によるものではない」²⁵、孝道に根ざした受動的・習慣的な信教ではないだろうか。それに、「腰も立たない」父親と自分の「餓え死」を免れるためにヒロインが基督教の戒律に背くことさえ憚らずに娼妓になったことや、基督が自分の「心もちを汲みとって下さ」²⁶らなければ「警察署の御役人も同じ」という、敬虔な信者には到底言えそうにない一句により、キリスト信仰に孝道・生存を優先させるヒロインの行動論理が明らかになった一方、十五歳の少女の信仰が内包する恣意性や不穏性も看過できなくなった。こうして、キリスト教の原初の宗教原理は「宋金花」により個人化されることになったと言えよう。

なお、そのような中国化または個人化される部分は金花が外国人と寝た夜の夢に現れる「天国」と「基督」の描写においても端的に見て取れる――「紫檀の椅子」、種類豊富な中国料理、「青い蓮華」や「金の鳳凰」など、いずれも中国の文化や伝統芸術の典型的なイメージである。このように「秦淮らしい心もちがした」金花

なりの天国をめぐる描写は、彼女の信仰に潜んでいる土着性、此岸性を顕在化させることになった。ヒロインの心象風景は、西欧文化・文明を象徴するキリスト教が近代以降の百年以上にもわたる中国における伝道過程において、中国文化と衝突したり、融合したりする様相を隠喩している。そのうえで、「私は支那料理は嫌いだよ。お前はまだ私を知らないのかい。耶蘇基督はまだ一度も、支那料理を食べた事はないのだよ」という夢における基督が言い残した最後の言葉は、中国娼婦「宋金花」の耶蘇基督に対する理解の欠落や、中国文化の重要な一部である食文化を代表する「支那料理」と基督との距離、無縁化を明示している。もつと掘り下げると、それはちょうど西欧文化が中国へ「進出」していた際に暴露した、それと中国文化との相容れない部分や、両者の相互に拮抗する様相を示唆しているのではあるまいか。

2、中国娼婦と梅毒

既述したように、芥川のキリスト教信者と売春婦の結びつきという発想はモーパッサンの『脂肪の塊』によった可能性がある。それと同時に、『脂肪の塊』には以下のような隠喩性に富んだくだりがある。

誰もかれも忙しそうに動きまわり、あたかも女がスカートの下に忌まわしい病気でもかかえ込んでいるかのように、なるべく女とは距離をおいていた。^{〔と〕}

短い生涯で梅毒に苦しめられていたモーパッサンがここに触れた「忌まわしい病気」は即ち梅毒への暗示と目されてきた。その後、梅毒に対する暗示的描写はついに『脂肪の塊』の姉妹篇と称される短編小説「寝台二十九号」(一八八四年)において顕在化され、梅毒の「武器化」に変貌したのである。小説のヒロイン妓女「イルマ」はプロイセン軍官のレープにより感染された梅毒を武器として、プロイセン軍に意図的に伝染し続けたのである。即ち、梅毒の致命的伝染性は妓女「イルマ」の愛国心や復讐心を通じて一種の越境性を持った武器になった。

梅毒という疾病の起源を遡ると、それはコロナプスが新大陸を発見してから一四九三年帰国した際に、インデアン婦人と性交した海員が感染して持ち帰った病というのが通説である。その後まもなく、梅毒はスペイン、イタリア、フランスから、ドイツ、スイス、ポーランド、ギリシャまで、欧米大陸中で猛威を振るっていったが、モーパッサンの生きていた十九世紀後半までも衰えを見せないのである。要するに、梅毒

はヨーロッパ人の植民地開拓の過程に随伴した、「新大陸」＝アメリカに起源し、ヨーロッパ大陸を席卷していた疾病である。また、寺田光徳氏は『梅毒の文学史』で「十九世紀のフランス文学には、梅毒がいつでも、どこでも、だれにでもまとわりついていた」と述べ、モーパッサン以外にバルザック、スタンダール、ボードレール、フローベール、ゴンクール兄弟、アルフォンス・ドーデ、ユイスマンスなどを、梅毒に罹患した作家として列挙している^[5]。いずれも高名なフランス作家であると同時に、ほとんどは芥川龍之介の熟読または愛読してきた作家でもある。さらに、寺田氏の同著により、梅毒は「性、欲望、それから狂気（梅毒ゆえの本物の狂気と愛ゆえの比喩的な狂気）、そして女性と娼婦という、いずれも近代的な文学の主題を喚起する病気」として、ヨーロッパの「十九世紀の社会と想像の世界のなかにはびこっていた」ことがわかる^[6]。したがって、芥川が以上羅列した作家の生活経歴や、梅毒を取り上げた文学から深い感化を受けたことは想像するに難くない。

ここでテクストに戻って考えると、今までの研究者たちはもっぱらヒロインの梅毒が治癒されたかどうかを追究してきたが、梅毒という疾病の隠喩性を説明しようとする論考は極めて稀である。不思議な外国人が中国の古都南京の娼婦「宋金花」とのコミュニケーション障害や彼女の身体をただで占有した行為は、アヘン戦争以来中国の半植民地であることの歴史的コンテクストと結びつけて考えると、帝国による植民地化の進展を背景とする（欧米）対（中国）の文化・文明衝突ないし侵略を表象している。それに加えて、ヒロインと一夜を共にした外国人と想定される日米混血児が、その後欧米に起源した梅毒に伝染されて発狂してしまったそうだという情報には、梅毒が最初から地理的にはヨーロッパ大陸、文学的には欧米文学、とりわけフランス文学においてあまねく広がっていたという歴史的・文学的意味と関連して考慮すれば、かのように中国を蚕食しながら文化的侵略を続ける列強がいつか反作用を受けかねない意味合いが読み取れる。

総じて言うと、「宋金花」という中国少女の行動論理は孝道及び現実的な生存である。それがゆえに、彼女のキリスト信仰は生まれながら中国化、個人化されたうえで、一種の稚拙性、恣意性並びに此岸性を帯びるものである。だからこそ、例えば見慣れない外国人と寝た夜に、彼女が凍死・飢え死にの瀬戸際に立たされた時点というような極限状態に追い込まれた時に、ヒロインは自分自身の生存を他人への思いやりに優先させるのも無理はない。一方、梅毒に感染した無頼混血児が金花に先立って発狂してしまったらしい結末の裏には、「自業自得」という東洋的因果律が稼働しているのではないか。つまるところ、キリスト教が表象する西欧文化が「宋金花」が表象する中国文化に同化すると同時に、日米混血児（日本＋欧米）からの「植民者」が彼女により負かされたと言っても過言ではない。

むすびに

「南京の基督」が発表された一九一九年ごろはちょうど芥川龍之介の中国旅行への関心が高まる時期だった。ことに友人谷崎潤一郎や佐藤春夫などが相次いで中国旅行に行ってきたことは芥川にとつて大きな刺激になるに違いない。谷崎も「人魚の嘆き」で中国南京を舞台にしたのに引き続き、身を持って念願の南京を満喫してきてから「秦淮の夜」を書き上げたのである。「人魚の嘆き」(『中央公論』、一九一七年一月)の秀逸さを「絶賛」した宣伝文を執筆した芥川はその時既に谷崎の描いた「煙花城」南京に触発されたかのようである。よつて、「秦淮の夜」の発表は芥川に再び中国の古都南京に対する着想を喚起して「南京の基督」を創作させるに至つたと推定できよう。

「秦淮の夜」という谷崎の「支那趣味」シリーズの一つとして知れ渡る作品から、芥川は可憐な「売春する中国娼婦」／彼女に同情する「買春する日本知識人」という構図を受け継いで「南京の基督」に取り込んだと思われる。この構図はまた敷衍されて、「日本の旅行家」／「宋金花」Ⅱ運動的・能動的／静止的・受動的、消費／被消費、超越的／内在的という重層的な二項対立に拡充されたが、そういった重層的対立を成立させるのは、「日本の旅行家」の理知・理性と「宋金花」の無知・感性という異なる生存・行動論理である。

一方、「宋金花」という「売春婦」像は同じく宗教意識の高い娼妓をヒロインとするモーパッサン「脂肪の塊」からヒントを得た可能性が高い。にもかかわらず、「宋金花」の宗教信仰及び天国想像は西欧の正統的基督教の宗教原理から程遠い中国化された恣意的・個人的なものだと言わざるを得ない。また、娼婦「宋金花」が梅毒に罹患するという設定は、梅毒の十九世紀ごろのヨーロッパ、特にフランスにおける頻繁な文学化に深く関与している。なかんずく、モーパッサンの「脂肪の塊」や「寝台二十九号」などが「南京の基督」に投影したと推測できる。「日米混血児」が中国の古都南京の娼婦「宋金花」の身体を占有したエピソードは、中華民国にアヘン戦争を引き起こした(欧米)、欧米列強に伍して二十一か条を投げかけた(日本)による対(中国)の侵略・植民を表象している。それに対して、混血児が梅毒に伝染されて発狂してしまった結末はそういった文化的侵略をしつつある欧米列強や、戦争による権益を追求しようとした日本が中国文化或は中国の同化力の反作用を受ける隠喩性を潜ませている、即ち西欧文化と「脱亜入欧」に邁進しつつある「混血的」日本と中国文化の衝突性を匂わせているのではあるまいか。こうしてみると、「宋金花」像は芥川龍之介が西欧文明と、西欧文明に憧れて「欧化」してきた日本と前近代的な中国文化との衝突を觀照するための媒介としての他者表象だと考えられる。

第三節 芥川龍之介「奇怪な再会」論——日清戦争・近代化を背景にした「狂女」の生成はじめに

「奇怪な再会」は一九二一年一月五日から二月二日まで、十七回にわたって『大阪毎日新聞』夕刊に連載された中編小説である。同年三月に刊行された『夜来の花』（第五短編集）に収められ、翌年に金星堂の名作叢書『奇怪な再会』（一九二二年十月）にも収録される。本作において、ヒロインの「お蓮」——本名が「孟蕙蓮」で、日清戦争（中国側では甲午戦争）中に中国（当時は清朝）威海衛の妓館で客をとっていたことが小説の結末で明らかになる——が日清戦争後陸軍一等主計の牧野によって東京本所の妾宅に囲われている。昔中国で飼っていた愛犬に酷似する白犬が病死して以来、お蓮はしばしば幻覚の世界に迷い込むようになる。ついに薬師の縁日に、弥勒寺から妾宅に戻ってきた彼女は二階の座敷の闇にこもると、白犬は過去中国で親しんでいた男「金」に化し、窓の外の景色も森に一変したのである。

ヒロインお蓮という中国女性像に対する研究はさまざまな視座から盛んになされてきた。孔月氏は「日本帝国主義のオリエンタリズムによる差別表象として」、「お蓮の狂気の両義性、特に植民地言説としての喩の意味を明らかに」して、芥川が「征服しやすい対象としての「女」というレトリックを使用し、脳病という（分裂病）隠喩を用いて暴いている」と結論づけている^{〔5〕}。孔月氏の結論に筆者も賛同するが、お蓮のアイデンティティをめぐる論述においてヒロインが「日本語を話す」という設定に触れただけでそれを問題視できないところも物足りないと思われる。また、戴煥氏は「奇怪な再会」の舞台となった本所の近代化・工業化問題に注目して、小説のモチーフを「近代日本人は近代化を進める中で、中国を暴力によって征服しよう」と捉えている^{〔6〕}。この見解には筆者も頷けるが、氏は本作のクライマックスであるお蓮の周囲の景色が森に一変した場面における隠喩性について説明していない。一方で、姚紅氏はジェンダーの視点から「狂気」と「女性性」の結びつきに焦点をあて、お蓮の身体性と精神性の両者にわたって抑圧された中国人としてのアイデンティティと彼女の精神崩壊との関係をあぶり出すことによって、この小説を「帝国男性を眼差しの主体、半植民地の中国女性を表象されるだけの受動的な対象物とする」と位置づけている^{〔7〕}。だが、姚紅氏も孔月氏と同じようにお蓮の言語問題を看過してしまった。姚紅氏論の延長線上で、陳玲氏はお蓮が「中国にいて娼婦であった時期」や「娼婦になる前の時期」を「振り返つ」たうえで、「狂気」を「日本帝国の植民地主義から」の「脱出」や「故郷中国の家長制社会の抑圧から自我意識」の「回復」を「表象するもの」として積極的に認識している^{〔8〕}。が、それは当時の時代的コンテクストにおいてどこまで可能だろうか。

そこで、本節は先行研究を踏まえながら、お蓮が発狂するに至るまでの経緯を再考したうえで、今までの先行論で見落とされてきたお蓮の見た東京の風景が森林に化する場面の意味合いやその後のヒロインの行く末について試論し、日清戦争と日本の近代化を背景としたお蓮という中国女性像を捉え直してみる。

一、無効化された母語

「奇怪な再会」が創作された一九二〇年は、大阪毎日新聞社入社後の中国旅行計画が二度とも挫折してしまい、芥川が中国旅行を真剣に考えていた時期であった。したがって、念願の旅行先である中国を意識しながら中国人女性をヒロインにしたと考えるも差し支えないであろう。そうすると、共通語の選択は異国人を取り込んだ作品にとって、まず解決すべき課題として浮上してくる。

当時の日本国民が潜在的対清恐怖感を一挙に清国蔑視に転じつつ、清国に対する軍事的勝利に熱狂した^{〔5〕}という本作の歴史的コンテクストを考慮に入れると、「密輸入」されたお蓮が日本で日本人に身をやつして生活するのにある程度の日本語能力が必要になることは容易に推測できる。にもかかわらず、コミュニケーションの道具としての共通語の問題に関する説明や解釈はテクストの中で不問に付されたまま、お蓮と牧野、田宮や傭婆さんとの会話は円滑に進んでいる。さて、それは作者芥川の不注意に起因しているのかどうかを究明するために、本作とほぼ同時期（一九二〇年七月）に発表された同じく中国人娼妓をヒロインとした「南京の基督」の内容を例示しておく。

——「そう言えば今年の春、上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに来た、若い日本の旅行家が、（中略）不審らしい顔をしながら、
「お前は耶蘇教徒かい。」と、覺束ない支那語で話しかけた。

「何か御用ですか。」

金花は稍不気味な感じに襲われながら、やはり卓の前に立ちすくんだ俣、詰るようにこう尋ねて見た。すると相手は首を振って、支那語はわからないと言う相図をした。それから横啜えにしたパイプを離して、何やら意味のわからない滑かな外国語を一言漏らした。が、今度は金花の方が、卓の上のランプの光に、耳環の翡翠をちらつかせながら、首を振って見せるより外に仕方がなかった。（中略）客は（中略）じろじ

ろ金花を眺めていたが、やがて又妙な手真似まじりに、何か外国語をしやべり出した。その意味も彼女にはわからなかったが、唯この外国人が彼女の商売に、多少の理解を持っている事は、臆げながらも推測がついた。

支那語を知らない外国人と、長い一夜を明かす事も、金花には珍しい事ではなかった。そこで彼女は椅子にかけて、殆習慣になつてゐる、愛想の好い微笑を見せながら、相手には全然通じない冗談などを言い始めた。

「南京の基督」において、「日本の旅行家」とヒロイン「金花」のやりとりは前者の「覚束ない支那語」で成立するのに対し、「支那語を知らない」西洋人とヒロインのコミュニケーションは「相図」、「妙な手真似まじり」や「通じない冗談」によつてあやふやになつてしまつた。また、一九二六年一月一日に『中央公論』に掲載された中国の下層女性を取り扱つた小説「湖南の扇」のなかで、日本人の「僕」と湖南の芸者「玉蘭」や「含芳」らとの会話は日本留学の経験をもつ旧友「譚永年」の通訳によつてはじめて成立している。ところが、「南京の基督」や「湖南の扇」で明記されている作中人物の言語選択の行為、方法及びコミュニケーション障害に対する配慮は「奇怪な再会」において無視されてゐるようである。その事由を本作の怪奇性または語りの多重構造のみに帰着させては、よりによつて執筆二十数年も前の日清戦争という本作の背景設定にある深意を看過してしまうことになる。

一八九五年一月に日本軍は山東半島に上陸し、二月には北洋艦隊の軍港であり、即ち本作のヒロインの故郷である山東省の威海衛を陥落させる。そして同年四月に調印された下関条約（中国側では馬関条約）に則つて、「遼東半島、台湾、澎湖諸島を割譲する」（二）、「軍費賠償金庫平銀二億両（邦貨約三億円）を支払う」（三）、「批准後三カ月以内に日本軍は撤退し条約を誠実に履行することの担保としての威海衛を占領する」（八）¹⁵⁰。また、テクストが書き上げられる直前のパリ講和会議（一九一九年一月）でも、山東省の権益をめぐつて日本は欧米列強と帝国主義的競争を繰り広げていた¹⁵¹。一方において、「奇怪な再会」に以下のような興味深い場面がある。妾宅を訪問する田宮は「その昔馴染みと言うやつがね、お蓮さんのように好縹緞^{ハオビイヂェ}だと、思い出し甲斐もあると言うものだ」と述べ、日本式の「丸髻を結っている」お蓮に昔の中国式のなりに変えることを進めようとしたのである。すなわち、小説全篇を通して中国語を一言も発していないお蓮は、中国語の発音を真似

る日本人男性田宮によってからかわれた。前述した時代背景も勘案すると、それは言語というアイデンティティの重要指標において、戦勝国の男性／敗戦国の女性という非対称の権力関係の暴露だと言えよう。ひいて、それは周倩氏が「権力支配による一方的な独善性」と「他者」性の再確認」という「二重の傲慢さ」を含意すると指摘したヒロインの変装を注文する行為と同質的だと考えられる^{〔註〕}。さらに、共通語の問題を糊塗して、日本の占領地威海衛から連れ込まれてきた中国人女性が母語を（公的な場でも私的な場でも）使用する機会や権利をほぼ喪失して、戦勝国の国語＝日本語を話すという当然で自明的であるかのような隠蔽的な設定は名前や外見の同化に先立って、中国語によって媒介されるヒロインの中国人としてのアイデンティティが日清戦争により揺さぶりをかけられたことを示唆している。

一方で、『日本の植民地言語政策研究』（明石書店、二〇〇五年三月十六日）における「日本語」を「教え」ることにより「日本人としての国民性を獲得させる」、「母語という視点の欠如により、（中略）すぐ日本語以外のことばを話す植民地人民のことを怒る」^{〔註〕}などという石剛氏の指摘と、言語から名前、服装にいたるまでのヒロインをめぐる日本人への「改造」と関係付けて考えれば、母語の無効化は当時テクスト外で明治政府が日清戦争の勝利以来植民地で推進しつつある文化の同化政策の実態とも呼応している。

二、商品化された身体と自己分裂

「お蓮」に改名させられて、「丸髷」に結った日本人姿のヒロインはいつも「軍服を着た、逞しい姿を運んできた」「牧野の酒の相手をし」なければならぬ。その上、牧野の友人から度々着替えを注文されることがある。

「妙なもんぢやないか？　こうやって丸髷に結っていると、どうしても昔のお蓮さんとは見えない。」
（中略）

「――だがね、牧野さん。お蓮さんに丸髷が似合うようになる、もう一度又昔のなりに、返らせて見たい気もしやしないか？」

（中略）
「そいつは猶更好都合だ。――どうです？　お蓮さん。その内に一つなりを変えて、御酌を願おうぢやありませんか？」

「そうそう、臘肭獸の話よりや、今夜は一つお蓮さんに、昔のなりを見せて貰うんだった。(後略)」

以上の引用は「お蓮が牧野に囲われるのに就いて」、いろいろな世話をした「いた田宮という男がお蓮の妾宅へ二回訪ねた場面である。来るごとに田宮は「丸鬚を結っている」お蓮に「昔のなり」に「変え」ることを持ち出す。それについて、岡田豊氏は「日本人」と思い込まれたり「支那人」に引き戻したりという手前勝手な言動がお蓮に屈辱感を与えたであろう」と推測している²⁵。姚紅氏はまたジェンダーの視座からお蓮を「(帝国、筆者注)男性の性的欲望を煽る対象としてのメタファー」²⁶と捉えている。言い換えると、お蓮は妾になっても、彼女は「娼婦の延長線に位置づけられ」²⁷る存在であり、その身体が依然として男性の快樂に奉仕し、性を提供する商品でしかない。

尚且つ、帝国軍人・商人である男性が自分の官能的享樂や征服欲を満たすために、「密輸入」された半植民地の元娼婦に着替えを恣意的に注文する場面が鮮烈に露呈したように、下層女性の身体に対する消費及び搾取を当たり前のように貪る軍人階級の男性中心的なイデオロギーは、植民地・帝国主義と深く結びついた形で、お蓮の女性性と中国人としてのアイデンティティを支配・抑圧しつつある。

一方において、日本語を話すことを強要されたうえに、日本式の身なりをさせられ、日本人の名前を名付けられることによって、ヒロインはアイデンティティ・主体性喪失の窮地に追い込まれつつ、自己分裂の兆しを見せ始めたのである。例えば、「丸鬚に結った」お蓮が牧野と寄席に行く場面が挙げられる。

あたりの客は言い合わせたように、お蓮の姿へ、物珍しそうな視線を送った。彼女にはそれが晴がましくもあれば、同時に又何故か寂しくもあった。

お蓮が注目されたのは「自分の主体性に相応しくない格好をしているから」という周倩氏の主張に筆者も頷ける²⁸。言い換えると、「あたりの客」が日本人女性の姿であるお蓮に送った「物珍しそうな視線」は、彼女が未だに日本風の身なりに馴染めないことを裏付けているのである。「丸鬚」に結ったものの、中国人らしさが保有できていることに、お蓮は「晴がましく」なった。それに対して、無事に生きていくために日本人に仮装することを余儀なくされたが、いくら日本人に成りすましたところで成りきれないという空回りを彼女は虚しくまた「寂しく」思っている。それはヒロインの中にある被抑圧／抑圧Ⅱ中国人／日本人というアイデンテ

イテイの力学から生まれたアンビバレンスと言えよう。そして、小説の最後に昔の恋人金に再会する直前の、「私は昔の蕙蓮じゃない。今はお蓮と言う日本人だもの」という自己暗示からも、そうした矛盾が垣間見られるよう。

一方、常に「微笑を漏らした佯」無言で牧野らのお酌をしたり、「私の国の人間は」「諦めが好い」と表明したりするお蓮が、実は「数年間の生活が押し隠した」「狂暴な野性」の持ち主であることはテクストの第十四節で判明する。孔月氏は「お蓮の自己分裂は「昔の蕙蓮」、「野性」的と呼ばれる中国人としてのアイデンティティそのものを抑圧して「お蓮」という無抵抗な自己を演じ続けてきた」と論断している²⁸。戴煥氏は「理性的の対極にある「野性」こそが、お蓮の行動論理をなしている」が、そういった「行動論理」がお蓮を「近代の合理的な考えから一線を画した存在」にしたと打ち出している²⁹。平素に「無抵抗」という演技・戦略の下に押し殺されるお蓮の本性である野性は、従順な日本人女性を演じるヒロインの日常の自己分裂を裏付けている一方、内的な不安定要素としていつか彼女を狂気に誘い出す可能性を示唆している。

三、卜占・夢・幻覚——東京の森林化における多義性

外部からの抑圧や自分の精神的葛藤に喘いでいるお蓮は、「朋輩たち」や恋人の金がいる「過去の生活」が恋しくてならなくなつた。そこで、「突然足踏みもしなくなつた」金の身の上が心配で占に行つたが、その行動からお蓮の〈迷信〉を信じる一側面が読み取れる。

金との再会に対する執念に関して、戴煥氏はお蓮にとって「金が抹殺されたことを許せないのは、自分の過去、自分のアイデンティティが抹消されることを許せないから」と分析しているが、筆者も賛同する³⁰。言い換えると、お蓮にとって金は単なる恋人のみならず、「蕙蓮」の喜怒哀楽の体験を共有する人間であればこそ、中国人としてのアイデンティティを彼女に確認させられる、またそのアイデンティティを侵食しつつある「お蓮」という他者性に拮抗している存在である。そのため、「金が抹消された」と知らされた時、お蓮の野性が徹底的に解放され、彼女の発狂に拍車をかけたのである。

ただし、お蓮が金に会える前提は「玄象道人」の提示によると、「東京が森や林にでもな」ることである。その後、お蓮は東京が森林になる夢を一度見たが、白犬が死んだ後で「森林」はヒロインの幻視となり三回も登場してきた。したがって、東京の森林化という謎を解くために、お蓮の示唆的な夢を分析しておかねばならない。

彼女は細い路を辿りながら、「とうとう私の念力が届いた。東京はもう見渡す限り、人気のない森に変わっている。きつと今に金さんにも、遇う事が出来るのに違いない。」——そんな事を思い続けていた。すると少時歩いている内に、大砲の音や小銃の音が、何処とも知らず聞こえ出した。と同時に木々の空が、まるで火事でも映すように、だんだん赤濁りを帯び始めた。「戦争だ。戦争だ。」——彼女はそう思いながら、一生懸命に走ろうとした。が、いくら気負って見ても、何故か一向走れなかった。

以上の引用は牧野と近所の寄席に日清戦争の幻灯を見てきた夜のお蓮の夢である。戦艦「定遠」^①が「沈没するところ」を映した幻灯の戦闘場面は、「お蓮」を「動かすべき理由」を「持つてい」て、彼女の夢にまで侵入し、そこで「見渡す限り」「森に変わっている」東京の風景と混在し、融合することになる。

お蓮の「念力」によつて出現した「森」は、まず神秘的な（自然）・（大地）と客体化されていた女性性の原始的なメタファーだと考えられよう。「森」にまで戦火が波及した場面は、男性が主導する、自然改造の爛熟を示す「工業力」ものをいわせる近代の「^②戦争に表象される男性性が、近代以前の「農業の時代」、^③神祕の時代に結びつい」「^④た女性性を征服・支配することを象徴しているのではなからうか。それはひいては、抑圧／被抑圧の二項対立の構図にある、戦争で主役を務めていた軍人牧野と、野蠻視される老大国から略奪された野性の持ち主であるお蓮との関係にも合致している。

一方、「人気のない森」や「戦争」が結びついたお蓮の夢は、芥川龍之介自身の郷愁や感慨と無縁ではない。ヒロインの妾宅が置かれた本所について、他界する直前の芥川龍之介による「本所両国」という印象記が『東京日日新聞』（一九二七年五月六日～五月二十二日）に連載されていた。芥川はまず（一）の「大溝」において、「お竹倉」は僕の中学時代にもう両国停車場や陸軍被服廠に変わってしまった。しかし僕の小学校時代にはまだ「大溝」にかこまれた、雑木林や竹藪の多い封建時代の「お竹倉」だった」と述懐している^⑤。それに続いて、（三）の「お竹倉」の中で芥川が再び「雑木林や竹やぶのある、町中には珍しい野原だった」、^⑥「自然の美しさを教えた」お竹倉や、そこに建てられていた「いかめしい陸軍被服廠」を回想している^⑦。要するに、林が多くて自然豊かなお竹倉に対して芥川が親近感や深い愛着を抱いていればこそ、その自然性を破壊しつつあった殺風景な陸軍被服廠に違和感や嫌悪感を覚えずにはおかないだろう。また、「いかめしい陸軍被服廠」と照応しているように、「両国橋の袂」に日露戦争の表忠碑がある。それを眺めながら、芥川は「鉄条網にかかって戦死

した」知人を思い出して、「表忠碑にも時代錯誤に近いものを感じ」たのである^[80]。そのうえで、陸軍被服廠や表忠碑が象徴している軍備拡張や戦争に連動する工業化や近代化の発散した強烈な匂いを芥川は嗅がされた

高い鉄の櫓だの、何階建かのコンクリートの壁だの、殊に砂利を運ぶ人夫だのは確に僕を威圧するものだった。同時に又工業地になった「本所の玄関」という感じを打ち込まなければ措かないものだった。^[81]

最後に川の上を通る船も今では小蒸気や達磨船。(中略)現世は実に大川さえ刻々に工業化しているのである。^[82]

しかし今はどこを見ても、ただ電柱やバラックの押し合いへし合いしているだけである。^[83]

つまるところ、随所にある工業化の産物そのものである鉄筋コンクリートやバラックを目の当たりにして、芥川は困惑してたじろぎ、それに「金銭を武器にする修羅界の空気を憂鬱に感じるばかりだった」^[84]と、包み隠さずに日本の急速な工業化への不安や焦慮を皮肉な口調で告白した。以上引用した本所両国の一九二七年の風景は「奇怪な再会」が書き上げられた一九二一年より一層変化したことは言うまでもないが、日清戦争に勝利し下関条約を通して、日本が「脱亜入欧の課題を達成した」^[85]うえに、「賠償金二億両は戦後の軍備拡張を軸とする産業革命に原資をあたえ、金本位制の採用を可能にした」^[86]ことや日露戦争などの歴史背景から、一九二一年当時の日本、特に首都である東京の工業化における加速度的な発展状況は想像に難くない。それをお蓮がちょうど芥川の親しんだお竹倉に住んでいる設定と結び付けて考えると、お蓮が夢見た或はテクストの結末で「見た」周囲の森林化は、そのまま雑木林や竹藪の叢生したお竹倉に対する芥川の偲びと共通している。それとともに、お蓮の夢に起こった大砲や小銃の飛び交う戦争の風景が、お竹倉やその近くに入り混じった陸軍被服廠や表忠碑に表象された軍備拡張や戦争、なおかつそれに癒着する日本の近代化、工業化の爛熟と重なり合う。そういう日本の急進的な姿勢と自己分裂の絶境に立たされることになったお蓮の「念力」として彼女に付与されて、工業化を表象する鉄筋コンクリートなどの抹消を意味している東京の森林化に転化したのではあるまい

か。しかしながら、ヒロインは東京の森林化を「目睹」して恋人との「奇怪な再会」を実現すると同時にすっかり「狂女」に変身したのである。

四、〈狂女〉の行く末

完全に発狂したヒロインはまもなくK脳病院の患者になったのである。狂気の隠喩性について、先行研究はいろいろ論じてきた。お蓮の狂気は牧野が象徴する「中国を暴力によって征服しよう」と試みる「近代日本人」の失敗だと戴煥氏は締めくくっている^{〔32〕}。姚紅氏は「お蓮の狂気に女性性と中国人が結びつけられた時、男性と日本人の項目が理性のカテゴリに一括される」と主張している。陳玲氏はまた一歩進んで、お蓮は「『狂気』によって」、「日本帝国の植民地主義から脱出し」て、「中国の家父長制社会の抑圧から自我意識を回復し」て「再生」したとまとめている^{〔33〕}。

確かに、お蓮の狂気が持っているマイナスな意味合いに、芥川が実母の疾患と自己の遺伝体質に対する不安が隠れている一方、「男性性と日本人の項目」と対置された理性・先進と無縁な中国人狂女の像が顕現してきた。それにしても、「病院へ来た当座」「支那服を脱がなかった」お蓮も確実に発狂で主体性や中国人としてのアイデンティティの被抑圧から一時的に脱出することができたと言えなくもない。にもかかわらず、もつと掘り下げて考えねばならないのは、ヒロインの未来はどうなるのかという問題であろう。残念ながら、発狂した彼女の姿が「古写真」に映っているイメージとして「私」の目に入った時点で小説は急ブレーキをかけるように幕を閉じたため、彼女の未来は未知のまま読み手の想像に任せられることになった。

もつとも、当時の日本の精神病院の実態について調査した結果、以下のようなことが判明した。一、一九三八年まで東京では精神病院も精神障害者も警視庁や警察が統括していた^{〔34〕}。二、太平洋戦争前まで薬物療法がなかった^{〔35〕}。三、精神病は他の病気に比して、入院期間が非常に長い。一年や二年はおろかな事、五年六年乃至は十年、場合によっては一生を病院に送らねばならぬ患者もある^{〔36〕}。四、以上三の原因もあって、入院料が高額になる。精神病院への入院が家族にとつてかなりの負担となる^{〔37〕}。福祉予算のまだ乏しい時代だったので公的扶助の審査は厳格で適応人数も少なかった^{〔38〕}。五、すべての精神病院に隔離と拘束をする保護室という外から鍵のかかる個室が存在する^{〔39〕}。場合によっては（例えばある幻視の激しい女患者）、鉄柵の狂躁室に入れられる患者もある^{〔40〕}。六、患者逃走を防止するための監視が厳重である^{〔41〕}。

以上の状況とテクストとを結びつけて考えるため、監視が厳重であると、次のような推論が導き出せると思われる。「薬物療法」

のない時代にお蓮の狂気が治癒する可能性は極めて希薄である。万が一彼女の狂気が完治した場合でも、当時の日本人にとって忌まわしく、しかも生産手段を何一つ持っていない清国からの女性は、その生存でさえ全うできないと言える。

一方において、ヒロインの立場に立ってみたら、彼女の精神は非日常的世界の中で徘徊し、放浪しているのに対し、現実世界に取り残された「抜け殻」は日本帝国の男性に抑圧、消費されなくなった代りに、脳病院施設によって「拘束」され、外の社会から「隔離」されたのである。それは脳病院の閉鎖的空間に封じ込められて、自由の行動力を備えない主体であり、極めて不健全で限界のあるものにほかならない。しかも前に推論したとおり、お蓮にとって脳病院も決して永遠に安住できるシエルターではありえない。

要するに、狂気によってヒロインにまつわる被抑圧の問題が解決されたかのように見えるテキストの結末には、不穏なフアクターがいくつか潜在している。ヒロインの行く末は、無解決のままテキストのオメガに放置されている。「古写真」に映っている「孟蕙蓮」の「寂しい」姿から、ひたすら非日常の世界に逃避することによる倦怠感や、安定した未来が先に待ち受けないことから生じた払拭できない精神的不毛や空虚感が感じ取れるよう。

むすびに

ヤニック・リーパは『女性と狂気——十九世紀フランスの逸脱者たち』の第一章でパリの十三区に位置する病院「サルペトリエール」に関して以下のように述べている。

精神病院に生まれ変わる以前のサルペトリエールは、長らく淫蕩の病院であった。梅毒に冒された娼婦、なかば拘禁者なかば病人であり、しばしば錯乱と痴呆のただなかで生涯を終える娼婦たちを治療してきたのだ。精神病院となってもその忌まわしい過去を清算するにはいたらず——現に依然として売春婦を収容していた——、人々にとってサルペトリエールとは悪徳と狂気と同義語であった。精神病院と淫蕩の病院、この両者の相貌が渾然となって、その住人に恥辱の烙印を押しつける。¹⁷⁸

十九世紀のフランスにおける娼婦の収容は「上層社会の梅毒恐怖症と、社会全体を汚染しうる精神の変質への不安」に根ざしている¹⁷⁹。「売春と狂気」の「同根」¹⁸⁰性を吹聴することによって正当化される娼婦の収容

は、「悪徳」の娼婦と狂女を同じく忌避しながら関連付け、ひいては同一視しがちな社会通念を端的に現している。それに加えて、大正時代に活躍した通俗性科学者澤田順次郎も『花柳病院』において娼妓がかかりやすい梅毒と精神病との病理的な関わり——「南京の基督」にある梅毒に伝染された日米混血児の発狂はそれを傍証できると考えられる——記している¹⁸⁰。それは十九世紀末を生きる元娼婦が最後に狂気になる「奇怪な再会」の展開と呼応していると同時に、「女性性」と「不正」・「不合理」という共通項で連結されて、「渾然とな」つた「娼婦」と「狂女」の「忌まわしい」マークによってステイグマ化された中国女性像を浮き彫りにしている。

「サルペトリエール」にまつわる言説が明示した十九世紀のフランスの社会通念と澤田の記述は、ある意味でテクスト内でヒロインの娼婦だった過去と発狂した結果にある因果関係を提示しているのではなからうか。

十七世紀頃から産業社会がフランスで形成されはじめ、狂人のほかに、老人、病人、失業者、売春婦などのいわゆる「社会的不適応者」¹⁸¹の存在が許されなくなったのである¹⁸²。そのため、「文明の喧騒のなかに浮かぶ平和の孤島」のような精神病院という避難所が提供されてきた、即ち近代文明の進歩を標榜する産業革命は、「文明を善用する」のに不可欠な「知的アプローチ」を持ってない時代遅れの弱者を淘汰して、押しつぶそうとした¹⁸³。一方、「精神病患者」へ娼妓へ支那人へ幻影へ夢へ迷信」という項目は、日本の近代化の過程で社会の規範的な定常系から差別化されたものとして、一斉に大正期を代表する精神医学雑誌——芥川と同じように夏目漱石の門下生だった中村古峽が創刊した——『変態心理』に採録されている¹⁸⁴。「奇怪な再会」に戻って考えれば、近代化以前の清国という「後進国」、近代科学や合理性と対置された「野性」へ迷信、近代文明・社会から同質のものと目されて、排除された「娼婦」へ「狂女」といういくつかの記号がその造形に同時に集約されているヒロインは、極端なまでに重層的な「他者」となっている。日本の近代化発展の需要に密接に絡んでいる日清戦争は、敗戦したヒロインの母国を弱体化させたのに反し、植民地分割の関与に成功した日本の近代化の土台を固めることになった。一切の存在を非対称的に差異化し、二元的に規制しがちな近代合理的イデオロギーと、対清勝利に助長された日本国内の優劣意識によって、「後進国」からの「娼婦」は最初から劣等のカテゴリーに貶められる。その上、日清戦争後の近代化の急速成長に乗じようとする帝国男性に消費・圧迫されつつ、ヒロインは「野性」の蘇生をきっかけに「狂女」に「逸脱」して、近代化から完全に篩い落された存在となり、最後に脳病院に「収容」されるに及んだ。それは一方において、近代化発展と近代戦争の理論的基盤を構成する、「創造力、明晰、知性、秩序」や「超越」・「技術」・「理性」などの「男性的要素」が「支配的にな」り、「内在」・「魔術」・「迷信」|| 女性的要素を「打ち勝った」ことの具象化だと考えられよう¹⁸⁵。

他方で、芥川龍之介は過去の遊び場だった木の生い茂った本所両国が日に日に鉄筋コンクリートやバラックに変わりつつあるところを目の前にはおかないだろう。そのうえで、彼は未だ足を踏み入れていない隣国中国の近代化への困惑と懐疑を抱かずに入れた、近代文明の恩恵を蒙った日本軍人と、日本の近代化を背景に科学や合理化と発展との連動性をも視野に入れて、近代文明の恩恵を蒙った近代化・合理化から排斥された狂気に罹患する、つまり近代化により周縁化され、しかも間接的に壊された中国の下層女性を塑造し、描出していると思われる。

第二章 都市・自覚・革命——旅行者の観察と体験

前章の考察を通して、谷崎潤一郎は既に訪中を実現したにもかかわらず、彼が描き出した中国女性像は依然として中国古典文学の知識や欧米文学によるヒントに立脚して構築されたものだと言わざるを得ない。そうしたところは中国旅行の素志を遂げていない芥川龍之介の作り上げた中国女性像とほど遠くないと考えられる。そこで、第二章は芥川龍之介やその影響を受けた、中国の旅行体験を持つている横光利一や阿部知二がそれぞれの中国体験に基づいて執筆した中国都市を舞台とする小説における、社会の変革に関与したりする中国女性像を分析してみたい。

第一節 激動する一九二〇年代を生きる中国女性像——芥川龍之介「湖南の扇」論はじめに

芥川龍之介は一九二一年三月下旬から七月上旬にかけて、つまり谷崎潤一郎の後を追って「大阪毎日新聞」の特派員として「上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京」（「自序」、『支那遊記』、改造社、一九二五年）らを含める中国の都市を遍歴して、ついに中国の旅という宿願を叶えることができた。帰国直後、「上海遊記」（『大阪毎日新聞』、一九二二年八月十七日）、「江南遊記」（『大阪毎日新聞』、一九二二年一月一日）、「二月十三日」、「長江遊記」（『女性』、一九二三年九月）、「北京日記抄」（『改造』、一九二五年六月）を断続的に発表した後、これらを『支那遊記』（改造社、一九二五年十一月）に収録し上梓している。その後『支那遊記』の出版後間もなく、芥川は自身の中国体験を題材にする小説「湖南の扇」を一九二六年一月に雑誌『中央公論』に発表した。脱稿直後、「湖南の扇」について、芥川は斎藤茂吉宛の書簡に「仕舞の方が出来損っている」と述べているが、小説の名前が依然として作者の生前最後の短篇集『湖南の扇』のタイトルになっていることから、本作の重要性を窺うことができる。

本作の梗概についてははじめにまとめしておく。一九二〇年代の中国の湖南省長沙市が本作の舞台となった。日本人旅行者の「僕」は長沙を案内してくれた旧友「譚永年」の勧めで嶽麓を見学に行った。途中ですれ違ったモーター・ボート上に「玉蘭」という芸者を見かけたが、彼女は一週間まえに斬罪に処せられた土匪「黄六一」の情婦だった。その晩の妓館で、玉蘭が「わたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味わいます」と言いながら、黄六一の血を染みこませたビスケットを食べ始める衝撃的なシーンを「僕」は目撃した。後日長沙をたった船室の中で、「僕」は誰かに置き忘れられたように、桃色の房を垂らした扇一本を発見する。

従来の先行研究の中で本作に登場する二人の中国女性「玉蘭」や「含芳」について考察しているものは数多あるが、二人を革命の協力者とみなす「革命者」説と、二人が単に作者が同情を寄せる下層女性だという「民衆」説に大別できる。前者を代表する論考として、青柳達雄氏「芥川龍之介と近代中国序説（承前）」（『関東学院大学紀要経済学部編』、一九八九年十二月）や姚紅氏「『湖南の扇』論——情熱的な中国女性」（『文学研究論集』二七、二〇〇九年二月）が挙げられる。青柳氏は玉蘭を中国の名高い女性革命家秋瑾をモデルとした「革命的精神の持主」とみなしている^[83]。姚氏は「父権」や「階級」的に「抑圧され」た二人のヒロインが「革命運動」に関与したと捉え、彼女らのイメージが一九二〇年代の「中国の政治・文化そのものの縮図」と結論づけている^[84]。それに対し、後者の代表的論文に例えば戴煥氏「芥川龍之介筆下の現代中国形象——『湖南的扇子』解析」（『芥川龍之介による近代中国像——『湖南の扇』解析』、拙訳、『日語学習と研究』一六三号、二〇一二年第六期）がある。戴氏は「弱々しくも何かを期待している含芳」や、「苦しめられても負けぬ気の強い玉蘭」は「蹂躪される側においても希望を捨てない女性として」、「激動する社会状況のなかで粘り強く生きている中国の下層民衆を象徴している」と打ち出している^[85]。

さて、本節はテキストの同時代的コンテキストのもとで、史料や芥川龍之介の中国体験の関連遊記、書簡、手帳などを踏まえながら、玉蘭と含芳という二人の中国女性像に焦点をあて、それを複眼的に解説する新たな可能性を示しておく。そのうえで、本作のタイトルになっている「扇」の意味を解き明かしてみたい。

一、近代意識・革命精神に覚醒した中国女性 1、女性革命家「秋瑾」

中国に赴く前の芥川は薄田淳介宛ての書簡において以下のように記している。

一昨日精養軒の送別会席上にて里見弴講演して曰「支那人は昔偉かった。その偉い支那人が今急に偉くなくなる」といふことはどうしても考えられぬ。支那へ行ったら昔の支那の偉大ばかり見ずに今の支那の偉大もさがして来給え」と、私もその心算でいるのです。

では、「今の支那の偉大」を「さが」すという課題を抱えて中国の旅を始めた芥川はその後中国でいかなる「偉大」さを発見したのだろうか。

一九一〇年代から一九二〇年代まで、中国の歴史上二つの画期的な大事件が発生したのである。一つは「湖南の扇」の冒頭で羅列されている「孫文」、「黄興」、「宋教仁」らの革命家が指導した辛亥革命である。それによつて、清王朝の支配は崩壊し、一九一二年一月一日、アジア最初の共和国である中華民国が誕生することになった。ただし、辛亥革命の歴史について論じる際に、孫文をはじめとする男性革命家以外に、命を捧げることで辛亥革命に一役を買ったひとりの女性革命者——秋瑾に言及せねばならない。秋瑾は周知のごとく浙江省の生まれだが、湖南人の夫に嫁して数年間湖南で住んでいたため、そこで湖南生まれの唐群英、葛健豪と親交を結んで「蕭湘三女侠」と称されるようになった。また、秋瑾は日本留学中、湖南同郷会の集会に出席したりするばかりか、孫文が指導する革命団体「中国同盟会」にも参加し、孫文、黄興や宋教仁らと交際をはじめたのである。そういつた清末の代表的な女性革命家秋瑾に関して、芥川は「江南遊記」や佐々木茂索宛の「書簡」のなかでこう述べている。

私はさつき秋瑾女史の墓前に、やはりこの煉瓦の門を見た時、西湖の為に不平だったばかりか、女史の靈の為にも不平だった。「秋風秋雨愁殺人」の詩と共に、革命に殉じた鑑湖秋女侠の墓門にしては、如何にも氣の毒に思われたのである。（「江南遊記」）

今日西湖見物の序に秋瑾女史の墓に詣でた。墓には「鑑湖秋女侠之墓」と題してある女史の絶命の句に曰「秋風秋雨愁殺人」。この頃の僕には蘇小々より女史の方が興味がある。（「書簡」）

中国古典文学の愛好家である芥川が中国伝統文化・文学を表象する名妓蘇小々より「革命に殉じた」秋瑾のほうに「興味がある」のは、犠牲になってまで自分の信念を貫こうとする近代中国の代表的な女性革命者である秋瑾の義侠心や革命精神に感服し、そこから近代中国の「偉大」さを感じ取ったからではないであろうか。のみならず、それを古典文学にある伝統的な中国像または中国女性像だけでなく、中国の近代女性にも振り向けようとする芥川の姿勢と見てよかるう。

2、「女学生」の登場

一九二〇年代の中国の歴史上もう一つの大事件は第一次世界大戦が終結する一九一九年に、青年学生たちが

主役を演じる五四運動である。そして、芥川が中国を旅行したのはちょうど五四運動の二年後である。一九一九年四月より設立が始まった各地の女子高等師範学校で学び、辛亥革命や五四運動の洗礼を受けてきた「女学生」たちは、激動する時代にあつて中国の歴史舞台で大きな役割を果たしていた¹⁰⁰。なかんづく湖南の女学生は排日運動が高揚するなか、愛国宣伝や日貨排斥に積極的に取り組んでいたのである。例えば一九一九年六月三日の湖南「大公報」に掲載された、「これをもって吾が湖南諸姉妹に告げる。国恥常に心がけ、外貨用いる勿れ。本校と一丸となり、かの会の盾になれ……」(拙訳)¹⁰¹という湖南省立第一女子師範の宣伝文や、同年同月六日付け同紙に掲載された「今既に金輪際日貨を買わないと決議した。諸姉妹に国貨購入により誠な心を示すことを勧める」(拙訳)¹⁰²という女学生の誓いから、湖南の女子学校において昂揚する日貨排斥運動の激しさや、女学生たちの決意の健気さを端的に読み取れよう。したがって、「湖南の扇」における「それはついきの朝、或女学校を参観に出かけ、存外烈しい排日的空氣に不快を感じていた為だった」という心理描写や、芥川の「雑信一束」にある、「長沙の天心第一女子師範学校並に附属高等小学校を参観。古今に稀なる仏頂面をした年少の教師に案内して貰う。女学生は皆排日の為鉛筆や何かを使わないから、机の上に筆硯を具え、幾何や代数をやっている始末だ」という記録はとりもなおさず排日運動に積極的に身を投じた湖南女学生の我慢強さ、粘り強さを再現している。

一方において、芥川が実感させられた湖南の女学生たちの激しい排日的雰囲気について、彼の親友江口渙は後日に以下のように回想している。

それは芥川が湖南省の首府長沙へいったときのことである。日本からきた作家だというので、とくに好意をもつて女学校の参観をゆるされた。ところが教室に入つて見ておどろいたことは、女学生たちのあいだにあふれている排日抗日精神のなみなみならぬ烈しさであつた(中略)女学生たちは教室でも家庭でも絶対に日本品をつかわない。(中略)そして、あらゆる不便をがまんしながら、あくまでも抵抗をつづけている(中略)女学生たちは日本が帝国主義的侵略をやめるまでは断じてこの運動はやめないといっている。その決意と闘志のげしさを実際に見たとき、芥川はもう少しで涙が出そうになるほどの感動に打たれた、といつていた。「中国人という民族は全くたいした民族だね。いまに見たまえ。いまに、君。中国はたいした国になるよ。」

この話のあとで芥川は感慨ぶかい表情とともにこうつけ加えた。¹⁰³

つまるところ、江口によると女学生たちの抗日精神の激しさに対して、芥川は前述したとおり「不快を感じていた」わけではなく、むしろ「その代わりに深い感慨を抱いていた」という¹²⁵。すると、「ここにある「不快」を多重的、或は両義的に解読する可能性が出てくる。その内実はまだ究明できないが、少なくとも女学生たちの態度や行動から芥川は大きな衝撃を受けたのである。さらに、姚紅氏は「湖南の扇」の草稿と完成稿の結末を照合して、完成稿の結末に日本人旅行者の「僕」が「鉛筆」を使うディテールが書き入れられた点を見出したうえで、玉蘭と「排日運動の女学生との共通した抵抗精神」を指摘した¹²⁶。筆者の管見では鉛筆の書入れが「玉蘭」イメージに直結できるかどうかはまだ一考を要するが、それが芥川が湖南の女学生の「鉛筆」へのボイコットを強く意識していることの証左になることは否認できない。

一方、芥川の「手帳」において湖南の女学生に対する以下のような細かい点描が書き残されている。

女学生——白帽、髪切れる故——…
現代ではごく普通に見える「髪切れる」「女学生」は、当時の中国の歴史的コンテクストにおいて特殊な表象性を持っている。以下湖南出身の初期中国共産党の女性党员王一知による「湖南桃源女子第二師範学校の五四期の愛国運動」の内容を引用しておく。

「五・四」後、私たちは文章を書き、長い髪のままでも役立つことはないと言った。最初、十数人の同級生が髪を（今日の背広姿の短髪の男性のように）切った。断髪は今からみればたいしたことではないが、当時はそのために闘わなければならなかった。社会と学校当局のいざれもが反対で、断髪は尼僧のようだと言われ、家長のなかには学校に押しつけて一悶着を起こす者もいた。校長は激怒して私たちが叱責した。当時、女子の断髪は、実際耳目を集める出来事だった。一九二二年の上海でも、私たちが道を歩いていると、子どもたちがあとをついてきた。頑固な年寄りには、私たちが化け物よばわりし、「国家が滅びるときは、必ず不埒な奴らが現れるものだ」などと言った。¹²⁷

「身体髪膚之を父母に受く」というような封建的社会通念がなお根深く鎮座している一九二〇年代の中華民

国において――一九一六年九月中華民国教育部は女子学校に対して「断髪すべからず、違反者に退学を処すべし」(拙訳)¹⁹⁾という禁止令を頒布した――自ら進んで「髪を切る」という行動は取りもなおさず男女平等・自由・民主への追求を表明する一種の反逆行爲である。一方、孫文を指導者とする反清革命党の「断髪」によって強化されてきた「断髪＝革命」というロジックは、そのまま五四運動後の女学生の「断髪」に革命性を付与することになった²⁰⁾。

というわけで、五四運動を背景とする湖南の女学生の排日運動や「断髪」からみる反帝反封建の健気な「決意」と革命の「闘志」を、機敏さに富んだ新聞特派員芥川は切実に思い知らされたに違いない。

3、「南国美人」の「素顔」

従来の先行研究により明らかになったのは、芥川の長沙行が二泊三日であり、小説で描かれたように妓館には上がらなかったということである。その場面に關する描写は「上海遊記」の「南国美人」にある関連内容をもとに創作されたものだと思われる。

その一人の洛娥と言うのは、貴州の省長王文華と結婚するばかりになっていた所、王が暗殺された為に、今でも芸者をしていると言う、甚薄命な美人だった。

社会上層の派閥の闘争や軋轢で夫が「暗殺された」洛娥は、愛人黄六一を斬首された玉蘭を彷彿とさせる。洛娥以外にも芥川はまた「大總統の徐世昌を除けば」「最近二十年間の政局の秘密を知っている」(「上海遊記」)唯一の人である林黛玉という有名な高級娼妓にも言及している。そして、当時の関連史料からは林黛玉は一九一〇年代より元帥張勳一のバックアップを受けていたことが判明する²¹⁾。以上のことを考え合わせると、一九二〇年代の軍閥割拠の激変する時代にあり、従来より政治からかけ離れた存在である花柳界の妓女も、役者なり大官なりと何らかの繋がりをもって時局に關与することになる可能性が高いと割り出せる。

すると其処の電灯の下には、あの優しい花宝玉が、でっぷり肥った阿姨と一しよに、晚餐の食卓を囲んでいた。食卓には皿が一枚しかない。その又一つは菜ばかりである。花宝玉はそれでも熱心に、茶碗と箸とを使っているらしい。私は思わず微笑した。小有天に来ていた花宝玉は、成程南国の美人かも知れない。

しかしこの花宝玉は、――菜根を噛んでいる花宝玉は、蕩児の玩弄に任すべき美人以上の何物かである。私はこの時支那の女に、初めて女らしい親しみを感じた。(「上海遊記」)

以上の引用に示されるように、名妓花宝玉の華やかな外見と、「菜根を噛んでいる」実生活のギャップによって、芥川は中国の下層女性にある素朴さを発見したのである。その人間味に満ちた質素な姿は、「日かげの土に育った、小さい球根」のように見える含芳と二重写しになるといえよう。

総じていうと、近代中国の「偉大」を発掘しようという課題を背負う芥川は、女傑秋瑾、湖南の女学生や上海の高級妓女など異なる階層・身分・年齢に属する中国女性に、先鋭的で粘り強い主体的意識、革命精神や政治性を痛切に実感させられた。そういった女性群像のそれぞれの「偉大」または時代性を、芥川は二人の湖南芸者玉蘭と含芳の造形に凝縮し、彼の生前最後の中国体験を題材とする小説に登場させたのである。なぜ妓女を主人公としたのかというと、まず確に姚紅氏も既に解釈したように、鮮明な革命性を帯びた女学生などより、従来エキゾチックな表象と解読されがちな異国妓女を取り上げたほうが、「厳しい言論統制・検閲制度」を免れやすいからであろう^[10]。また、その裏に前節で論じている「南京の基督」や「奇怪な再会」以来続いてきた作者自身の妓女を代表とする中国の下層女性に対する関心もあると考えられる。さて、本作にある二人の中国芸者について検討してみよう。

二、混乱を生きる湖南芸者

1、生／死――抵抗する玉蘭

玉蘭という女性像を解読する上で是非取り上げねばならないのは、彼女が愛人の血を染みこませたビスケットを食べさせられるシーンである。玉蘭の「衝動的な行為」は「異民族」・「性差別」・「階級」の「三つの権威」に対する「抵抗」だという姚紅氏の論断に筆者も首肯できるが、もう一つ見過ごせないのは、そういった衝動的な場面に潜んでいる生と死の衝突ということである^[11]。

斬首された黄六一の血液が染み込んだビスケットは、ほかでもなく静止・死亡そのものを象徴するものであるのに対して、「僕」にいつまでも「鳥籠の中に」「滑らかに上下していた」栗鼠を「思い出」させる玉蘭の「エナメルのように」光る歯は活動的で生命力に満ちた存在である。そういった歯が人血ビスケットを噛む・食べるときこそ、紙一重になった恋人同士である玉蘭の生と黄六一の死の対決により目も当てられない残酷さ、無

気味さが生み出されたのではなからうか。しかしながら、抵抗精神に富んだ玉蘭はあえて「わたしは喜んでわたしの愛する……黄老爺の血を味わいます」と表明することで、その行為の動機を譚のいう「無病息災」という迷信から死別した愛人に対する敬愛の意に転換することに成功したと思われる。しかも玉蘭と黄六一の間柄は単なる恋人だけでなく革命同士でもありうることを勘案すると、例えば溝部優実子氏が論述したとおり、「生きている」玉蘭は「死んでいる」黄六一の血を摂取し自分の体内に融合させることで、その反体制的な革命精神を「持続」することになるという解釈もありうるだろう^[10]。すると、「死」を「(新)生」に、「悲しみ」を「喜び」に反措定的に解釈することができなくもない。こうして、玉蘭は自分を「食べさせられる」|| 受動的側から「進んで食べる」|| 主動的側に反転させることに成功し、しかもそれにより、昔「幅を利かしていた」が今や勢力を失った彼女を苦しめようとする譚永年の意地悪をある意味で頓挫させてしまうことになった。そこから、男性(性) / 女性(性)、小ブルジョア知識人 / 下層民衆、消費する / 消費されるという三つの二項対立の低位にありながら、中国女性の主体性を確立しようとする近代意識をも窺うことができよう。

一方、以上のように玉蘭という女性像に表象される生と死の衝突・混在というモチーフは芥川を見た都市長沙と如何に関係しているのだろうか。ここで、芥川の記録における長沙に関する記述を引用しておく。

張継堯(湯(弟))ト譚延闓トノ戦の時張の部下の屍骸土を蔽う事浅ければ屍骸湘江を流る。

日清汽船の傍、中日銀行の敷地及税関と日清汽船との間に死刑を行う。刀にて首を斬る。支那人饅頭を血にひたし食う。——佐野氏。(「手帳」)

往来に死刑の行われる町。チフスやマラリアの流行する町……(「雑信一束」)

此処の名物は新思想とチブスだ 以上(「書簡」)

以上の引用に示されるように、長沙は軍閥混戦による「屍骸」、「死刑」、人血「饅頭」や、「マラリア」——小説の冒頭でBはマラリア熱にかかっているため「僕」の出迎えに来られなくなった——「チブス」など衛生環境の悪い高温地区に多発する伝染病という陰気で退廃的な一面を有するが、芥川はそれらの素材を如実に「湖南の扇」に盛り込んでいる。にもかかわらず、長沙は猛威を振るっている「チブス」の温床であると同時に、

「チブス」とともに「名物」と併称される、發育しつつある進歩的な「新思想」の発祥地でもある。このように、「身体上」における死亡・疾病の氾濫と「精神上」における新生思想の成長がなす鮮烈な対比は芥川に鮮やかな印象を与えずにはおかない。それゆえ、作者はそういった鮮烈な対比を、死亡・疾病などの悪条件を克服しつつ粘り強く生きていこうとする、新思想に感化を受けた湖南女性の造形に潜ませていると考えられよう。さらに、軍閥混戦の続く一九二〇年代の中国における階級矛盾・党派対立の複雑化・深刻化を暴露しようとしているのではないだろうか。

2、伝統・前近代／革新・近代——忍耐する含芳

本作で玉蘭に先立って登場した彼女の友達含芳はどちらの党派に属するかは判別することはできないが、彼女は政治性を帯びる、革命活動の積極的な協力者である可能性が高い。だが、含芳についても少し補足せねばならないのは、彼女の造形から読み取れる伝統と革新、または前近代と近代の対立と共存という点である。「僕」が長沙の埠頭に到着した時に、含芳の姿は「僕」の視線を惹いた。

しかし僕は棧橋の向うに、——枝のつまった葉柳の下に一人の支那美人を発見した。彼女は水色の夏衣裳の胸にメダルか何かをぶら下げた、如何にも子供らしい女だった。

「水色の夏衣裳にメダル」をぶら下げた「子供らしい」伝統美に満ち溢れた中国美人というのは「僕」が含芳に持つ第一印象である。

彼女は水色の夏衣裳の胸に不相変メダルをぶら下げていた。が、間近に來たのを見ると、たとい病的な弱々しさはあっても、存外ういういしい処はなかった。僕は彼女の横顔を見ながら、いつか日かげの土に育つた、小さい球根を考えたりしていた。(中略)すると突然林大嬌は持っていた巻煙草に含芳を指さし、嘲るように何か言い放った。含芳は確にはっとしたと見え、いきなり僕の膝を抑えるようにした。しかしやつと微笑したと思うと、すぐに又一こと言い返した。

譚永年に連れていかれて「僕」は長沙の妓館に上がったが、そこで座席の隣に座っている含芳に気づいた。

彼女は衣裳やアクセサリーが変わらないにしても、「僕」はその「弱々しき」以外に、「ういいういし」くないところ及び「小さい球根」のような地道さや強靱さを発見したのである。また、林大嬌の挑発に面しても、含芳はなるべく感情の起伏を隠蔽しようとし、最後に冷静に対応することができたといえる。こうしてみると、含芳は子供のように病弱な外見を持つ伝統的・前近代的な中国美人でありながら、大人で強靱な中身も有する革新的・近代的な革命協力者でもある。さて、それはまた長沙の都市表象にどのように関わっているのか。ここで、芥川の手帳にある内容を提示しておく。

長沙に來り葉德輝の蔵書を見たり。葉先生今蘇州にあり……（「書簡」）

紺ノ馬掛子。金のメガネ。白哲。葉尚農（德輝）。

湖南長沙蘇家巷怡園。葉。（「手帳」）

黄蔡（鏢）兩人の墓の爲国費、道を創る……六君子堂（「手帳」）

此処の名物は新思想とチブスだ 以上（「書簡」）

つまり、芥川の見た湖南には蔵書に心酔し、革命に反対する保守派の清朝遺臣葉德輝もあれば、近代革命に尽瘁した六君子、黄興、蔡鏢らもある。そこには「岳麓寺」や「愛晚亭」（「手帳」）のような古風の名所もあれば、既述したように近代意識・革命思想に目覚める女学生の集まる女子師範学校もある。言い換えると、一九二〇年代軍閥割拠・混戦に巻き込まれた重要な戦場である湖南において、表面的に古典・伝統的な風物が残っている一方、近代的な教育機構や「新しい赤煉瓦の西洋家屋」（「湖南の扇」）も有する。その内部には逆行的・保守的な旧制度が残留していると同時に、先鋭的な「新思想」・近代的革命意識も芽生えているのである。したがって、伝統的な外見と近代的な思想・精神を兼備する含芳という女性像はまさに伝統・保守・前近代性と革新・革命・近代性の混在している都市長沙の政治・文化表象の縮図だと言わざるを得ない。

「扇」は全作において果たしていかなる意味を持つのだろうか。――しかも小説のタイトルになっている

三、「扇」の多義性

「扇」は周知のごとく、従来中国の漢詩文（特に閨怨詩）において含蓄的・静止的な「女らしさ」のシンボルとして頻繁に設置されてきたツールである。よって、「水色の夏衣裳」を身にまとう含芳の持っていた「扇」は表向きには彼女の前近代的な古典美・伝統美を補強する装置にほかならない。それから、小説の結末に出てくる「桃色の流蘇を垂らして」いた誰かの忘れ物である「扇」も一見エキゾチックな情緒を醸し出す道具にか見えない。

しかし、小説のタイトルひいては芥川生前最後の短篇集のタイトルになっている「扇」は中国女性の古典美の表象としてのみ機能しているはずがない。宋代より芸妓たちの手に握る「扇」はその職業を暗示していたが、明朝後期では「桃花扇」は次第に「妓女」そのものの代名詞になるようになった。よって、名高い（雲亭山人 || 孔尚任）『桃花扇伝奇』というタイトルはプロット自体と関係する一方、ヒロイン「李香君」の身分にも関わっている¹⁰³。この清代伝奇の代表作は一九二二年（塩谷温訳）『国訳漢文大成 文学部』（第一一巻、国民文庫刊行会）に、一九二四年（山口剛訳）『近代劇大系』（第一六巻、近代劇大系刊行会）に収録されたのである。そして、周倩氏の調査では、「日本近代文学館の芥川文庫に『桃花扇傳奇』（宣統一年刊）全二冊が所蔵され」ていることがわかる¹⁰⁴。そこで、権力者に媚びない『桃花扇伝奇』のヒロイン、つまり「桃花扇」の持主である妓女李香君の剛直さや義烈さを意識している芥川は、「桃花扇」のイメージを借りてそれを湖南芸者の負けぬ気の強さまたは反逆性を示唆する装置として設定したと推定できよう。

一方、「湖南の扇」というタイトルから「湖南」と「扇」との、文学的意味を捨象したうえでの関連性を考え直してみると、「扇」というものの最も重要な役割は「あおいで風を起こす」ということである。だからこそ、それが多用されるのは特に夏の暑い時である。そして、湖南（特に長沙）省の気候は夏の連続の高温というところに顕著な特徴があるが、初めて中国に足を踏み入れた病弱な芥川はいにく湖南の猛暑に遭遇したのである。

六 長沙 ……夜になっても敷石の上はまだ暑さのいきれる町……（「雑信一束」）

長沙は湘江に臨んだ町だがその所謂清湘なるものも一面の濁り水だ暑さも八十度を越えている……（「書

以上のような長沙に関するわずかな記録からでも、湖南の暑さに晒される芥川の耐え切れなさが判明する。即ち、そういった湖南特有の高温は芥川に強烈な印象を残したことは疑いない。「湖南の扇」において長沙の暑さそのものには言及されていないが、冒頭でBが「五六日前からマラリヤ熱」で倒れたエピソードは亜熱帯に位置する、長沙の五月の気候特徴の一端及びそれによる伝染病の猖獗をほのめかしている。したがって、鮮明な季節性を帯びる「扇」は取りもなおさず湖南の猛暑、高温を意味していると言えよう。ひいて、それは湖南の炎天下で悪条件と戦いながら生きていく、玉蘭と含芳を代表とする「情熱に富んだ湖南の民」の燃え上る革命精神の炎を表象しているのではないだろうか。

むすびに

近代中国の「偉大」を探求しようとする「心算」で一九二一年中国の土に初めて足を運んだ芥川龍之介は、辛亥革命に殉じた女傑秋瑾や五四運動以来革命運動を舞台に活躍する進歩的な女学生から、大官らに関わる高級妓女に至るまでの異なる階層の中国女性を通じて、近代意識及び革命精神の萌芽、即ち発育しつつある新思想を発見するに及んだのである。

芥川はそういうさまざまな中国女性より収穫した認識や感動を革命者の揺籃と称すべき湖南における下層女性に凝縮して、彼女らをヒロインとする生前最後の近代中国を取り上げる小説「湖南の扇」を書きあげたと考えられる。それに加えて、湖南長沙の旅で見聞した「新生」・「進歩」／「死亡」・「退廃」の対決・衝突や、「伝統」・「前近代」／「革新」・「近代」の交錯・混在という政治的・文化的現実の一部を、作者は玉蘭と含芳という二人の湖南芸者の造形に付与することで、軍閥混戦の続く激動する時代に立たされた下層女性に芽生えはじめた主体的意識及び革命精神を顕在化しようとしたのではなからうか。

最後に、小説のタイトルになっている「扇」は、中国女性の前近代性や古典美を表象するとともに、「妓女」「芸者」という身分をも含意することができるといって、それは『桃花扇傳奇』のヒロイン李香君の剛直さや義烈さを象徴する「桃花扇」のイメージと重なり合うため、湖南女性の反逆精神を暗示している。一方、「湖南の扇」というタイトルは湖南の猛暑・高温を指向することにより、湖南の炎天下で悪条件と戦いながら生きていく、玉蘭と含芳のように「情熱に富んだ」下層女性の燃え上る革命精神の炎ならびに彼女らに特有な強靱さ

を隠喩している。

要するに、玉蘭と含芳という二人の中国女性像は、辛抱強く政局と深く関わる上海の妓女、革命的な近代女傑や、進歩的な湖南の女学生のイメージを統合的に彷彿とさせる一方、「新思想とチフス」を名物とする都市長沙の政治的・文化的表象と一体化している。また、二人の女性像は「湖南の扇」というイメージに集約される外見の伝統美と中身にある能動性を兼備している。

他方で、谷崎潤一郎の塑造した「酈小姐」を代表とする近代中国の女性像と、中国古典文学を基盤として、中国へ旅する以前に芥川が塑造した「梅毒を罹患した「宋金花」(「南京の基督」)や狂気に陥った「お蓮」(「奇怪な再会」)のように身体・精神的に翻弄される「弱い」娼婦像と一線を画したように、それなりの主体性や行動力を獲得した「玉蘭」と「含芳」は「強い」娼婦像として中国の変動的な現実を体験してきた芥川の小説に出現するようになった。そこに、同時代の中国の下層女性像の社会性・現実性に目を向けはじめて、いわゆる「東洋趣味」離れしようとする作者の意識が反映していることは確かであろう。

第二節 「芳秋蘭」の虚と実——横光利一『上海』における女性共産党員をめぐるはじめに

横光利一は中国帰りの芥川龍之介に勧められて、一九二八年四月中国旅行に出発する。彼は約一ヶ月間上海に滞在した後、帰国する。この旅から生まれた長編小説『上海』の初出は「改造」に一九二八年十一月から一九三一年十一月にかけて断続的に発表された七編であった¹⁰⁵。その後、一九三二年六月に「文学クオータリー」に掲載された「午前」を挿入したうえで、作者によって加筆修正が行われ、同年七月改造社より『上海』というタイトルで出版された。さらに一九三五年三月、横光利一自身が決定版とした『上海』が書物展望社から刊行されたのである。便宜上、順に初出版、初版本、決定版と呼ぶことにする。分析にあたり、改造社版の『横光利一全集』に収録されている決定版を底本とするが、必要に応じ、適宜初出版を参照することとする。

『上海』は主人公「参木」、その友人「甲谷」、甲谷の兄「高重」という三人の日本人男性や、トルコ風呂の湯女である「お柳」と「お杉」、踊り子「宮子」という三人の日本人女性、中国の女性共産党員「芳秋蘭」や、白ロシア女性「オルガ」という合わせて八人の主要人物が、一九二〇年代の国際都市上海を舞台に、「五・三〇事件」（中国側では五卅運動）という中国の民族運動を中心とする政治状況及び経済状況によって翻弄される経緯を描出している。

『上海』に関する先行研究のなかでの集大成的存在として言及せねばならないのは、前田愛氏の「SHANGHAI 1925」（『文学』、一九八一年八月）である。前田氏は都市論と作品論を結びつけたうえで難解といわれる『上海』にアプローチした——都市論的視座より、横光の描き出した上海の都市構造をそれぞれに芳秋蘭に表象される「革命都市」、宮子に表象される「租界都市」と、お杉に表象される「スラム都市」といった三層においてとらえている¹⁰⁶。一方、氏は罷業や暴動の描写や中国工人の射殺などに「虚構」があり、会社側の論理がすべてこんでいる点を問題にした¹⁰⁷。また、松寿敬氏は『上海』（特集 横光利一の世界）¹⁰⁸においてテクストの内包する「複数主題性」や、それに呼応した「都市小説、経済小説、政治小説、風俗小説」などのような「さまざまな読みの照射」を打ち出した。それをうけて、以下は前田氏以降の先行研究を三つの視点によって整理してみた。まずは「政治小説」や「経済小説」の読みという軸で、『上海』の題材となった「五・三〇事件」の関連史料を手がかりに、歴史的事実とテクストの関係を検証した論考である。例えば、李征氏「横光利一『上海』における五・三〇運動の描写をめぐる——同時代関係史料との比較をとおして——」（『文学研究論集』一三、筑波大学、一九九六年三月）、河田和子氏「（上海もの）と五・三〇事件——横光利一の『上海』とその周縁」（『横光利一研究』八、横光利一文学会、二〇一〇年六月）などが挙げられる。次に、「都市小説」や「風俗小説」の読みを主軸に都市表象・人物表象などの表象論の方法によって作品を解明しようとしているものがある。田口律男氏「横光利一「上海」論の試み（一）——娼婦（お杉）の意味——」（『近代文学試論』二三、広島大学近

代文学研究会、一九八五年十二月）、李征氏「身体性の表現と小説の政治学―横光利一『上海』における外国人表象―」（『文学研究論集』一四、筑波大学、一九九七年三月）と「虚構としての小説空間と租界都市上海―横光利一『上海』における都市表象―」（『文学研究論集』一五、筑波大学、一九九八年三月）、石田仁志氏「横光利一『上海』のインターテクスチュアリテイ―表象の論理―」（『文学論藻』東洋大学文学部紀要日本文学文化篇八六、二〇一二年二月）や、柚谷英紀氏「横光利一『上海』考」（『自由』の表象）（『日本文藝研究』六七（二）、六八（一）合併号、関西学院大学日本文学会、二〇一六年八月）が数えられる。最後に、複数の読みを同時に背景にしつつ同じく上海を舞台にする同時代作品との比較をとおして横光の『上海』を複眼的に解読する可能性を提供した論文である。その中に、例えば小川直美氏「横光利一『上海』―吉行エイスケとの比較において―」（『同志社国文学』二八、同志社大学国文学会、一九八六年十二月）、渋谷香織氏「横光利一『上海』に描かれた外国人をめぐる一考察―井東憲を視座に―」（『駒沢女子大学研究紀要』一八、駒沢女子大学、二〇一一年十二月）がある。

そのなかで、『上海』において前田氏の言う三角の都市構造の「革命都市」という重要な「一角」が集約される。芳秋蘭像は先行論では以下のように触れられている。前田愛氏は芳秋蘭を茅盾の『虹』における「梅女士」と対比して、芳秋蘭の「繊弱さ」や「つくりものめい」た性格を指摘している¹¹⁰。前田氏の主張と一直線上において、小田桐弘子氏は芳秋蘭が「行動的」でありながら、「繊弱さ」が払拭できないため、そのイメージの虚構性を強調している¹¹¹。また、渋谷香織氏は芳秋蘭像における加筆過程に着目して、その政治性や歴史性の欠如を論断している¹¹²。さらに、大橋毅彦氏は「膨れ上がる芳秋蘭像―横光利一『上海』直筆原稿を掘り所として―」（『山本実彦旧蔵・川内まごころ文学館所蔵「改造」直筆原稿の研究』、雄松堂出版、二〇〇七年十月）において文献学の方法でこの中国の革命女性からみた社会・政治性と文学・芸術性を緻密に考察している¹¹³。要するに、芳秋蘭は政治的、歴史的色合いの浅くて虚構性の強い中国女性イメージと解読されてきた。しかしながら、『上海』において「五・三〇事件」と深く関与した共産党側の唯一の登場人物である芳秋蘭があまりに根拠のない、成立基盤の弱い人物像だとしたら、それは「『上海』序」に示された、「出来得る限り歴史的事実に忠実に近づいたつもり」で、「一度はこの事件の性質だけは知っておいて貰わねばならぬ」という横光利一の初心とうらはらになるのではないか。さらに、『上海』の登場人物参木や高重は明確なモデルがある以上、芳秋蘭像の成立にあたっても特定の歴史人物の経歴がそれに投影した可能性が高い。つまり、芳秋蘭像についてさらに詳細を論じる余地があると思われる。

さて、本節は関連史料と照合しながら芳秋蘭のモデルを検証したうえで、そういった女性革命者の造形における真実性と虚構性について分析して、芳秋蘭像を捉え直してみる。一方、そのような中国女性像の創出という意味から『上海』の位置づけを検討してみたい。

一、「芳秋蘭」像の原点——芥川龍之介の影響

「静安寺の碑文——上海の思ひ出」(『改造』、一九三七年十月)において横光利一は

私に上海を見て来いと言った人は芥川龍之介氏である。氏は亡くなられた年、君は上海を見ておかねばいけないと言われたのでその翌年上海に渡ってみた。

と回想している。彼の上海旅行を促す動機の一つが芥川龍之介の勧めだということは、既に数多くの論者によって指摘されている。さらに、上海から帰国してまもなく、横光はエッセイ「作家と家について」(『三田文学』、一九二七年九月)のなかでこう述べている。

ここまで書いたとき、芥川氏が自殺をした。原色が一つ無くなった感じがする。然も赤だ(中略)今は芥川氏に代るべき赤がない。然もそれは殆ど絶対的でないと言ってもよいであろう。赤のない構成は活動力の衰えることが必然だ。此の見方からしても、芥川氏の死は重大な影響を與えるに相違ない。

そこから、既成文壇の安定を確保してきた、「三原色」の一色である芥川の死に対する横光の哀惜の念がにじみ出ている。要するに、横光利一の上海行を勧める芥川龍之介がその中国体験に基づいて創作した『支那遊記』や「湖南の扇」などは横光の『上海』に大きな影を落としたことが疑えない。さらに、横光に「上海へ行くと政治のことばかりに頭が廻って困る」と「こぼしたことがある」(『北京と巴里(覚書)』、『改造』、一九三九年二月)芥川龍之介は、実際革命精神に燃え上がる中国人を『支那遊記』及び生前最後の中国を題材とする小説「湖南の扇」においてそれぞれ克明に記している——「社会革命」の必要性を真摯な態度で力説する共産党創立者の一人である「李人傑」、芥川が興味を持っている女傑「秋瑾」や、革命者の輩出した湖南で近代意識・革命精神に目覚めた芸者「含芳」と「玉蘭」である。もつと掘り下げて考えてみると、「社会革命」の重要な一環である群衆・工人運動を実行し貫徹する共産黨員芳秋蘭は「李人傑」の理念をそのまま継承するといつてよからう。一方、興味深いことに、そもそも「芳」という漢字は中国の百家姓にもない稀有な姓ということもあつて、「芳秋蘭」という名前もそれぞれ「含芳」、「秋瑾」、「玉蘭」に由来したものである可能性がなくもない。言い換えると、芥川龍之介の中国体験から生れた文学が芳秋蘭像が成立する一つの原点となり得るであろう。

二、「秋之白華」——瞿秋白の妻楊之華

1、女工として工場に潜入する共産黨員

既述したとおり、芳秋蘭は今まで虚構性の強い架空人物だと思われてきた。しかし、『内外綿株式会社五十年史』のなかで「果せる哉工人は少数の共産系分子の一顰一笑に依りて動き、其の一人が一指を挙げれば工場機械の運転は忽ち停止し、又其の一挙手にて忽ち機械の活動を開始する」^[153]という叙述が、『上海』における「右手を上げれば」「工場の機械はいっぺんに停まる」という芳秋蘭のリーダーシップを仄めかすエピソードとびつたり合致していることから、芳の塑像にあたって少なくとも典拠があることが割り出せる。例えば、石田仁志氏・田口律男氏の調査^[154]によって判明した、横光利一『上海』の典拠の一つである『邦人紡績罷業事件と五卅事件及各地の動揺 第一輯』（便宜上、以下は『第一輯』と略称）において以下の箇所が見当たるとする。

仏租界に於ては排英日といふお極り文句以外に目先きを変へて共産党の暗中飛躍を痛撃したる伝單が配布されたるが其文面に依れば、赤化分子は支人の死者一名に対して五萬元の報酬を受けつつありて、彼等赤化分子こそ支那を労働露国の管理下に置かんとする国賊なりと、尚ほ該伝單は赤化の頭株として陳独秀、瞿秋白、禪代英、沈沢民、施存統、鄧、劉一清、韓覚民等の名を列挙し……^[155]

以上の引用で列挙された「頭株」である共産黨員は確かにいずれも中国共産党の成立初期の高層指導者であり、「五・三〇事件」と深く関わる共産党側の大物である。また、事件直後に『申報』や『字林西報』などの新聞への抵抗として、瞿秋白が紙名を題字したうえに編集長にして主要なライターであった『熱血日報』が一九二五年六月四日に創刊された。だが、まもなく工部局が印刷所の經理を逮捕し、瞿秋白を指名手配したために、『熱血日報』は二十四日間の短命となってやむを得ず廃刊になったのである^[156]。なおかつ、印刷所の經理に対する公判は『五卅事件調査書 第二輯』（以下は『第二輯』と略称）において記されている^[157]。この『第二輯』は『上海』の典拠になったかどうかは未だに判明していないが、『第一輯』の同系列として横光にとつて入手可能であり、彼が読んだ可能性が高いと思われる。さらに、『第一輯』や『第二輯』にある「事件扇動者」関連の言説において「上海大学」は重要な固有名として繰り返し触れられたが、上記した瞿秋白、禪代英、施存統、鄧（中夏、筆者注）は全員上海大学の創設時に同級の社会学系の教員になった。とりわけ、瞿秋白は上海大学の社会学系（系は日本の学部にあたる）の最初の主任だった。瞿秋白らをはじめとする上海大学の社会学系の教師たちの講義は好評を博して、出版或は新聞に連載されることになったが、それはマルキシズムの宣伝に大いに貢献した。瞿秋白の講義に魅了された地主家庭の生れなかに、後に彼の二人目の妻になった楊之華がいた。楊之華は浙江省の落ちぶれた地主家庭の生れだが、五四運動の機運に乗じて創刊された進歩的雑誌『星期評論』に憧れて、ついに一九二〇年初め、そこに勤めることになった。それをきっかけに、楊之華は前述した

李人傑や施存統らの革命者と知り合い、彼らから大いに感化されたうえに、中国共産党の成立にも立ち会うことができたのである。一九二四年の春、前記したように上海大学の社会学系に在学中に瞿秋白と知り合い、また瞿と向警予の紹介で入党した。楊之華は共産党の初期女性指導者にして中国最初の女性マルキシストの一人である。向警予から多大な影響を受けてきた一方で、夫（沈劍龍）を持ちながらも自分の先生である瞿秋白と親交を深めて恋に陥るようになった。三人でいろいろ交渉した後、楊之華と沈劍龍の離婚記事、楊之華と瞿秋白の結婚記事、それに沈劍龍と瞿秋白の仲良記事は一斉に一九二四年十一月二七日から二九日まで劬力子が編集長である『民国日報』紙上に登載されたが、その特異な記事はやはり中国共産党内の佳話になったと同時に一時期に上海で物議をかもした次第である。そういうエピソードが一九三六年八月号の『改造』に発表された「瞿秋白伝」にも言及されている^[120]。その後、瞿秋白と楊之華は切り離せない夫婦として「秋之白華」と呼ばれるようになった。

一方で、一九二四年初頭より、当時の中共中央婦女部の部長向警予の助手として、楊之華は女工たちの仲間になつて彼女らを宣伝・鼓舞したり、身をもつて女工たちと共に罷業に参加したりするような仕事に重点をおいてきたのである。一九二四年末から、上海大学を離れて女性革命者になった楊は、婦人・工人運動に身を投じるようになり、一九二〇年代上海で起こった罷業運動に大いに貢献したのである。群衆運動の実践の重要性を実感した楊は、「常に女工の制服や布靴に着替えて女工の集中する工場エリアにまで潜入していた。彼女は楊樹浦にある老怡和、東方、大康紡績工場、引翔港にある公大、同興、厚生紡績工場、浦東の日華紡績工場や虹鎮の協成紡績工場などをあまねく歩き回っていた。そこで、女工たちと打ち明けて話したりその難儀を聞いた

雁氷）のエッセイ「五・三〇」運動と商務印書館ストライキ」が挙げられる。

当時、楊之華はまだ上海大学の学生だったが、学校での活動（彼女は「上大」学生会の執行委員だった）や労働運動で、非凡な活動能力と卓抜した組織能力を発揮していた（中略）瞿・楊両名のこの結婚は、當時美談として伝えられた。^[120]

要するに、茅盾の回想を通じて楊之華が「上海大学の学生」として「労働運動」で発揮した「非凡な活動能力と卓抜した組織能力」や、楊の結婚が「当時美談」になったことはより明瞭になった。さらに、一九二四年一月二一日に、向警予主催の上海婦女運動委員会がリードした上海女界国民会議促成会は正式に成立したが、

劉清揚、向警予、楊之華、鐘復光、張琴秋ら五名は第一次委員会の執行委員として選出された^[121]。そうい

でリーダーシップを持てる、東洋紡績に女工として潜んでいる共産黨員「芳秋蘭」に関する個人情報と二重写しになった。そのうえで、「その国にはその国の原料と文化とに従ったマルキシズムの運用法がある」という「芳」のセリフから、マルキシズムの理論を信仰すると同時に中国の「原料と文化とに従ったマルキシズムの運用法」に群衆運動、工人運動の参加も重要視した姿勢が見て取れよう。それも女工運動の実践性と婦人運動の理論性にともに精神的に取り組んでいた楊之華を想起させずにはおかない。

2、楊之華と「滬西工友俱樂部」

『上海』の第三章において、中国工人射殺事件の後以下のように語りがある――

総工会幹部と罷業工人三百人から成る一団が、棺を担いで、殺人糾明のため工場へ押しかけた。しかし、彼らはその門前で警官隊から追われると、漸く棺は罷業本部の総工会に納められた（中略）中国工人の団結心は、一個の死体のために、ますます強固に塊まり出したのだ。彼はその巧みな彼らの流動を見ていると、それが尽く芳秋蘭一人の動きであるかのように見えてならぬのであった。間もなく彼女は数千人の工人を引きつれて八方に活動するにちがいない。

という部分からは、「あたくしたちは」「絶えず活動してい」て、しかも「あなた方の工場に不平を起そうと企んでいる」と参木に直言した芳秋蘭が、実は「総工会」と密接な関係にあることが前景化してくるだろう。ここでの「総工会」は井上聡氏の説明によると即ち「滬西工会」・「滬西工友俱樂部」のことである^[12]。そのうえ、井上氏は『警務日報』に出ている「活動家は李立三、劉華、楊之華など」と指摘して、彼らと「滬西工友俱樂部」との関係性を示唆した^[13]。が、「李立三」、「劉華」は横光が典拠とした『第一輯』や『第二輯』にも「たびたび言及された人物である。例えば『第二輯』において、「総工会は李立三、劉貫之、劉華の如き若輩が表面に立って牛耳り居れるが、内幕を窺うと彼等の背後には勿論、国民党共産派の有力者が糸をひいた」という記述がある^[14]。それに、滬西工友俱樂部の前身である滬西工人補習学校へ、李立三、瞿秋白、楊之華や鄧中夏らはいつも講義に通っていた^[15]。また、前に引用した茅盾の同エッセイにおける

二月九日、内外綿第八工場の全労働者がストを決行、ついで第五、第七、第一二工場の労働者もストにはいり、みなは蘇州河対岸の潭子湾の空地で大会を開いた（中略）このとき大会で演説したのは鄧中夏・楊之華らだった（中略）労働者が楊之華に会うのは初めてだったが、彼女が上海大学の女子学生と知るや、女子労働者が大歓迎した。

という記録から、一九二五年二月九日に楊之華は初めて正式に内外綿の「労働者」を前にして講演したことがわかる。その後、一九二五年二月の罷業事件や「五・三〇事件」前後、楊之華と滬西工友倶楽部との関連性は警視総監マクウエンの『警務日報』にある記録によって明らかになった（下記の引用は全部拙訳）。

三月二日

二月十五日罷業工人に殴打されて蘇州河に投げ出された日商豊田紡績工場の竹谷は三月一日に死亡した（中略）およそ七百人の工人は三月一日午後三時三十分に関北潭子湾（中略）集会を催していた（中略）悪名高い共産党員楊之華は瞿秋白の妻だが、彼女は会議で工人たちに派閥に利用されないように言動を慎むべきだと呼びかけていた。^[126]

三月二十三日

およそ男工五十人と女工二十人は三月二十二日午後三時に関北潭子湾の工友倶楽部で会議を開いたが、その中に悪名高い共産党員瞿秋白の妻楊之華がいた。^[127]

三月三十日

およそ男工二十人と女工八十人や幾人かの工友倶楽部の組織者は三月二十九日午後二時に関北潭子湾の事務所で会議を開いた。悪名高い共産党員瞿秋白の妻楊之華は会議に列席し、群衆に滬西工会章程を紹介していた。^[128]

五月二十一日

およそ六百人の内外綿紡績工場の工人は五月二十日午前十時から十一時半まで、関北潭子湾三德里滬西工会のそとで集会していた。講演者の一人としての断髪的女性楊之華は、「滬西工会はもはや上海や全国各地から十万人の手紙をもらったが、内容は顧正紅の死を悼むとともに、罷業の工人にも慰問を伝えている」と言っていた。^[129]

五月二十五日

およそ二百人の女工は五月二十三日午後四時半に関北潭子湾工友倶楽部で会議を開いたが、司会者は瞿秋白の妻楊之華だった。^[130]

六月四日

およそ男女工人各百五十人は六月三日午前八時に閘北潭子湾工友俱樂部で会議を開いたが、司会者は悪名高い瞿秋白の妻楊之華だった。^[131]

要するに、楊之華は滬西工友俱樂部の重要な女性指導者として工人たちにストライキを呼びかけて、二月罷業事件や「五・三〇運動」に深く関わる事が判明した。それを察知した工部局の警務処最高責任者であるマクウエン (Mcueen Kenneth John) は一九二五年二月二六日付の「内外綿等紡績工場の罷業を扇動する容疑者リスト」という工部局警察署の報告において「九、楊之華女士 上海大学」という記録を書き残したのである^[132]。横光利一が『警務日報』の英語原稿を読んだかどうかはまだ判明できないが、「警視総監マクウエン」の名前は何度も『第二輯』に登場したことから^[133]、それに対する基本的調査を横光がした可能性がなくもない。

三、「復光復亮」——施存統の妻鐘復光

一九二五年前後楊之華の活躍ぶりを裏付けているもう一つの言説として、前述した共産党の「頭株」の一人である施存統の妻鐘復光の「五・三〇事件」に関連する口述内容を引用しておく。

わたしは上海大学社会学系で勉強していたときに、鄧中夏は校務長で、瞿秋白は社会学系の主任だった。瞿秋白の奥さん楊之華は社会学系の学生だから、私たちは一緒に婦女運動にも従事したり、上海大学に所属する平民学校で教鞭をとったりしていた、つまり工人運動と結合したんだ。五卅運動以前に、私たちはみんな上海大に住んでいた。上海大は西摩路にあったが、一階は事務室で、私たち学生は二階の狭い三人部屋に住んでいたんだ。(拙訳) ^[134]

即ち、鐘復光と楊之華は上海大学社会学系の学生で隣人であったうえに、婦女運動に従事していた同志である。しかも、鐘も楊と同じように、上海大の学生として同学の教授であった施存統と恋愛して結婚するに至った。また、鐘復光は楊之華と同年の一九二四年に向警予、鄧中夏を紹介人として入党した。当時、施存統は鐘に好意を示すために「復光復亮」の文字が入った印鑑を作って彼女に送ったうえに、自分の名前まで「存統」から「復亮」に変えたが、それも党内の美談となっていた。興味深いことに、鐘復光の存在や施存統の名前はそのまま『第一輯』のなかで以下のように取り上げられた。

二月十三日、閘北の三德里における工人会の本部に開ける会議には劉と称する一中国婦人にして上海大学

の教師にて同時にまた学生でもあると言われるものが中国学生側を代表して出席し、会議は罷業に賛成する決議案を通過せり、同日会議に列せる他の一名の婦人に施某（施存統）の妻あり、同人の夫は千九百廿一年共産主義宣伝のために日本より追放され、上海大学の教師となり中国共産党にては陳独秀に亜ぐものにて、此の一派が罷業者を後援することは去る二月日本人を攻撃せる、民国報の記事によりても立証され、民国報の一主席社員（即ち主筆の邵力子）は上海大学校長代理を勤め、（施存統）は副主筆なり。¹²⁵

以上のくだりに出ている「劉」は即ち前記したように楊之華と同じく上海女界国民会議促成会の執行委員に列席した劉清揚で、「施某（施存統）の妻」は鐘復光だと断定できる。なおかつ、以上の引用と同一の記録は『上海事件に関する報告』（南満洲鉄道株式会社、一九二五年十月）にもみられる。一方、鐘復光の重要な経歴としても一つ言及しなければならぬのは、彼女は一九二五年五月三十日やその翌日に南京路のデモに参加し、しかも隊列の前にビラを配布して、講演し続けたがゆえに、四人の女学生とともに逮捕されたことである¹²⁶。その経緯は鐘復光自身の口述にも見受けられる。

上海大から三百人余りの大学生は五月三十日に講演やデモに参加したが、参加者の最も多い学校だった。私たちは十人で一つのグループとして公共租界に割り当てられて顧正紅事件に抗議したり、不平等条約の撤廃を呼びかけたりしていた。私が上海大学の学生と道で講演した最中、老閘巡捕房は逮捕を始めて、多くの学生を捕房のなかに拘束したが、私も不幸にして逮捕され拘束されることになったんだ。数時間後釈放されたときにはじめて、南京路でのイギリス巡捕の無差別射殺事件を知らされた。（拙訳）¹²⁷

つまり、鐘復光は講演、デモのリーダーの一人として「五・三〇事件」の渦中に置かれて、老閘巡捕房、つまり工部局に逮捕されることになった人物である。そういった鐘復光の体験は「五・三〇事件」の現場を再現している『上海』の第三章にある以下の場面を彷彿とさせる。つまり、中国群衆の反帝デモに参加していた芳秋蘭が「旗の傍で、工部局属の中国の邏卒に腕を持たれて引かれていった」ところである。総じて言うると、「五・三〇事件」関連言説を入手する一つの目のルートは「かの地で買って来た上海に関する書物や雑誌と日本で発行されたものと、四、五百冊ほど手に入れた」（「上海の事」、『ホームライフ』、一九三七年十月）という横光利一の記述に示されたとおり、『第一輯』、『第二輯』をはじめとする「五・三〇事件」の関連資料である。それらに記録された人物名や固有名を糸口に、一九二五年前後の雑誌、新聞により横光は一九二五年ごろに工人運動を後押しし、「五・三〇事件」に緊密に関係した楊之華や鐘復光をはじめとする大活躍していた女性共産党員に注目するようになったと推定できる。二つめのルートは横光の知人の言説だが、まずは中

国人の知人の言説である。金子光晴は『どくろ杯』において（横光利一の最初の上海行前）中国の劇作家田漢を迎える招宴に横光が列席したことを記しているが^[138]、田漢も一九二三年の秋より前記した上海大学の文学系の教授になった。よって、一九二八年に上海にいた横光は知り合いの田漢から関連情報を獲得することは可能である。また、横光の日本人の知人として、上海の紡績会社の勤務に勤務していた今鷹の友人の兄以外に、当時日文学者の架橋として名を馳せた内山書店のオーナー内山完造が挙げられる。内山完造の『花甲録』の一九二五年の追加事項には以下のような記述が残されている。

私がドアを開ける後から一人の中国人青年がはいつて来た。それは忘れもせん施存統その人であった。久闊を述べて今帰滬したことを話し、五・三〇事件のいきさつを聞いたが、施先生の話では書籍は少しも差支えありませんとの事で、悠々と沢山の本を買って帰ったことを覚えていた。^[139]

一九二五年六月五日に上海に戻った内山は書店へ本を買いに来た「五・三〇事件」背後の指導者の一人である施存統から直接に事件の「いきさつ」を聞いたということである。それを後年横光がまた内山完造から聞いて『上海』或は芳秋蘭造形の素材とした可能性は充分ありうるだろう。

四、「芳秋蘭」におけるスパイ性の増幅

初出より一九三五年の決定版において芳秋蘭は最も強く加筆された登場人物である一方、加筆は例えばダン・ホルでの初登場や男装したエピソードなど、異なる人物に扮装した芳秋蘭の諜報員Ⅱスパイとしての不可解性・神秘性の増幅に集中している。そういった「共産党員とスパイの結びつき」に対して、李征氏はそれを作者の「経験する当時の日本共産党の生態」と捉えていて、「上海に見られた現象」ではないと判断しているが、果たしてそうであろうか^[140]。

横光利一が上海に赴いた時代の背景として、蒋介石の反共クーデターにより数多くの共産党員が地下工作（潜伏・偽装）に転換したため、上海のスパイ戦は白熱化を呈するようになったことが指摘できる。「上海再刊の序」や「静安寺の碑文」においても横光は蒋介石政権の台頭に言及していることから、そういうような背景に対する彼の強い意識が看取できる。一九三六年十二月十二日付の日記にある「中華民国の作家、郁達夫、郭沫若両氏の歓迎会に出席す」という記載から、横光と中国文学者郁達夫、郭沫若との交際が読み取れるが、一九二六年から郭沫若は黄慕蘭という綺麗な女性共産党員と互いに尊敬しあい、親交を結ぶようになった。その後、郭は『革命春秋』（人民文学出版社、一九七九年三月）の「回到上海」（上海に帰ってきた、筆者訳）という一節において黄との記憶を書き残している^[141]。黄慕蘭は湖南省の出身で一九二六年十一月に党員になったが、茅盾

の回想によつて黄は「エネルギッシュで、交際も広く、活動能力も抜群の女性同志だったうえに美人でもあつたので、武漢三鎮では有名だった。一部独自の青年たちは毎晩のように彼女たちの宿舎を訪ね、いつまでも居座っていた」というぐらゐである^{〔五〕}。瞿秋白の取りもちで黄は漢口『民国日報』の編集長宛希儼と結婚したが、一九二七年蒋介石の反共クーデターで黄夫婦は地下工作に潜入することになった。黄慕蘭はあらゆる社会関係を通じてさまざまな身分の女性に偽装してホテルへ合図に行ったり、埠頭でぶらぶらしたりしていた。また、一九二九年上海に派遣された黄も既述した楊之華らと同じように「劉阿秀」と名乗つて学徒として恒豊紗廠に潜入したのである。それに一九三一年五月に、周恩来の部署のもとで中共中央政治局委員である関向応を救出するため、黄慕蘭はベロアのチャイナドレスをまとい、ハイヒールを履いて、雅やかな貴婦人になりすまして上海の霞飛路の高級マンションに出現したのである^{〔六〕}。

そうすると、黄慕蘭は芳秋蘭の直接のモデルと断定できないが、一九二七年国共合作の失敗後に黄のような隠蔽戦線Ⅱ地下工作のために異なる身分、階層の女性に偽装して上海中で駆け回つたりした党员の存在は、芳秋蘭イメージにおけるスパイ性の増幅の合理性を証明できるのであるまいか。一方において、甲谷に「歌余舞い倦みし時、嫣然巧笑。去るに臨んで秋波一転」という「徐校濤の美人譜中の一句」を思い浮かべさせる、「典型的な中国婦人の都雅な美しさ」を持つ芳秋蘭像は、確かに五・三〇運動に深く関わつていた普段着姿の女性共産党员の同時期写真^{〔七〕}にあるような、素朴な服装を着て颯爽たる断髪をした彼女らの外見とかけ離れるようである。しかしながら、任務遂行のために貴婦人に扮装したりした黄慕蘭の経歴を考慮に入れると、芳秋蘭の外見に対する横光の描出もあながち無理ではない。

五、「芳秋蘭」からみた虚構性——革命と恋愛をめぐる

決定版において芳秋蘭イメージの最も虚構性の強いところはその美しく描き出された容貌というよりむしろ彼女が中国女性共産党员として日本のニヒリストの男性と演じるその恋愛である。一九二〇年代に活躍していた、五・三〇運動に深く関与した名高い女性党员の恋愛・婚姻状況を例示しておく、既述した楊之華と瞿秋白、鐘復光と施存統、黄慕蘭と宛希儼以外に、向警予と蔡和森、王一知と張太雷、張琴秋と沈沢民（茅盾の弟）も数えられるが、いずれも例外なく共産党员同士である。よつて、女性共産党员の恋愛と革命の統一を可能にする党内結婚が普通だった一九二〇年代を背景に、揺るぎなくマルキシズムを信仰する中国の女性党员がイデオロギーの異なる、名前さえ知らない日本男性に恋をすることはほぼ不可能だと言つても過言ではない。では、

横光が女性党员とニヒリストの男性のラブストーリーを作り上げた意図は何であろうか。『上海』の決定版で芳秋蘭に関わる恋愛関係が加筆されたのに対して、参木がマルキシズムを信仰する芳の考えに賛同を示すところが全部削除された。言い換えると、信仰の面において参木と芳秋蘭は完全な対立者に

なつた。それに正反對する構図を取りいれたプロレタリア文学のなかで、例えば一九三三年「轉換時代」の仮題によつて『中央公論』四、五月号に掲載された小林多喜二「党生活者」が挙げられる。作中で健気なプロレタリア革命者である「私」と親しくなつた、「左翼の運動に好意は持っていたが別に自分では積極的にやつてい

るわけではなかつた」笠原に関する以下の叙述がある。

私はこのギャップを埋めるためには、笠原をも同じ仕事に引き入れることにあると思ひ、そうしようと幾度か試みた。然し一緒になつてから笠原はそれに適する人間でないことが分つた。如何にも感情の浅い、粘力のない女だつた。私は笠原に「お前は氣象台だ」と言つた。些細のことで燥いんだり、又逆に直ぐ不貞腐された。こういう性質のものは、とうてい我々のような仕事をやつて行くことは出来ない。¹⁴⁵

笠原の党員工作の適性は常に彼女との恋に先行して「私」の脳裏に浮かんだということである。それに、笠原が「何時も私について来ようとしていないところ」、つまり彼女が自分ほどの信仰や革命力を持ってないとわかまえるや、「私」は自ずと彼女と距離をとるようになったのである。笠原に反して、伊藤という「私」と「一緒に仕事をして来」た女性同志から、「私」はその「しつかりしていた」ところを見出した。そのうえで、笠原を伊藤と比較してはじめて、「私」は「笠原が如何に私と遠く離れたところにいるか」ということを感じたのである。換言すると、「党生活者」に見られる信仰や革命が絶対的優位性であり、個人的恋愛を超越した構図に対して、『上海』に描かれた恋愛は異なる信仰、民族を超えてそれらと拮抗できる力をもつてゐる。したがつて、『党生活者』を代表とするプロレタリア文学における革命が恋愛に優先する図式へのアンチテーゼとして、横光利一は芳秋蘭と参木の恋愛をめぐるディテールをクロゾアアップしたのではないかと考えられる。

むすびに

一九二七年に他界した芥川龍之介の後を追つて、マルキシズムとの精神的苦闘に疲れ果てた横光利一はついに国際都市上海に渡つたのである。なおかつ、芥川の中国体験をもとにした作品により、横光は大いに触発されればこそ上海の政治的・革命的な一面に関心を寄せるようになったと考えられる。そのうえで、芥川は「湖南の扇」で近代意識に目覚めたチャイニーズ・ヒロイン「玉蘭」と「含芳」を塑造することにより、五四運動以降湖南で芽吹いてきた革命精神・新思想及び複雑な現実を觀照しようとした。それに対し、横光は芥川が関心を寄せたものの書かずにまいだつた、「五・三〇事件」を中心とする上海の革命都市としての一面を「芳秋蘭」という中国女性共産黨員に付与してゐる。それとともに、横光は『上海』の創作にあたり収集してきた調査書、雑誌や新聞など豊富な関連資料、知人からの情報により、一九二〇年代に活躍していた女性黨員に注目するよ

うになつた。なかんずく、女工運動に身を投じたと同時に滬西工友俱樂部を拠点とした楊之華や、顧正紅事件に抗議するデモに参加して逮捕された鐘復光という、「五・三〇運動」に大いに貢献した二人の女性党員の経歴を強く意識しつつ、彼女らをモデルとして「芳秋蘭」像を充実させたと推測できる。増幅は、蒋介石の反共クーデターの後で共産党員が地下工作に潜入した現象と呼応しているものと思われる。その一端は例えば郭沫若の親友だった美人諜報工作員黄慕蘭の経歴を通じても明らかになったのである。日本作家の描いた女スパイとして、井東憲『上海夜話』（平凡社、一九二九年十二月）に収録される「アジアの恋人」にある「梅炯」、吉行エイスケの「大世界の女スパイ」（『新しき上海のプライヴェート』、先進社、一九三二年初版・復刻版、ゆまに書房、二〇〇二年九月）における「リン・ウエン・チン」もある。それらの女性像には不可解性や神秘性が過度に強調されたのに対して、芳秋蘭イメーには地下工作員としての一面、黨員にあるべき理論的基盤や、社会運動に身を持って参加した着実さも伺える。こうして、行動力や神秘性を併せ持つ芳秋蘭は租界都市上海の階級闘争、国家主権、企業権益などといった重層的な構造を取りも直さず表象していると言える。

最後に、革命者「芳秋蘭」像からまたメロドラマ的な恋愛は現実の中国革命者と縁遠くて、ある程度の非合理性があることは否めないが、それはまさにプロレタリア文学に定着した「恋愛と革命」の図式化に対する横光利一の対抗意識によるアンチテーゼとも読み取れよう。恋愛と革命を意識的に対決させようとした横光利一の心事は、後年彼が田村泰次郎の「肉体の悪魔」を夏目漱石賞に押し込んだ要因であろう。横光が芳秋蘭イメーへのデフォルメ及び虚構によつてはじめて築き上げた恋愛と革命の対決する構図を、田村泰次郎は自分の実体験としてそのまま「張沢民」という女性共産党員の人物像に取り入れたのである。

第三節 〈北京〉の女性像・女性的北京像における二重性——阿部知二『北京』を中心に

「昭和初年のマルキシズムの浪、それにつづく苛酷な弾圧、ファシズムと戦争との脅威、その蔭での頹廢と虚無」^[127]や、雑誌『行動』の創刊などを経験してきた阿部知二は一九三五年九月一日から十三日まで、ほぼ二週間に渡って北京に滞在していた。帰国して間もなく、阿部は「支那の眼鏡」(『文化学院新聞』、一九三五年十月二十五日)、「隣国の文化——北平の印象から」(『読売新聞』、一九三五年十月二十六日、二十七日、二十九日)、「北京から新京へ」(『月刊文章講座』、一九三五年十一月)、「北京雜記」(『セルパン』、一九三五年十一月)、「美しき北平」(『新潮』、一九三五年十二月)など一連の北京行きに関するエッセイを矢継ぎ早に新聞や雑誌に発表した。それから、阿部が一九三五年の北京体験に基づいて創作した最初の小説は「燕京」(『文芸』、一九三七年一月)だが、彼はその後「燕京」を約三倍に書き伸ばして、それまでの北京エッセイを盛り込んだうえで、蘆溝橋事件後の一九三八年四月に長編『北京』(第一書房、一九三八年四月)として上梓したのである。

『北京』の跋において阿部知二が「この小説は時局的文章でない」と繰り返して強調しているが、安藤一郎氏はそれに対して『北京』を「最も時局的関心の鋭敏な作品」だとはやくも評価した^[128]。そういう『北京』の時局性の両義性を指摘した一方で、竹松良明氏は「北京の美の本質」が「不穏な情勢」や「時代的危機感」により増幅するが、「やがて失われゆくその美に対する哀惜」を『北京』の「主調低音」とみなしている^[129]。竹松氏の論点と同じような方向性で、水上勲氏は阿部知二の描出した古都北京を「幻想都市」とみなしたうえで、作中の高級娼妓「鴻妹」のイメージが「抒情的」で「幻想的」だと捉えている^[130]。『北京』の抒情性や幻想性を重要視した水上氏の論考に反して、石崎等氏は『北京』の「ほとんどすべての登場人物」は「激動する中国の現実の中へと積極的に飛び込んでいく可能性が」とあると主張している^[131]。さらに、中国研究者王成氏は阿部知二が「中国を「東洋趣味」(オリエンタリズム)的に女性化」したうえで、鴻妹を「北京」の「イメージとダブらせるように描いたと認識している」^[132]。

さて、本節は先行研究を踏まえて、同時代資料と照合しながら、阿部知二における北京表象を捉え返す一方で、『北京』にある中国女性像——「鴻妹」のみならず今までの先行論で閑却されてきた「楊素清」や王子明の教え子だった「少女」イメージ——の生成・本質を考察してみる。さらに、そういった女性表象と北京表象の関係性を説明しておく。

一、女性化された北京像の表と裏

北京の旅から帰国早々、阿部知二は一九三五年十二月雑誌『新潮』に掲載された「美しき北平」の中で、北京を「怪しげな魅力」、「悪夢のような大怪異な美麗さ」を備える美女に見立てている¹⁵⁵。そして蘆溝橋事件直後、彼は再び「北平眼鏡」において、「北平の町は、まだしも北清事変のころには姥桜の美をもっていたのだらうが、今となつては老婆である……街を女に譬えるならば、私は一眼で、蒼白く老いかけた彼女に惚れたのである」と、衰退しつつある北京を一目惚れした恋しい「老いかけた」女に擬人化させている¹⁵⁶。また、『北京』の跋においても、阿部知二は北京に対する第一印象についてこう回想している。

要するに、晩夏初秋の澄明な大気のなかにかがやいている北京に、私はいわば一眼の恋におちたようなものだった。この年ふけた美女にこそ惹かれた私は、判断心も忘れてしまつて愛着したのであるかも知れなかつたが、それもよろしい、と今でもおもっている。分別臭く批判するより、その魅力に酔つて、幾分でもおのれの感覚を豊かにすることができたとすれば、それは却つて幸せですらあつた。

以上の引用から、「年ふけた美女」に「一眼の恋におちたよう」に、阿部の北京に対する深い愛着や名残りが読み取れる。しかしながら、作者はこの「年ふけた美女」の美麗さや魅力だけを満喫していたわけではない。以上の内容に続いて、阿部はまた以下のように付け加えている。

一方では、その和やかとみえる北京の空気のなかに、何か不気味なほどの嵐の気がはらまれていることは、一人の旅人の嗅覚にも強く感じられるのであつた。北支は、北から、南から、西から、東からの民族の力、政治の力、思想の力が渦巻きとなつて衝突し合い、いつかは活劇か悲劇の舞台となる運命を持っていたのだ。刻々と迫ってくるその雷電の雲を、見るものは見ていたのだ。

従つて、旅人としての私は、その和やかな故都の風趣と、その嵐の気と、ふたつのものを同時に感じながら、街を歩き、人と語らいながら、滞在したのであつた。このことは、文学風にいえば、一入に私の感情を深くしてくれたのである。不穩の気あるがゆえに、美しいものはなおさら美しく心にせまり、美しいがゆえに、不穩の気はなおさら強く痛ましく心を打つた。しかし、また文学風にいえば、この二つのものを練り合わせて、文章をなすことは、及び難く困難の業であつた。

要するに、阿部知二が「去日の美女」として描き出した故都北京は、表面的には依然として「和やかな故都の風趣」という美しさを誇っているのに対し、裏面的に「民族の力、政治の力、思想の力」の衝突¹¹「不穩の氣」を潜ませている。「燕京」ではこの「美しいもの」と「不穩の氣」への「表現欲がみたされたとおもわれなかつた」ために、この二つのものを「練り合わせ」ることは阿部にとつて長編『北京』を創作する際に重大な課題になつたと考えられる。阿部がそういう課題を如何に『北京』で実践しているのかを究明するために、まず「燕京」より書き足された「萬寿山の一日」というところについて分析しておかねばならない。

二、『聊齋志異』の女の幽霊——萬寿山の一日

『北京』の第二章の後半において極めて幻想的なエピソードが提示される——北京西郊の萬寿山へ遊びに行つた大門は、ある暗い祠堂のなかで雨宿りしたときに二人の中国人女性に遭遇したのである。

水色の羅衣をまとつた、しなやかな若い女の半身と、黒衣の老婆のずんぐりとした半身とが見えた（中略）彼は場所をあけるように身を引きながら、その娘の水色の服の肩から、細い頸、漆黒の髪と視線を投げて行つたが、その刹那に、仄暗い祠の中の彼をみとめた二人の女は、一種の恐怖の色さえ浮かべ、娘は、たちまち手にした桃色の扇をぱつとひらいて、その顔を蔽つた（中略）すばやく顔を蔽つて隠れてしまつたその娘が、すごいほど美しかつたような氣もするし、また有りふれた醜い田舎娘であつたような氣もする（中略）その夜から起つた熱を、彼は、ただ雨に打たれたためばかりとは考へない。聊齋志異などの女怪のようなものに魅せられたのか、北京の妖しい美しさに、心を痺れさせてしまつたのか、とにかくそうしたための熱病だつたとおもつたりする。

幻想性に富んだ以上の章段について、水上勲氏は「水色の羅衣をまとつた」「若い女」が「慌ただしく逃げ去つてしまつた」ことが「（北京）の側からの日本人への拒絶の意志表明」だと主張している¹²。それに対し筆者も領けるが、その場面の幻想性と（北京）との関連性またはこの二女性の隠喩性において未だに解明されていまいとところがある。前述した女性化された北京像を考慮に入れると、「黒衣の老婆のずんぐりとした半身」はまさに「年ふけた美女」、「去日の美女」に擬えられた、歴史の転変のなかで荒廃していく北京の退廃的な一面を表象しているだろう。一方、「水色の羅衣をまとつた」「しなやかな若い女」は明らかに両義的な性格を持つ

メタファーだが、それを既述した『北京』創作時の課題と結びつけて考えると、「すごいほど美しかったような気もする」というのは、表面的に壮麗で「和やか」で、しかも「不穩の氣」により一層美しくなる、「一個の生身の人間の感覚、感受性に触れてきた」北京の風趣を指している^[159]。それに反して、「有りふれた醜い田舎娘であったような気もする」というのは、「迫ってくる」「時代の民族的関係の現実」^[157]を思い知らせる、北京に孕まれている「不穩の氣」を意味していると思える^[159]。

ここで阿部知二の中国認識に大きな影響を及ぼした中国の文学者林語堂を取り上げねばならない。阿部知二は蘆溝橋事件後催された「支那を語る」(『文学界』、一九三八年一月一日)という座談会で、ほかの出席者に初めて林語堂と彼の名作『我国土・我国民』(原題は“My country and my people”)を推薦したのである^[159]。その後も続いて「支那及び支那人觀の三座標」(『セルパン』、一九三八年四月)、「林語堂の『支那』」(『東京日日新聞』、一九三八年九月二十一日)、「支那漫想」(『国民評論』、一九三八年十二月一日)というエッセイや評論において林語堂の思想及び著書を紹介していた。「林語堂の『支那』」にある内容によって、阿部知二は一九三七年一月から林語堂の『我国土・我国民』を読み始めたと推定できるが、「そのうち事変が勃発し」たことが判明する。即ち、林語堂を読むことは「燕京」を『北京』に改作する過程とパラレルになった。更に興味深いことに、『聊齋志異』の女の幽霊について、『我国土・我国民』の第三章「支那人の心」には以下のようにくだりがある。

私には支那人の想像の最も特徴的なものは愛すべき女の幽霊であるように思えるが、「聊齋志異」(注、エッチ・A・ジャイルズ教授の翻訳がある)にある話のように、支那の学者が想像で作りあげたものである。(中略)そうした話は支那人の何よりも好きな人情味の豊かなもので、支那の幽霊はひどく人間的で、女の幽霊に至っては驚くほど綺麗である。彼等は恋もし嫉妬もして普通の人間生活に貢献するのである。だから学者がぼつねんと書齋にただ一人いても怖くなるような幽霊ではないのだ(中略)かくの如きが支那の典型的な想像の世界であって、その想像は神のように天の高きに上昇するのではなく、人間の情熱と悲哀とを心とする活物としたのである。^[160]

というわけで、中国人のメンタリティーや想像力を最も本質的に表せるものは『聊齋志異』にある「女の幽霊」だという林語堂の認識に共感したゆえ、阿部は「聊齋志異」などの女怪のようなものに魅せられたのかという一文を書き込んだのではないだろうか。

三、『北京』の女性像における二重性

1、謎めいた高級妓女「鴻妹」

小班的妓女鴻妹は言うまでもなく『北京』において主人公大門のデカダンス体験における非常に重要な中国女性である。竹松良明氏は「鴻妹の頹廢美」を「中国の「同化力」や「生命力の神秘的な結晶」だと指摘している^[10]。それと一直線上にあるように、水上勲氏は鴻妹を「頹廢的な唯美的」で、「(幻影の街)にふさわしい人物」だと捉えている^[11]。それに反して、石崎等氏は以上の両氏と異を唱えて、「上海からやってきた鴻妹」が「祠堂の娘と」かけ離れた、「時代に向かって生きようとする逞しい人物と結論付けているが、具体的な論証が行われていない^[12]。また、小川直美氏は鴻妹と「横光の『上海』の芳秋蘭」など同時代の文芸作品におけるヒロインとの類縁性を主張したが、それを敷衍することができなかった^[13]。確に以上の数多くの研究者が既に指摘したとおり、『北京』における鴻妹は高慢かつ「妖艶」で、主人公のデカダンスにふさわしい「頹廢美」を帯びている。だが、鴻妹に対する解説がそれにとどまっているとしたら、既述したように「美しいもの」と「不穩の氣」、または「抒情性」・「幻想性」と「記録性」・「時局性」の練り合わせを『北京』の「跋」や「自作案内」で繰り返し強調していた阿部知二の深意を看過してしまうことになるのではあるまいか。したがって、鴻妹という女性像を立体的に解き明かすために、従来の『北京』論ではこれまでに論及されていないそのモデルとテキストにある人物像を結合して分析しておこう。

ここで、阿部知二の中国観の形成に大いに寄与した中国文学者である奥野信太郎に言及せねばならぬ。奥野は阿部が文化学院で教鞭をとっていた時代の同僚だが、阿部よりやや遅れて一九三六年に北京へ留学に赴いたのである。阿部が『北京』の跋において、「終りに、私に支那への関心を興え、培ってくれた奥野信太郎、宮島貞亮氏に感謝する」と明記したと同時に、エッセイ「北平眼鏡」でも奥野の「北平からの時折りの通信ほど、深い支那理解に溢れたものはない」^[14]と綴っている。それと、阿部が奥野著の『随筆北京』に寄せた序文とともに、奥野が阿部の中国認識に与えた影響の大きさを裏付けている。そして阿部知二自身の書き残した北京体験に関するエッセイなどのなかでほとんど見出せない鴻妹のモデルについての情報は、奥野信太郎の随筆において初めて散見できる。

着到の翌日、早々にして单身北京の花街百順胡同の群芳班に紅妹を訪れたについては理由がある。紅妹は

阿部知二の小説『北京』のなかに、鴻妹の名をもって描かれている年若い妓であつて、日本出発に先立つて、阿部から小さな包を託されていたからである。もちろんその請託を果たすことを義務と感じた以上に、小説中の鴻妹のモデル紅妹が、どんな女であるかということに異常な好奇の念をもったからであることはいうまでもない。

小説『北京』をみると、(中略)云々と描かれている。ぼくは白昼群芳班を訪れたのであるから、まったく化粧もしない素顔のままの女の女であつた(中略)すべてここに描かれているとおりの女であつた。(中略)かの女は阿部をよく記憶していた。そしてぼくを自分の寢室にみちびき、化粧鏡の前にならんでいるたぐさんの壇のなから、小さな香水の壇をとりあげて、

「これ阿部さんがくださったのよ、でももうすっかりなくなつちまつたわ」といって微笑した。[109]

要するに、『北京』における鴻妹のモデルであつた紅妹は百順胡同(八大胡同の一)の群芳班に所属している。彼女は外見が小説『北京』に「描かれているとおりの女であると同時に、「化粧鏡の前に」「たぐさんの壇」を並べているところ、阿部から小さな壇の香水をもらったことや、「客に対しては北京語を語り、朋輩や跟媽と語る時には蘇州語を用いる」という点も『北京』の「鴻妹」と完全に一致している[109]。一方において、紅妹の性格を、奥野は「緘黙を守りつつ時折、寸鉄言を投げることによって、意を惹」いたりする、「消極的、陰性的、策謀的動作に自信ある」[109]、「ガラツパチ」[109]だと定義している。そういつた性質は『北京』の鴻妹からみた「わがままで遊びずき」、「男を男と思わない高慢さ、コケティッシュや気まぐれ且つ技巧的などころともさほど変わらない。そのため、阿部知二は彼が北京八大胡同の群芳班で知り合つた紅妹に即して鴻妹という女性像を作り上げたと考えられる。

さらに、奥野の随筆でもう一つ見過ごせないところは、彼が紅妹によつてもう一人の高級妓女「紅弟」を紹介されたということである[110]。紅弟に関して調査してみたところ、一九三〇年代前後、当時国民政府の高官だつた周仏海は紅弟のパトロンの一人であることが判明する[111]。ここで、紅妹や紅弟、ひいて彼女らが所属する群芳班と時局との関係性が浮上してきた。群芳班は北京の一等妓館で、いわゆる清吟小班(「小班」という略称もある)の一つだったが、ほとんどの常連客が商人や軍政要員などの上層人物のたぐいであつた。それに政局の激動する中華民国初年より、議員や政治家などは道楽を極め、八大胡同の妓館を直接に交渉したり、密談したりする場所としていたため、百順胡同にある清吟小班を中心とする商業エリアができるようになったほどで

あつた¹²³⁾。阿部知二が北京に足を踏み入れた一九三五年になつても、八大胡同に位置する群芳班のような清吟小班と政府高官や政治要員たちとの関係性の緊密さについては変わりがない。よつて、「或る種の貿易をやつてくる連中の一方の親分」かもしれない「某という北支政局の有力者がパトロンのよう」で「毎日のようにやつてきて大尽遊びする日本人もあるらしい」という、『北京』において「沼」が漏らした鴻妹に関する情報や、大門が鴻妹を二回目に訪ねた際に、日本人の客が彼女のところに遊びに来る場面は、阿部知二の実際の経験による可能性が高い。

また、大門は『北京』の結末で沼からの手紙により、「鴻妹女士は、数日前に、この北平より姿を消したということ」を知つたのである。石崎等氏はそれを鴻妹の「民族統一戦線への参加」に対する「暗示」として考えている¹²⁴⁾。鴻妹の失踪が民族統一戦線への参加に関係するかどうかはまだ一考を要するが、「燕京」より書き加えられた、鴻妹が初対面の知識人「王子明」と複雑な表情で会話した場面や、「いろいろと複雑な境遇にこの女はいるらしい」、「困つた女」、「上海から来た、というのだから、悪い女かも知れ」ないという王子明の大門に対する警告は鴻妹という女性像における神秘性や不可解性を増幅させると同時に、彼女がいくつかの派閥と関係したり、多重身分を持つたりし、なおかつ時局の変化につれて「変動」していく人物だと言えなくもない。もう一つ注意すべきところは、作品外で阿部知二が奥野信太郎に妓女紅梅の失踪を知らされたのは一九三七年七月二十日だということである¹²⁵⁾。こうしてみると、鴻妹の失踪事件は、作品内のコンテクストにおいて一九三五年の華北事変と無縁ではないのに対し、作品外のコンテクストにおいては一九三七年の蘆溝橋事件と深く関与していることにより、二重的な時局性を持つことになった。それはひいて、「跋」で一九三五年の北京をそのままにしておいたという阿部自身の強調とうらはらになり、『北京』で描き出されたのは完全に一九三五年の北京及びそこにいた人物とは言い切れず、時勢の発展に伴って動いているものであることを示唆している。

2、矛盾に満ちた知識女性「ヨウ女士」

鴻妹に先立って登場した王家の家庭教師である楊素清は『北京』における最も矛盾している人物だと言わざるを得ない。なぜなら、大門も困惑したように、「北京の宗教女学校」を出てから「Y大学に一年ほど」通つていた知識階層の女性であるものの、楊は大門を全力的に誘惑しようとしたが、間もなく彼を袖にして「三人の夫人を持つ老人」王世金に「身を任せる」からである。それを大門は「貧弱にあがく北京の街の一つの現象」と結論づけ、つまり経済的原因に帰着したのだが、実際の状況はどうだろうか。史料と照合してみると、一

九二九年北平の貧民のなかで婦女は46.05%を占めた¹⁷⁵⁾。その主な原因は、そもそも生産力に乏しい北平で男性の職探しは極めて困難で、ましてや女性は生存さえ全うできないという実情にある¹⁷⁶⁾。そういう状況への暗示は『北京』の随所に見られる。したがって、裕福でない家に生まれた知識女性楊素清の墮落は小川直美氏が指摘したように、近代教育を受けたくせに「男女同権」の唱えを置き去りにした¹⁷⁷⁾彼女自身の認識の限界性を示している一方、一九三五年ごろ貧困にあえぐ北平社会の現実をも鋭く暴露している。鴻妹と同じように、楊素清もモデルが実在する女性像である。それについて、阿部知二は早くも一九三五年十月に発表した「支那の眼鏡」で以下のように触れている。

燕京大学というのは、北京の西部の、萬寿山に近いところのアカシアと柳の茂みにつつまれた野の中であり、アメリカの出資で出来たものである。多くの北京の大学の中で排日的な色彩の強いところだそうだし、しかし、北京の近代的男女学生には人気があるらしくて、僕がその頃知合になったHというミッシヨン・スクール出の娘さんは、来年はどうしても燕京に入るのだと、怪し気な英語でいつていた。¹⁷⁸⁾

Hという女性が「ミッシヨン・スクール出」であるところは楊素清と合致していたうえに、燕京大学を志望する点も、「Y大学」——Yは「燕京」のピンインの頭文字——に通った経験を持つ楊を想起させる。さて、楊素清と燕京大学とを関連付けた作者の深意は何だろうか。それは『北京』のみを通しては把握しづらいが、長編『北京』と「合わせ鏡」という形で成立したミニアチュールである短編小説「王家の鏡」（「改造支那事変増刊号」、一九三七年十月十日）と照合すればわかりやすい。

「王家の鏡」は王家のボーイ「張徳順」の視点より長編『北京』の内容を要約した短編だが、作中の主要な登場人物は『北京』と相互に対応している。なかんづく、「王家の鏡」において「山西あたりの田舎」生まれで「某大学出身」の、英語を話せる「すらりとした断髪の摩登な」¹⁷⁹⁾王家の家庭教師「葉女士」は、『北京』で「山西省の小さな町に生まれ」て、「Y大学」出身で「乱暴に剪った髪をぼうぼうとさせ」た英語のできる家庭教師楊素清と明らかに同一人物だと言える。また、王家のボーイを視点人物としたため、「王家の鏡」には早めに北京をたった日本人の主人公が知る由もないまま、ボーイが発見する以下のような場面がある。

王子明が数人の男女を従へて、今晚この室を借りる、といつて、これも二十銭札を一札呉れた。一度は門

番部屋まで逃げに行ったが、何事であろうと、茶を運んで行くことにしてその室に入ってみると、寢床の端に腰掛けたり、椅子にまたがったりして、皆が昂奮し切って議論していた。もつとも驚いたことは、葉女士が、断髪の頭を振り立てて、その寢床の角のところに腰掛けて、大声で叫んでゐた。戦争、戦争、われらは先鋒となる。皆がどっと賛成していた。[180]

つまり、拝金的な摩登ガールに見える「ヨウ女士」は、日本人の主人公が見た官能的な誘惑に満ち溢れた一面を有すると同時に、五四運動以来の女学生によく見受けられる、革命精神に燃え上がる勇ましきや熱血の性質も備えている。さらに、そういったエピソードは取りもおさず『北京』のオメガにも取り上げられた、一九三五年末に勃発した「一二・九学生運動」の前触れだと考えられよう。「一二・九学生運動」は既述した「八・一宣言」の呼びかけに応じて、中国共産党が後押しした抗日救国運動だが、燕京大学や清華大学などの学生たちが運動の主力となったのである^[181]。そうすると、「ヨウ女士」が燕京大学出身である設定は、『北京』でこそ一切言及していないが、「王家の鏡」の中では驚かせるほど逆転的に表されている彼女の勇ましい姿の伏線だと理解できる。

3、ブルジョア出身の少女

「王家の鏡」と同時期の一九三七年十月に発表した「支那女性グリンプス」(『婦人画報』、一九三七年十月)において、阿部知二は彼なりの中国女性観を展開している。

ここで、支那の女性といっても、それを、古い伝統的なタイプと、新しいタイプとに分けて考えることが必要になってくるが、そのあまりにも掛けはなれた二つのタイプに共通な一つの性格がある。まず、古い方からいえば、仕事よりは遊惰な生活がすきで、無自覚で、放縦で、そして男の愛玩物になってその日を送るようなことになり易い。善良勤勉な妻や母ではないのである。新しい女性はいえ、我々がときどき新聞や雑誌でお目にかかるように、ずば抜けてハイカラで、急進的で、男まさりに飛びまわる、日本の新しい女性どころのものでない、というタイプになる……[182]

阿部がいう「古い伝統的なタイプ」の中国女性の特徴は『北京』の鴻妹と楊素清を思い起こさせる。それに

対し、「新しい女性」の特徴はまた「王家の鏡」における葉女士の活躍する姿を彷彿とさせる。それに続いて、阿部はこう回想している。

だが、いまは、どんなタイプにもせよ、少なくとも教養ある女性である限りは、ある一つの意識に燃えていることであらう。(中略) 今一人はL嬢。これは北平の西南郊に家があった。蘆溝橋の方角であるから、いまどうなっているか知らない。父は鉄道の大官であったが(中略) いかこの人が私に、妾は日本に来る気じやなかった。兄はいまモスクワの大学に行きたがって、父と争っているが、妾も兄と一緒にモスクワに行きたいのだけれど、——と昂然していった(中略) しかし、彼女の思想はコミュニズムだと言うのである。

L嬢が、いまどんな気持で日本に対しているかは分かりすぎるほど分かる(中略) いまはどんなタイプの人も、ある一つの興奮と敵愾心に燃えているだらう。 [183]

父が「鉄道の大官」で、兄と一緒にモスクワの大学に行きたがったL嬢は疑いもなく『北京』においてP飯店で王子明が言及した彼の教え子だった「少女」のモデルである。王子明と少女の結末に関するくだりが「燕京」にはなかったが、『北京』で加筆されたのである。

「私も、いつかPホテルの上でお話した少女と、いよいよ結婚するであらうといふ点まで到達した。彼女が、モスクワにゆくことを断念したからです。しかし、実際に結婚するのは果たして何時のことであるかは、予期もつかない。何となれば、私達は、結婚といふやうな個人のことよりも、もっと大きな、激しい渦巻きの中に今や全身的に巻き込まれようとしてゐるからです。現に、その少女がモスクワに行かなくなった原因にしても、私と結婚するために踏みとどまったのではなく、まず此方において為すべきことが多いと信じたのが動機です」

要するに、以上の引用はほかでもなく、コミュニズムに傾倒した少女と一緒に時代の揺れ動きに連動して社会運動に身を投じようとす知識人王子明の意志表明であろう。「激しい渦巻きの中」に置かれた、北京において為すべきことが多いと信じた「少女の姿勢は、阿部知二が「支那女性グリンプス」で予想した中国女性の敵

懐心と通底したうえで、「王家の鏡」における「ヨウ女士」の興奮ぶりとも同質的なものだと考えられよう。総じて言うると、高慢な高級妓女鴻妹に満ち溢れた頹廢性や、女性知識人「ヨウ女士」の墮落した姿は、「去日の美女」のような北京の衰退と呼応している。そのうえで、「鴻妹」の洗練された容貌は、「ヨウ女士」の誘惑的官能美とともに、目に見える北京の美しさⅡ『聊齋志異』の女の幽霊を思わせるような「すごいほど美しい一面と共通している。それに対して、鴻妹の複雑な素性や時局に深く関与しているところ、「ヨウ女士」の勇敢さや決断力、そして王子明が教えたブルジョア出身の少女にある社会参画への意欲や行動力は、北京に漂う「不穩の氣」Ⅱ「有りふれた醜い」一面と対応している。

むすびに

阿部知二にとって一九三五年の北京は老いかけた美女のように彼の心を魅了したが、その初めての北京行で見聞した「美しいもの」と感受させられた「不穩の氣」を、彼は中国人の精神世界を代表する『聊齋志異』の女の幽霊の両義性により表象したうえで、『北京』及び「王家の鏡」における中国女性像の二重性を通して浮き彫りにしようとしたと考えられる。換言すれば、高級妓女である鴻妹や知識女性「ヨウ女士」の頹廢的な官能美は、「去日の美女」の美しさⅡ衰退しつつある北京の和やかな風趣、則ち視点人物（「大門」、「滝英作」）にとって可視的な部分を構成したと言える。ひいて、小説の抒情性、幻想性や静止性を醸成している。それに引換えて、鴻妹像における人知れぬ複雑な政治性や変動性、「ヨウ女士」に潜んでいる革命意識、ならびに登場していない少女の社会参画に対する志向性は北京の「不穩の氣」を暗示したうえで、小説の記録性、時局性や運動性を顕在化させている。つまり、視点人物には不可視的な部分になった。こうして、小説の女性像と北京像は往還したり、共振したりしている。一方、『北京』や「王家の鏡」からみた上述した三人の女性の結末により、華北事変、それから蘆溝橋事件を背景に、各階層の中国女性の行先が民族・国家の運命と一体化しつつある社会的現実をうかがうことができる。最後に、ニヒリストである日本人男性がデカダンスの途中で出会った謎めいた中国女性に惹きつけられた構図や、時勢の発展に伴う改作というところに、『北京』はそれと中国都市を題材にする小説の双璧と併称された横光利一の『上海』と通底しているといつてよい。さらに、「昭和十四年一月十七日」付けの阿部知二宛ての書簡において横光は作品創作にあたり、「本当の云いたいことと云うのは暗示にとどめておく適度の問題」に対する困惑をもらしているが、この「適度」の問題に対する横光利一の思い悩みは、「不穩の氣」と「美しいもの」との「練り合わせ」に腐心した阿部知二と二重写しになっているのであろう。

阿部知二が初めて北京に赴いた時期は、日本国内の言論統制が著しく強化され、知識や思想は政治に利用されて、それに加担させられるような「不幸」な時代になっていた。『北京』出版後間もなく、同書の刊行所である第一書房は一九三八年九月に「戦時体制版の宣言」を發表したのである。そういう抑圧的な雰囲気こそ、「不穩の氣」と「美しいもの」を「練り合わせて、文章をなすこと」の困難の所在ではないだろうか。『北京』のエキゾチシズムの背後に、時局に対する阿部知二の憂慮や苦渋が見え隠れしている。

第三章 暴力・「姑娘」・「女兵」——従軍者の記録と歪曲

芥川龍之介の自殺、横光利一や阿部知二がライバル視或は懷疑しつつづけてきたマルキシズムの退潮、そして阿部知二が主導者の一人であった「行動派文学」の下火を経て、日本の文学者たちは中日全面戦争の勃発という重大な歴史的転換点に逢着することになったのである。なかんずく、数少なくない作家は続々と戦時下の中国戦場へ従軍して、各自で戦争の内実を思い知らされるようになってきたうえに、それぞれの手法で鮮烈な戦場風景を即時に反映、或は後日に再現しようとしていた。本章は日本の男性作家が各自の中国での従軍経験に基づいて書き上げた小説を取り扱う。まず、戦時下の中国を「即時に反映」しようとした石川達三、「兵隊作家の双壁」と併称された火野葦平や上田広の小説における「姑娘」像を捉え返す。その後、かつての戦場であった山西省と安徽省をそれぞれ「後日に再現」しようとした田村泰次郎「肉体の悪魔」における女性共産黨員や、武田泰淳「廬州風景」にある中国人看護婦を分析する。そのうえで、「即時」と「後日」の戦争小説における中国人女性像の境界線に照明をあててみたい。

第一節 戦時下文学に塑像された「姑娘」たち——石川達三・火野葦平・上田広を中心に はじめに

盧溝橋事件の勃発直後、数多くの文化人、文学者たちは召集されて特派員または兵士として中国の戦地へ続々と赴いたのである。彼／彼女らが自分自身の戦場体験記をルポルタージュや日記などの形で記録して日本国内に送り続けるに伴い、所謂「戦争文学」は日清戦争以来ようやく爛熟期を迎えるようになった。それに、中日戦争期の戦争文学の代表作家というと即座に思い浮かべるのは、『生きてゐる兵隊』に関する「筆禍事件」で投獄された石川達三と、彼と対照的に「兵隊三部作」で人気作家として持て囃されていた火野葦平に違いない。また、火野葦平と同じようにプロレタリア文学に一時傾いた経験を持ち、火野とともに名高い「陣中作家」と併称された上田広にも言及しなければならない。

以上の三名の作家やその代表作は戦争文学研究の専門家によって繰り返し論じられてきたが、作中の人物像をめぐる考察といってもっぱら日本人兵士Ⅱ男性戦闘員に焦点を当てて論じてきたのが当たり前のようである。それに対して、テクストに登場する——数少ないが——他者である中国人特に中国女性性が論外になってきた。しかしながら、それは避けては通れない問題点である。なぜなら、同時期の日本戦争文学は往々にして中国の戦地を舞台にした「越境文学」といえる。そのなかで絶対的な主体としての日本人以外に、帝国主義のイデオロギ―

のもつて誤解されたり歪曲されたりした客体・他者としての中国人が構築された¹⁸⁵⁾。とりわけ客体としての戦地の女性には常に中国人男性と同じく命の危険に直面させられたうえに、日本人兵隊による性暴力にもさらされるのである。即ち、戦時下の中国女性には常に二重の被害者である。したがって、戦争文学における中国人女性という他者に対する検討を敬遠したり忌避したりすることは今までの日本戦争文学研究の宿痾と言わざるを得ない。そういった中国女性イメージを捉え返してこそ、彼女らを塑像した戦争文学の位置づけをもっと正確に把握できるのではないかと思われる。が、広義の戦争文学は戦後文学も含める幅広すぎるジャンルなので、本節はあえて中日戦争下に創作された石川達三『生きてゐる兵隊』、火野葦平『花と兵隊』、上田広『鮑慶郷』や「黄塵」を中心に、テクストにある中国女性を抽出して、関連史料と照合しながらそれらの女性イメージの現実性、独自性や、それらと作者の戦争認識との関連性を解明していきたい。

一、性暴力・虐殺の被害者である「姑娘」——『生きてゐる兵隊』

石川達三をめぐる近年の代表的論考のなかに、『生きてゐる兵隊』(『中央公論』、一九三八年三月)や同小説の中国での受容を手がかりに「戦記テクスト」のプロパガンダ性を浮き彫りにした五味渕典嗣氏「ペンと兵隊——日中戦争期戦記テクストと情報戦」(紅野謙介・高榮蘭ら編『検閲の帝国 文化の統制と再生産』、新曜社、二〇一四年)がある。その後、『生きてゐる兵隊』の検閲問題に注目しつつ、その経緯やそれと石川達三の創作手法との関連性について詳細に検証している尾西康充氏「出版検閲とリアリズム——石川達三『生きてゐる兵隊』」(『人文論叢』第三二二号、二〇一五年三月)が挙げられる。

『生きてゐる兵隊』が発売禁止処分を受けた原因として、『出版警察報』(第一一一号、一九三八年二月)の執筆者は「(イ)日本軍将兵が「自棄的嗜虐的」に敵の戦闘員・非戦闘員を恣に殺戮する場面を記すことで「著シク残忍ナル感ヲ深カラシメ」たこと」や、「日本兵が「性欲ノ為ニ」中国人女性に「暴力ヲ振揮フ場面」を書いたこと」を列挙したことが五味渕氏の論著によってわかる¹⁸⁶⁾。上述した二箇条に該当する場面は以下のようなものである。

「おい、クーニヤ」と一人の兵が呼びかけてにこにここと笑った(中略)「これはええ女だけど汚ねえなあ」と今一人の兵が残念そうに言った(中略)あとから入って来た三人の兵にとりかこまれて、女は土間の上に横向きに倒れたまま身動きもしなかった。ただ彼女のふくれた胸と腹のあたりが荒い呼吸のたびに波を

うっているのが四人の眼にまざまざと映った。

突然、彼等は凶暴な欲情を感じた。この抵抗する女をできるだけ苛めてみたい野性の衝動を感じた。

「こいつの皮を剥いで見る」と近藤は言った。けれども彼は自分の言葉を欲情的に解釈されることをやや羞かしく思ったので、小声でつけ足した（中略）他の兵は彼女の下着をも引き裂いた。すると突然彼等の眼の前に白い女のあらわな全身が晒された。それは殆んど正視するに耐えないほど彼等の眼に眩しかつた。見事に肉づいた胸の両側に丸い乳房がぴんと張っていた。豊かな腰の線がほの暗い土間の上にしらじらと浮き上がって見えた（中略）近藤一等兵は拳銃を左手に持ちかえると腰の短剣を抜いて裸の女の上のっそりと跨がった。女は眼を閉じていた。彼は暫く上から見下していたが、そうしている中に再び狂暴な感情がわき上がって来た。それは憤激とも欲情とも区別のつかない、ただ腹の底が熱くなって来るような衝動であつた。

彼は物も言わずに右手の短剣を力限りに女の乳房の下に突きたてた。白い肉体はほとんどはね上がるようにがくりと動いた。彼女は短剣に両手ですがりつき呻き苦しんだ。恰度標本にするためにピンで押さえつけた蠅螂のようにもがき苦しみながら、やがて動かなくなつて死んだ。

やや長い引用だが、以上は南京へ向かう途中にある日本人兵士が戦地の中国女性に向ける性暴力や虐殺の過程を緻密にクロージアアップする、戦時下において戦争という「非日常」を生きている兵隊の残酷性に対するほとんど唯一無二の迫力のある生々しい描写だと言える。引用文の冒頭にある「クーニャ」は日本軍隊の大量の中国進駐につれて定着してきたいわゆる「兵隊中国語」である。言葉自体は最初字義通りに「中国の若い女性」を意味するが、引用も仄めかしたように、中日全面戦争勃発以降中国の被占領地における日本兵隊の婦女強姦事件の猖獗により、「(花) 姑娘探し」⇨女狩り⇨レイプは兵隊間の隠語や暗黙知になった。したがって、「姑娘」という「兵隊中国語」自体も性的暗示性に富んだ用語に転換するようになった。引用のほかに、『生きてゐる兵隊』でたくさん見られる兵士が「姑娘」を探しに行くエピソードは、つまりその証左である。「姑娘」の官能美に満ちた裸体を「跨がるのはいかにも征服や支配を表象する行為である一方、近藤一等兵のなかにこみ上げてきた「憤激とも欲情とも区別のつかない」という二重的な「衝動」は、つまり殺すべき「敵国」の潜在的戦闘員である「姑娘」の民族・国籍に向けて「憤激」であると同時に、その女性性に対する「欲情」でもある。また、「姑娘」が「ピンで押さえつけた蠅螂のよう」に死んだ暴力性に満ちた場面から、日清戦争以来の中国蔑

視というような根深い民族的差別意識が看取できる。だから、このように中国人の生命を塵芥のように扱う日本人兵士は、その後も母に死なれて号泣した、明らかに非戦闘員である「姑娘」を虐殺したのである。そうした迫真力、リアリティのある小説を石川達三が書き上げられたのは、彼が占領後の南京で「下士官と兵の間に寝泊りし」たり、「彼等と共に街をさまよ」ったりするとともに、「上海以来の彼等の戦歴を聞くことに終始」することにより、「嘘もかくしも無い、不道德と残虐と凶暴さと恐怖とに満ちた戦争の裸の姿」を知り得たからであろう^[186]。

なおかつ、笠原十九司氏は『アジアの中の日本軍』において、中国女性にとって中日戦争は「性を蹂躪される危険に晒されつづけた時代であり、また実際に膨大な数の女性がその犠牲になった時代」だと述べている^[187]。それを裏付けているように、笠原氏の論著『南京事件』で引用している史料によると、南京近郊の農村——以上『生きてゐる兵隊』の引用文も南京へ進軍する途中にある農村を舞台にしたが——に住んだ中国民衆は「未だ他所へ避難できず（中略）不幸にして日本侵略者にみつかる多くが被害に遭う（中略）婦人で髪が顔にかかり、乳房が割れて胸を刺され、ズボンをつけていない者」がしばしば出たという^[188]。乳房は母性を象徴するため、「乳房毀損」行為は日本兵士が中国女性の哺育機能を破壊して、ひいては中国人の生育性を断絶しようとするジェンダー的・民族的差別意識の表象ではないかと考えられる。この記録は近藤一等兵が「右手の短剣を力限りに女の乳房の下に突きたてた」という引用文とぴったり一致しているため、『生きてゐる兵隊』における日本軍が中国女性を凌辱、虐殺した場面の典型性や真実性を裏打ちしている。まさに尾西康充氏が指摘したように、『生きてゐる兵隊』は「戦場における描写の迫真性を追求しつつ、戦争の真実を告発しようとした作品」である^[189]。

しかしながら、『生きてゐる兵隊』の満ち溢れる赤裸々な真実性は日本軍部の逆鱗に触れたがゆえに、「造言飛語」または「虚構の事実」のラベルを貼られてとうとう発売禁止の処分を受けることになった。「筆禍事件」は中日全面戦争以来の唯一無二のケースとして日本文壇のセンセーションを巻き起こし、それ以降——少なくとも一九四五年日本敗戦まで——の戦争文学に手を染めようとする作家に警鐘を鳴らすことに大きな役割を果たしたのである。よって、石川達三『生きてゐる兵隊』を境目として、戦争文学の「真実性」は極度に規制されるようになってきて、戦時下文学にある中国女性イメージは一変したのである。

二、「きれいな恋愛」・友情——『花と兵隊』

初回芥川賞の受賞者石川達三が「筆禍事件」で冷遇されたのに反して、『糞尿譚』で第六回芥川賞を受賞した火野葦平は徐州会戦を背景にした『麦と兵隊』で人気作家になった。『麦と兵隊』の大ヒットをきっかけに、火野は続いて同系列の『土と兵隊』（『文藝春秋』、一九三八年十一月）、『花と兵隊』（『東京朝日新聞』、一九三八年十二月二十夕）一九三九年六月二十四夕／『大阪朝日新聞』一九三八年十二月二十夕）一九三九年六月二十夕）を発表してきたのである。

『花と兵隊』のなかで、「河原上等兵」と彼の面白半分の挑発で驢馬から投げ出されて怪我した姑娘「鶯英」とのラブストーリーが描き出された。最初は自責の念に駆り立てられて鶯英を常に見舞いに行く河原はいつの間にか彼女と恋をするようになってきた。しかも、鶯英ともっと円滑にコミュニケーションをとるために、それまで「征服者である日本人が敗戦国の言葉を覚える必要はない」と言い張ってきた河原は前と打って変わって中国語を勉強しはじめたのである。このいかにもメロドラマ的なエピソードについて、中国人研究者李雁南氏は、日本人男性が憧れる西湖の湖畔で「美しくて純粹でしかも全ての意味において男性を中心とする植民地の女性と親密な関係を結ぶ」ことが、一時的な自慰で自己欺瞞でしかない論断しているが、筆者も頷ける¹⁹²⁾。河原と恋する「姑娘」以外に、火野はいつも歌ったり「楽しげな笑い声」で「兵隊を喜ばせた」¹⁹³⁾りする、後に日本軍病院の看護婦になった「玉金」と「妙月」や、班長である「私」と友達以上恋人未満の関係にある、「親日」（当時中国側では「漢奸」）の青年「肅長徳」の妹「青蓮」をも造型している。

ところが、『生きてゐる兵隊』をめぐる「筆禍事件」以来、「女のことを書いてはならない」という制約が定着するようになった¹⁹⁴⁾。火野自身はそれを知りながらも、「検閲でやかましくいわれている兵隊と現地的女との接触、恋愛などがどこまで書けるか、その実験を試してみたい野心」に駆られてあえて「現地の女との接触、恋愛」を盛り込もうとしたのである¹⁹⁵⁾。案の定、

連載中（中略）河原上等兵と（中略）鶯英との恋愛を書いたのだが（中略）大本営報道部から電報が来た。「コノカワハラトオウエイトイウクニヤントノコト、コレカラサキ、ドウナルカ」ソレガハツキリセネバ、アト、キヨカセヌ」私はおどろいて、朝日を通じて、「コノフタリノコト、モウカカヌ」ヨロシクタノム」という返電を打った。この程度のきれいな恋愛ですら、検閲にひっかかるのならば、男女の問題を突っ込んで書くことなど思いもよらない。そこで、「花と兵隊」では、この二人の恋愛をはじめ、私と青蓮とのことも中途半端になってしまっている。しかし、とにかく、書き得るギリギリの線までを表現すること

に努力した。〔1931〕

即ち、「花と兵隊」における杭州の日本占領軍と現地女性との「接触」や「恋愛」を描出する過程で、火野は終始軍部の厳しい監視や検閲を強く意識しなければならなかった。そういうような外部の圧制と、軍人である特殊の身分によるナショナリズムの稼働、国際的観照の欠如という作者自身の限界性と相まって、「花と兵隊」にある中国女性像に現実との偏差や乖離をもたらさずにはおかない。具体的に言うると、玉金と妙月を「我々の分隊だけで独占する訳に行かなかった。外の分隊からも借用申込が来、二人の娘はあちらこちらと引っ張り尻にされ、きやつきやつと燥ぎ廻った」という一節からも伺えるように、この二人の「姑娘」は日々の操練や警備などで疲れ果てる日本軍兵隊にとって精神的慰藉で、瞬時的な快楽を提供する機能を備える「道具」にすぎない。この「一輪の花のごとく見えた」「絶世の美人」は杭州という桃源郷の骨子であり、取りも直さずタイトル「花と兵隊」にある「花」の意味であろう。玉金と妙月に比べると河原と恋愛に陥った鶯英は無言化されたうえに、人物造形が簡略化されて輪郭しか現出していないと言わざるを得ない。さらに、最も力点をおいて造形された歌手青蓮も「古い時代の話しは熱情をもって語るけれども、現在の問題については全く口を閉ざしていた」人物である。

彼女が過ぎ去った昔の物語を始める時には、彼女は生々と活気づき、恰も自分の話に酔っているごとく見えた。彼女の教養が自然に発する冷たさは、そのような時には全く消えてしまつて、不思議なことに、彼女自身がそのような古い時代の人物に返つてしまつて、彼女は見えて来るのである。

というのは、青蓮は近代的教養を有するように見える一方で、「私」からみるとしばしば「古い時代」を生きるような「昔風」、つまり前近代的な中国女性だと考えられる。そのうえで、いつも「私」と西湖の湖畔を散策して、しかも蘇東坡、蘇小小など西湖文化を象徴する歴史人物に詳しい青蓮は、むしろきれいな西湖イメージと呼応する伝統的な女性像と言える。それは谷崎潤一郎の小説「西湖の月」における西湖言説と深い影響関係や継承性を持っている。なぜなら、テクストには以下のようなくだりがある。

私は十数年も前に読んだ記憶のある「西湖の月」とかいう小説を思い出した。それは月夜湖上に片舟を浮

かべて湖心に出た時に、水藻の中に白くほのかに見えるものがある。よく見るとそれは女の裸の屍体であった、というようなことが書かれてあったと思うが、そのような妖気の美しさがこの湖には漂っている、と私はそんな意味のことを水面を眺めながら言った。

上述した西湖が帯びる「妖気の美しさ」はほかでもなく谷崎潤一郎「西湖の月」に引きずられた印象だが、後に「私」が「莊園の温室の中を歩きまわった」青蓮の姿に見出した、「水族館の硝子越しに泳いでいる魚のように妖しい美しさ」とも照応している。だが、成田龍一氏が河原一等兵と鶯英との関係性について以下のように鋭く指摘している。

河原／鶯英というくみあわせは、侵略者の男性／被侵略者の女性のくみあわせということであり、植民地支配の典型的な構図となっている。外部からやってきた支配者が、「内部」の住人を無力化し従属させるという力関係が、男性／女性の関係に重ねあわされているのだ。^[16]

成田氏の説をもっと敷衍すれば、以上の中国女性イメージに共通するところは、日本兵隊／現地中国女性（男性）／女性（性）、戦闘員／非戦闘員、占領／被占領という重層的で非対称的な二項対立にあるということである。かくのごとき非対称的な権力関係のうえで、「花と兵隊」にある現地の中国女性は一層単純化されて、基本的な知性や民族・国家意識などというような思想性を意図的に剥離されたのである。なお、芥川賞を火野葦平に渡すために杭州へ赴いた小林秀雄が「杭州は抗日の中心地で、防空壕などは、素晴らしいのが出来ている」^[16]と明記しているように、盧溝橋事件直後のエッセイ「支那女性グリーンプス」において『北京』を改作しているところの阿部知二も「いまはどんなタイプの人も、ある一つの興奮と敵愾心に燃えているだらう」^[16]と推測したのである。つまりとところ、小林秀雄が杭州で思い知らされた「抗日精神」や、中国体験のある阿部知二が予想した中国女性の「敵愾心」、それに現地の中国女性が日本侵略軍の軍服を着る兵士を前にする際に抑えきれないはずの恐怖感が、「花と兵隊」においては悉く血なまぐさい戦場に釣り合わないような安直な友情或は火野の言う「きれいな恋愛」に置き換えられ（ようと）たと思われる。『生きてゐる兵隊』にあるような中国人女性に対する凌辱・殺戮の内容に引き換えて、「花と兵隊」は友好・温情などという全くの逆方向へ突進していった。だが、同じ歴史的コンテクストのもとで、極度のリアリティを有するテクストの反対側は現実性

の喪失に決まっている。

三、揺れ動く「土民」の視線——「黄塵」から「鮑慶郷」へ

火野葦平「麦と兵隊」が日本国内において好評を受けていた時期に、上田広は「鮑慶郷」（『中央公論』、一九三八年八月）それから「黄塵」（『大陸』、一九三八年十月）の発表により火野と所謂「兵隊作家」の双璧と併称されるようになった。この二人は作家であると同時に中国戦線に派遣された兵隊でもあるところにおいて一致するほかに、嘗てプロレタリア文学に傾倒した一時期がある点も酷似している。「黄塵」と「鮑慶郷」をはじめとする上田広の戦争文学を、池田浩士氏は「単純な戦意昂揚文学や、好戦的な民族主義と憎悪の表現と」¹⁾ 離れた作品と見なして、それが「プロレタリア文学作家としての」上田の経験に關与していると強調した²⁾。ただし、筆者の管見では、「プロレタリア文学作家としての」の経験は日本兵隊ばかりでなく現地の住民、村の農民などのいわゆる「土民」に關心を寄せる意識を上田に培ってきただけで、「プロレタリア文学作家」と称する文学者にあるべき国際的連帯感や巨視的視座を彼に植え付けるに至らなかったのである。『新日本文学全集』の年譜にある、「この年七月支那事変勃発、勇躍応召。北支鉄道沿線を転戦、心機一転民族愛に目醒む。死力を尽して陣中作「黄塵」を綴る」³⁾ という金親清の解説をも考え合わせると、作家上田がプロレタリア文学に携わった経験はあいにく兵隊上田のナショナルイズムの目覚めと逢着したからこそ、そのような「ハイブリッド」は上田の戦地文学においてしばしば彼の視線を些細で猟奇的なところに留めることになった。ひいては、上述した上田広のテクストのなかで、彼の塑像した人物像に一種の微温性や曲筆性をきたしてしまっただけか言いようがない。

上田広のテクストを分析するにあたり、華北における上田の従軍路線をおさえておかなければならない。上田は一九三七年十月から一九三八年の春にかけて、「鉄道第六連隊の一兵隊として、山西省正太鉄道の沿線を転戦していた」⁴⁾ が、彼が所属する「連隊は同鉄道を占領し、その運営の任にあつた」（『作者のことば』、『戦争の文学1』、東都書房、一九六五年七月）のである。それに、「黄塵」の結末に「昭和十三年二月、山西省靈石にて」の情報が明記されている。調べてみた結果、当時の正太鉄道は東から西へ順次に石家荘、獲鹿県、井陘県、娘子関、陽泉、寿陽県、榆次県そして太原など各駅を経過したことがわかるが、「黄塵」のテクストにおいても「石家荘」、「井陘」、「娘子関」、「陽泉」、「寿陽」、「榆次」という地名が明確に取り上げられている。すると、ここで説明しておくべきのは、正太鉄道沿線の各駅で、それに「黄塵」が書き終わった「靈石」で日本軍が何

をしていたのであるか。「黄塵」の序文「作者のことば」において上田自身が「ゲリラ戦で私達をおそい苦しめる敵は、甚だ執拗であった。味方の第一線と後方をつないでいた私達は、それがためいつ戦死するかもわからない状態におかれていた」と述べているが、それが日本側による山西省における戦闘の実相の一部を反映している。

日本側の関連資料として、笠原十九司氏の『南京事件と三光作戦——未来に生かす戦争の記憶』が数えられる。笠原氏は河北、山西、山東、河南という河北四省には「抗日根拠地・抗日ゲリラ地区として広大な晋察冀辺区・晋冀魯豫辺区が建設され」たため、日本軍の「掃蕩作戦」（中国側は「三光作戦」）が「集中して実行された」地区と指摘している¹⁶⁶。それに、「三光作戦のなかでおこなわれた虐殺・残虐事件こそが、日本軍の正式な作戦と計画にもとづき、大規模に解放区・ゲリラ地区の軍民の燼滅（皆殺し）を図った掃蕩作戦の結果生じたもの」だと主張している¹⁶⁷。なかんずく、日本軍による性暴力や虐殺の被害者、犠牲者になった中国女性の人数は夥しい。一九三七年十月から「黄塵」が完成した一九三八年二月まで、特に「山西省における日本兵の婦女凌辱」に対する笠原氏の調査と照合してみると、まず上田が「黄塵」で言及している、正太鉄道沿線に位置する河北省の「石家荘」（当時は「正定」、一九三七年十月に発生）、「井徑」（一九三七年十月に発生）、山西省の「榆次」（一九三七年十一月に発生）や、「靈石」（一九三八年二月に発生）——「黄塵」に付記してある時間とぴたり一致する）において県城から村落に至るまでの数多くの女性が性暴力をこうむったあと虐殺される始末だった。中国側でも例えば陳旭清氏の博士論文『心靈的記憶…苦難与抗争——山西抗戰口述史』（浙江大學、二〇〇五年）は上述したような婦女凌辱・虐殺事件を傍証できる。また、当時の日本軍が「食糧物資の現地調達という略奪主義を採用した前近代的」であつたうえに、「中国女性の貞操の略奪行為を流行させた」ような「軍規弛緩を常態とする軍隊」¹⁶⁸であることから、これらの事件に上田が属する鉄道部隊は直接関与したかどうかは断言できないものの、多かれ少なかれそれを耳にしたはずがあると推定できる。しかも、一九三七年十一月三日に発生した「工兵部隊が進駐、村民が通信線の破壊を通報しなかつたことを理由に報復の虐殺、主婦を強姦後射殺」¹⁶⁹という事件から、鉄道部隊を含める工兵部隊といっても「三光作戦」に無関係とは言えないことが判明する。にもかかわらず、そうした現地の実情を背景にしても、「黄塵」のテクストは是非を転倒させるように戦地の光景を描いている。以下はその一例である。

陽泉の町には再び平和な空気が漲った（中略）あの交戦のどさくさまぎれに、又もや敗残兵の為にいろいろ

ろ略奪されたという町民たちは、極度に日本軍にたいして信頼の度をつよめた。私の顔見知りの宣撫官の話では、単に品物を持っていかれたばかりでなく凌辱された婦女も少なくないことだ。私はあの交戦のさ中にかくに規律のない敗残兵とは言えその戦列から身をひいてそれをなす不逞さにはあきれないわけにゆかなかった。

要するに、正太鉄道沿線にある「陽泉」に発生した物資略奪も婦女凌辱も「宣撫官の話」によって「日本軍」ではなく「敗残兵」たちの仕業にすり替えられたのである。それにくわえて、他人に騙されて石家荘にきて水商売をさせられた「晋翠林」という十八歳の「姑娘」が登場した。『生きてゐる兵隊』以降の戦地文学と同じように、北平生まれの晋は北京への帰り方を「おののき」ながら日本軍兵士である「私」に尋ねてみたところ、思いもよらず日本軍兵士に親切で思いやりのある態度で対応されたゆえに「私」たちと迅速に親しくなってきた。それから、その後「私」と再会した際に「驚きとも喜びとも判断つかない声をあげたかと思うと私に抱きついてきた」ほどである。それに加えてもう一つ顕在化してきたのは、晋翠林も『花と兵隊』における両姉妹玉金と妙月と同様に、「嬉しそうに微笑んだ」、「美しい微笑を浮かべた」、「わざと笑顔をつくつ」た、「明るい微笑が宿った」などの描写が付与された、「私」に向ける「笑顔」が大写しにされた中国女性像と言える。言い換えると、「黄塵」にある「姑娘」イメージは当時山西省にいた中国女性の普遍性をなくし、民族・国家意識、知性や思想性などを捨象されたうえで、日本軍に対して自ずと込上がってくるはずの嫌悪感や恐怖心を一気に紋切り型の「笑顔」が象徴する温情や好意に置き換えられたのである。それに対して、「私」は「姑娘」に安直な同情しか寄せることができなかつたと言わざるをえない。

さらに、「黄塵」においても一つ注意すべきところは、作者が中国女性の「纏足」に関心が強いということである。

「それでもお前の母親は、お前のようないい男を生んだんだからたいしたもんさ。一度あって見たいもんだな」

「とても。貧乏のくせに足ばっかりちっちゃくて、どうして父親があんな母親を貰ったかわからんくらいです」

「いやに母親をわるく言うじゃないか」

「まあ話しがですよ」と彼はつづけた。「一般的に言って支那の女は駄目できあ。ほんとになにも出来やしないんです。自分で立ってるだけでもやつとですもの」

以上引用した一節は日本軍に協力した中国青年「陳子文」と「私」との会話だが、それは陳子文が纏足した中国女性に対する苦肉や軽蔑を色濃く表している一方で、作者上田が中国女性の「纏足」に示した関心をも看取できる。その関心は「鮑慶郷」においても続いている。

彼女もやがてあたりを憚りながら部屋を出た。法で禁ぜられながら、今までそれが誇りであった小さな自分の足が、その時ほど齒がゆいと思つたことはなかつた。いつもなら眼をつむっても走れる屋敷内であつて、一寸した小石にも躓き倒れるのだった。

以上の引用はヒロイン鮑慶郷が「支那軍」の将校から自分の貞操を保つために家から逃げようとした場面である。逃亡という時こそ纏足した足の不便さにヒロインは気づかされたのである。纏足は宋代より勃興してきた、中国伝統社会の男権的審美観に根ざした独特の陋習だが、なかんずく華北の農村地区のような辺地で纏足の風習は最も盛んだった。清朝末期より所謂「反纏足運動」が活発に展開されてきたにもかかわらず、中日戦争時期に一部の農村地区で纏足の習いはまだ残留している^[203]。そういう意味において、以上引用した描写は当時山西省農村の現実からほど遠くないと言える。しかしながら、戦時下の山西省において「反纏足運動」が呼びかけられた一つの重要な原因は、日本軍の掃蕩作戦から婦女が逃亡する際に纏足が最大なる支障をきたすことにある。纏足の不便さで脱出に失敗してしまつた農村婦女の数多くは、慰安婦に徴用されたか日本軍にレイプ・虐殺される始末だつた^[204]。にもかかわらず、小説において鮑慶郷が纏足した足を悔恨する事由は「支那軍」将校の好色、威嚇や略奪に対する危惧にあると無理矢理付けられた。なおかつ、筆者の調べているかぎりでは、中国軍が山西省農村、部落の女性を拉致し、レイプすることに関する情報はまだ見いだせないのに対し、上述した中日両方の調査や証言が明示したように、日本軍の性暴力を受けた土民の女性はあまたある。それにしても、日本軍の行動を心配した父母を前に、鮑慶郷は「日本軍はそんなことしないうわ、帰ってくる人が皆んなそう言ってるじゃない」と、従来関わりがなかった日本軍のために弁護しようとした。それに反して現実の状況は、「寝るときにも服を脱がずに、おっかなびっくり毎日を過ごしていった」山西女性は少なくない^[205]。

こうしてみると、土民の「姑娘」鮑慶郷に関する上田の描写は捏造されたところが多々ありと言っても過言ではない。
上田広「鮑慶郷」と少し前後して発表された武田泰淳のエッセイ「土民の顔」の冒頭では以下のようなくだりがある。

日本軍がいかによさしく近づいたとしても戦線では支那の人民はなかなかついてくるものではありません。武装した我々に支那人たちが近寄るとしてもその時はもはや或る種の心構えをととのえて来ているに違いありません。^[206]

要するに、上田と同じように兵士として華中に従軍した武田は「親切」に見える中国「土民」は自分なりの考えを隠していることを洞察した。だが、中国文化・文学研究者武田泰淳が把握した現地中国人の「実態」を、上田広は知らなかったか、或は知って知らぬふりをしたと考えられる。そのため、鮑慶郷という「他者」を視点人物にして、彼女の身近なことしか描き出さないトリックにより、兵隊上田広は山西土民の生活を人間的な角度から観照しているかのように見せかけたものの、実際わずかで断片的な情報により自分に都合のいい「他者」を築き上げようとしただけではあるまいか。

むすびに

「女は家、家族、家庭の魂なのだ。同時に、女はより大きな集団である都市、地方あるいは国家の魂でもある」ため、「外国人がある地域の魂を自分のものとしようとするのは女をとおして」だと、ポーボワールは「女」に内在する共同体的表象性を析出している^[207]。そういった共同体的表象性は戦争を戦う双方の関係性においてひとしお増幅することになる。したがって、中日戦争の場合に、日本軍の兵士／現地「姑娘」の構図は征服・支配／被征服・被支配という非対称的な二項対立性を自明的に備える。この構図に内在する非対称性による身体・精神的暴力性・残虐性を最も即時で如実に開示した戦時下の文学は、石川達三『生きてゐる兵隊』しか見受けられないと思われる。テクストを一貫したリアリティは、同時代の中国側に高く評価されたのに反して、

一方において、戦地の中国民衆が虐殺された場面に触れたことで災禍に陥った石川達三と対照をなしたのは、

徐州会戦を背景とする『麦と兵隊』において日本兵士の素朴で強靱な姿に対する特筆により脚光を浴びた火野葦平である。そこで日本人兵士のクローズアップに対して、現地の中国人イメージはほぼ不可視化されたのである。だが、『麦と兵隊』で味をしめた火野はどんどん創作の意欲に燃え上がり、軍部に厳禁される女性描写に手を染めようとしたが、創作の最中に軍部から注意されることになった。そのような複雑な事情を背景に、当時の日本占領地杭州における中途半端な異国恋愛を物語の骨子とする『花と兵隊』は完成した。結果として、作中における「私」と青蓮、河原と鶯英の温情に満ちた関係性が明らかに「宣撫工作」に合わせるように構築されたとしか言いようがない。それは「戦争をした者には戦争がよくわからぬ」^[20]という杭州にいた火野の自嘲を想起させずにはおかない。

それと同時に、火野と同じように嘗てプロレタリア文学に親しんだ「兵隊作家」上田広は河北省、山西省を背景とする「黄塵」や山西省農村を舞台とする「鮑慶郷」を相次いで発表してきたのである。上田広の二作と火野葦平『花と兵隊』に通底するのは、『生きてゐる兵隊』で随所に見られるような戦争が女性にもたらす残虐さはほとんど一掃されたうえで、中国女性是国家・民族的アイデンティティを弱化されて、侵略国からの男性に対して自ずと生起するはずの複雑な心理を抹消されることになった。換言すると、戦時下の中国女性にありうる思想性や抵抗性が剥離されまたは曖昧化にされて、作中の日本人兵隊に脅威性を持たない存在に転換されたのである。だからこそ、戦時下の日本文学における「姑娘」がほとんど非戦闘員でなければならぬ。興味深いことに、それに対して例えば謝氷瑩や丁玲という中国女性作家の小説におけるヒロインは常に逞しい戦闘員或は革命者である。それについて詳しい検討は、中国の女性戦闘員をヒロインとする田村泰次郎や武田泰淳の戦地小説を取り扱う後の章節に譲る。

第二節 挾撃される〈身体〉——田村泰次郎「肉体の悪魔」と丁玲文学における女性党員を比較してはじめに

一九四〇年四月に第一次召集されて新兵訓練に加わった田村泰次郎は、「君はやはり我々の罪障を背負ってくれた事になる」（一九四〇年五月十九日）という石川達三からのメッセージを受けて間もなく召集解除された。が、一九四〇年十一月に第二次召集令状が届いて、田村泰次郎は独立混成第四旅団に配属されて、上田広がやや早い時期に建設に取り組んでいた正太線（或は石太線）を警備する一兵士となった。尾西康充氏の調査によれば、丹羽文雄の助言のおかげで田村は一九四一年三月ごろ「旅団司令部直属の宣撫班員に転属になった」という¹²⁹¹。その後、中国の戦線で敗戦を迎えた田村は「肉体が人間である」（『群像』、一九四七年五月）、「肉体解放論」（『オーケー』、一九四七年十二月）や「肉体の敵」（『ルージュ』創刊号、一九四八年十月）などのエッセイを相次いで発表していった。それらのエッセイにおいて田村は人間の「肉体」を束縛してきた封建的な儒教倫理に批判の矛先を向けて、一切の思想を凌駕する「肉体」の優位性を力説している。その中でも、一九四六年九月雑誌「世界文化」に掲載された小説「肉体の悪魔」は取りも直さずそうした「肉体論」から結実された小説である。

今まで「肉体の悪魔」に関連する先行論のなかで、尾西康充氏『田村泰次郎選集』の刊行を機に——『肉体の悪魔』自筆原稿の検討」（『日本近代文学』第七三号、二〇〇五年十月）は緻密な実地・実証調査を行ったうえで本作を具体的に考察している労作である。一方、ジェンダー・スタディーズの視座から「肉体の悪魔」を検討する論著として、作中の「男のひとりよがり」を看破した彦坂諦氏の『男性神話』が挙げられる。また、池田恵理子氏は「田村泰次郎が描いた戦場の性——山西省・日本軍支配下の買春と強姦」（石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力 大娘たちの戦争は終わらない』、創土社、二〇〇四年四月二十五日）のなかで、「肉体の悪魔」、「檻」、「春婦伝」など中国山西省を舞台にリアリズムで一貫した田村の戦争小説を手がかりに、戦時下山西省における日本軍の性暴力の実態を把握しようとした。そのうえで、秋山洋子氏は「田村泰次郎が描いた〈貞貞〉——『肉体の悪魔』再読——」（『中国女性史研究』（一九九）、中国女性史研究会、二〇一〇年二月）において、中国の女性作家丁玲「霞村にいた時」（中国語で「我在霞村的時候」）のヒロイン「貞貞」と「肉体の悪魔」の「張沢民」との類似性を打ち出している。秋山氏が「肉体の悪魔」と丁玲文学との関連性を提示したことにより、「肉体の悪魔」のヒロインを解読する新たな地平を開いたことは評価すべきである。しかし一方において、秋山氏は「張沢民」と「貞貞」の「体験」の共通性を指摘したものの、田村泰次郎が小説において表

面化させた「肉体」の含意に拘りすぎて、深入りした分析に欠けているところがあることは否めない。なぜなら、厳密に言うとな人間の「体験」の基盤は「身体」であり、「身体」はまた「肉体」を包摂していると思われるからである。

さて、本節は田村泰次郎が強調していた「肉体」にとらわれず、「身体」^[210]や「身体」の境遇性の次元で「肉体の悪魔」における張沢民像や、丁玲の代表的な二作品にある女性党员を捉えかえしたうえで、「肉体の悪魔」と丁玲文学にある女性党员像の描かれ方の接点や異同等を明らかにしていく。それに加えて、田村泰次郎「肉体の悪魔」の位置づけを試みる。

一、ジェンダー化・肉欲化される「身体」

一九四二年の「晋冀豫省境作戦」の最中、田村泰次郎の分身Ⅱ日本軍兵士「佐田」は「よく光る大きな眼をし、彫りの深い顔立」をしていながら「日本軍に対して骨の髄から憎悪に燃えているような冷やかさを全身に見せていた」、俘虜の張沢民に惹きつけられた。即ち、佐田が張に好意を持ちはじめ一つの要因は、俘虜でありながらも敵である日本軍に対して自分の意志や態度をはっきりと表明した彼女の不逞さにある。そういった不逞さを佐田は「自分の内部」にある「戦争そのものに対する人間らしい否定を」「外部に具体化して」彼自身と向かい合わせる媒介と考えている。ただし、ボーパワーが鋭く指摘した、「知性をもって彼に抵抗するが最終的には説きふせられてくれる女」^[211]という男性の理想を考え合わせると、自分に抵抗的な姿勢しか示さない女性を「馴致」しようとする、佐田の男性性に内在する征服欲は二人の関係の原点にあるのではないか。それに、冷たい張の存在を勝手に期待して「一つの理想的な人格」として、「実際に自分の内部にあって戦争という現実を生きている行動人と」対決させてみたい佐田の欲望については、

女は「他者」に見えると同時に、自己のうちに虚無をかかえる男の実存とは対照的に、充足した存在に見える。主体の目から客体として定められる「他者」は、即自として、つまり存在として定められるのである。実存者が心のうちにかかえる欠如を女は具体的に体現しているので、男は女をとおして自己に合一しようとする。努力することで自己実現したがる^[212]

というボーパワーの論述はある程度で適切に解釈していると考えられる。言い換えると、佐田は「心のうち

にかかえる「戦争の現実」がもたらしたトラウマⅡ「虚無」、「欠如」を、自分を憎悪の対象とする張という「敵国」の女性によって埋め合わせることで、自分自身の主体性を再確認或は再構築しようとする。そういう「他者」としての女性を通しての戦争により一部剥奪された男性の主体性の奪還は、「肉体」の優位性を強調する理論のもとで創作された田村の小説において主に男女の肉体関係によって実現されることになった。三ヶ月に渡る作戦行動から帰ってきた佐田を、張は「待ち焦がれた熱情」と「安心」の「宿っている」目で迎えたが、当夜で二人は肉体関係を結んだのである。それに、敵国の兵士と性的関係にあることに思い悩んでいる張に対して、佐田は以下のように自白している。

君のそういう内部の闘いが、私に対する愛のあかしとして、たまらなくうれしく、一層いろんなことを君に訊ねて、君を苦しめたくなる衝動を覚えるのだ。——男にとつては、自分のためになんか女が苦しんでいるのを見るのは、気持がいいものなのだ。(中略)君が自分の内部の肉体と知性の断層をどんなに生き抜こうと悩んでいるかという君の誠実さは、男の不逞な思いあがりやを叩きのめした。けれども、それと同時に、そういう君の知性を君自身の肉体に負けさせるということに、私は男としての勝利のよろこびを感じないでいられたなかった。君を下界へひきずり降すたびに、私の心のなかの男は凱歌をあげたのだ。

要するに、佐田は張の苦悩を自分への「愛のあかし」とみなして嗜虐的に満喫したうえに、張の知性を彼女の肉体に「負けさせる」ことで自分自身の男性性の「勝利」を享受することができた。そういう「男としての勝利」または「凱歌」は取りも直さず性行為による征服感や達成感の発露である。ひいては、張の「身体」に内在する「肉体」性が強調され抽出されて、彼女の「知性」、精神と対決させられて、肉体／精神の二項対立に還元されてしまうことになった。まさに中国研究者謝有順氏が主張したように、

身体への軽蔑から崇拜に至るまでの文学革命の過程が簡単かつ急速すぎるため、若い作家たちは掘り下げて思考、反省することなく身体の神聖化や肉体化を急いでいるが、身体自体の豊富性や欠落、不足、限界性を看過してしまうことになった。肉体が性と欲望に簡略化された際に、一種新たな身体専制が生成するが、それは人間を身体の代替物——昔は「仁」、「志」、「政治」等、今は性、肉体や欲望——の奴隷にしてしまふのだ。(筆者拙訳) [213]

以上の引用は主に中国の近現代文学に対する論述だが、田村泰次郎「肉体の悪魔」にも通用すると考えられる。謝氏の指摘を敷衍すれば、肉体／精神の二項対立の非対称性が解消されないかぎりには、田村はいくら肉体の優位性を唱えようと、結果的に張沢民を代表とする女性の（身体）を肉体（欲）化してしまふことにより、男根—ロゴス中心主義と表裏一体になるしかないと見えよう。一方において、女が「都市、地方あるいは国家の魂」^[24]で、「外国人がある地域の魂を自分のものとしようとするのは女をとおして」であるがゆえに、張の（身体）のジェンダー化や肉欲化により、中日戦争を背景にする佐田と張沢民の関係に表象された征服・支配する日本／征服・支配される中国の構図はひとしお前景化することになった。しかしながら、佐田はそれを強く意識しつつも、そういうような力関係の危険性を押切り自分の肉体の衝動に任せる始末である。

「肉体の悪魔」の解説にあたる「破壊された女」（『女拓』、中央公論社、一九六四年十二月）では、田村は張沢民は「張玉芝」という実在の女性の「人柄と行動を」「かなり事実^[25]に即してなぞったもの」だと説明している。そして、犬飼上等兵——「肉体の悪魔」では「猿江上等兵」——が張玉芝を殴ったところを見かけた田村は、実際に彼女を慰める途中で「張に無理やり接吻し、その夜、肉体関係をもった」^[26]のだが、その経緯は「破壊された女」においても記述された。そこから一つの問題点が浮上してきた。田村泰次郎の戦争文学の誇るリアリティは歴史学者を含める数多くの研究者に既に指摘されたとおりである。だが、田村の回想においては「犬飼事件」をきっかけに彼と張が「その夜」急速に肉体関係に突入した経緯が、なぜ「肉体の悪魔」では佐田が「猿江事件」を契機に「張」と仲良くなっているのや取り扱うようになる過程を経て、また三ヶ月の作戦行動の後で彼に「積極的」に好意を明示した張と肉体関係を結ぶという漸進的な展開になったのだろうか。筆者の管見では、その原因は日本軍兵士と中国人俘虜の関係にある絶対的な非対称性や、「肉体の悪魔」が舞台にした山西省において頻発した日本軍による婦女凌辱事件と深く関わるのではないだろうか。「肉体の悪魔」の姉妹篇である「檻」（『新潮』第四四卷一〇号、新潮社、一九四七年十月一日）において、掩護隊の分隊長が捕虜となった知識女性「王小英」をレイプしたところを目撃した佐田は以下のように告白している。

私はこの女を、どんなにしてもかまわないように思った。この女を犠牲にすることによって、私は生きるのだ。この女の知性も、誇りもみんな、私がふみにじるのだ。いや、そうしないでは、私は生きられない（中略）私の肉体からは情欲の放射能が、眼に見えぬ光を發し、それに照射されて、彼女は身動きするこ

とも出来ないようだ（中略）ふと、彼女の方から、私を誘うような錯覚さえ覚える。

いま、考えると、私はあの瞬間の自分の心が、自分のものであったとは信じられない。敗戦国とはいえ、一応生命の危険から解放された環境にある私には、あの戦場での自分が、異常人であったとしか思えない。あの環境のなかでは、あらゆる考え方が錯倒していたとしか思えない。

以上の引用の前半は捕虜になった中国の知識女性に性暴力をふるう寸前の佐田の複雑な心理である。彼が王の「知性」や「誇り」を「ふみにじ」ろうとする衝動は張の知性を彼女の肉体に「負けさせ」ようとするそれと同質的なものではないだろうか。したがって、佐田が王から覚えた「誘うような錯覚」は、彼女と同じように中国の知識女性の捕虜である張から全く感じ取れないとは断言できなくなったのだろう。戦場にいた「異常人」である佐田の行動に内包される危険性や倒錯性を戦後の田村泰次郎は意識しているからこそ、張が佐田に対する好感度を自然に高められるような場面を加筆したりすることにより、二人の肉体関係を、それと紙一重になった拒否権を持ってない女性捕虜に向かう性暴力と差異化して、「恋愛関係」の一環として意図的に方向づけようとしたのではあるまいか。そのようなデフォルメの原因に先行論者が論及した男のひとりよがりがあるばかりか、兵士と女性捕虜との関係に内在する危険性に対する田村泰次郎の懸念もあると思われる。

二、監視・馴致される（身体）

既述したように、反骨精神に満ちた張沢民を「馴致」しようとする佐田の意図は二人の関係の原点にあるが、そのために佐田はさまざまなからくりを思いめぐらしたのである。まず、佐田は張の自分への「好意」を「わかっていた」くせに、自分の「利己的ひねくれた」心理に駆られて張の愛情を確認するために「中国や朝鮮の娘たちのいる家」にとまって彼女らと「つかみあい」するなど、思う存分に女遊びをしていた。それに、佐田は「中国の人々が漢奸といわれることをどんなに嫌がるか」「心得ていた」のに、結局「いろんなことを」張に「訊ねて」彼女を「苦しめたくなる衝動を覚える」のである。さらに、張の知性を彼女の肉体に負けさせることに「男としての勝利のよろこびを感じないでいられない」「佐田」は、自分自身の知性の有効性を確保することができたと言える。

ああ、そんな君を思うとき、私の心のなかでは君が一層美しく、可憐な女となり、私の肉体はもうどうに

もならぬ情熱に喘ぎつつ、がむしゃらに君の肉体を求めろのだ。そういう私をやつとひきとめるのは、仲間たちの眼であり、また私たち兵隊の心身を縛る軍規という眼に見えぬ觀念だったが、そのほかに私自身の魂の奥底にある君に対する民族的なひけ目……

その時点で既に張を「ものにした」佐田は今更のように「仲間たちの眼」、「軍規」や「民族的なひけ目」などの支障に思い至つたわけである。まさに戦後に彼自身が告白したように、「私には君の情熱が純粹で完全なものであり、私の情熱が不純で不完全なものである。なおかつ、佐田は「いつまでも」張の「完全な情熱を自分のものとして置きたい執着からは逃れることが出来ない」のである。換言すると、佐田と張の「恋愛関係」の度合いは佐田のエゴイズムによって調節される、或は佐田が絶対的な主導権を握っている。自分の思うがままに張沢民との関係を左右しようとする佐田の欲望は、しばしば「恋愛関係」の域を超えて、張に関する一切に対する強烈な詮索欲や独占欲にまで拡大化していくことになった。例えば、佐田は「陳」という中国人の密告によってはじめて張が「陳」に合図したことや、彼女が一九四〇年の七・七記念日に開かれた民衆大会で『魔穴』という劇に出演したことを知った時に自分の苛立ちを隠せない。

私は君が共産党員であることを前から知って居り、また君が私と特別の関係になつたとしても、君の思想的な自由までこちらの思うようにしようとは思つたこともなかつたが、——本当は共産党員である君をして、理論的矛盾を生かさせていることに、男としての私の満足感があつたのだが、——その反面、私はいままで、君が私に対してどんなことでも秘密を持つことをゆるさない気持になつていた。私は君のあらゆることを知っていなければ満足しなかつた。

即ち、結果として佐田は張の「思想的な自由」に干渉してきたうえに、彼女に関する「あらゆること」を知り尽くそうとした、或は彼の監視下に置こうとしたのである。が、そうした佐田の「独りよがり」或は利己的行動や欲望のほとんどの実現を可能にしたのは、ほかでもなく張の捕虜という身分である。換言すると、張沢民が自由の行動を制限される、（身体）を監視、監禁される「敵国」の捕虜であればこそ、佐田は絶対的な支配力を持つているわけである。なおかつ、戦場の「性暴力」と紙一重になる肉体関係に基づいた「恋愛」という親密関係の名のもとで、佐田は張を誘導し利用して、自分に有利な情報を探っていたのである。それと同時に

「恋愛」の名目に不可視化されてきたのは、そういう非日常的なコンテクストにおいて、俘虜としての張が終始死に処せられる脅威、懲罰にさらされているのに対して、武器を常に持ち歩く兵隊である佐田は張の処刑人に十分になりうるということである。そうした構図が前面化したのは、張が自分の権力のボーダーを抜け出そうとしたのに佐田が気づいた際である。即ちテクストのクライマックスの場面である——佐田が七里屯へ調査に出たときに「裏山を登って行く」張の後ろ姿をみたたん、佐田は「捨てられる」、「裏切られた」ような意識でいっぱいになり、つい張に拳銃を向けたのである。それは尾西康充氏の調査によると草稿から修正されたものだと判明するが、草稿と完成稿との違いは主に佐田が最後に発砲するかどうかということにある。しかし、佐田が張に向けて発砲しようとしなかつた、二人の関係性において大差はないのではあるまいか。なぜかというところ、規則にやかましい軍隊のシステムのもとでは、兵隊である佐田／俘虜である張における訓戒 (discipline) する／される非対称的な権力関係において変わりはないからであり、張の生死に対する決定権は佐田が相変わらず握っているからである。

三、革命化される〈身体〉

「肉体の悪魔」のなかで張沢民は佐田らと太行地区における共産党の指導した演劇運動について語る際に、「女流作家丁玲の主宰する西北戦地服務団の活躍状況」を話したのである。丁玲（原名蒋偉）は一九〇四年湖南省生れの中国作家である。父蒋浴嵐は留日経験のある名門の子弟で、母余曼貞は新文化の洗礼を受けた民主革命思想の持ち主である。十五歳の丁玲は一九一九年の五四運動から多大な影響を受けて、デモや断髪など当時の学生運動に積極的に取り組んでいた。一九三一年最初の夫である胡也頻が国民党に殺害されたことから大きな衝撃を受けたこともあって、一九三二年中国共産党に入党した。一九三五年丁玲は国民党のスパイにより南京へ拉致され一時軟禁されていたが、ようやく一九三六年革命根拠地である陝西省に到着した。しかし、捕虜になった女性が転向せずに生還できたという「奇跡」は、一部の黨員同士から丁玲の革命的忠誠への懐疑を招くことになった。この捕虜になった経験は丁玲のトラウマとして彼女を生涯にわたって悩ませていたうえに、作家である彼女の重要な創作テーマの一つにもなったのである。成立したばかりの西北戦地服務団（以下は「西戦団」と略称）のために丁玲が突貫して創作した演劇「再会」（拙訳、中国語の原題は「重逢」、一九三七年八月）は、まさに上述した作家の実体験を投影した作品だとされてきた^[21]。その直後、西戦団は山西省に駆けつけて「再会」を何回も公演したという^[22]。

「再会」のヒロイン「白蘭」が抗日軍の政治部に属する工作員であるという設定は、「晋冀魯予辺区政府教育庁」に勤めた張沢民と類似している。テクストはヒロインが捕虜として収監された日本特高科の密室から始まるが、以下の引用は冒頭部分で日本兵の足跡を聞きつけたヒロインの心理活動である。

白蘭 鬼子が来た。もう我慢できない。日本人をみると心は感情を爆発させるようだ。そいつをかじろう……きた、きた、鬼子が来た！（筆者拙訳）

日本軍に対する囚人白蘭の抑えきれない憤怒は、そのまま「日本軍に対して骨の髄から憎悪に燃えているような冷やかさを全身に見せた」張沢民を想起させる。さらに、張が身元を隠蔽するために看護婦と自称したと同じように、白蘭も自分が「高校生」だと言い張ったのである。かくして、白蘭と張沢民の身分や捕虜になったあとの態度における通底性から、繰り返しになるが「肉体の悪魔」のリアリティは再確認できる。にもかかわらず、「肉体の悪魔」において日本兵士である語り手により肉欲化された女性革命者の（身体）は、「再会」ではいかに表象されているのか。

獄中で逮捕された抗日軍の戦友に再会した白蘭は、戦友の一人である「斉新」から革命的大役をおおせつかった。

斉新（前略）第一に、あなたは政治的身分を暴露していない。第二に、あなたは若いから、敵はあなたを引き込んでやつらのために工作させようとす可能性が高い。（中略）

斉新 白蘭はできるよ。彼女はそうすべきだ。生きていける希望がある以上、死を待つのがやなく機会を逃さずに工作すべきだ。白蘭、敵の魔手で死ぬのは簡単だけど、敵の魔手のなかで生きて革命のために工作し続けることは難しい。試みたらどう？ 少しでも可能性さえあれば、表向き敵に順応ながら、実際は同志たちのために工作して、敵の心臓のなかで活躍して、私たちの闘争に合わせたらどうだろうか？（中略）

斉新（前略）白蘭、勇気を出せ！（中略）国家民族の存亡のために全てを勇ましく引き受けよう。あなたは中華民族のいい子だから

以上は斉新が死を覚悟した白蘭に彼女の偽装した「高校生」の身分や青春を利用して両面工作をするよう説得する場面である。「若い」は女性の魅力を意味するため、白蘭の工作は即ち「高校生」になりすまして、彼女をもにしようとする謀報機関の「山本隊長」の欲望を逆手に取って彼をもつと誘惑して、ひいては彼に身を任せることを前提とすることが容易く推測できる。白蘭は最初のきっぱりと拒絶する態度から、暫くの躊躇を経て、斉新を含める三人の戦友・同志が銃殺された銃声を聞いた瞬間、やっとな斉新の託した大役を引き受けるに及んだ。つまるところ、斉新の革命の道義に満ちた説教や同志たちの死による精神的重荷は白蘭の決意を固めたと言わざるを得ない。こうして、女性党員の個人の「身体」に孕まれた衝突性をクロージアップした「肉体的悪魔」と異なり、「再会」において女性党員の「身体」はもはや個人的レベルからはみ出して、国家・民族的デイスクルのなかで革命の手段になって、革命の目標に従属することが期待され或は要請される。

「再会」のテクストに戻ると、山本隊長は一方において白蘭を自分のものにするために、一人の中国人を通して彼女を説得させることにしたが、その中国人は思いがけずも一年あまり行方不明になっていた白蘭の元の恋人である「馬達明」である。昔の恋人が日本軍の情報課課長として自分の目の前に出現した瞬間、白蘭は再度苦渋に陥ったのである——つまり、どのような態度で馬に直面すべきだろうか。だが、斉新ら革命同志の犠牲を知らされた白蘭は馬に対して以下のように対応している。

白蘭　あなたを知っているよ。昔の達明は誠実で、聡明で、努力的で、愛国心がある、勇敢だったが、今は……

馬達明　今も同じだよ。そして永遠に……

白蘭　嘘つき！まだ私を騙すつもりか。あんたみたいな卑怯なやつは早く死ねばいい。あなたの口車に乗らないわ。あんたを恨んでるわ、全ての国賊よりも。あんたを死なせるんだ……

つまるところ、過去の恋人であり革命同志だった馬達明が転向して漢奸になったことから大きなショックを受けた白蘭は、胸を締め付けられながら革命や国家を裏切った彼を断罪し折檻したのである。即ち、田村泰次郎が描いた知性と「肉体」、革命と恋愛との矛盾や対立に思い悩んで、その間で徘徊している張沢民と違い、白蘭は昔の恋愛への名残り、恋人への愛おしさを心の奥底にしまいこんで、革命の論理を内面化した女性党員として築き上げられた。中国研究者黄丹鑾氏が主張したように、「反侵略の民族戦争のコンテクストにおいて、革

命は全部の（個人）に生命を浸透できるような主導権がある。革命者たるものの前にはグレーゾーンはなく、二者択一しかない」（拙訳）¹²⁸。よって、真の革命者にとって恋愛というような親密な人間関係は副次的なものでなければならぬ。革命思想は共通する理想を持つ二人を恋愛関係にすることができるとは、一方、精神が離反する恋人たちを迅速に分離させるに相違ない。「肉体の悪魔」において張沢民が言及した「階級的恋愛」は、取りも直さずそのように個人の恋愛までも支配できるといふ革命の優位性を傍証している。田村泰次郎が特筆していない／できない女性黨員を取り巻く「階級的恋愛」を、丁玲は「再会」において展開していると見えよう。にもかかわらず、女性の（身体）は革命に献身するという大義名分のもとで政治化された後でまたどのような境遇に陥っていくのだろうか。

四、ステイグマ化／英雄化される（身体）

一九四〇年八月八日、丁玲はある友達からこういう情報を得た——ある女性同志は「日本人のところからひどい病も持って帰ってきた。彼女は前線によく頑張っていたが、今はうちの延安病院へ治療を受けに来たんだ」といふ。中国作家蕭軍も一九四〇年八月十九日付の日記で「凌辱から逃れたある女」をタイトルに、「河北で日本（軍）に連行されていったある中年女性。黨員だ。日本兵にレープされてそして太原に連れて行かれた。彼女は八路军と連絡をとれて（地下）工作に大いに貢献したが、その後いられなくなって逃げ出してきたわけだ。党は彼女を延安につれて治療を受けさせたんだ——淋病」と記している¹²⁹。丁玲はこの情報の女性黨員に同情して、「彼女は運命において犠牲者だが、人々は彼女を聞いたこともなければ知っていないわけでもない。それに彼女を軽蔑する。なぜなら彼女は敵にいじめられた女で、不名誉なんだ」と慨嘆した。続いて、「じっくり考えてみたらそれを書かないわけにはいかないと思うから、「霞村にいた時」を創作したわけだ」と、短編小説「霞村にいた時」を執筆するに至る経緯を回想した。要するに、「霞村にいた時」は日本軍の性暴力を受けた実在する女性黨員をモデルにした作品である。この意味において「霞村にいた時」と田村泰次郎の「肉体の悪魔」は通底している。既に述べたように、「肉体の悪魔」と「霞村にいた時」との関係性或は比較できる可能性について秋山洋子氏は研究ノート「田村泰次郎が描いた（貞貞）——『肉体の悪魔』——再読」で言及しているが、具体的なテクスト分析をなしてはいない。

「霞村にいた時」は丁玲が一九四一年六月二十日雑誌『中国文化』に発表した小説である。霞村生れの「貞貞」という若い女性は見合い結婚に反抗するためにカトリックチャーチに逃げ出して修道女になろうとしたと

ころ、日本軍に連行されて慰安婦になる始末だった。日本兵の虐待や凌辱に耐えられなくて二回も逃走したが、抗戦に有利な情報を提供するために両面工作員となって日本軍の魔手に再び戻っていったのである。しかしながら、ひどい性病に感染して霞村に帰還した貞貞は、村民らによって冷遇され、軽蔑された。「雑貨店の主人のような連中は、顔をしかめ、冷ややかな眼で」貞貞をみた。また、「ことに女たちのなかには、貞貞がいるために、自分に対する誇りの念をおこし、いまさらのように自分の純潔を発見したのもあった。自分は強姦されていないからといって威張れるわけだ」という。つまり当時の中国農村にまだ残留している封建思想や伝統的道徳観にとらわれる村民たちにとって、貞貞の苦衷いかに関わらず、彼女の病にかかった「不潔」な（身体）は忌避、唾棄すべきものにすぎない。なかんずく女性の村民にとって、貞貞の傷付いた（身体）は同じく女性である自己の「純潔」や「完全性」を再確認させられる参照物になった。また、歐陽燦燦氏が論述しているように、土地を生産資料とする中国農村を取り扱うテクストにおいて、個人の（身体）は土地と切り離せないものであっただけでなく、農村にいる他人とも同源的な（身体）をもって利益的关系を結んで共生している¹²⁰。ところが、そうした身体的な繋がりがや境遇性はときどき個性を抹殺したり、個人の運命を非情に翻弄したりする傾向にある¹²¹。すると、霞村が依然として封建的イデオロギーの支配下にある農村であるがゆえに、そうした利益で結ばれた集団的な共生関係はかえって封建的倫理に背反した「異端者」と思われた個人の（身体）の汚名化、ステイグマ化を増幅することになったと考えられる。

一方において、貞貞の（身体）は既述した「再会」の白蘭と共通するように、結果として戦争、革命に貢献した性格があるが、李超傑氏が論じたとおり、貞貞が自分の（身体）を情報収集に利用することにした背後に、国家・民族的ディスクールにおいて革命に強要される一面が否めない¹²²。村民たちに引き換えて、革命に身を投じた貞貞に対して、霞村現地の「活動分子」・党員は一般の村民とはつきり異なる態度を示している。

「あら、馬同志ですの？私の名刺、ごらんになって？さあ、どうぞお掛けなさい」

私は、彼がこの村の責任者であることを知った。まだ卒業前の初等中学の生徒だった（中略）

こうした若い人には前線でもたびたび会った。彼らに接したときは、いつもびっくりし、自分とかけはなれたこうした若者たちは実に変わりようが早いと感心させられるのであった。が、私は話しをもとへもどした。

「いまさっきのは何なの？」

「劉二媽の娘の貞貞が帰って来たんです。あの人はまったくすばらしい人だったんですね。たちまち私は、彼の眼の中に、何かしら一種うれしそうな熱っぽい輝きを放つものを見てとった。」

即ち、霞村の責任者である「馬同志」は、いろいろな新思想や革命精神を飲み込んだ典型的な若者として、抗戦、革命のために凌辱されまくった貞貞を「まったくすばらしい人」とみなした。さらに、馬同志は貞貞が「日本人のところまで」「一年以上も仕事をしていた」たからこそ、視点人物である「私」の創作活動にとつて「材料」がきつとたくさんある」と強調したのである。また、馬同志と同じような考えから、「活動分子」である「若い人たちはみんな彼女にあたりがよい」。すると、日本軍に身を委ねた女性工作員の（身体）は、敵を倒すための道具、武器として革命の言説と緊密に結びついたうえで英雄化、崇高化される一面が現前してくる。それは革命の勝利に大いに寄与し、人知れず数々の苦難をなめてきた女性に対する補償、奨励である性格があるもの、女性のトラウマに関する言説を繰り返して再生産させることにより、彼女らの（身体）を記号化、プロパガンダ化していく傾向が強い。要するに、このように相反するかに見える活動分子と村民の見方は、最終的には苦難を体験してきた（身体）を消費することにおいて一致している。

李超傑氏の調査では、貞貞のように生還してきた慰安婦のほとんどは革命活動に取り組み続けることがなかったうえに、万が一彼女らが故郷に帰ったとしても、屈辱や差別に満ちた余生を送ることになる²³³。そうした状況を勘案すると、両面工作をしたとすれば、張沢民も貞貞らのような慰安婦と同じ境遇に陥りかねないだろう。言うに及ばず、それに反して張沢民が両面工作員でないとしたら、戦後になれば日本軍に協力した事実を否認ない彼女は、もちろん彼女の（身体）も、民族の恥辱として裁断されてしまうに決まっている。こうしてみると、捕虜になっても殺されずに生きていけた張沢民の行く末は丁玲の個人体験や文学を考え合わせると明らかになった。丁玲が書き残したそうしたメッセージは、「作中のヒロイン」は「烈しい時代の渦巻のなかで、いま、どうしているだろうか」（「作家のことば」、『現代日本文学選集』第二巻、細川書店、一九四九年十一月）という田村泰次郎の問いに対する最適な回答だろう。

むすびに

日本侵略軍の一兵士として中国の華北戦場を転々と駆け回ってきた田村泰次郎は、無数の死傷者を目撃して、自分も何度も死とすれ違ったがゆえに、思想や知性というものの無力、虚無を実感させられて、人間の本质で、

あるべき「肉体」の優位性を力説するに及んだ。そうした中核的思想のもとで、「肉体の悪魔」における中国の女性党员張沢民の（身体）は日本兵士佐田の男性性により極端なまでに肉欲化されたが、兵隊の捕虜に対する性暴力と差異化するため、田村は二人の肉体関係を「恋愛」過程の一環として漸進的に繰り広げている。しかしながら、兵隊／捕虜に内在する非対称的な権力関係は佐田が不逞な張沢民を完全に監視して、馴致しようとする欲望を助長して、実現させることになった一方で、「恋愛」に見える二人の関係を随時に支配／被支配、殺す／殺されるという構図に還元してしまう危険性を内包している。

そういった日本の兵隊だった田村泰次郎の支配する側による男性視点に対して、田村と同時期に山西省を含めた根拠地で革命活動のために奔走した中国の女性作家丁玲は、女性の身体体験を重視して、抗戦、革命に身を投じた女性党员、工作員の心理葛藤や彼女らが背負わされた時代的運命を余すところなく描出したと言える。なぜなら、「生理と心理の差異に基づいて、女性性は男性と異なる本質を内在的に持っているため、女性作家によるテクストは女性の体験、感情、思想や欲望に注目しななければならない」からである^[24]。丁玲自身の「囚人経験」に基づいて創作された話劇「再会」のヒロイン「白蘭」が直面させられた矛盾や選択により、革命に対する革命者の（身体）の従属性、副次性が垣間見られる一方で、女性革命者の女性性を備える（身体）に特有する道具性も看過できない。また、実在人物に関する情報を踏まえながら書き上げられた「霞村にいた時」のなかで、丁玲は日本軍の「慰安婦」に偽装した女性工作員「貞貞」の物語を綴っている。「貞貞」の（身体）は「再会」にある「白蘭」と同じように革命化、道具化されたうえに、「霞村」という封建的イデオロギーに主導される農村共同体により、性暴力に起因した病で恥辱の烙印を押し付けられてしまった。それに対して、霞村の進歩的な側により戦争や革命に貢献した貞貞の（身体）は過剰に英雄化されて、プロパガンダの材料として消費されていく運命を免れないと割り出せる。というのは、（身体）の肉体性を抽出して知性や思想に優先させようとした田村泰次郎が「肉体の悪魔」において書かずじまいだった革命による（身体）の政治化を、丁玲は「再会」のなかで再現しているが、それから「霞村にいた時」において懐疑の姿勢でその合理性を見直して、その暴力性を詰問している。また、田村泰次郎が「肉体の悪魔」において展開していない張沢民の行先や最終の運命について、丁玲は「霞村にいた時」のなかで克明に物語っている。こうして見ると、女性共産党员的の（身体）の境遇性或は体験を基軸に、田村泰次郎「肉体の悪魔」と丁玲「再会」、「霞村にいた時」とは一直線上にある、重なり合いながら相互補完的なテクストだと言ってよからう。しかしながら、そういった境遇や関係のなかにある（身体）は境遇性や関係域に反作用されるような受動的なものであることは、歐陽燦燦氏が述べたとおり

である^[23]。本節で論じてきたのは、まさにそのような受動的な女性党員の（身体）である。中日戦争というコンテキストにおいて、「肉体の悪魔」は俘虜になった女性党員の（身体）が敵国の日本兵との関係性に反作用される――肉欲化、訓戒、殺傷されるなど――一面を明示しているのに対して、「再会」、「霞村にいた時」は戦争・民族・国家的ディスカールに置かれた女性工作員の（身体）が革命化されたうえに、同胞によりそれぞれ神聖化／汚名化され、ひいては消費される一面を炙りだした。そのうえで、男性が主導する中日戦争という大きな歴史的転換点に逢着した女性の（身体）が中日両方から挟撃され翻弄されつつ、革命活動など社会参画に積極的に取り組んだり、個人の（身体）を民族、国家の言説に預けたりすることにより、主体性の確立をはかろうとしていた中国女性がたどってきた屈折した道が浮き彫りにされている。

さらに、中国人女性を造形した日本文学における「肉体の悪魔」の位置づけにも少し言及する必要がある。横光利一が『上海』で形象化した中国人の女性党员「芳秋蘭」に比べると、「張沢民」が田村泰次郎の身近にいる実在人物をモデルにした中国女性像であるために、その外見は既にステレオタイプの中国古典美から脱皮したうえに、人物の立体感、実体感やリアリティにおいても進んできた。そういうこともあり、横光利一は「肉体の悪魔」を推奨したのである。一方で、それまでの戦地小説にある思想性を剥離された、日本軍に協力的な変形した「非戦闘員」である中国女性イメージに対し、「張沢民」像は新たな地平を切り開いたうえに男性作家が塑像した中国女性像の歪んだ軸を一部矯正したと言える。また、丁玲の作品との比較を通じて、「肉体の悪魔」にある田村泰次郎の限界性は看過できないにもかかわらず、「佐田」の目に映る「張沢民」やその（身体）の受動性をめぐるリアリティ、「佐田」と「張」の間に立ちあはだかる障壁への認識や大胆な自己解剖という意味において、「肉体の悪魔」は一步踏み進んだ戦争小説であると考えられる。

第三節 女性視点による中国「女傑」——武田泰淳「廬州風景」論 はじめに

火野葦平が一兵隊として柳川軍団の命令を受けて、第一回の杭州湾上陸を遂行した際に、杭州湾に集結した船団のなかに、後日第一次戦後派の中堅となるもう一人の作家——武田泰淳がいた。川西政明氏の調査によると、武田らは「火野葦平のあとを追うことにな」ったが、悪天候のため上陸が困難になるので、武田ら補充兵は「杭州湾で上陸せず上海の呉松へ向」つたという^[27]。一九三四年初頭に成立した中国文学研究会の骨幹メンバーである武田泰淳は運命に翻弄されるように、一九三七年一〇月に、つまり盧溝橋事件後まもなく一輜重兵として中国の戦地に派遣されることになった。戦争の時運に乗じて花形の「兵隊作家」になった火野葦平、上田広に対して、武田泰淳が戦後になつてはじめて本格的に作家としてデビューしたのは、「中国、中国人、中国文芸を愛すると自称していた」武田が中国人を「敵」とせねばならない複雑な感情にとらわれていたからだろう^[27]。このような武田泰淳の心理状態は「北京の輩に寄する詩」（一九三八年秋）を通じて端的に伺えるが、この詩は「安徽省の街から」、ひいては当時の「廬州」（今の安徽省合肥市）から発信されたと推定できる。それに、「廬州」という戦場は武田泰淳にこの奇矯極まる詩ばかりでなく、「廬州風景」という独特の小説をも創作させた。

「廬州風景」の初稿は一九三九年の執筆だが、一九四二年と一九四六年との二回の改稿を経て、一九四七年十一月に『才子佳人』（東方書局発行）に収録されてやっと発表されるに至ったのである。しかも『武田泰淳全集』（増補版、筑摩書房、一九七八年）において「廬州風景」が第一巻の第一篇として組み込まれたことも、武田泰淳の文学生涯における本作の位置づけを端的に示唆している。しかしながら、「審判」など戦時下の記憶に基づいて創作された小説に比べると、「廬州風景」に関する論文は数少ないようである。ここで言及しなくてはならないのは石崎等氏の「『廬州風景』の成立」（『日本近代文学館年誌 資料探索2』、日本近代文学館、二〇〇六年九月十五日）という論文である。石崎氏は日本近代文学館に所蔵される武田泰淳コレクションにある「稿本・廬州風景」を出版された定稿「廬州風景」と照合したうえで、「輜重兵である主人公（私）」を「看護婦・水野雪江という女性にしたこと」や、「端役であった中国人女性「楊さん」を水野雪江、森医官と同等の重要人物に格上げした」ことという変更部分を指摘している^[28]。それは流布版テクストの解説にとつて重要な提示だと思えるが、石崎氏の論はそうした箇所がわざわざ書き改められた事由や役割について深く詮索することができない。

さて、本節は定稿「廬州風景」で格上げされた中国人女性「楊さん」に焦点をあて、「楊さん」イメージに武田のいかなる中国女性観や「心象風景」が投影されているのかを解明すると共に、この「楊さん」像はそれまでの戦地文学にある中国女性像に比べてどのような独自性を持つのかを検討してみる。

一、「楊さん」における「女傑」・「侠女」イメージ

「廬州風景」のテキストは戦争未亡人で廬州の野戦予備病院の看護婦である水野雪江の手記によって構成される。楊さんは水野Ⅱ「私」と同じく外科の第一病棟で働いていた同僚で、日本語ができないもののコレラと戦う過程のなかで「私」と友情を結ぶようになったが、「私」が見た楊さんの性格はどのようなものであるか。「いきなり楊さんの手を握って」焼けどをするかどうかを「しらべようとした」森医官に対して、「楊さんは首を振って身を引き、反抗するような目つきで、キツと医官を睨んだ」が、このように他人に迷惑をかけないようにして、しかも異性からの唐突の接触を避けようとした楊さんを「私」は「若々しく野性的で」「気の強い」、「たのもしいひとと思った」のである。また、通過していく「鳥の大群」を縁起が悪い象徴として「畜生！」とか「何やらひどい罵りの言葉を吐いて」「激怒」したりする楊さんを「私は好きだった」のである。この場面に關して、磯田光一氏は「鳥の大群を憎悪する楊さんは、もし彼女が日常性の場に還るとき、『水滸伝』や『金瓶梅』を読むことがないであろうか。英雄・豪傑の物語もまた、民族の文学伝統のうちに生きています」と論及している^[29]。「鳥の大群を憎悪する」楊さんの行為を「英雄・豪傑の物語」に接合している磯田氏の見解に筆者も賛同するが、それだけでなく、後文でお酒を「水のように造作なく」豪飲したりして、豚の屠殺場で働く「豪傑」風の（彼氏かもしれない）男性友人を叱ったりする楊さんの気質は取りも直さず磯田氏が挙げた『水滸伝』にある「一丈青」などの女傑を彷彿とさせる。

周知のごとく、数多くの女傑が登場する『水滸伝』は武田泰淳の愛読する中国古典小説の一つだが、そのほかに侠女「何玉鳳」（「十三妹」）をヒロインとする『兒女英雄伝』も挙げられる。なおかつ、『兒女英雄伝』を底本に、武田は一九四八年に『女賊の哲学』、そして一九六五年『十三妹』において彼なりの「十三妹」像を築き上げた。さらに、前述したとおり、「肉屋」で働く豪傑風の中国人男性が「楊さんの前にいると、さっきまで不機嫌そうにしていた頑固な顔がまるで別人のように若々しく見えた」、それに「楊さんが早口で高びしゃに喋る、それを彼はおとなしくきいていた」場面がある。そういう伝統的な男権中心主義に基づいた男／女Ⅱ支配／被支配の非対称的な権力構造を顛覆したように、女性のほうが主導権を握るところは、まさに『十三

妹』においてヒロインが夫「安公子」を凌駕して家庭内の中心となる武田泰淳の斬新な設定に通底している。また、もう一つ注意すべきは、「纏足した小さな足」で「わずかな薪をかかえて歩いて行く」中年女性を見かけたら、楊さんが「チョツチョツ」と「舌打ちし」て、「何物かを憎む如き、はげしい感情がキラキラ光る眼にあらわれていた」箇所である。なぜなら、それと共通するように、中国の原作『兒女英雄伝』における十三妹の「纏足」という設定は武田泰淳の『十三妹』においては「天足」に変更された。その点について、武田は『十三妹』の「あとがき」において、「たとえば「兒女英雄伝」の十三妹の足は、纏足となつてゐるが、私のイメージの中の彼女は、どうしても天足（つまり自然のままのかたちの足）でなければならなかつた」と説明している²³⁰。そういうところに武田がこだわるのは、清朝末期から辛亥革命を経て中華民国成立初期に至るまで、伝統の男性的審美観に根ざした、女性の身体への最も典型的な改造や束縛として、纏足か否かは中国人女性の先鋭性、進歩性や独立性の有無を評価する一つの重要な基準だったからである。ましてや正義や革命のために自由自在に奔走したりする、強い行動力を持つべき女傑や侠女は天足でなければならぬであろう。したがって、そういうこだわりは武田による女性革命者秋瑾をめぐる伝記『秋風秋雨人を愁殺す』にまで続いてきた。なおかつ、『秋瑾女士伝』の結末に武田は以下のように付け加えている。

第二章に、秋瑾女士の纏足の話があるが、誤解されるといけないので付け加えておく。
女士は纏足反対論者として、その論文を書いているのだから、少なくとも結婚前後には、幼女時代からむりやり自分の足をしばりあげていた布、『金蓮』とよばれる奇怪にちぢかめられた美しい小さな足を娘にあたえようとした両親の愛情をときほぐしていたにちがいない。²³¹

すなわち、古典文学にある十三妹も名高い近代革命者秋瑾も、武田泰淳の文学世界に登場する女傑や侠女、或は近代的主体意識に目覚めた能動的な中国女性はすべて天足で、または纏足を憎悪する進歩的な人物でなければならぬであろう。武田が十三妹や秋瑾のような中国女傑像を愛すればこそ、それらの女傑像にある特質——例えば「気の強い」、「はげしい感情の表現をする」、纏足を憎悪するなどというところ——をおのれの造形した楊さんに付与していると言えよう。

二、「楊さん」に秘められた謝氷瑩

以上引用した秋瑾女士の纏足に関する説明の後に武田はまたこう補足している。

かつて北伐の革命軍に女兵士として従軍した、謝氷瑩女士から聴いたところによると、少女時代の彼女は夜、寝室に入ると纏足の布をほどいて、足を大きくしようとするという。〔231〕

すなわち、『秋瑾女士伝』の結末において、武田泰淳は中国近代史上最初の女兵士兼作家である謝氷瑩に関するエピソードを挿入している。確かに、纏足嫌いのほかに、気が強く民族、国家を愛して、しかも死をものともせず革命運動や戦闘等に参加するという点において、二人の中国人女性性は性質が共通している。もしも秋瑾が武田のイメージする中国女傑に最適する歴史人物というならば、謝氷瑩はとりもなおさず武田に一番強烈な印象を与えた中国の女性友人と言っても過言ではない。それを説明するために、武田と謝女士の深い絆を取り上げておかねばならない。

「廬州風景」が発表された一九四七年十一月に、武田の随筆「謝氷瑩事件」も『中国文学』の誌上に掲載された。武田の記述によると、彼が謝女士に「アパートを紹介して、彼女とその夫に日本語を教えたが、女士は「満州国皇帝」溥儀の「来朝」を歓迎に行かなかったことに因んだ「満州国皇帝暗殺」の疑いで特高刑事に逮捕された。それに連座して、それまで何回も左翼運動に関与した武田も五回目に拘留されることになった。同事件について武田は「禁欲の青春」（小説現代）、一九六八年七月、「わが思索わが風土」（朝日新聞）、一九七一年三月十五、十九日）などのエッセイにおいても繰り返し言及している。

五回目は、謝氷瑩女士（北伐軍に女兵として参加した人）の下宿の世話などして、偽満洲国皇帝の来日のさいに検挙された。中国留学生たちが、中目黒の寺へ遊びにくるし、私の方でも彼らといっしょに海水浴をしたり、中国語の演劇に声援したりしていたから、にらまれ、何かの重大犯人とまちがえられたにすぎない。〔231〕

女兵士として北伐軍に参加したS女士もきた。（中略）S女士はコミュニストではなく、福建独立運動の失敗のあと、自然科学者の夫といっしょに来日しただけだ。彼女が大金を所持していたため、彼女にアパートを世話した私までが検挙された。〔234〕

つまるところ、以上の引用から「謝氷瑩事件」が武田泰淳に及ぼした影響の大きさが垣間見られよう。一方で、召集前の執筆と思われたが、一九七五年四月の『文芸展望』第九号に発表された戯曲「月明、笛と風がきこえる」のなかで、武田は謝女士の面影を「葉さん」という中国女性の登場人物に投射した。それに第一幕「湖南の風」の結末部分の注において、武田は以下のように明記している。

さらに重要なのは、謝氷瑩女士の印象が、葉さんの挙動にいりまじっていることである。謝さんは、われわれ三人（武田泰淳、竹内好、岡崎俊夫を指す、筆者注）の友人であるが、私とは、つきあいがあつた。彼女に下宿を世話してやったおかげで、私は目黒署につかまつた。湖南省出身の彼女は、北伐軍にも従軍し、女の兵隊として有名であつた。粗暴と思われるくらい活発で、何事も無造作にやつてのけた。やがては「湖南の風」という作品を書きたいといつていた。私が、この戯曲に、風の音を使いたがったのは、その影響かもしれない。^[25]

即ち、武田泰淳と特に「つきあいがあつた」、「粗暴と思われるくらい活発で、何事も無造作にやつてのけた」謝氷瑩の「印象」は葉さんに重なり合つたうえに、この戯曲のタイトルやテーマまで謝の文学的発想に触発されたものである。以上の「印象」は「謝氷瑩事件」における「しなした女らしさが足りないだけで、活発な身ぶりや、大きな眼には野性のみちていて、いかにも元気が良かった」という記述と一致している。そのうえで、「活発で」「無造作」で、「野性のみちていて」「元気が良い」謝氷瑩のイメージは戯曲にある葉さんだけでなく、小説「廬州風景」に登場する楊さんの姿にも共通するところが多い。一方において、謝氷瑩は『在日本獄中』（『日本の牢獄にいる』、筆者訳、西安華北新聞出版社出版部、一九四三年一月）などの文章において投獄された経験Ⅱ「謝氷瑩事件」を回顧している。とりわけ『在日本獄中』のなかで、看守の罵声を浴びた謝氷瑩が武田らにも聞こえるように、中国語で大声で罵ろうと思つたエピソードがある^[26]。謝氷瑩自身が知っているかどうかはわかるはずがないが、彼女の罵声は武田にとって既に忘れがたい響きになったのである。謝の回想と呼応しているように、武田は謝の罵声について「謝氷瑩事件」のなかでこのように追憶している。

拘留中の男たちはいずれもこの中国女性を面白い犯人として注目していた。ある日、スリで入っている二

十歳ばかりの男が、便所のかえりに女士の房の前にたち、着物のスソをまくって醜物をあらわして女士をからかった事があった。すると女士はたちまち大声を發して、非常な勢いで相手を罵った。その罵り方がいかにも自然で、絶対的で、聴いている私まで、精氣と勇氣が湧きあがってくるのをおぼえた。独立し、反抗することに慣れている中国女性の怒りにみちた罵言は、ああした醜悪な、濁り澱んだ空気の中では、ことに清風にも似て効果的であった。^[237]

要するに、獄中にいる武田泰淳にとって謝女士の「自然で」「絶対的」な「罵り方」や、「独立」性や「反抗」性を帯びる「罵言」は、人に「精氣と勇氣」を与える新風のような存在だった。そして、以上の場面は武田の脳裏に焼き付いたまま、一九五八年發表された「地下室の女神」において再び取り扱われた。それゆえに、烏の群に向かつて楊さんが吐いた「ひどい罵りの言葉」や、肉屋にいる豪傑風の青年に対する彼女の「おそろしい」「威力」を持つ「罵り」や「叱り」は、恐らく同時期の「謝氷瑩事件」において取り上げられた謝女士の「罵言」と無縁ではないであろう。よって、この「罵言」に対する獄中の武田の感心は、自ずと視点人物である日本人看護婦水野雪江¹¹「私」の「好きだった」心持ちに転化したのである。

にもかかわらず、その事件以降ついに再会することができなかった武田泰淳と謝氷瑩は、実は盧溝橋事件の勃発によって再度結ばれたように思える。前述したように、武田は一九三七年十月に召集されて不本意ながら一輻重兵として中国の華南戦場へ赴いて、上海、杭州、南京、廬州（合肥）、廬山などを転々と駆け回っていたが、なにかんづく本作の舞台となった廬州で彼は野戦予備病院に勤務していたのである。それに対して、女兵士だった謝氷瑩は日本で投獄されたこともあって、前線に身を投じようと健気に決心し、四日間で「湖南婦女服務団」を組織して、九月中旬より廬州にいた武田と同じように野戦病院で負傷兵の救助や看病を主な仕事としていた^[238]。そういうところは偶然にも楊さんの身分設定に合致している。当時野戦病院や戦闘の光景は「在野戦病院」（「野戦病院にて」、筆者訳）、「葉県之夜」（「葉県の夜」、筆者訳）等の文章に書き残されたが、これらの文章は後に『氷瑩抗戦文選集』に組み込まれて、一九四一年十月に建国出版社によって刊行された。それ以外に、謝は『第五戦区巡礼』（『第五戦区の巡礼』、筆者訳、桂林出版社、一九三七年九月）、『在火線上』（『火線にて』、筆者訳、漢口民族解放社、一九三七年十一月）、『新従軍日記』（上海天馬出版社、一九三八年七月）、『戦士の手』（『戦士の手』、筆者訳、重慶独立出版社、一九三九年四月）などのルポルタージュを相次いで發表していた。興味深いことに、「侵略者」だった武田の比較的淡淡たる綴り方に反して、「被侵略者」謝氷瑩の筆致

はいかにも率直かつ激昂的で血なまぐさいと言わざるを得ない。それは「廬州風景」の作中人物を借りて言えば、あたかも鳥の大群を日常的な一風景ととらえる「私」と、それに向かつて「はげしい感情の表現」をする楊さんが織りなすコントラストのようである。

また、武田泰淳が「土民の顔」や「廬州風景」のなかで何度も取り上げた安徽省の「土民」について、謝氷瑩は以下のように描出している。まずは『戦士的手』に収録された「正陽関に逃亡した子供」、(謝氷瑩 筆者訳)の結末を引用しておく。

正陽関を思い出すたびに、その話し上手で、表情豊かで利口な子供たちに言及するに決まっている。(彼らは)中華民族の偉大なる精神の代表者なのだ。いつになっても、彼等は絶対に屈服しないと信じている。たとえ敵に拉致されるとしても、彼等は従順に敵国の「良民」になることなく、一丸となってこの凶暴なる日本帝国主義に反抗するに相違ない。(筆者訳) [239]

正陽関は安徽省の寿县に位置するが、川西政明氏の調査により武田は五月から六月にかけて寿县へ進軍する途中で、二回の「殺人事件を体験したらしい」[240]。というのは、武田泰淳が「殺人」したかもしれない同じ場所において、謝氷瑩は逃亡した子供たちを代表とする「土民」からの反抗を予想している。それに加えて、「漢奸の息子——紀念一個英勇孩子的死」「漢奸の息子——ある勇敢な子供の死を偲ぶ」、筆者訳、『戦士的手』所収)の末尾において、安徽省無為市の李海泉という十三歳の男の子は「日本鬼を殺し尽くせ!漢奸を殺し尽くせ!中華民族万歳!」(筆者訳)と叫びながら日本軍に銃殺された場面がある[241]。このルポルターージュが書かれたのは一九三八年三月二十五日だが、ちょうど武田が安徽省を進軍する直前である。同じ安徽省の戦場にて武田泰淳と謝氷瑩という敵対する陣営に属する二人の作家はすれ違ったものの、相似する戦場の風景を共有していることは疑えない。だからこそ、表向きに野戦予備病院で日本軍に協力しているが、「馮玉祥の故郷」、つまり「抗日が一番ひどいところ」安徽省巢県生れの楊さんが密偵であるおそれがある設定の変更も不思議ではないどころか、中国研究者としての武田泰淳の賢明さのあらわれと言ってよからう。そういう変更点に対して、石崎等氏は「廬州風景」がそれまでの宣撫小説と異なり、戦後の言論自由を背景に「楊さん」は宣撫的立場から好奇の眼に晒されることも、また抗日運動の女性として英雄視されることもなく、一人の人間として描かれている」と鋭く指摘している[242]。言うまでもなく、もう一つ看過してはならないのは、謝氷瑩を代表とする身

を持つて前線に駆けつけた愛国・革命的な中国人女性が武田泰淳の胸に残した風貌が密偵設定の背後に稼働していることである。武田泰淳が謝氷瑩の抗日に関する文章を読んでいるかどうかは未だに判明していないが、戦後まで戦争に関してほとんど緘黙を守ってきた武田に反して、謝氷瑩の豊作期は確かに中日戦争の戦時下である。したがって、戦線でも旺盛な読書習慣を保持していた武田はそれを知らないはずがない。

三、女性視点・脱女性化——脱構築の試み

謝氷瑩は『従軍日記』で持て囃されて、日記・散文体に長ずる作家として知れ渡るが、定稿「廬州風景」も日本人看護婦の手記という形で彼女の第一人称の視点から語られている。しかも既述したように、それは「廬州風景」の改稿において非常に重要な変更点である。石崎等氏も打ち出したように、「廬州風景」には極力戦争のイデオロギー性は抑圧されており、そうした原理から最も遠い場所に位置している^[23]が^[24]、この効果の達成には戦後の言論自由という事の他に、「人を殺す」男性の輻重兵から「人を救う」女性の看護婦へという視点人物の性別・身分転換が最も有効に機能していると思われる。前節で既述したとおり、例えば、火野葦平の「兵隊三部作」や上野広「黄塵」を含めての石川達三にまつわる筆禍事件後の戦地文学は、現地の中国人イメージの不在、戦時下性暴力の不可視化、中国人女性の脱思想化・形骸化・簡略化の傾向にある。その原因に軍部の統制がある一方で、中国人女性に対する男性兵隊作家の皮相的視点に内在するひずみもあげねばならない。武田泰淳が「内地から送られる雑誌の類の中から支那人を書いた日本作家の小説はないかと眼を皿のようにして探し」て、「上田広の「黄塵」や小田嶽夫の「漂泊の魯迅」など、支那人の事が書いてあるというだけで夢中になって読」んだのは、「支那人というものを対象として果たして日本人の智慧や感情が、どんな具合にどの程度に働くものか知りたかった」からである^[25]。それゆえ、上田広の「黄塵」ばかりか、火野葦平の「花と兵隊」も愛読した^[26]武田泰淳はむしろそれらの小説の致命的な欠陥を察知すればこそ、表現が自由にできる時期の到来を待つ一方で、いつそもともと輻重兵の男性視点を看護婦の女性視点に変更したのではないか。そういう日本人女性／中国人女性の構図で戦時性暴力の問題は自ずと解決されたうえに、リアルで立体的な中国女性イメージも語り手或は視点人物の男性性により他者化されることなく完成できるのである。言い換えると、戦闘員の日本人男性／非戦闘員の中国人女性Ⅱ征服／被征服という対立構図におけるジェンダー・身分による権力関係の非対称性は一部解消されることになる。

一方において、前述したように楊さん像は謝氷瑩の面影を彷彿とさせるが、武田は「謝氷瑩事件」において

謝の性質を「しなしなした女らしさが無い」と表現している。それに対して、楊さんの「女らしさが無い」或は欠けているところは日本人女性である「私」の目線によってこそ再定義、再構築されるのである。例えば前に引用したように、森医官を頑なに拒絶した楊さんの「気の強い」姿勢を「私」は「たのもしい」と思うところがある。それに、楊さんの「野性にみちた」「強い感情」、「あたりまえの生き生きした日常」を「私」は「女らしい」と見たうえで、「鳥の群に激怒するさまを私は好きだった」ところも挙げられる。また、お酒を「水のように造作なく飲む」だ楊さんが「えらい」と「私」が感服したりした場面である。ジェンダーをめぐる儒教伝統に根ざした中日における一般的な社会通念からみると、以上列挙した楊さんの言行はいずれも「良妻賢母」のイメージから逸脱した、一般人の輦轡を買いがちなものだろう。あらゆる意味での占領や征服に慣れた兵隊どころか、普通の男性目線で見ても、恐らくそうした楊さんの「反骨」性質は謝氷瑩の性格と同じように、既成観念においての従順という「女性性」から脱却した「男性的」なものである。そのため、性差や支配を前提としない水野雪江の視点でクローズアップされ、顕在化した楊さんの性格は水野に欠ける生命力の横溢をしっかりと備えているからこそ、水野により従来の定義を転覆したような「女らし」さとして再構築されて好かれたと考えられよう。「廬州風景」を同系列にある戦場の記憶を振り返った小説「細菌のいる風景」(『改造文芸』一九五〇年一月)と対照してみたら、輻重兵である「私」の男性視点で描かれた後者においては、重要人物としての中国人女性が登場していないことがわかる。その対比によって中国人の描き方にこだわる武田の配慮はひとしお明らかになった。一口に言う、武田泰淳は日本側の男性兵士の視点を女性看護婦の視点に転換する女性化する、つまり日本側の視点人物を「弱く」と同時に、中国側の女性を逞しくしたりする。脱女性化する、つまり他者・客体を「強く」することにより、従来の戦争文学における「語る」・「見る」日本男性／「語られる」・「見られる」中国女性の二項対立の構図や、それに内在する重層的な非対称性を解消しようとした工夫が伺える。そうした脱構築の試みによって、日本の男性作家である武田泰淳と彼が描き出した中国人女性との間にある程度のバランスが取れている。したがって、二回の改稿を経て築き上げた戦場の「風景」のなかで、中国人女性「楊さん」は初めて自由を獲得することができたのである。

むすびに

いよいよ、赤紙が来た。留学生の祖国を侵略する輻重兵二等兵として、私は出発する。中国、中国人、中国文芸を愛すると自称していた私の、「愛」はニセモノだったのか。(中略)お前はそれでも人間を愛

していると言えるのか。しかもモト坊主だと言うのに。中国人は、一切衆生のなかにふくまれていないつもりなのか。だが二等兵はトラックに乗り小舟に乗り、進軍する。[246]

以上は「わが思索わが風土」(『朝日新聞』、一九七一年三月十五日〜十九日)におけるやや長い章段だが、召集された当時の中国への愛情を問われた武田泰淳の、自己懐疑に陥って苛まれた心情に関する真摯な述懐としてあえて引用しておく。一九三九年やつと召集解除になった武田は、「廬州風景」の初稿を一時棚上げして、日本人看護婦の視点を取り入れるとともに、戦地の中国人女性楊さんを重要人物に格上げした定稿をようやく一九四七年十一月に発表した。それと同時に、武田は己に強烈な印象を残した女兵士との関わりを顧みる「謝氷瑩事件」を『中国文学』(第一〇一号、一九四七年十一月)に投稿したのである。十三妹を代表とする武田泰淳が愛読する中国古典文学にある侠女像、武田が敬服する革命に殉じた女傑秋瑾や、彼が忘れがたい友人謝氷瑩の潇洒とした風姿は、そのまま楊さんの造形に投影されたと思われる。

さらに、「廬州風景」の掛け替えのない独自性はそれまでの戦地文学に比べると以下のようである。まず、楊さんを代表とする戦時下の中国人女性の強靱な有り様を「脱女性化」の手法で「強化」して描出したのに対して、女性視点で女性を「見る」、「語る」という方法を借りて日本人の語り手視点人物を「女性化」して、つまり男性の視点人物(特に兵隊の場合)にありがちな鋭気を「弱化」しようとしたうえに、女性の／的視点からジェンダーの既成観念へのアンチテーゼとして「男性性」を「女性性」に置換したのである。それにより、日本戦争文学に定着したかのように見える日本兵隊(視点人物)／中国人女性(登場人物)の構図に内在する対立性、衝突性が緩和されて、ひいてはそこにある権力関係の非対称性はある程度まで調和したと思われる。つまり、武田泰淳は日本人男性作家の書いた中国人女性イメージの新しい地平を切り開くことに成功したと言える。それから、「廬州風景」の試みを経て、武田は続いて「聖女侠女」、それに「女の国籍」等の作品においても女性の第一人称を活用している。もちろん、戦後の言論自由も楊さんイメージの立体的造形に大いに寄与したであろうことは言うに及ばない。

ただし、武田と同様に戦後いち早く「肉体文学」に手を染めた田村泰次郎の「肉体の悪魔」とを比較すると、日本人看護婦の語った密偵かもしれない「楊さん」と、日本人兵士の独りよがりの目線のみたスパイ容疑者「張沢民」には質的な差異が顕著であることは否めない。その背後に、日本人男性／中国人女性の対立構図に向ける中国文学研究者武田泰淳の工夫や苦心が見過ごせない。武田泰淳は「廬州風景」においてジェンダーを「攪

乱」することにより男性／女性という一重の二項対立を主に解消しようとしたが、そうした「攪乱」がその後
の作品のなかでいかに実践されていくのか、また武田に残された一つの課題、即ち日本人／中国人の対立
という難題がどのように解決されていくのか、それらの疑問を説明するために武田泰淳の「上海もの」を待た
ねばならない。

第四章 「新女性」・Shanghai・〈脱構築〉——居留者の回想と展望

盧溝橋事件の四年後、一九四一年十二月に勃発した「太平洋戦争」は上海において絡み合う力関係を変えたとともに、所謂「中日提携」の類の名目により日本の知識人或は文化人を上海に招致することになった。それを背景に、既に中国の従軍体験を持つ武田泰淳は中日文化協会にとめるために、またかつて進軍していた土地に足を運んだのである。武田とほぼ同時期に上海に滞在した文学者に、過去旅行者として北京の「美し」と「不穏」さをともに満喫してきた阿部知二がいた。中国に対する親しみを共有するこの二人の男性作家が各自の上海体験を追憶して戦後書き上げた〈上海もの〉における中国人女性イメージやその独自性を、本章は検討していきたい。

第一節 阿部知二の〈上海もの〉における「新女性」——関露・田村俊子との関連性を手がかりに はじめに

戦時下の短編小説「北平の女」(『文学界』、一九三七年五月)や「王家の鏡」(『改造支那事変増刊号』、一九三七年十月)、長編『北京』(第一書房、一九三八年四月)その他の〈北京もの〉に引き続き、阿部知二は戦後早々「新浪人伝」(『週刊朝日』、一九四五年九月二十三日)と一九四六年二月二十四日、後に「大河」と改題される新潮社刊『大河』に収録される)、「緑衣」(『新潮』、一九四六年一月)、「陸軍宿舎」(『改造』、一九四六年三月)や「花影」(『文学界』、一九四九年六月)などの〈上海もの〉を矢継ぎ早に発表してきたのである。以上列挙した作品の創作背景に、一九四三年の秋から一九四四年二月までの一回目の上海滞在や、一九四四年九月から一九四五年四月までセント・ジョーンズ大学の講師としての二回目の上海居留生活がある¹⁵⁰⁾。そういう作品群のなかで、「大河」と「緑衣」で共に登場するヒロイン「李帽」と、この両作の中で点景人物に過ぎないが「陸軍宿舎」において前面に押し出されている「曹小姐」とは、阿部が力点をおいて描出した二人の中国女性だと言える。

李帽の人物像について、竹松良明氏は彼女を「戦争の苦しみ」に「鍛え」られた「新生中国の可能性を予感させる女優」と捉えている¹⁵¹⁾。なお、小川直美氏は李帽を「矛盾に満ちた謎の多い存在」として、その「変貌の契機」が見当たらないと主張している¹⁵²⁾。一方において、中国研究者徐静波氏は李帽を代表とする「上海の新しい女性」が「近代社会の人間の自覚性を持ち始め」と同時に、身をもって社会参画に取り組もうとしたと論述している¹⁵³⁾。そのうえで、徐氏は李帽も曹小姐も「裕福な家庭の出身で」ありながら「浅薄なモダンガ

「ル」ではなくて、「内心が祖国や民衆に自分の身をささげようという情熱に燃えている」「近代女性」だと結論づけている[257]。しかしながら、テクストが明らかに相互関連している「大河」、「緑衣」や「陸軍宿舎」と、もう一つの（上海もの）に数えられる「花影」との接点は未だに判明していない。さて、本論は先行研究を踏まえながら、「緑衣」における李岬と「陸軍宿舎」の曹小姐に着目して、テクスト分析の方法で激動する時代に巻き込まれた二人の中国女性イメージを主にジェンダー・スターデイズの視座より捉え返してみる。それと同時に、そういう中国女性像と「花影」のヒロインである田村俊子との関連性をも解明しておく。

一、「緑衣」における李岬

1、日本遊学時代の沈明華

「緑衣」の主人公松原遵二郎はその手記において、日本遊学時代の少女だった沈明華に関して以下のように回想している。

沈がわざわざ海を渡って東京のそんなところに来ていたというのも気紛れだ。二人の兄についてモスクワに行くのと両親に駄々をこね、それが許されぬからといって伯父を頼って東京に来たというのも深い目的があつてのことではなかったのは、沈がこないだも自白したとおりだ。（中略）さてその時に「西安事件」がおこり、「支那事変」がおこったが、それらも天地と人間界との気紛れによるものだったろうか。しかし沈は大真面目だった。西安事件の報道された日には泣くような眼をしていた。支那事変がはじまった時に俺に別れを告げに講義の後に来た時には怒りに燃える眼をしていた。（中略）ダンスに誘ったのも沈だった。あの時俺が「病氣の家内のことが気にかかるから。」と断つたというその文句もじつは俺はこないだ忘れていた。

それにくわえて、松原が沈の住所で写真を見た場面に、彼女が「十五の時、北京の西郊」に住んだことがあるという情報が出てきている。興味深いことに、以上のとおり遊学時代までのヒロインに関する人物設定の要素のほとんどは、阿部が盧溝橋事件勃発直後の一九三七年十月に雑誌「婦人画報」に発表したエッセイ「支那女性グリーンプス」に見出すことができる。

一人はC嬢。(中略)ある日逢ったときこのC嬢が珍しく感情をあらわして焦々としていた。それは忘れもしない、あの西安事件の時のことであつた。『妾はもう三日も一睡もしないで、蔣委員長のことを心配し、妾の国のことを心配しているのです』と彼女は声を慄わせた。(中略)その時の彼女の顔色のただならぬ色は今でもはつきり思い出せる。

今一人はL嬢。これは北平の西南郊に家があつた。(中略)父は鉄道の大官であつたが、(中略)東京にきて、在留中国学生の素人劇団に加わつていた。いつかこの人が私に、妾は日本に来る気じやなかつた。兄はいまモスクワの大学に行きたがつて、父と争つてゐるが、妾も兄と一緒にモスクワに行きたいのだけれど、――と昂然としていつた。そうかとおもうと、パパがいま帝国ホテルに来てゐるからねだりに行くんだ、といたり、私にダンスをしないかと誘つたり――私は無論辞退したが――若い支那学生と銀座を歩いたりしてゐた。しかし、彼女の思想はコミュニズムだと言ふのである。

L嬢が、いまだんな気持で日本に対してゐるかは分りすぎるほど分る。だが、あの弱々しいC嬢の蒼白い頬が西安事件で燃えたことをおもうと、いまはどんなタイプの人も、ある一つの興奮と敵愾心に燃えてゐるだらう。^[252]

以上のやや長い引用から、西安事件のため「大真面目」になつて「泣くような眼」をしたり、兄に追隨してモスクワに行きたがつたが親に拒否され不本意ながら東京に来た沈明華の造型に、「C嬢」と「L嬢」は大きな影を落としたことがわかる。なお、「怒りに燃える」沈の目は、ほかでもなく阿部知二が「支那女性グリーンプス」で予想してゐた中国人全体の胸に燃えてゐる「一つの興奮と敵愾心」と呼応してゐるのである。ちなみに、「L嬢」は「緑衣」に先立つて既に阿部の『北京』のなかでコミュニズムに傾倒する「少女」として「王子明」に関連するエピソードに出ているが、彼女との結婚をきっかけにもともと「親日」と「抗日」の間に躊躇してゐた中国知識人「王」の思想は左傾するようになったのである^[253]。そういうところから、L嬢は『北京』と「緑衣」を接合させてゐるような一つの共通点として浮上してきた一方、阿部がこの実在の中国女性から受けた印象の強烈さをも伺えよう。それゆえに、阿部は『北京』におけるコミュニストの「少女」に引き続き、L嬢の思想的傾向をある程度まで再び「緑衣」のヒロインに付与してゐるのである。

要するに、L嬢とC嬢をモデルにした日本遊学時代の沈明華は、もはや愛国心、義烈や勇敢の持ち主だと言つてよからう。それは一つの伏線として後に女優李媚の演技力の開花や、彼女の社会運動参画及び革命への傾

斜を予告していると考えられる。

2、沈明華から李帽へ

「私」と初対面した時に、「体のすべてが、じっとしている時にさえも、艶な情をたたえてゆらめきうごいて立たぬ装いと化粧」している極素朴な一面がある。「眼立たぬように化粧し灰色の外套を着ている」という松原の日記もそれを裏打ちしている。そういった沈の行為から、上海を席卷したインフレーションを背景とする経済的自粛、それに時間の無駄遣いを避けようとする心理や、化粧により増強される女性的魅力に対する弱意識が読み取れるのではないか。さらに、東京の「在留中国学生の素人劇団に加わった経験をもつL嬢と重ね合わせるように、上海の素人劇団のメンバーとして沈は演劇で「得た金はすべて歳末の難民への贈物にし」ようと考えて劇場を借りるために奔走していた。それと、「婆さんみたいな癖」とからかわれるほど慣れた乞食への施与等の行為より、ヒロインのヒューマニズムのほかに、かつて「モスクワに行こうとした沈の思想にある、社会や大衆に貢献しようとするコミュニズムの一端が垣間見られよう。

一方、ヒロインが沈明華から李帽への「転生」について、その「変貌の契機」を「作中からは読み取ることができない」^[254]という小川直美氏の主張に対し、徐静波氏は「柔媚に見える沈自身は、その内面にもともと李帽のような強靱さと屈しない気質が含まれる」^[255]と指摘している。筆者は後者の意見に一応頷けるが、補足しようと思うものがある。松原の推測では、「李帽の変化が、あの公寓のまつ暗な階段の時におこった」のである。

階段は真暗で、軋んだ。そこで、俺によりかかってきた女は、そのまま俺の腕のなかに崩れてしまった。あののようにやわらかな骨がひとつもないような体を、――あのようになるがるとしてしかも奈落の底までも引きこもうとするような力を有った体を、俺はまだ知らなかった。あのようにつめたく、しかも俺を燃えるように熱くさせる力を有った体を、まだ知らなかった。

即ち、真暗な階段でそれまで松原に頼りがちなヒロインはもはや消え失せてしまった。健気な決心や燃え上がるある種の闘志は、彼女を一層強靱にさせたのである。だが、ヒロインの覚醒を促したものは一体何であるのか。ヒロインは二人の兄が「重慶軍の飛行士になり、ともに戦死してしま」い、他の一人は行方不明になっ

たうえに、「重慶の役人をしていゝ」父までも「亡くなった」といふ。それゆゑに、「病身」の母と「小さな妹と二人困つていゝ」るのである。というわけで、ヒロインに相次いで降りかかつてきた非運は彼女にどれほどの悲哀や重圧を背負わせるかは容易に推し量れるが、彼女の家族を離ればなれにさせ、彼女を苦しめてきたのは根本的にいうと戦争以外のなものでもない。だからこそ、愚園路の住所に戻ってきたらヒロインは「いつもくなく真剣な眼でみつめながら」、桧原に「永いこと放浪したけれども、もう動かないつもりだわ。――すくなくとも平和が来るまで。――」と打ち明けたうえで、「平和はいつ来るのでしょうか」、「平和――いつくるかしら」と二度と呟いたのであろう。そのうえで、「過去を全部忘れる」といふのは、殉国した兄たちに引換えて、「放浪し」たりして平和の実現に何一つ寄与できなかった過去の自分を切り捨てることを意味している。こうして、過去の無為への痛恨、家族の逝去による悲哀、「子供みたいな時から」続いてきた戦争に対する憎悪と、平和が「待ち遠しい」心持ちとは緇交ぜになり、ヒロインを平和のために力を尽くそうとする堅牢な信念・意志に覚醒させることになった。さらに、沈明華の演技力を「なにかの目的に向つてつきすすんで行つていゝうな、犯しがたい力がこもつていゝ」ものに昇華させ、彼女を「柔媚さには鋭い神経が、艶めかしさには悲哀の気分が、明るさには力が、駄々っ子のような放埒さには不逞な意志が加わつた」李媚に転生させることになった。換言すると、ヒロインの「柔媚」、「艶めかしさ」や「駄々っ子」など所謂伝統的な「女性性」に「鋭い神経」、「力」や「不逞な意志」といふ「男性性」が付け加えられる、つまり「女らしさ」と「男らしさ」が融合するようになった。

もつと掘り下げて考えると、ヒロインは「柔媚」・「艶めかしさ」・「駄々っ子」|| 静止的な「内在（性）」（*immanence*）を表象する「女性性」に對置される、「鋭い神経」・「力」・「不逞な意志」|| 運動的な「超越（性）」（*transcendence*）^[256] || 「男性性」を獲得することになった。沈明華から李媚へのヒロインの「変化」は「両性具有」（*androgyny*）の理論や方法を想起させずにはおかない。生物学的に「両性具有」は字義どおり同じ生物の個体において男性性器と女性性器を併せ持つということだが、心理学において、それは同じ個体に顕著な男性的特質と女性的特質がともにある、即ち例えば「逞しさ」と「優しさ」、「果敢」と「細心」などの性質を兼ね備えることを意味する。この概念は最初に心理学者カール・ユングに確立されてから、イギリスの女性作家バージニア・ウルフの論著『自分自身の部屋』（原題“*A Room of One's Own*”）を通してジェンダー研究に導入されたと見なされてきた。ウルフが述べたように、作家は女性を「男性化」する、または男性を「女性化」すること成功してはじめてバイヤスを乗り越えて創作することができる。したがって、「両性具有」の方法は男性（性）

／女性（性）というジェンダー構造における二項対立に対する最初の脱構築の試みと思われてきた^[25]。それと呼応するように、阿部知二はエッセイ「フェミニズムについて」（『新潮』、一九五三年十月、十一月、後に評論集『現代の文学』に所収）において、西欧文学にある「男性的様式と女性的様式との「対立」」が「緊密な相互依存なもの」であり、「一人一人の西欧の男や女の中に、混沌と入りみだれて闘い合っていたもの」だと考えている^[26]。すると、上述したような「緑衣」のヒロインの性格は文学的コンテクストにおいて「両性具有」という創作方法の実践そのものになったと言えよう。ひいては、それはある程度で従来の日本男性の既成作家の塑像してきた中国女性像に珍しく見受けられる、「女性性」と「男性性」の二項対立に対してなされた一種の脱構築の試みではあるまいか。

3、社会進出・革命への傾斜

既述したとおり、L嬢を一人のモデルにしたヒロインの思想はコミニズム的性格を持つている。それから、演技力の飛躍的な向上とともに、ヒロインは社会運動に参画する決意や革命に必要な（超越（性））に目覚めることになった。淪陥下の上海で書籍・思想・言論などありとあらゆる文化が嚴重に統制されるなか、数多くの進歩的劇団は「借古諷今」の手法で話劇を創作したことにより、当時の中国民衆に民族意識を喚起しようとしたのである。「緑衣」に取り上げられた歴史劇「文天祥」はちょうどその一好例である。一方において、「弟たちを殺した北方軍閥を呪って革命家になろうと家を出奔する」富家の娘にせよ、「革命の烈女秋瑾」にせよ、ヒロインの役柄のほとんどは革命女性である。そういう革命女性に扮する過程で、ヒロインは単純なパフォーマンズから精神・思想的に次第に彼女らに接近し、ないしアイデンティファイするに及んだと思われる。従って、ヒロインも一方において話劇舞台を活用し、迫力のある演技をもってより多くの大衆を魅了し鼓舞して、革命の精神を広めようとするという割り出せよう。さらに、李帽の新生に伴ってその演技には「火が燃え」るようになったのである。

何か火が燃えついてきているのだ。からみついてきて、しまいには臍腑のなかまでも沁みこんでくるような、なまなまましい肉感が、紅衣をつけた彼女の体から、火花のように飛び散ってくる。（中略）李帽には、ただあまつたりの欲情の火が燃えているのではなく、その底には、何かしらせつまつたような烈しい気がちららついているらしい。（中略）——これは、あの闇の段階で燃え出したものなのだ。

奇妙な熱気はこの夜も李帽に燃えつづけている。その変生が一時的のものでないとみななければならぬ。

その「火」の正体はまさに「あの闇の段階」で燃やされた、平和の実現に向けるヒロインの社会進出の決心及び革命の意志・闘志であろう。彼女はその後范士傑に心を寄せるようになるのも、彼のなかで燃え上がっている革命の炎に精神的共鳴を覚えたからと想像に難くない。だからこそ「スキヤンダル事件」の後以下のようなエピソードがある。

「胸に火がある人だね。」俺はそんなことを気障でもかまわぬと思っただけでいいつづけた。「夢をみることできる人だね。運命の人だね。」（中略）「ええ、あたしの内部にもあの人を見た時に火が燃え出したのです。あたしたちは、一緒に燃えて、灰になってしまいうまで燃えなければならぬんじゃないかしら。」（中略）「ありがとう、先生。あたしも秋瑾は好きだわ。——でも、徐錫林も秋瑾も、燃えて灰になったわ。——ああ、あたし、秋瑾の芝居を誰かに書いてもらおうわ。」とますます泣き出した。これは、范と彼女自身のことを、二人の革命家の運命にむすびつけていたのにちがいはなかった。

「胸に火がある」范士傑を「見た時に」その内部にも「火が燃え出し」たヒロインは、自分と范のことを当たり前のように熾烈な信念の炎に「燃えて灰になった」革命同士徐錫林と秋瑾の運命に「むすびつけていた」のである。要するに、平和の一日も早い到来のために、ヒロインは舞台を自分なりの戦場として、話劇という武器で人心を鼓舞し、革命精神を伝えつづけようとしつつ、社会進出及び社会運動の参画を介する自己実現の道を模索している。

二、「新女性」イメージと関露との関わり

「緑衣」において「時代が変るまで」「学校をやめて芝居を」と宣言していた曹小姐は、李帽と同じようにブルジョア出身の女性である。李帽の同劇団で舞台装置を担当する曹は、「陸軍宿舎」でも「白粉気ひとつなかつた」顔をしている、「無造作だった」髪に「質素な服装だった」「ほっそりとした小柄の娘さん」である^[259]。「三十歳にもみえた」が、S・T女史の話によると、曹は「北京語がすばらしく、英語もうま」くて、しかも「江西省の赤色地区に飛び出したこともある」^[260]。しかしながら、ある日、街角の「泥色にむくん

だ行倒れの死体」[26]を目の当たりにしたのをきっかけに、裕福な生活を捨て去り、国民党軍の野戦病院へ特志看護婦として働きに行ったようである。

ここで二人の実在する女性作家の名前が浮かび上がってきたが、まずはS・T女史Ⅱ佐藤俊子（田村俊子、以下は俊子と呼ぶ）である。「陸軍宿舎」の地の文も彼女の情報について以下のように紹介している。

ちょうどその一年前、十九年の冬、私が無目的で放縦な上海滞留を切上げてかえる二十日ほど前、ある日S・T女史が曹小姐をつれてキャセイ・マンションズを訪ねてきた。（S・T女史とは、かなり年老いた日本の女流作家である。米国にいたこともあり、もう十年も前から北京上海にすまっている孤独な老人である。そのころは有志の援助によって、華語の婦人雑誌を上海で発行していた。したがって幾人かの中国の女流作家や女優や画家などを知っており、私を映画女優の陳燕々に紹介してくれたこともあり。）――
――終戦直後、S・T女史は上海の客舎で急死したという報を私は最近に受けた。[26]

俊子は十八年間米加に住んでいたけれども、一九三六年に一旦帰国したがまもなく、一九三八年十二月北京に渡り、その後一九四二年から上海で中国語婦人雑誌『女声』を主宰した。『女声』の刊行期間は一九四二年五月から一九四五年七月[26]までであり、ちょうど阿部知二の二回の上海滞在期とパラレルである。前述した阿部の「上海もの」の一つに数えられる「花影」は、取りもなおさず最晩年期の俊子の面影を記録したものであり、「青年時代の阿部の心に焼き付けられたであろうところの女作者俊子の華麗な印象に基づく尊敬と親愛に満ちたもの」である[26]。「花影」において、阿部は俊子の身辺にあるもう一人の女性に言及している――（俊子は）「若い中国の女性Kを助手にして、経営困難というのも愚かな「女声」を力一杯で出しつづけ、若い者に対しては俠気ある世話をしつづけた」[26]。このKはつまり俊子より二十三歳年下の、『女声』時代の俊子と一番親交を結んだ中国の女性作家関露である。

ここでひとまずテクストに戻って考えてみたら、「小柄」で三十代の中国女性で、しかも「いたずらな自分の娘をいとおしむような眼」[26]に滲み出る俊子の愛情の相手になれる人は、関露しか思い浮かべない。一九〇七年生まれの関露は一九三二年に中国共産党に入党して、上海、南京あたりで左翼劇団の話劇に出演した経歴を持って、それから一九四二年『女声』の編集兼書き手になったのである。そして、塗曉華氏の調査では、編集長としての俊子の仕事内容の一つは編集者をつれてインタビューに出かけることだが、その訪問対象の一人に

阿部知二があるという^[267]。以上引用した内容はもしかすると『女声』のインタビュー場面由来かもしれない。ところが、もし『女声』のインタビューはテクストにある昭和十九年の冬^[268]だとしたら、阿部と関露はそれより早く面識があるはずである。一九四三年十一月二十日の「大陸新報」に「日華文人懇談」というような記事がある。

中日文化協会では今回日本文報派遣で来滬した作家阿部知二（中略）の歓迎宴をかね十八日午後六時から華格縣路錦江川菜館で日華文人懇談会を行った。中国側出席者は（中略）関露女史の中国文壇十数名（中略）と日華文化の交流につき懇談を重ね盛会裡に十時散会した。^[269]

つまり、関露は唯一の女性として阿部知二とともに懇談会に参列していたことがわかる。一九四五年、関露がいくつかの困難を乗り越えてやっと延安に赴いたのだが、それについて阿部は「上海での同棲者のKという中国女性が、彼女の死後に延安に向けて奔った、といったが、そういう事からして、佐藤さんが、その末年も、ひそかに運動を支持していた、などとまで考えるのは思い過しでもあるだろう」と触れている^[270]。それに対して、呉佩珍氏は、阿部は「関露が中共の地下工作員であったことを知る由もないが、それはかえって俊子と関露との連帯関係の強さ、そして俊子の社会主義と反戦運動への共感を裏付けている」と論断している^[271]。呉氏の主張に筆者も賛同する。したがって、「陸軍宿舍」の曹が「江西省の赤色地区に飛び出したことがある」という設定は、戦後延安に駆けつけた関露の経歴を繰り上げた芸術的加工ではあるまいか。こうして、ブルジョア出身の曹小姐の思想が帯びるようになった反戦性、進歩性や先鋭性は、李帽と共通していると判断できよう。

さらに、「花影」のなかで、阿部知二は俊子が雑誌『女声』を「つとめて日本精神の宣伝を避けて、純粹に文化的なものにしよう」と努力していた^[272]と評価したことや、雑誌のインタビューを受けた経験があることから、『女声』に対してある程度の認識を有すると推定できる。さて、「華中淪陷区で刊行した時間が最も長くそして最も重要な婦女専門誌」^[273]として、『女声』のコンセプトは何であろうか。創刊号から一九四五年七月の第四巻第二号までをみると、関露の「（女性解放）評論が圧倒的に多いこと」は、既に呉佩珍氏が指摘したとおりである^[274]。もう一度テクストに戻って考えると、海関の職務に甘んじなくて、あえて興味を持つ話劇に専念しようとする李帽の姿勢は、そのまま職業上の自己決定権を握ろうとする中国近代女性の主体性意識の覚醒をあら

わしている。一方、彼女が高級マンションの支配人である曹さんの兄の好意を断り、「汚い狭い室」に引越して「ひとりの力で生きることにした」ことはその経済的独立性や能動的 정신を示唆している。そういう李媚像は取りもなおさず雑誌『女声』が期待する理想的な新女性ではあるまいか。

むすびに

一九三二年一月の第一次上海事変を背景にした横光利一の『上海』は複雑な力関係に包囲された上海像や、そこに積極的に身を投じた行動的な中国の女性黨員「芳秋蘭」を描出したことにより、それ以来都市上海をトポスにした日本文学のマイルストーンとされてきた。ところが、「芳秋蘭」が日本人の男性主人公とのメロドラマ的な恋愛に起因し、冤罪に着せられて犬死してしまうことになった展開が物足りないと思われる。それに反して、阿部知二は一九四〇年代前半の上海を舞台にした「緑衣」の冒頭近くで「日本の男と中国の女との間に恋愛が成り立つということは絵そらごとの通俗映画の筋書以外にはまず有り得ない」と、単刀直入で中日戦争を背景とする日本男性と中国女性の関係にある生まれつきの必然的な非対称性や、それによる中国女性像の崩壊を回避しようとした。

また、阿部自身の「北京もの」からみた、例えば老人となった買弁商人「王世金」に囲われる貧乏な知識女性「楊素清」や高級妓女「鴻妹」などの中国女性より、「上海もの」のヒロインは上流階層にあることもあって、経済的・精神的自立性並びに堅実な主体性を持ち続けるため、積極的な社会参画を通じて自己決定・自己実現の段階に到達できるようになった。コミュニストL嬢のイメージを彷彿とさせる「沈明華」は、「放浪し」つづけてきた過去の自分を切り捨てて、「待ち遠しい」平和に向けて行動する信念によって、革命精神を備える新女性「李媚」に生まれ変わったのである。一方において、「李媚」と同劇団で舞台装置に従事した「曹小姐」は、中国女流作家関露を一つのモデルにして塑像されたこともあって、最後に前線に駆けつけて「李媚」と異なる形で社会進出に成功し、平和のために貢献することになった。「李媚」は話劇舞台に立つ闘士になったのに対して、「曹小姐」は前線の看護婦になった。言い換えると、激動する時代や戦渦に巻き込まれたものの、この二人の中国女性性は独立な主体性・能動性、堅実なアイデンティティや積極的な行動力を持ちながら、躊躇を乗り越えてやっとなり確固たる理想と信念を獲得するようになった。

最後に、阿部知二の「上海もの」における中国女性像から看取した新女性の性格は、上海淪陥下の中国語雑誌『女声』の主旨と関与している一方、そこになされたジェンダーの既成構造に対する脱構築の試みが見逃せ

ない、即ち「李帽」イメージにある両性具有性である。それも日清戦争（甲午戦争）以降の日本男性作家の数多くが築き上げてきたステオタイプの中国女性イメージにある機械性や形骸性に対する、中国と深いゆかりのある作家阿部知二の打破だと言えよう。

第二節 武田泰淳の〈上海もの〉における「混血(的)」「女性像——」「閨姑娘」から「陸淑華」へ はじめに

阿部知二がセント・ジョーンズ大学の教鞭をとって上海に滞在していた時間軸(ことに二回目の一九四四年十月〜一九四五年三月)は、ちょうど武田泰淳が「中日文化協会」に就職するために上海に渡る時期(一九四四年六月〜一九四六年二月)と重なっている。それに、「阿部知二が「知性派ではあるけれど『北京』なんか中国ものを書いている」と、武田泰淳はその未完成の遺作である『上海の螢』のなかで触れている^[26]。武田が国際化した近代都市上海で見聞きした人物や経験した事柄は貴重な文学的材料となつて、膨大な〈上海もの〉の誕生を促すことになつた。また、そういった〈上海もの〉は武田泰淳の戦後文学の一つの主軸として確立したのである。なかならず、武田が上海にいた身近な女性をモデルにしたと思われた作品は数多く挙げられる。例えば、「才女」(『隨筆中国』第二号初出だが発行年月未詳、後に一九四七年十一月に東方書局発行の『才子佳人』に収録)、「月光都市」(『人間美学』初出、一九四八年十二月)、「聖女侠女」(『思潮』初出、一九四八)、「女の国籍」(『小説新潮』、一九五一年十月)があるが^[27]、ことに中国人女性をヒロインとして取り扱うものが圧倒的に多いと言える。

ところが、以上列举している作品に関する今までの論考は概観的に言う和不毛を呈している。そのなかで、「女の国籍」をめぐる有意義な先行研究として郭偉氏「武田泰淳「女の国籍」論」(『立命館言語文化研究』十八卷三号、立命館大学国際言語文化研究所、二〇〇七年二月)を取り上げねばならない。氏は「非革命者」(『芸』初出、一九四八年五月)の「M喫茶店の彼女」、「女の国籍」にある「陸淑華」や、「上海の螢」における「林小姐」のモデルが共に実在した画家陳抱一と日本人の妻飯塚鶴の間で生んだ「中日混血児」陳緑妮だと新たに打ち出したが^[28]、それは「女の国籍」というテクストの急所を突く重要な指摘だと筆者も賛同する。その後、郭偉氏論より十年以上の時間を経て、周晨曦氏は博士論文「武田泰淳の女性視界」(「武田泰淳の女性ホリゾン」、筆者訳)(上海外国語大学、二〇一八年)において以下のように論じている。混血児「私」||「陸淑華」は中日という二つの血統を受け継いだものの、ずっと中国人としてのアイデンティティを強く持っている。それに対して、「私」の母は中国の国籍を有するが、血筋や民族のうえでは日本人であるという国籍と民族のずれは母のアイデンティティに混乱をきたすことになつた^[29]。つまり、郭氏論より周氏がさらに一歩進んで「私」ばかりでなく、「私」の日本人である母のアイデンティティにまつわる問題をも視野に入れた点は評価すべきだと思われる。しかしながら、陳緑妮以外に、上海滞在期の武田泰淳の身近にいる中日文化協会に勤めた夏少姐

と給仕をそれぞれモデルにした「周女士」（「才女」）や「閨姑娘」（「月光都市」）に対する考察は既述したとおり稀であるため、中国人女性を主要の登場人物とした（上海もの）という意味で一直線上に置かれるべき「女の国籍」との接点や関連性についての研究はなおさらだと言わざるを得ない。だが、それは統括的な視点で武田泰淳が描いた上海女性イメージを捉え返すのに必要不可欠な作業であろう。さて、本節は上述した先行論を踏まえつつ、「月光都市」における天主教徒「閨姑娘」、「才女」にある有能な職業女性「周女士」や「女の国籍」の混血児「私」こと「陸淑華」イメージを解読することにより、三者の共通性や、それらの上海女性像と都市上海、戦争との関係性を解き明かしておく。そのうえで、武田泰淳が築き上げた上海女性イメージのオリジナリティや位置づけを試論してみたい。

一、「閨姑娘」からみた中西文化の融合と相克

武田泰淳が天主教徒「閨姑娘」を「月光都市」に登場させたのは、言うまでもなく武田自身がキリスト教に寄せる関心とは無縁ではない。戦後、武田泰淳はバイブルを読みふけていた。「わが思索わが風土」（『朝日新聞』初出、一九七一年三月十五日〜十九日）における、

日僑集中地区に追いこまれる私の前途に何があるか。『聖書』の黙示録をよむ。吹きならす天使のラッパの音につれ、あらゆる破滅、徹底的な大滅亡の予言がまざまざと語られている。¹²⁸¹

という章段からも、やけになった自分を救済しようとする武田の姿勢を伺えよう。ほかに、「懷疑と信仰」について（『人生の本』第八卷『懷疑と信仰』、文芸春秋、一九六七年六月）などエッセイのなかで武田も度々キリスト信仰に関する問題に言及しているが、ここで引用を省略する。

一方で、キリスト教と中国ひいては上海との「因縁」はどうだろうか。上海が正式に開港されたのは中国近代史の発端だったアヘン戦争直後の一八四三年だが、それに先立っての一六〇八年に、明朝の文淵閣大学士・天主教徒徐光啓はイタリア人の天主教徒郭居静を招待して、彼とともに上海の天主教を創設したのである。徐家の子孫たちはそれ以降徐光啓の遺志を継いで、天主教信仰を曲げずに生きてきた¹⁶¹。その後、徐光啓の墓地に由来して仏租界に隣接した「徐家匯」は著名なキリスト教区として、中国と西欧の文化交流に大いに寄与することになった。徐光啓や徐家匯について具体的に紹介している章段は「月光都市」にも見られる。

「やはり一度、徐光啓の墓をたしかめておかなくては」
異国の宗教を上海の街にひろめた明代の新思想家徐光啓が埋められている墓地を見ておくことが、杉にはこの際どうしても必要欠くべからざる務めのような気がしていた。大げさに言えば閩の問題やその他、何か考えを明かにする鍵がそこにしずかに横たわっているのぞみがあった。

以上は主人公「杉」と同じ職場に勤めた給仕「閩姑娘」の辞退が決定した後の杉の心理描写である。「異国の宗教」―西欧の文化を代表するキリスト教を上海に輸入したことにより中西文化の交流に貢献した徐光啓に対する思考を通じて、「閩の問題」、つまり閩が杉を「たよりにならぬ、実のない日本人だ」と思い、それからやがてすっかり忘れてしまう―か、または閩が「果して本当のキリスト教徒だったのだろうか」という疑問の解決を杉は図ろうとした。が、杉をがっかりさせたのは、「キリスト信者だった徐光啓の墓は純支那式の形で残されてあった」ことであり、彼はそれを「キリスト教区徐家匯」の創始者、「明代唯一の科学者徐光啓の欲した墓の形式」と信じられない。それに加えて、徐の墓地を「誰一人訪ねる者もなく、秋の陽のあたためるままに、その墓地が置かれてある、そののびやかさ、そのあまりにもあたりまえな姿が」、杉を「心淋しく」、「腹立たしく」させたのである。そうした叙述から、キリスト教の輸入や土着化に尽瘁して、ひいて中西文化の融合に一役を買った草分けへの民衆の無関心に覚える悲しみや、中西文化の対立・衝突を背景としたため中国人でありながらキリスト教信者でもある徐光啓の墓の形式が一方的に純粹な中国式にされたことへの憤りが読み取れよう。にもかかわらず、徐光啓の墓地で見当たらなかった「鍵」を、杉は交通大学の裏門の前で偶然に出会った閩姑娘との会話により探し出したのである。

「杉先生、今日はどこかへ遊びに行きましたか」

「うん、方々。大世界やなんか。君は？君はどこかへ遊びに行つた？」

「いいえ」

「月餅やなんか、おいしい物食べた？」

「いいえ」

「変だね、今時分、一人でどこへ行くの」

「教会の牧師さまのところですよ」（中略）

「そうか。えらいね。こんなに小さくおそく、牧師さんのところへ行くなんて」

笛の音のやんだ闇の中に立ちすくむようにして、杉はあらためて二人の姿を見なおした。娘は小さき、父は大きなバイブルらしき書物をそれぞれ手にしていた。

「しかし、中秋節には、君のところでも紙銭を焚いたり、月宮殿を祭ったりするんじゃないの」

杉は念のために彼女にたずねた。
「いいえ、キリスト教徒はそんなことはやりません」
彼女がやや高い声でそう答えるのを、父なる男は賛成するように首うなずかせて聞いていた。

以上の引用は小説「月光都市」のクライマックスの場面である。テクストにおいて、その年の中国の伝統的祝日である中秋節はたまたま（ほとんど）天主教徒の礼拝の日¹¹日曜とかぶったがゆえに、天主教徒閩姑娘は上海にいる多数の中国人と異なり、天主教の教義を厳守して遊びにも行かなければ月餅も食べていない。しかも、紙銭焚きや月宮殿祭りもしていないのである。ここで十八世紀に発生した「中国礼儀をめぐる争い」（中国語では「中国礼儀之争」）を遡って触れなければならぬ。一七〇四年中国の天主教徒が教皇により中国の伝統的行事に参加することを禁止されたことは、中国人でありながら神に「救済」されたい中国の天主教徒に深刻なアイデンティティ・クライシスをもたらすことになった¹²⁰。なかんずく、儒生である教徒たちは中国伝統の文化人とキリスト教徒としての二つの身分を合わせ持っている。それ以降、中国のキリスト教徒は中国人と基督教徒としての二つのアイデンティティの間でもがいたり、徘徊したりしてきたのである¹²¹。ただし、「キリスト教徒はそんなことはやりません」と言い切る閩姑娘は父とともに中国の伝統祝日である中秋節を祝うような行事への参加を断固として拒否して、文化伝統を保つ中国人より天主教徒としてのアイデンティティのほうに傾いたと言つてよい。それに、王瑩氏の調査により、中国では先祖祭祀や上述したような紙銭焚きなどの伝統的習俗に反対するキリスト教徒が圧倒的に多いことがわかる¹²²。そういう状況は閩姑娘の言動の合理性やリアリティを裏打ちしている一方で、閩姑娘一家の存在がまさに二〇世紀四〇年代に基督教文化と中国伝統文化の交流・衝突する運動的過程の一側面を表象することを炙りだしているのではあるまいか。したがって、それまで閩姑娘の中国人女性としてのアイデンティティを優先させて彼女を認識していたうえに、極端に中国化された天主教徒徐光啓の墓を見物して天主教文化の凋落を痛感した杉は「強いショックで身体がすくみ、やがて

顔がほてる気持がした」わけである。それから、杉は閻姑娘をやめさせる件について確認して、自責しながらその理由を彼女に説明しようとしたところ、閻は以下のように返答している。

「いいえ、杉先生はいい人です。杉先生の気持はよくわかります。キリスト教徒はみんないい人です」
少女は勝ちほこったとも言おうように、自信にみちたおもちで言った。それはあたかも、杉ばかりでなく、自分の少女友だちなどと話し合う時の、あの無邪気な、きかぬ気な口調であった。

以上のセリフは杉が上海語の教授を閻に頼んだ際の彼女の返事と一緒である――「杉さんは良い人です。天主教の人はみな良い人です」。それに応じて、杉の反応は一回目の「苦笑せずにはいられなかった」から二回目の「強い光線で焼き貫」かれたかのように変わった。なぜなら、ここで閻のリプライにいくつかの意味合いが含まれているからである。まず、天主教徒としてのアイデンティティに誇りを持っていればこそ、閻姑娘はバイブルに読みいった、キリスト教徒が「きらいじゃない」と表明した杉に連帯感を覚えて彼を「天主教の人」、「キリスト教徒」と見なして自ずと「いい人」と信じ込んだのであろう。また、「キリスト教徒」と「いい人」との繋がりについてはそれまでのキリスト教の在中国事業を振り返って説明する必要がある。キリスト教の最初の輸入や発展は欧米帝国の文化侵略政策、戦争と癒着することは否めないが、教会は一方において、学校の創立、寄付金の募集、売買春の取締、捨て子や婦女の収容・救助など、中国の社会公共事業、福祉事業の向上に積極的に取り組んでいたことも事実である²⁸³。具体的に上海徐家匯の状況を例に挙げると、崇徳女中や震旦学院などの教育機構、土山湾孤児院や聖母院などの社会福祉機構も基督教会によつて設立されたが²⁸⁴、特に「月光都市」のなかで土山湾孤児院は言及されている。他方で、経済不況が深まりつつあるなか、富裕でない家庭に生まれて給仕として勤めた、つまり下層階級に属する閻姑娘がキリスト教の信仰によつて「救済」されたい願いは推測できよう。それゆえに、閻にとつて弱者層の救助に尽力してきたキリスト教の教徒は「いい人」に等しいという原理が成立したわけであろう。最後に、閻姑娘は「対中国文化事業に関係している」²⁸⁵中日戦争の協力者と言える日本人杉を「いい人」と断定したのは、彼を日本人より先に「キリスト教徒」として認識しているから、言い換えると既述したように閻は天主教徒としてのアイデンティティを中国人としてのアイデンティティに優先させたからと思われる。さらに、「自分の少女友だちなどと話し合う時」の口調で杉と対話したところにより、宗教が性別・民族・国籍に優先するという敬虔な信仰者閻姑娘のアイデンティティにおける認識原

理は一入浮き彫りになった。それで、閻姑娘の認識が内包している危険性を断罪するのはさておき、中国人／日本人の二項対立は中国人女性の天主教信仰により一時的に後景化することになった。それは中国人に対する「判断に自信がな」くて、戦争の協力者としての後ろめたさを抱いている杉は感心した次第であろう。総じて言うと、武田泰淳が造形した敬虔な中国天主教徒「閻姑娘」は多元文化の坩堝である上海という絶好な土壌で、宗教における中外文化の融合・衝突の一形態或は申し子の具象化である。閻姑娘のように貧乏な上海の下層女性には例えば宗教にすがって、信仰者としてのアイデンティティを優先させて持ち貫くことにより、戦争に喘ぎながら苦難を乗り切ろうとする姿勢は浮上してくる。

二、「文化・思想的混血児」の行先——「周女士」を手がかりに

下層女性「閻姑娘」のほかにも、武田泰淳は「才女」の「周女士」や「女の国籍」の「陸淑華」など、閻と同様に多元文化を背景に、多元文化の教育による能力を発揮する職業女性、エリート女性も造形したのである。周晨曦氏は「女の国籍」論において、「私」の父は「武田泰淳と同じように」「思想的にはとくに中日混血になった」と主張している^[85]。ここに周氏が提示した「思想的中日混血」は非常に重要な定義だと考えられる。なぜかというところ、それは「才女」のヒロイン周女士の人物像を分析する際にも通用しているからである。

周女士は「小柄な身体がしなやかで、肉づきも良く。少しはなれると西洋人くさい顔だち」であり、つまり中国人でありながら西洋人っぽい混血的な外見を備える女性である。そのうえで、

日本語のうまさには、この一年間、たえず驚かされていた。東京の大使館の専員時代に遊び歩いたため、うなぎやそば、どここのあんみつがうまいかまで、まちがえずに話した。

というくらいに、周女士は日本語能力の高い、日本滞在の経験をもつ職業女性である。彼女が東京の食べ物に対する詳しきは、彼女の日本に対する興味や親しみをも傍証している。周女士のそうしたところは「女の国籍」における「私」の父にある文化的・思想的な中日混血性に共通していると言える。だが、日本に親近感があり、高い日本語能力を仕事で活用して活躍していた周女士は、「日本の憲兵」を「あしら」ったり、汪精衛の傀儡政権を批判したりした日本人や中国人の高官、有力者に媚びない一面も有する。それに、日本の敗戦後に「漢奸問題がやかましくなっても」周女士は「私は大丈夫ですわ」、「私は中国人ですもの。勝利した中国人ですもの」

と「強氣」を示したのである。それはかえって周女士の「内心のあせり方」をほのめかした一方、考えようによつて彼女が自分の中国人としてのアイデンティティへの「確信」の強靱さも露呈している。周女士のような中国人たちの結末について、武田泰淳は杉の考えを通して発信している。

日本人関係の仕事をしていた中国人の不安動揺は予想以上にちがひなかつた。(中略)たとえば周女士にしたら、表情にこそ出さね、内心のあせり方ははげしいであろう。勤めていた会社はみな日本関係だし、交際範囲も日本人有力者にかぎられていた。才女たる才能をはたらかせる舞台そのものが、上海の日本人社会であつた。それらすべてが消滅した今日、彼女の立場は悲惨なものとなつたと化しつたと言つてよい。

言うに及ばず、多民族、多元文化などを包容する国際都市上海は周女士のような多文化背景や多言語能力を備える人々を活躍させる舞台を提供したが、それはあいにく戦争という大きな歴史的コンテクストに置かれた際に当人の立場を「正義」か「不正義」かという結果に導かずにはおかない。ことに当人の文化背景や能力がほかでもなく戦争の敵国に深い関わりがある時になおさらである。しかも当人が有能者或はエリートであればあるほど、彼／彼女らが母国に対する裏切りの「罪」は深くなる。周女士は最後まで中国人としてのアイデンティティは動揺したことがあるかどうかは当人以外に知るすべもないが、「敵国」の文化背景を利用し、「敵国語」を操り、「敵国人」から豊かな給料をもらった事実から、母国の罪人Ⅱ「漢奸」として断罪されるに決まっている。それは中日戦争下でさまざまな形で中日という多文化的背景に「恵まれて」、両国の言語能力を掌握した有名な歴史人物を顧みるともつと明瞭になる。

川島浪速という日本人を養父にもつ、なおかつ日本で育つた清朝皇族の後裔である「川島芳子」(中国名「金璧輝」)はまず取るに足る一人の女性である。彼女は中国人でありながら第一次上海事変に関与したなど、つまり日本軍に積極的に協力したため、戦後すぐ「漢奸」として死刑に処せられることになつた。川島芳子と親交を結んだものの彼女の運命と対照をなしたのは、「支那の夜」など満洲映画協会が「王道楽土」や「五族協和」のスローガンを宣伝するために制作した映画を出演したことにより人気女優・歌手になつた「李香蘭」(日本名「山口淑子」)である。中国東北(当時の偽「満洲国」)から上海、北京まで転々と駆け回つたりしていた李は中国人有力者の養父をもつたうえに、中国語と日本語のバイリンガルである。ずっと中国人として活躍していた彼女は戦後も川島と同じように「漢奸罪」に処せられようとした際に、自分の日本国籍を証明することによ

り処罰を免れたのである。この二人の女性の「波瀾万丈」の運命について高橋信也氏がこうまとめている。

中国と日本。文字通り、この二人は二つの祖国を生きた。そして引き裂かれた。川島芳子の場合、中国人でありながら日本名を名乗り、日本軍に協力、上海事変の契機を作ったとされる。対照的に、李香蘭は満洲の国策によって中国人スターとされ、日本国籍によって救出されている。中国国籍だった川島は漢奸として処刑。山口淑子の戦後の活躍は周知の通りである。文字通り、明暗を分けた形となった。(中略)立場を超えて俯瞰した時、二重のアイデンティティとその反目が、個人の運命を左右した悲劇と言わざるを得ない。^[287]

高橋氏の以上の知見に筆者もうなずける。良い意味であれ悪い意味であれ、ともかく自分の多文化的背景やバイリンガルの優勢を利用して中日間を越境して活躍していた二人の女性は、「二重のアイデンティティ」の間で徘徊した結果、とうとう「中国国籍」か「日本国籍」かという二者択一に迫られて、相反する行先に逢着したのである。さて、この文化的・思想的「中日混血児」の代表者と言える二人の女性に投げかけられた二者択一を、生物学的Ⅱ血統上の本格的な中日混血児はどのように対処すべきであろうか。ここで上海で活動していた中日混血の諜報員鄭蘋如を取り上げなければならぬ。

三、中日混血児のジレンマ——中国か日本か

中国の国民党员である父と、父が日本留学中に娶った日本人の母を持つている鄭蘋如は、混血児かつバイリンガルであること、それに中国・日本の特質を兼備する美貌やエキゾチック性によって中国国民党の特務機関「中統」と、日本の陸軍参謀本部、「中支那派遣軍」の要職を得ることができた。鄭が当時日本の総理大臣近衛文麿の息子近衛文隆に接近しようとしたことに関して、高橋氏は「中統の仕事に関わることによって「それまで自分の存在を危うくすることもあった混血という宿命を乗り越えられたという実感をもつようになり、「内なる中国人としてのアイデンティティを確信した蘋如は、近衛と出会うことで、近衛に象徴されるもうひとつの祖国でもある、敵国日本と自分の力で向き合おうとした」り、「日本と中国、決裂する二つのアイデンティティを自らのうちで融合し、結果直接平和をもって止揚することを試みようとした」りしたと指摘している^[287]。高橋氏の急所をついた論述に筆者も賛同する。ただし、諜報戦が毎日のように繰り上げられた国際都市上

海を舞台にした鄭蘋如の工作期間は短かった。日本軍に協力した丁黙郵を暗殺する計画が発覚したゆえ、鄭は一九四〇年二月に処刑されることになった。高橋氏の調査では、鄭が死ななければならなかった重要な理由は、その中日混血の外見が持つ魅惑性にある¹²⁸⁸⁾。一方において、鄭は若死にしたにもかかわらず、中日戦争に立たされた彼女は民族・血統上の二者択一において「中国人としてのアイデンティティを確信し」て、なおかつ「漢奸」暗殺事件で犠牲になったことでその「確信」の強靱さを証明したからこそ、国家・民族的な女英雄として記念されてきた。

鄭蘋如の「殉死」より四年後、武田泰淳は彼女が倒れた上海の土に足を踏み入れた。興味深いことに、武田泰淳が上海滞在期間においてずっと世話になった東亜同文書院に勤めた小竹文夫博士は鄭蘋如と以下のような因縁があった。近衛文隆に近付こうとした鄭は小竹の所に行つて、彼女が日本人の母を持つから日本が好きで、もつと日本語を勉強したいなどの願いを小竹に伝えて、近衛文隆と交際することを小竹に頼んだが、小竹はその女性が「後にスパイだということが発覚し、汪政権の機関によって処刑されたのには、まったく一驚した」という¹²⁸⁹⁾。のみならず、鄭は「小竹夫人の信頼」も「取りつけた」のである¹²⁹⁰⁾。よつて、小竹夫婦に強烈な印象を残した混血児鄭蘋如にまつわるエピソードを、小竹家に長く寄宿していた武田は聞かされた可能性が高いと推定できよう。また、郭偉氏は武田の小説「非革命者」における「M喫茶店の彼女」のモデルが「女の国籍」と同様に陳緑妮であることを指摘した¹²⁹¹⁾。それも一理があるが、筆者の管見では、「M喫茶店」の混血女性性が街巷戦で犠牲になったスパイである一面はむしろ鄭蘋如を彷彿とさせるものではあるまいか。要するに、伝奇性に富んだ鄭蘋如の経歴や、同じく中日文化協会で働いた陳緑妮の存在とともに、武田に中日混血児への関心を喚起して、「女の国籍」の創作を促すことになったと言えよう。

また、周晨曦氏が既に論じたとおり、「女の国籍」のヒロインである「私」は中日混血である身分に内在する両義性をはっきりと認識したうえで、進んで日本人に偽装したりして、日本人の名前や日本語能力を利用して仕事しようとした¹²⁹²⁾。それに、中日混血児でありながら「私」はアイデンティティが混乱することなく、混血のままの自分を受け入れているが、「私」を苦しめたのは中日戦争下の外部社会である¹²⁹³⁾。「私」という混血女性像に対する周氏の見解は的中だと思われる。それを敷衍すると、「私」を中国人か日本人かという二者択一に追い詰めようとしたのは「私」自身でなく、外部の人間たち、特に戦争で敵対していた中日両国の人々、ひいては「純粋」を基盤に置き、言語——人種——文化——国民の同一性を理念とする「近代国家だと言わざるを得ない¹²⁹⁴⁾。したがって、「女の国籍」において「日本人なの、中国人なの」という詰問は何回も繰り返されて

いるが、そうした状況は今日でも続いている。例えば下地ローレンス吉孝氏のインタビューでは、「中国のルーツをもつ」混血児はよく「尖閣諸島」（中国側では「釣魚島」）の問題など、つまり中日間の政治・領土問題について聞かれるという¹²⁹⁷。それに対して下地氏は、「ネーションへの強固な結びつき」はいつも混血である「当事者のアイデンティティやポジショナリティ」を二者択一に「執拗に迫られる」と強調している¹²⁹⁸。それはまた「女の国籍」の結末にある、「日本人か中国人か詰問されないですむ時代、それはいつ来るのでしょうか」という切望に満ちた疑問が未だに応答されていないことを裏付けしているように思われる。

むすびに

一九七一年七月に発表した評論「視野脱落をおそれた人」（『文芸』、「高橋和巳追悼特集号」）のなかで、武田泰淳は「八路軍に従軍していた中国の少女が日本軍の捕虜になり、日本の宣撫班将校のもとに配属されて村々を宣撫してまわる」という上田広の「地燃ゆ」に比べて、「中国女性を登場させた日本作家の作品」にある「すぐれたもの」として、本論のなかで既に論じてきた「横光利一」「上海」¹²⁹⁹、阿部知二¹³⁰⁰「北京」、芥川龍之介「南京のキリスト」、田村泰次郎の戦地ものを列挙している¹³⁰¹。ことに横光利一の「上海」について、武田は「上海の蜚」において「五・三〇事件を取り扱った「上海」では、楊樹甫の紡績工場から、デモの先頭にたつて女神の如く現われる女指導者」と述べて、「芳秋蘭」イメージに対する深い印象を綴っている。これらの名高い作品におけるさまざまな中国女性像を念頭に置きながら、中国文学研究者としての武田泰淳はどのような独自性を彼が塑像した中国女性イメージに盛り込んだのであろうか。

かつて谷崎潤一郎、芥川龍之介、横光利一たちが旅人として満喫した国際都市上海を、武田泰淳は阿部知二にやや遅れて足を踏み入れたのである。戦後の言論自由を獲得した武田は上述した中国女性イメージを描出してきた「先輩」たちと異なる角度から日本の男性作家による中国人女性言説のなかに絡み合う対立構図や権力関係にあえて向き合おうとした。そういうところは武田が描いた上海女性イメージから端的に見て取れる、つまり彼とともに中日文化協会に働いていた給仕をモデルにした「閨姑娘」（「月光都市」）、夏少姐をモデルにした「周女士」（「才女」）、そして協会の上海分会の代表役林広吉の秘書だった陳緑妮をモデルにした「陸淑華」¹³⁰²「大和淑子」という上海女性イメージである。この三人は多人種を包摂している「混血的都市」上海で、多元文化を背景にしつつも戦争という非日常的コンテクストにおいて、積極的な社会参画により主体性を確立（しようとした）中国女性の内部に生じたアイデンティティの再構築や再確認を経験したうえに、外部の経済・

終章

本論は一九一九年から一九四五年までの時間を論述の主軸にすると同時に、それをテクスト内の背景にした、そのような時期前後に「中国体験」を持つ日本人男性作家の小説における中国人女性像や、そこから読み取った日本男性作家の中国女性認識などをジェンダー研究、ポスト・コロニアリズムや比較文学などの方法で複眼的に考察している。また、そうした文脈における小説に描出される中国人女性像の発展や、変容・変貌する過程をよりの確に把握するために、可能な限りで互いに何らかの影響関係がある作家の小説を選定した。そして、その変容する過程は以下のようになった。

第一章において所謂「東洋趣味」の代表者とされがちな作家谷崎潤一郎や（中国に行く前の）芥川龍之介の小説を取り上げた。まず第一節のなかで、谷崎潤一郎「西湖の月」の「艷小姐」像における欧米文学と漢文学が対決する実態を明らかにした。「艷小姐」の「病的な美」の背後に、谷崎が親しんだアメリカ作家エドガー・アラン・ポーの方法（論）が機能している、つまり谷崎が「艷小姐」を「見る」視線はポーの視座や方法を媒介としたため、「日本男性」／「中国女性」の権力関係の対立構図に、「欧米男性」／「中国女性」というもう一重の二項対立が重ね合わせられることになった。「西湖の月」は全体的に漢詩文的情緒に満ち溢れたにもかかわらず、「見られる」、「書かれる」客体である「艷小姐」の塑像は谷崎の男性中心の姿勢を暴露しているばかりか、当時の谷崎のなかにある、ポーの方法が表象する「欧米崇拜」が漢詩文を代表とする「東洋趣味」を凌駕している一面も現前化させた。さらに、「艷小姐」のイメージがアヘン戦争、日清戦争以来弱体化していった中華民国を表象した一方で、中華民国と欧米列強、帝国日本との国家間の権力関係にも一致している。続いて、第二節では中国行き前の芥川龍之介が谷崎の中国行きに触発されて創作した「南京の基督」にある「宋金花」における重層的対立構図を炙り出した。芥川が谷崎「秦淮の夜」から「売春する中国娼婦」／「買春する日本知識人」という構図を受け継いで「南京の基督」に取り込んで、「日本の旅行家」／「宋金花」Ⅱ運動的・能動的／静止的・受動的、消費／被消費、超越的／内在的という重層的な二項対立に拡充されたことを明らかにした。一方において、「宋金花」という「売春婦」像はモーパッサン「脂肪の塊」や「寝台二十九号」のヒロインからヒントを得た可能性が高いとともに、彼女は芥川が西欧文明と、西欧文明に憧れて「欧化」してきた日本と前近代的な中国文化との衝突を観照するための媒介としての他者表象だと指摘した。そうすると、前近代的な中国人女性像「見られる」視線にある欧米文化・文学の媒介性或は介在性において、「西湖の月」と「南京の基督」は通底している。最後に、第三節において「宋金花」に類似する「お蓮」という中国（当時は清朝）の

娼婦像について分析した。清国という（後進国）、近代的科学・合理性と対置された（野性）（迷信）、近代文明から劣等のカテゴリに貶められた（娼婦）（狂女）という重層的にステイグマ化されている「お蓮」は、最初から劣等の存在となったことを浮き彫りにしている。科学や知性と対極にある（野性）や（無知）の持ち主である中国娼妓が近代化から排斥された病氣——例えば梅毒や狂氣——に罹患することや、そうした近代化により周縁化された中国人女性と近代文明の恩恵を蒙った日本人男性との対立構図において、「南京の基督」と「奇怪な再会」は一致している。

第二章において、中日全面戦争の勃発まで公私を問わずさまざまな理由で中国の都市——湖南長沙、上海や北京——を見物してきた旅行者としての日本作家による代表的小説をそれぞれ捉え返した。第一節では第一章に引き続き芥川龍之介がやつと念願の中国行きを実現したあとで書き上げられた「湖南の扇」における「玉蘭」と「含芳」という二人の湖南女性像を考察した。この二人の中国女性像は、政局と深く関わる上海の高級妓女、革命に殉じた近代女傑「秋瑾」や、進歩的な湖南の女学生のイメージを彷彿とさせる一方で、革命的な都市長沙の政治的・文化的表象と一体化している。また、彼女らは外見の伝統美と中身にある能動性を兼備しているため、中国の旅以前に芥川が塑造した「宋金花」や「お蓮」のような「弱い」娼婦像と一線を画したように、主体的意識に自覚しはじめた、それなりの行動力を獲得した「強い」娼婦像として中国の激動的な現実を察知した芥川が描き出した中国人女性像の転換点となった。次に、第二節では芥川のアドバイスで上海に行き、「湖南の扇」を代表とする芥川の小説にある政治、革命への関心を意識して創作された横光利一『上海』における女性共産党員「芳秋蘭」の成立について解説した。横光は『上海』の創作にあたり、一九二〇年代に女工運動に身を投じた楊之華や、顧正紅事件に抗議するデモに参加して逮捕された鐘復光という、「五・三〇運動」に大いに貢献した二人の女性党員をモデルとして「芳秋蘭」像を充実させたことを解明した。一方において、『上海』決定版における「芳秋蘭」のスパイ性の増幅は、蒋介石の反共クーデターの下で共産党員が地下工作に潜入した現象と呼応している。そうした行動力や神秘性を併せ持つ「芳秋蘭」はそのまま租界都市上海の重層的な構造を表象している。さらに、「芳秋蘭」像からみた非合理的なメロドラマ的な恋愛は、マルキシズムとの苦闘に疲れはてた横光のプロレタリア文学に定着した「恋愛と革命」の図式化に対するアンチテーゼだと言える。第三節において、横光利一『上海』と中国都市を題材にする小説の双璧と併称された阿部知二『北京』における三人の中国人女性像を中心に検討した。高級妓女である「鴻妹」や知識女性「ヨウ女士」の頹廢的な

官能美は、衰退しつつある北京の和やかな風趣を構成して、ひいては小説の抒情性、幻想性や静止性を醸成している。それに引換えて、「鴻妹」像における複雑な政治性や変動性、「ヨウ女士」に潜んでいる革命意識、ならびに登場していない「少女」の社会参画志向は北京の「不穩の氣」を暗示したうえで、小説の記録性、時局性や運動性を顕在化させている。こうして、小説の女性像と北京像は共振している。ニヒリストである日本人男性がデカダンスの途中で出会った謎めいた中国女性に惹きつけられた構図や、時勢の発展に伴う改作というところで阿部知二『北京』と横光利一『上海』は共通している。最後に、本章の分析から、一九一九年の五四運動、一九二五年の「五・三〇運動」、そして一九三五年の華北事変を背景に、激動する社会情勢にあって主体的意識を自覚しはじめた各階層の中国女性が革命や政局などに積極的に身を投じようとした姿勢が判明する。

第三章では一九三七年から一九四五年にかけての中国戦場を舞台とした、従軍作家や従軍した経験がある作家の書き残した戦地（争）小説における中国女性イメージに照明を当てた。まず、第一節において従軍作家石川達三や、「兵隊作家」の双壁と併称された火野葦平と上田広の戦時下小説に登場する、当時の日本兵隊により「姑娘」と呼ばれた若い中国人女性の群像を繙いて捉え直した。石川達三『生きてゐる兵隊』は日本軍の兵士／現地（ことに南京へ進軍する途中）の「姑娘」の構図に内在する権力の非対称性による身体・精神的暴力性、残虐性をリアルに開示したが、それがために日本当局の輿論を買って懲戒を受けた。それから、日本軍が駐屯した杭州を舞台とした火野葦平『花と兵隊』は軍部の監視下にあることもあって、そこにある「私」と「青蓮」、「河原」と「鶯英」の生ぬるい愛情に満ちた日本人兵士と「姑娘」との関係性が結果として「宣撫工作」に同調するように構築されることになった。それと一直線上にあるのは、河北省、山西省を背景とする上田広「黄塵」や「鮑慶郷」である。上田の二作と火野『花と兵隊』に共通するのは、『生きてゐる兵隊』のなかで中国人女性が被った暴力性は一掃されたいうえで、彼女らの思想性や抵抗性が剥離されて、作中の日本人兵隊に脅威性を持たない存在に転換されたところである。続いて、第二節では山西省を主な舞台とした田村泰次郎「肉体の悪魔」と、「肉体の悪魔」のなかでも言及された中国の女性作家丁玲による「再会」や「霞村にいた時」にある女性党员像を比較しつつ論じた。女性共産党员の（身体）の境遇性或は体験を基軸に、田村「肉体の悪魔」と丁玲「再会」、「霞村にいた時」とは一直線上にある、重なり合いながら相互補完的なテクストである。中日戦争というコンテクストにおいて、「肉体の悪魔」は俘虜になった女性党员の（身体）が敵国の日本兵との関係性により肉欲化、懲戒される一面を明示しているのに対して、「再会」、「霞村にいた時」は戦争・民族・国家的デイスクールに置かれた女性工作員の（身体）が革命化されたうえに、同胞によりそれぞれ神聖化／汚名化され、

ひいては消費される一面を炙りだした。丁玲の作品との比較を通じて、「肉体の悪魔」にある田村泰次郎の限界性は看過できないが、「張沢民」像のリアリティ、「佐田」と「張」の間に立ちはだかる障壁への認識や大胆な自己解剖という意味において、「肉体の悪魔」はそれまでの戦地小説より新たな地平を切り開いたと言える。第三節において、安徽省合肥（当時は廬州）を背景にした武田泰淳「廬州風景」に登場する中国人看護婦「楊さん」を取り上げた。武田は十三妹、秋瑾を代表とする侠女像や、彼の友人である謝氷瑩の瀟洒とした風姿を「楊さん」の造形に投影したばかりでなく、「楊さん」イメージを「脱女性化」の手法で「強化」したのに対して、女性視点で女性を「見る」、「書く」という方法を借りて、男性の視点人物にありがちな鋭気を「弱化」しようとした。それにより、(戦後の言論自由も一役買ったことは言うまでもないが)従来の戦争文学にありがちな日本兵隊（視点人物）／中国人女性（登場人物）の構図に内在する衝突はある程度まで緩和された。

第四章では「太平洋戦争」勃発前後から中日戦争の終息まで上海に滞在していた、「居留民」体験を持つ二人の作家、阿部知二と武田泰淳の（上海もの）を考察した。第一節では阿部知二の（上海もの）——「緑衣」や「陸軍宿舎」にある「李帽」や「曹小姐」のイメージを検討した。「沈明華」は、「放浪し」つづけてきた過去の自分を切り捨てて、「待ち遠しい」平和に向けて行動する信念によって、革命精神を備える新女性「李帽」に生まれ変わったものに対して、「李帽」と同劇団に勤めた「曹小姐」は、中国女性作家関露を一つのモデルにして塑像されたこともあって、前線に駆けつけて「李帽」と異なる形で社会進出に成功した。即ち、戦渦に巻き込まれたものの、この二人の中国女性に独立した主体性・能動性、堅実なアイデンティティや積極的な行動力を持ちながら、躊躇を乗り越えてやっとな確固たる理想と信念を獲得するようになった。一方において、「李帽」像から看取した新女性の性格は、上海淪陥下の中国語雑誌『女声』の主旨と関与しながら、(両性具有)的な方法によるジェンダーの既成構造に対する(脱構築)の試みを示した。それもこれまで論じてきた日本男性作家が築き上げてきた中国女性イメージにある機械性や形骸性に対する、中国と深いゆかりのある阿部知二なりの打破である。また、第二節では武田泰淳「月光都市」における天主教徒「閻姑娘」、「才女」にある有能な職業女性「周女士」や「女の国籍」の混血児「私」こと「陸淑華」イメージを解説した。この三人は「混血的都市」上海で、多元文化を背景にしつつも戦争という非日常的コンテクストにおいて、積極的な社会参画により主体性を確立(しようと)した中国女性の内部に生じたアイデンティティの再構築や再確認を経験したうえに、外部の経済・政治的な力関係に絡め取られていったところで通底している。天主教徒である「閻姑娘」は中国の伝統文化より宗教的アイデンティティを優先させている。「周女士」は日本の文化背景のおかげで戦時下の上

海で大活躍していたが、戦争の終息に伴って文化的混血性によるメリットは彼女を「漢奸」として断罪する証拠となった。中日混血児である「陸淑華」は自分自身の存在意義を確信したが、外部から中国か日本かという二者択一の詰問に追い詰められている。要するに、武田泰淳は多元的文化観に基づいて、個人の身分標識における「混血性」＝多元性を有する中国人女性の生態をこの三人のイメージを通して前景化させている。それに加えて、第三章第三節で既述した武田泰淳が「廬州風景」で試みた「女性視点」レトリックを彼は「女の国籍」において再び活用して、「見る」・「語る」主体としての男性／「見られる」・「語られる」客体としての女性の二項対立を打破した一方で、中国／日本という対立構図を一旦中国人女性像の外部から個人の「混血性」に内在化させた。そういうところはまさに前の三章で考察してきた中国人女性イメージに対する中国文化・文学研究者である武田泰淳なりの「脱構築」の試みである。

繰り返される武田泰淳なりの「脱構築」の試みである。一九一九年前後に谷崎潤一郎や芥川龍之介が中国古典文化への憧れや欧米文化との比較により築き上げた代表的な中国女性像は、制限される空間における受動的でエキゾチックな客体であり、辛亥革命や五四運動など近代中国の革命と無縁な、中国の古典文学の作品に頻繁に見受けられる前近代・伝統的なステレオタイプである。だが、芥川龍之介の中国へ暫く旅行していた作家により造形された中日戦争の勃発まで、近代中国を観察しようとした意識をもって中国へ暫く旅行していた作家により造形された中国女性像は古典文学の引きずりからある程度まで脱却して、近代的主体意識に覚醒しはじめたとともに、「制限される空間」から解放され、革命運動などに参加することにより公共空間に積極的に関与しようとした傾向を示して、同時代のリアルな中国女性に接近するようになった。ところが、そうした変貌する傾向は中日全面戦争の勃発によりいったん切断された。換言すると、とりわけ『生きてゐる兵隊』以降のほとんどの戦時下の戦争小説において中国女性像はリアリティを失い、作中の日本軍に迎合したりする紋切り型の、戦争を正当化するために塑像されていた受動的な虚像である。この逆戻りにブレッキをかけたのは戦後の言論自由である。それゆえに、田村泰次郎「肉体の悪魔」や武田泰淳「廬州風景」を代表とする戦後に発表された戦争小説のなかで、戦時下の中国女性像は強靱さや反逆性というリアリティを取り戻した一方で、個人的内面や身体がクローズアップされたり、「脱女性化」というジェンダーへの「脱構築」が試みられたりした。そうした「脱構築」の傾向はまた「両性具有」の方法や多元的文化観として、「太平洋戦争」時期の国際都市上海に長期滞在した阿部知二や武田泰淳の「上海もの」において明確な主体的意識を持って、経済的独立や社会的進出を追求した「新女性」のイメージに付与され続けた。なおかつ、各自の「上海体験」に基づいた阿部や武田の小説は

より立体的な中国女性像を構築している。つまるところ、五四運動、「五・三〇運動」、中日戦争などの歴史事件を代表とする激動する時代的コンテクストの下で、主体性の確立をはかろうとしていた中国女性／イメージがたどってきた屈折した道が浮き彫りにされている。しかしながら、そうした中国女性像の変貌過程から、中年以上の女性像或は「老女像」が欠落していると言わざるを得ない。すると、青春や生命力横溢の美人表象への偏重と、それに対する年老いた女性表象の不可視化は、日本男性作家が中国女性に期待する特質を示唆していると同時に、中国女性表象の年齢設定において既存のジェンダー構造にとらわれるという男性作家の限界性をも暴露していると考えられる。

一方において、本論で取り扱った作家及びテクスト間における以下のような関係性や継承性が明らかになる。まず、谷崎潤一郎の中国旅行やそれに基づいて創作された〈中国もの〉が芥川龍之介の訪中を促すことになったことは、小説「南京の基督」の結末に加筆された谷崎への謝辞が明示している。なおかつ、芥川龍之介「南京の基督」における「日本人旅行家」／「宋金花」の対立構図は谷崎潤一郎「秦淮の夜」にある「私」／「花月楼」の関係性を参照した可能性が高い。さらに、近代文明の恩恵を蒙った日本人男性と、近代化や合理化から排斥され、かつ重病に罹患する中国娼妓という構図において、芥川「南京の基督」と「奇怪な再会」は共通している。また、中国から帰国した芥川龍之介のアドバイスによって横光利一が上海に足を運んだことを横光はエッセイにおいて明記しているが、横光利一『上海』における「芳秋蘭」像は芥川龍之介『支那遊記』や「湖南の扇」から受けた影響が大きい。それに、「芳秋蘭」像の虚構性からみた恋愛と革命を意識的に対決させようとした横光利一の意図は、後年彼が田村泰次郎の「肉体の悪魔」を夏目漱石賞に押し付けた一要因だと推測できる。また、ニヒリストである日本人男性がデカダンスの途中で出会った謎めいた中国女性に惑溺するという構図や、時勢の発展に伴う改作という点において、横光利一『上海』と阿部知二『北京』は共通していると思われる。最後に、火野葦平『花と兵隊』の「青蓮」像における前近代性は谷崎潤一郎「西湖の月」に大いに依拠している。要約すれば、本研究は日本の男性作家たちのテクストが絡み合いつつ、集団的中国女性イメージを生産、再生産してきた様相の一面を炙り出した。

最後に、中国人研究者の立場に立ち戻れば、以上導き出した中国女性イメージの変容から日本人男性作家が中国女性に対する集団的想像の根深さや特定の時代的コンテクストにおける限界性、そして彼らが構築してきた女性表象と同時代のリアルな中国女性との懸隔を認識しなければならぬ。そのうえで、そうした懸隔の度合いが時代の発展に連動しながら成し遂げてきた変化に目を向けるべきであろう。それに対して、一部の日本

の（とりわけ戦後の）男性作家による「バイアスのかからない」中国女性表象の再構築のための工夫や努力を看過しないうえで、日本男性作家による中国女性像の変遷が中国側の史料や文学と異なる角度より中国の女性運動や女性史を補足することになることも認める必要がある。

にもかかわらず、筆者の力不足、限られる時間や紙幅の制限から本論が看過してしまった中国人女性をヒロインとしたテキストがほかにあることは確かである。それに、日本の歴史や社会発展に対する整理や探究が物足りない。また、研究上の独自性や特殊性から同時期の「植民地台湾文学」や「満洲文学」を割愛した。なお、表象研究と銘打ちつつ、同時代の映画や演劇などにおけるチャイニーズ・ヒロインを取り上げることができなかった。最後に、中日社会が今日的に抱えている課題と結びつけることにより、本研究の射程を拡大させていくことができなかった。そういう問題点を今後の課題として継続的に検討していきたい。

- [1] 鄭永福・呂美頤「關於近代中国の女国民の觀念的歴史考察」、『山西師範大学学報（社会科学版）』第三二卷第四期、二〇〇五年
- [2] 宮内淳子、「西湖の月」の改稿をめぐって——谷崎文学の一軌跡——、『国語と国文学』、東京大学国語国文学会、一九八五年十月、六三頁
- [3] 西原大輔著『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』、中央公論新社、二〇〇三年七月、一三七頁
- [4] 李雁南「谷崎潤一郎筆下的中国江南」、『解放军外国语学院学报』第三二卷第二期、二〇〇九年三月
- [5] 陳玲「西湖の月」における中国人の身体表象——病の少女の身体を中心に——、『多元文化』一一号、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、二〇一一年三月、一〇九、一一二頁
- [6] 宮内淳子、前掲論文、五五頁
- [7] 宮内淳子、前掲論文、五八、六四頁
- [8] 宮永孝著『ポーと日本 その受容の歴史』、彩流社、二〇〇〇年五月、四四三〜四四四頁
- [9] 吉美頤著『谷崎における女性美の変遷——西洋文学との関係を中心として——』、花書院、二〇〇七年十二月、一〇三頁
- [10] 聂方冲「愛倫坡創作中的「美女之死」」、『江西師範大学学報（哲学社会科学版）』第三九卷第五期、二〇〇六年十月
- [11] 中村融「日本でのポーと昭和期（戦前・戦時）（二）」、『茨城大学文学教養部紀要』第十三号、一九八一年、五二頁
- [12] F.C.PRESCOTT. *Selections from the critical writings of Edgar Allan Poe. Gordian Press. 1981. p158*
- [13] 『日本幻想文学集成 5 谷崎潤一郎』、国書刊行会、一九九一年七月十三日、一一〇頁
- [14] 李雁南、前掲論文、一一六頁
- [15] 楊秀芝・田美麗著『身体・性別・欲望』、武漢大学出版社、二〇一三年二月。引用は同書のデジタル版を参照、筆者拙訳。
- [16] 同上
- [17] 『第二の性』を原文で読み直す会訳、『決定版 第二の性—I 事実と神話』、新潮社、二〇〇一年四月一日、三六五〜三六六頁
- [18] 水田宗子「女への逃走と女からの逃走——近代日本文学の男性像——」、『日本文学』四一（一一）、一九九二年、七頁

- [19] 橋浦洋志「南京の基督」考——物語と小説の間」、『茨城大学教育学部紀要 人文・社会科学・芸術』（四二）、一九九三年三月、七頁
- [20] 西原大輔「芥川龍之介「南京の基督」とフロベール」、広島大学日本語教育研究（一八）、二〇〇八年、一〇頁
- [21] 代表的なものとして、三好行雄「地底に潜むもの——『南京の基督』」（『芥川龍之介論』、筑摩書房、一九七六年）、海老井英次「芥川文学作品論事典『南京の基督』」（三好行雄編『芥川龍之介必携』、一九七九年）などの論がある。
- [22] 鷺只雄「南京の基督」新考——芥川龍之介と志賀直哉」（『文学』一九八三年八月）、笠井秋生「『南京の基督』——二通の芥川の書簡をめぐる」（『キリスト教文芸』第二卷、「キリスト教文芸」編集委員会、一九八四年十一月）、栗栖真人「芥川龍之介『南京の基督』論」『別府大学紀要』（二五号、一九八四年一月）の論がみられる。
- [23] 栗栖真人、前掲論文
- [24] 笠井秋生、前掲論文
- [25] 西原大輔、前掲論文・牧野陽子「芥川龍之介「南京の基督」における〈語り〉の構図」、『成城大学経済研究』（一七〇）、二〇〇五年九月など
- [26] 西原大輔、前掲論文、一〇頁
- [27] 『谷崎潤一郎全集 第六卷』、中央公論新社、二〇一五年十二月、一五九頁
- [28] ボーボワール著、『第二の性』を原文で読み直す会訳、『決定版 第二の性 I 事実と神話』、新潮社、二〇〇一年四月一日、三六三頁
- [29] 孔月「〈病〉と植民地の出会い——芥川龍之介「南京の基督」論」、『文学研究論集』（二六）、二〇〇八年一月、二一〇四頁
- [30] 牧野陽子、前掲論文、一二四頁
- [31] 鷺只雄、前掲論文、一二九頁
- [32] 孔月、前掲論文、二〇二頁
- [33] A.H.マズロー著、小口忠彦訳『人間性の心理学…モチベーションとパーソナリティ』、産業能率大学出版部、一九八七年三月
- [34] カール・マルクス著、中山元訳『資本論…経済学批判』、日経BP社、二〇一一年十二月
- [35] 宮坂覚「『南京の基督』論——金花の△仮構の生△に潜むもの——」、『文芸と思想』四〇号、一九七六年二月、二七、四〇頁

- [36] 西原大輔、前掲論文
- [37] 高山鉄男「解説」、モーパッサン著、高山鉄男訳『脂肪のかたまり』、岩波書店、二〇〇四三月、九八頁
- [38] モーパッサン著、太田浩一訳『脂肪の塊／ロンドり姉妹 モーパッサン傑作選』、光文社、二〇一六年九月、九二、九六頁
- [39] 同上、一〇一頁
- [40] 宮坂覚、前掲論文、四二頁
- [41] 同上
- [42] モーパッサン著、太田浩一訳、前掲書、一一一～一一二頁
- [43] 寺田光徳著『梅毒の文学史』、平凡社、一九九九年四、七～八頁
- [44] 同上、九頁
- [45] 孔月「芥川龍之介「奇怪な再会」―隠喩としての狂気―」、『日本語と日本文学』（四二）、二〇〇六年二月、三九頁
- [46] 戴煥「芥川龍之介『奇怪な再会』論―日清戦争を背景にした中日の表象」、『Comparatio』第十一卷、二〇〇七年十一月、三四頁
- [47] 姚紅「「奇怪な再会」論―帝国男性のまなざしをめぐって―」、『文学研究論集』第二六号、二〇〇八年一月、一六一頁
- [48] 陳玲「狂気に陥る女―「奇怪な再会」論―」、『多元文化』第一三卷、二〇一三年三月、六五頁
- [49] 藤村道生著『日清戦争―東アジア近代史の転換点―』、岩波書店、一九七三年十二月、四頁
- [50] 藤村道生、前掲書、一六九～一七〇頁
- [51] 中谷直司「ウイルソンと日本―パリ講和会議における山東問題―」、『同志社法學』第五六卷第二号、二〇〇四年七月、七九～一六六頁
- [52] 周倩、「芥川龍之介『奇怪な再会』論―中国古典文学との比較を起点として―」、『日本文藝学』第五三号、二〇一七年三月、一一二～一一三頁
- [53] 石剛著『日本の植民地言語政策研究』、明石書店、二〇〇五年三月、一七二～一七三頁
- [54] 岡田豊「芥川龍之介『奇怪な再会』への一視点―物語を語る「私」の物語として」、『駒澤国文』（三八）、二〇〇一年二月、一一二頁
- [55] 姚紅、前掲論文、一六九頁
- [56] 陳玲、前掲論文、六二頁

- [57] 周倩、前掲論文、一〇六頁
- [58] 孔月、前掲論文、三八頁
- [59] 戴煥、前掲論文、三〇頁
- [60] 同上、三一頁
- [61] 一八九〇年までに清国は戦艦二、装甲巡洋艦六、巡洋艦二と旅順軍港を擁する近代的艦隊を建設した。大艦名にはいずれも外国を意味する「遠」がつけられたが、とくに日本が意識されていた。北洋艦隊の充実は日本にとつて脅威で、とくに定遠・鎮遠の二戦艦は日本に無言の威圧をくわえていた。(藤村道生、前掲書、三九頁)
- [62] ポール・ケネディ著、鈴木主税訳『大国の興亡(上)』、草思社、一九九三年三月、三〇〇頁
- [63] ボーボワール著、『第二の性』を原文で読み直す会訳『決定版 第二の性 I 事実と神話』、新潮社、二〇〇一年四月、一五六頁
- [64] 芥川龍之介「本所両国」(一)「大溝」、『東京日日新聞』、一九二七年五月六日
- [65] 芥川龍之介「本所両国」(四)「お竹倉」、『東京日日新聞』、一九二七年五月十日
- [66] 芥川龍之介「本所両国」(二)「両国」、『東京日日新聞』、一九二七年五月七日
- [67] 芥川龍之介「本所両国」(五)「大川端」、『東京日日新聞』、一九二七年五月十一日
- [68] 芥川龍之介「本所両国」(六)「一銭蒸気」、『東京日日新聞』、一九二七年五月十二日
- [69] 芥川龍之介「本所両国」(八)「柳島」、『東京日日新聞』、一九二七年五月十四日
- [70] 同上
- [71] 藤村道生、前掲書、一七〇頁
- [72] 戴煥、前掲論文、三四頁
- [73] 陳玲、前掲論文、六五頁
- [74] 金川英雄・堀みゆき、『精神病院の社会史』、青弓社、二〇〇九年一〇月、一二頁
- [75] 杉村幹、『脳病院風景』、北斗書房、一九三七年四月、二〇六頁
- [76] 金川英雄・堀みゆき、前掲書、一一一、一二頁
- [77] 杉村幹、前掲書、六六、九四頁
- [78] ヤニク・リーパ著、和田ゆりえ・谷川多佳子訳『女性と狂気―19世紀フランスの逸脱者たち―』、平凡社、一九九三年六月、二二三～二四頁
- [79] 同上、三六頁
- [80] 同上、三四頁

- [81] 澤田順次郎、『花柳病院』、中央書院、一九一三年八月、一九一〜一二〇頁
- [82] 同上、一三五頁
- [83] ミシェル・フリーコー著、小林康夫ら編、『フリーコー・コレクションⅠ狂気・理性』、筑摩書房、二〇〇六年五月、四一三頁
- [84] ヤニク・リーパ、前掲書、一三六〜一三七頁
- [85] 栗原彬「『科学』的言説による靈的次元の解体構築——大本教へのまなざし」、小田晋ら編『『変態心理』と中村古峽：大正文化への新視角』、不二出版、二〇〇一年一月
- [86] ボーボワール、前掲書、一五四〜一五六頁
- [87] 青柳達雄、前掲論文、七四頁
- [88] 姚紅、前掲論文、六七頁
- [89] 戴煥、前掲論文、三二頁
- [90] 『中国女性の一〇〇年——史料にみる歩み』、中国女性史研究会編、青木書店、二〇〇四年三月二十五日、七〇頁
- [91] ≪五四時期湖南人民革命闘争史料選編≫、湖南人民出版社、一九七九年八月、一一一頁
- [92] 同上、一〇五頁
- [93] 江口渙「その頃の芥川龍之介」、『わが文学半生記』、日本図書センター、一九八九年十月、二一八〜二一九頁
- [94] 姚紅、前掲論文、六〇頁
- [95] 姚紅、前掲論文、六三頁
- [96] 『中国女性の一〇〇年——史料にみる歩み』、中国女性史研究会編、青木書店、二〇〇四年三月、六五〜六六頁
- [97] 「南京快信」、『申報』三、一九一六年九月二十七日
- [98] 姚霏「近代中国女士剪髮運動初探——以『身体』為視角的分析」、≪史林≫、二〇〇九年二月、五七頁
- [99] 邵雍著『中国近代妓女史』、上海人民出版社、一六五頁
- [100] 姚紅、前掲論文、六六頁
- [101] 同上、一七五〜一七六頁
- [102] 溝部優実子「『湖南の扇』…含芳の「扇」を糸口として」、『日本女子大学紀要・文学部』（四八）、一九九八年、三〇頁

- [103] 汪少華「扇子与中国文化」、『台州学院学报』第三四卷第五期、二〇一二年十月、四四〇四五頁
- [104] 周倩「芥川龍之介「湖南の扇」論」、『立命館文学』六六二号、二〇一九年三月、七五四頁
- [105] 「風呂と銀行」、「足と正義」、「掃溜の疑問」、「持病と弾丸」、「海港章」、「婦人—海港章—」、「春婦—海港章—」という七編である。
- [106] 前田愛「SHANGHAI 1925」、『都市空間のなかの文学』、筑摩書房、一九八二年、三九七頁
- [107] 同上
- [108] 松寿敬「『上海』（特集 横光利一の世界）——（作品の世界）」、『国文学解釈と観賞』六五（六）、至文堂、二〇〇〇年六月、一〇〇〇—一〇〇五頁
- [109] 前田愛、前掲書、三八七頁
- [110] 小田桐弘子著『横光利一——比較文化的研究——』、南窓社、二〇〇〇年四月三十日、一九六頁
- [111] 渋谷香織「横光利一の中国観——『上海』を中心に——」、『東京女子大学紀要論集』三八（二）、一九八八年三月十日、八二頁
- [112] 大橋毅彦、前掲論文、一二五頁
- [113] 『内外綿株式会社五十年史』（一九三七年九月初版）復刻版、ゆまに書房、一九九九年十月、七八頁
- [114] 石田仁志・田口律男「『上海』の典拠——『邦人紡績罷業事件と五卅事件及各地の動揺 第一輯』、『横光利一研究』第八号、二〇一〇年六月
- [115] 『邦人紡績罷業事件と五卅事件及各地の動揺 第一輯』、上海日本商業会議所、一九二五年九月、三九三頁
- [116] 鄭凱旋「瞿秋白与《熱血日報》」、『百年潮』、二〇一九年〇八期、二一八—三二二頁
- [117] 『五卅事件調査書 第二輯』、上海日本商業会議所、一九二五年十一月、九五—九六頁
- [118] 進士楨一郎「瞿秋白伝」、「改造」、一九三六年八月
- [119] 馬純古ら『回憶楊之華』、安徽人民出版社、一九八三年、二七頁
- [120] 立間祥介・松井博光共訳、『茅盾回想録』、みすず書房、二〇〇二年九月、二七一頁
- [121] 上海『時報』、一九二四年十二月三十日
- [122] 井上聡『横光利一と中国——『上海』の構成と五・三〇事件——』、翰林書房、二〇〇六年十月、二三四頁
- [123] 同上
- [124] 『五卅事件調査書 第二輯』、上海日本商業会議所、一九二五年十一月、一五二頁
- [125] 姜維新「從二月罷工到五卅運動」、『文史資料先輯（第三輯）』、上海人民出版社、四一頁
- [126] 上海市フアイル館編『五・三〇運動』第二輯、上海人民出版社、一九九一年十月、三三頁

- [127] 同上、四四頁
- [128] 同上、四七頁
- [129] 同上、八三頁
- [130] 同上、八八頁
- [131] 同上、一三一頁
- [132] 上海市フアイル館編『五・三〇運動』第一輯、上海人民出版社、一九九一年十月、五四〇～五四一頁
- [133] 例えば同書の第二輯、二七九～二八〇頁
- [134] 中共「一大」会址記念館研究員葉累整理、「鐘復光談上海婦運与五卅運動」、『世紀』、二〇〇五年〇三期、二二一頁
- [135] 上海市フアイル館編『五・三〇運動』第一輯、上海人民出版社、一九九一年十月、一九三頁
- [136] 龐国翔「少年風華正当時——中国婦女運動早期領導人鐘復光追述」、『党史縱横』、二〇〇八年十一月、五五頁
- [137] 中共「一大」会址記念館研究員葉累整理、前掲論文、三二二頁
- [138] 金子光晴著『どくろ杯』、中央公論新社、一九七六年五月、八〇頁
- [139] 内山完造著『花甲録』、岩波書店、一九六〇年九月、一四一頁
- [140] 李征「横光利一『上海』における五・三〇運動の描写をめぐって——同時代関係史料との比較をとおして」、『文学研究論集』一三、筑波大学、一九九六年三月、八五頁
- [141] 袁小倫ら「同志愛——黄慕蘭与郭沫若」、『党史天地』、一九九四年〇五、〇六期
- [142] 立間祥介・松井博光共訳、前掲書、三四〇頁
- [143] 常家樹「隱蔽戦線上的「奇兵」黄慕蘭」、『党史縱横』、二〇一一年〇三期。郎慕中「帯刺「紅玫瑰」——黄慕蘭隱蔽戦線紀事」、『檔案春秋』、二〇一八年四月
- [144] 例えば向警予、楊之華、王一知、吳先清などが挙げられるが、紙幅の制限で写真の引用を省略する
- [145] 小林多喜二「党生活者」、『現代日本文学大系』55 宮本百合子 小林多喜二集』、筑摩書房、一九六九年十月
- [146] 秦昌弘・尾西康充編『田村泰次郎選集』、日本図書センター、二〇〇五年四月、三三六頁
- [147] 阿部知二「解説」、『阿部知二全集 第一巻』、河出書房、一九五二年八月、二七三～二七四頁
- [148] 安藤一郎「阿部知二論」、『三田文学』、三田文学会、一九三八年九月、一二九頁
- [149] 竹松良明著『阿部知二 道は晴れてあり』、神戸新聞総合出版センター、一九九三年十一月、一四一頁

- [150] 「北京」論、水上勲著『阿部知二論』、双文社、一九九五年三月、一三一、一四一〜一四二頁
- [151] 石崎等「北京一九三〇—一九三五—（異郷）をめぐる二つの小説（I）」、『立教大学日本文学』第七十五号、立教大学日本文学会、一九九六年一月、八一頁
- [152] 王成「阿部知二における中国旅行と文学の表象」、『アジア遊学』一八二号、勉誠出版、二〇一五年四月、一七六、一七九〜一八〇頁
- [153] 阿部知二「美しき北平」、『新潮』、一九三五年十二月、一〇〇、一〇二頁
- [154] 阿部知二「北平眼鏡」、『文芸』、一九三七年九月、一三一頁
- [155] 水上勲、前掲論文、一三三頁
- [156] 阿部知二「自作案内」、『文芸』、一九三八年三月
- [157] 同上
- [158] この論述は筆者の修士論文『阿部知二『北京』の再解読』の一部を参照
- [159] 「支那を語る」、『文学界』、一九三八年一月、一七四頁。出席者は岸田國士、島木健作、芹沢光治良、深田久彌、舟橋聖一、阿部知二、林房雄、小林秀雄、河上徹太郎
- [160] 林語堂著、新居格訳『改訂版 我国土・我國民』、豊文書院、一九三八年十二月、一五一〜一五二頁
- [161] 「北京」——「冬の宿」の発展形として——、竹松良明著『阿部知二論——（主知）の光芒——』、双文社、二〇〇六年三月、一九一頁
- [162] 水上勲、前掲論文、一三四、一三九頁
- [163] 石崎等、前掲論文、八一頁
- [164] 小川直美『『北京』論——日本からの視線、日本へのまなざし——』、『阿部知二研究』六号、一九九九年四月、二二頁
- [165] 阿部知二「北平眼鏡」、『文芸』、一九三七年九月、一三三頁
- [166] 奥野信太郎著『奥野信太郎随想全集 三』、福武書店、一九八四年九月、一七二〜一七三頁
- [167] 奥野信太郎著『奥野信太郎随想全集 一』、福武書店、一九八四年九月、八七〜八八頁
- [168] 同上
- [169] 奥野信太郎著『奥野信太郎随想全集 三』、福武書店、一九八四年九月、一七六頁
- [170] 同上、一七五頁
- [171] 朱子家著『汪政権の開場と収場』、香港春秋雜誌社、一九五九年十月、四三頁
- [172] 宋慶欣「民国時期北京娼妓研究」、首都師範大学、二〇一一年五月

- [173] 石崎等、前掲論文、八一頁
- [174] 阿部知二「北平眼鏡」、『文芸』、一九三七年九月、一三三頁
- [175] 管段著『北平特別市社会局救済事業小史』、北平市社会局、一九二九年、五頁
- [176] 宋慶欣、前掲論文、一二頁
- [177] 小川直美、前掲論文、二二頁
- [178] 『文化学院新聞』、一九三五年十月二十五日
- [179] 阿部知二「王家の鏡」、『改造支那事変増刊号』、一九三七年十月、二八六～二八七頁
- [180] 同上、二九三～二九四頁
- [181] 中華全国婦女連合会編『中国婦女運動史』、春秋出版社、一九八九年十月、三四八頁
- [182] 阿部知二「支那女性グリンプス」、竹松良明編『阿部知二 未刊行著作集』一三、白地社、一九九六年六月、一一〇三頁
- [183] 同上、二〇三～二〇四頁
- [184] 李雁南「近代日本文学中的中国形象」、暨南大学、二〇〇五年、七〇頁
- [185] 五味泷典嗣著『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』、共和国、二〇一八年五月、五六頁
- [186] 石川達三著『経験的小説論』、文藝春秋、一九七〇年五月、三三三～三四頁
- [187] 笠原十九司著『アジアの中の日本軍——戦争責任と歴史学・歴史教育——』、大月書店、一九九四年九月、一六六頁
- [188] 笠原十九司著『南京事件』、岩波書店、一九九七年十一月、九四頁
- [189] 尾西康充著『戦争を描くリアリズム 石川達三・丹羽文雄・田村泰次郎を中心に』、大月書店、二〇一四年十二月、八六頁
- [190] 李雁南、前掲論文、七九頁
- [191] 平野謙「解説 体験者と表現者の問題」、『戦争の文学1』、東都書房、一九六五年七月、四三六頁
- [192] 火野葦平「解説」、『火野葦平選集 第二卷』、創元社、一九五五年、四三〇頁
- [193] 同上、四三四頁
- [194] 成田龍一「戦争」の語り 日中戦争を報告する文体、「増補 〈歴史〉はいかに語られるか一九三〇年代「国民の物語」批判」、ちくま学芸文庫、二〇一〇年、一七七頁
- [195] 小林秀雄「杭州」、張競・村田雄二郎編『日中の120年 文芸・評論作品選3 侮中と抗日1937—1944』、岩波書店、二〇一六年五月、一九頁

- [196] 阿部知二「支那女性グリンプス」、竹松良明編『阿部知二 未刊行著作集』一三、白地社、一九九六年六月、二〇四頁
- [197] 池田浩士「〈異境〉のまなざし 植民地体験と文学」、『ふあっしょファッション 池田浩士表現論集』、社会評論社、一九八三年七月、二四四頁
- [198] 『新日本文学全集 第二十四卷 上田広・日比野士朗集』、改造社、一九四三年三月、一六三頁
- [199] 笠原十九司著『南京事件と三光作戦——未来に生かす戦争の記憶』、大月書店、一九九九年八月、七七〜七八頁
- [200] 同上、七九頁
- [201] 同上、一一一頁
- [202] 同上、一〇八頁
- [203] 程艶芳「近代山西反纏足運動研究」、山西師範大学、二〇一六年
- [204] 江沛・王微「“三寸金蓮”之變：華北中共根拠地的政治動員与女性身体」、『福建論壇・人文社会科学版』、二〇一六年第一期、四七頁
- [205] 陳旭清「心霊的記憶：苦難与抗争——山西抗戰口述史」、浙江大学、二〇〇五年、七四頁
- [206] 武田泰淳「土民の顔」、張競・村田雄二郎編、前掲書、二二三頁
- [207] ボーボワール著、『第二の性』を原文で読み直す会訳、『決定版 第二の性——I 事実と神話——』、新潮社、二〇〇一年四月、三六二〜三六三頁
- [208] 小林秀雄「杭州」、前掲書、一五頁
- [209] 尾西康充著『田村泰次郎の戦争文学——中国山西省での従軍体験から』、笠間書院、二〇〇八年八月、一八頁
- [210] 田村泰次郎の言うセクシュアリティを主に意味する「肉体」と区別するために、本節はモーリス・メルロー『ポンディやミシェル・フーコーの理論を参照したうえで〈身体〉を用いる。』
- [211] ボーボワール著、『第二の性』を原文で読み直す会訳、『決定版 第二の性——I 事実と神話——』、新潮社、二〇〇一年四月、三七五頁
- [212] 同上、二九八頁
- [213] 謝有順「文学身体学」、『花城』、二〇〇一年第六期
- [214] 同上、三六二頁
- [215] 池田恵理子「田村泰次郎が描いた戦場の性——山西省・日本軍支配下の買春と強姦」、石田米子・内田知行

- 編『黄土の村の性暴力 大娘たちの戦争は終わらない』、創土社、二〇〇四年四月、三〇三頁
- [216] 袁良駿編『丁玲研究資料』、知識産権出版社、二〇一一年四月、七〇一五頁
- [217] 丁玲「我与戲劇」、『丁玲戲劇集』、中国戲劇出版社、一九八三年四月、五頁
- [218] 黄丹鑾「革命女性对生命意義的探尋——丁玲的「重逢」再解讀」、『現代中文学刊』、二〇一四年第六期、八〇頁
- [219] 李超傑・張均「文史互動視域下的異質書寫——重讀丁玲《我在霞村的時候》」、『山西大学学报（哲学社会科学版）』第四二卷第五期、二〇一九年九月、八九頁
- [220] 歐陽燦燦著『当代欧美身体研究批評』、中国社会科学出版社、二〇一五年五月、デジタル版、二〇二〇年六月九日に参照
- [221] 同上
- [222] 李超傑、張均「文史互動視域下的異質書寫——重讀丁玲《我在霞村的時候》」、『山西大学学报（哲学社会科学版）』第四二卷第五期、二〇一九年九月、九〇頁
- [223] 李超傑ら、前掲論文、九四頁
- [224] 歐陽燦燦、前掲書、二〇二〇年六月九日に参照
- [225] 同上
- [226] 川西政明著『武田泰淳伝』、講談社、二〇〇五年十二月、一五七頁
- [227] 武田泰淳「わが思索わが風土」、川西政明編『心身快樂 武田泰淳随筆選』、講談社、二〇〇三年七月、二八頁
- [228] 石崎等「『廬州風景』の成立」、『日本近代文学館年誌 資料探索2』、日本近代文学館、二〇〇六年九月、一九頁
- [229] 磯田光一「解説 L 恐怖症患者の振幅」、『武田泰淳全集』第一卷、筑摩書房、一九七八年一月、四〇四頁
- [230] 「十三妹」、『武田泰淳全集』第九卷、筑摩書房、一九七八年十月、一七五頁
- [231] 「秋風秋雨人を愁殺す」、『武田泰淳全集』第九卷、筑摩書房、一九七八年十月、二九四頁
- [232] 同上
- [233] 武田泰淳「禁欲の青春」、川西政明編、前掲書、一六頁
- [234] 武田泰淳「わが思索わが風土」、前掲書、二六頁
- [235] 「月明、笛と風がきこえる」、『武田泰淳全集』第十八卷、筑摩書房、一九七九年七月、二一三頁
- [236] 「死的威嚇」、『謝水瑩散文（下集）』、中国広播電視出版社、一九九三年九月、四一五頁

- [237] 「謝冰瑩事件」、『武田泰淳全集』第一卷、筑摩書房、一九七八年一月、一三九頁
- [238] 封徳屏ら編『謝冰瑩』、国立台湾文学館、二〇一四年十二月、二九五頁
- [239] 「正陽関的難童」、『謝冰瑩散文（下集）』、中国廣播電視出版社、一九九三年九月、三六六頁
- [240] 川西政明著、前掲書、一六六頁
- [241] 「漢奸的兒子——紀念一個英勇孩子的死」、『謝冰瑩散文（下集）』、中国廣播電視出版社、一九九三年九月、二七一頁
- [242] 石崎等、前掲論文、二〇頁
- [243] 同上、二四頁
- [244] 武田泰淳「支那文化に関する手紙」、川西政明編、前掲書、六四頁
- [245] 「上海の蛍」、『武田泰淳全集』第十八卷、筑摩書房、一九七九年七月、一五九頁
- [246] 武田泰淳「わが思索わが風土」、前掲書、二八頁
- [247] 竹松良明著『道は晴れてあり』、神戸新聞総合出版センター、一九九三年十一月、一六六頁
- [248] 竹松良明「北京」と「緑衣」——その質的差異をめぐって——、「阿部知二研究」一一号、阿部知二研究会、二〇〇四年四月、三二〜四〇頁
- [249] 小川直美「『緑衣』におけるまなざしの多層性」、「阿部知二研究」一七号、阿部知二研究会、二〇一〇年四月、四〜一三頁
- [250] 徐静波「阿部知二の「上海もの」に描かれた人物像についての私見」、「阿部知二研究」二〇号、阿部知二研究会、二〇一三年四月、四〜一三頁
- [251] 同上
- [252] 阿部知二「支那女性グリンプス」、『未刊行著作集』一三、白地社、一九九六年六月、二〇二〜二〇四頁
- [253] 詳しくは筆者の修士論文「阿部知二『北京』の再解読」が参考になる
- [254] 小川直美、前掲論文
- [255] 徐静波、前掲論文
- [256] ポーポワールが『第二の性』において打ち出した概念である。〈超越〉——人間は、根源的な投企によって、現にある自分をたえず越えていく。「超越」は、こうしてつねに自らをつくっていく運動としてとらえられる。〈内在〉——「超越」が運動であるのに対して、自らの内にとどまっていること。
- [257] 莫其遜著『従身体到心靈…当代身体研究与性別批評』、人民日報出版社、二〇一五年十二月…デジタル版、二〇二〇年六月十七日に参照

- [258] 「フェミニズムについて」、『阿部知二全集 第一一卷』、河出書房新社、一九七五年五月、一八三頁
- [259] 「陸軍宿舎」、阿部知二著『大河』、新潮社、一九四七年六月、一九三頁
- [260] 同上
- [261] 同上、一九八頁
- [262] 同上、一九二頁
- [263] 吳佩珍「上海時代（一九四二—五）の佐藤（田村）俊子と中国女性作家関露——中国語女性雑誌『女聲』をめぐって——」、『比較文学』四五号、日本比較文学会、二〇〇三年、一三〇頁
- [264] 竹松良明、「『花影』論——阿部知二と佐藤俊子その他——」、「阿部知二研究」二二号、阿部知二研究会、二〇一五年四月
- [265] 「花影」、阿部知二著『小夜と夏世』、池田書店、一九五一年六月、八七—一一二頁
- [266] 「陸軍宿舎」、前掲書、一九三頁
- [267] 塗曉華「非常時の女性啓蒙——『女聲』と田村俊子の上海時代」、江西社会科学、二〇一〇年九月、二四一頁
- [268] 「日華文人懇談」、「大陸新報」、一九四三年十一月二十日（土）日刊三頁
- [269] 「花影」、前掲書、八七—一一二頁
- [270] 吳佩珍、前掲論文、一三四頁
- [271] 「花影」、前掲書、八七—一一二頁
- [272] 「文壇大事記」、錢理群編『中国淪陷区文学大系史料卷』、広西教育出版社、二〇〇〇年、一一九頁
- [273] 吳佩珍、前掲論文、一三〇頁
- [274] 「上海の蛍」、『武田泰淳全集 第十八卷』、筑摩書房、一九七九年七月、一三四頁
- [275] 『武田泰淳全集 第一卷』、筑摩書房、一九七一年十月、古林尚の解題を参照。
- [276] 郭偉、前掲論文、一一五頁
- [277] 周晨曦、前掲論文
- [278] 「わが思索わが風土」、『武田泰淳全集 第十六卷』、筑摩書房、一九七二年八月、四六二頁
- [279] 莫為「自我啓蒙」と徐家匯宗教文化芸術事業」、上海師範大学、二〇一九年五月
- [280] 李天綱「嚴謨的困惑——18世紀儒家天主教徒的認同危機」、劉家峰編『離異与融會——中国基督徒与本色教會的興起』、上海人民出版社、二〇〇五年、五—一〇頁
- [281] 田海華「身分的重構——儒生天主教徒対「十誡」的詮索」、『宗教学研究』、二〇〇六年第二期

- [282] 王瑩「地方基督教的身分建構研究——以中原地区< 県基督教會為例」、上海大学、二〇〇八年五月、一六頁
- [283] 李向平「『本色化』与社会化——近代上海『海派基督教』的社会化歷程」、《上海大学学报(社会科学版)》
第一卷第三期、二〇〇四年五月、八〜九頁
- [284] 李天綱著『人文上海・市民の空間』、上海教育出版社、二〇〇四年、一九四〜一九五頁
- [285] 周晨曦、前掲論文、九五頁
- [286] 高橋信也著『魔都上海に生きた女間諜 鄭蘋如の伝説 1917-1940』、平凡社、二〇一一年七月、一六頁
- [287] 同上、九三〜九六頁
- [288] 同上、一八四頁
- [289] 同上、九〇頁
- [290] 同上、九四頁
- [291] 郭偉、前掲論文、一一五頁
- [292] 周晨曦、前掲論文、九〇頁
- [293] 同上、九二頁
- [294] 成田龍一「日本における「混血児」のディスコース 「戦前」と「戦後」」、川島浩平・竹沢泰子編『人種
神話を解体する 3 「血」の政治学を越えて』、東京大学出版会、二〇一六年九月、一二八頁
- [295] 下地ローレンス吉孝著『「混血」と「日本人」 ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』、青土社、二〇一八
年九月、三一八〜三一九頁
- [296] 同上、三二〇頁
- [297] 「視野脱落をおそれた人」、『武田泰淳全集 第十六卷』、筑摩書房、一九七二年八月、四八三頁

参考文献

一、日本語文献

- マルクス著、菅間正朔訳『経済学批判』、春秋社、一九四九年六月
- 田村泰次郎著『わが文壇青春記』、新潮社、一九六三年三月
- 池田浩士著『ふあつしよフアッション』、池田浩士表現論集』、社会評論社、一九八三年七月
- 山口淑子・藤原作弥著『李香蘭 私の半生』、新潮社、一九九〇年十二月
- 山本哲士著『フリーコー権力論入門』、日本エディタースクール出版部、一九九一年三月
- 瀬戸内晴美著『田村俊子』、講談社、一九九三年十二月
- 中川成美著『語りかける記憶…文学とジェンダー・スタディーズ』、小沢書店、一九九九年二月
- 笠原十九司著『南京事件と三光作戦…未来に生かす戦争の記憶』、大月書店、一九九九年八月
- 和田博文「ほか」著『言語都市・上海：1840-1945』、藤原書店、一九九九年九月
- 杉野要吉編著『交争する中国文学と日本文学：淪陥下北京1937-45』、三元社、二〇〇〇年六月
- 大木康著『中国遊里空間…明清秦淮妓女の世界』、青土社、二〇〇二年一月
- 見田宗介・内田隆三・市野川容孝編『「身体」は何を語るのか』、サイエンス社、二〇〇三年三月
- 中国女性史研究会編『中国女性の一〇〇年…史料にみる歩み』、青木書店、二〇〇四年三月
- 石田米子・内田知行編『黄土の村の性暴力…大娘（ダーニャン）たちの戦争は終わらない』、創土社、二〇〇四年四月
- 金子光晴著『どくろ杯』、中央公論新社、二〇〇四年八月
- 山口淑子著『「李香蘭」を生き延びて…私の履歴書』、日本経済新聞社、二〇〇四年十二月
- 劉文兵著『映画のなかの上海…表象としての都市・女性・プロパガンダ』、慶應義塾大学出版会、二〇〇四年十月
- ミシエル・フリーコー著、小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編『狂気・理性』、筑摩書房、二〇〇六年五月
- レーニン著、角田安正訳『帝国主義論』、光文社、二〇〇六年十月
- 濱川勝彦「ほか」編著『丹羽文雄と田村泰次郎』、学術出版会、二〇〇六年十月
- 秦剛「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象―へ支那趣味―言説を批判する『支那遊記』―」、『国語と国文学』

- 第八三卷第一号、二〇〇六年十一月
- 白水紀子著『中国女性の20世紀…近現代家父長制研究』、明石書店、二〇〇八年六月
- 大橋毅彦「ほか」編著・注釈『上海1944-1945…武田泰淳『上海の螢』注釈』、双文社、二〇〇八年六月
- 工藤庸子編著『異文化の交流と共存』、放送大学教育振興会、二〇〇九年三月
- 末次玲子著『二〇世紀中国女性史』、青木書店、二〇〇九年五月
- 李子雲・陳惠芬・成平編著、友常勉・葉柳青訳『チャイナ・ガールの二世紀…女性たちの写真が語るもうひとつの中国史』、三元社、二〇〇九年七月
- 李貞徳著、大原良通訳『中国儒教社会に挑んだ女性たち』、大修館書店、二〇〇九年十二月
- 井上紅梅著『支那風俗』、大空社、二〇一〇年一月
- 渡辺一民著『武田泰淳と竹内好…近代日本にとっての中国』、みすず書房、二〇一〇年二月
- 高橋信也著『魔都上海に生きた女間諜…鄭蘋如の伝説1914-1940』、平凡社、二〇一一年七月
- 尾西康充著『戦争を描くリアリズム…石川達三・丹羽文雄・田村泰次郎を中心に』、大月書店、二〇一四年十二月
- 張競・村田雄二郎編『侮中と抗日：1937-1944』、岩波書店、二〇一六年五月
- 張競・村田雄二郎編『断交と連帯：1945-1971』、岩波書店、二〇一六年六月
- 川島浩平・竹沢泰子編『「血」の政治学を越えて』、東京大学出版会、二〇一六年九月
- 中川成美著『戦争をよむ…70冊の小説案内』、岩波書店、二〇一七年七月
- 上野千鶴子・蘭信三・平井和子編、山下英愛「ほか」著『戦争と性暴力の比較史へ向けて』、岩波書店、二〇一八年二月
- 上野千鶴子著『女ざらい…ニッポンのミソジニー』、朝日新聞出版、二〇一八年十月
- 秦剛「上海で出発した戦後派作家——雑誌『新生』の堀田善衛と武田泰淳」、『すばる』二〇一九年三月号、二〇一九年二月
- 坪井秀人編『ジェンダーと生政治』、臨川書店、二〇一九年三月

二、中国語文献

- 丁玲著『蘇区的文芸』、南華出版社、一九三八年
- 戴緒恭著『向警予伝』、人民出版社、一九八一年
- 楊世驥著『辛亥革命前後湖南史事』、湖南人民出版社、一九八二年
- 楊之華遺著、洪久成整理『回憶秋白』、人民出版社、一九八四年 中華全國婦女聯合會編『中國婦女運動史…新民主主義時期』、春秋出版社、一九八九年
- 丁言昭編『郁達夫日記』、山西教育出版社、一九九七年十一月
- 唐宝林·陳鉄健著『陳独秀与瞿秋白』、中國青年出版社、一九九七年十二月
- 孫淑·湯淑敏主編『瞿秋白与他的同時代人』、南京大學出版社、一九九九年一月
- 丁玲著『丁玲全集』、河北人民出版社、二〇〇一年十二月
- 黃華著『權力，身体与自我…福柯与女性主義文學批評』、北京大學出版社、二〇〇五年六月
- 西原大輔著、趙怡訳『谷崎潤一郎与東方主義…大正日本の中国幻想』、中華書局、二〇〇五年八月
- 邵雍著『中国近代妓女史』、上海人民出版社、二〇〇五年十一月
- 汪民安著『身体、空間与後現代性』、江蘇人民出版社、二〇〇五年十二月
- 田伏隆編『湖南近代百年史事日志』、湖南人民出版社、二〇〇九年十一月
- 袁良駿編『丁玲研究資料』、知識產權出版社、二〇一一年四月
- 林語堂著、王海編『中国新聞輿論史（1968年版）=A history of the press and public opinion in China』、暨南大學出版社、二〇一一年八月
- 西蒙娜·德·波伏瓦著、鄭克魯訳『第二性』、上海訳文出版社、二〇一一年九月
- 楊秀芝·田美麗著『身体·性別·欲望』、武漢大學出版社、二〇一三年二月
- 钟桂松主編『茅盾全集』、黃山書社、二〇一四年三月
- 周芬伶編選『謝冰瑩』、國立台灣文學館、二〇一四年十二月
- 大橋毅彦「ほか」編『上海租界与蘭心大戲院…東西芸術融合交匯的劇場空間』、上海人民出版社、二〇一五年一月
- 李小江著『女性烏托邦…中国女性／性別研究二十講』、社會科學文獻出版社、二〇一六年五月
- 林語堂著、黃嘉德訳『吾国与吾民』、湖南文芸出版社、二〇一六年六月

林語堂著、越裔漢訳『生活的芸術』、湖南文芸出版社、二〇一六年六月
西格蒙德・弗洛伊德著、周麗訳『精神分析引論』、武漢出版社、二〇一九年一月

三、英語文献

- Paul Kennedy, *The rise and fall of the great powers : economic change and military conflict from 1500 to 2000*, Fontana Press, 1989
- Edward W. Said, *Culture & imperialism*, Vintage, 1994
- Edward W. Said, *Orientalism*, Penguin Books, 2003
- Judith Butler, *Gender trouble : feminism and the subversion of identity*, Routledge, 2006
- Benedict Anderson, *Imagined communities : reflections on the origin and spread of nationalism*, Verso, 2016

初出一覧

(それぞれ書き改めたうえで、博士論文に組み込んでいる)

第一章

第一節

「絡み合う漢詩文とエドガー・アラン・ポー——谷崎潤一郎「西湖の月」における躰小姐像を手がかりに」、『立命館文学』第六六九号、二〇二〇年九月

第二節

The multiple oppositions in the image of "Soukinka"-On Ryunosuke Akutagawa's *Nankin no Kirisuto*, *International Journal of Social Science and Education Research*(Volume3 Issue8), 2020.7

第三章

「芥川龍之介「奇怪な再会」論——日清戦争・近代化を背景にした〈狂女〉の生成」、『阪神近代文学研究』第二一号、二〇二〇年五月

第二章

第一節

(中国語)『動蕩与变革中的中国女性形象——論芥川龍之介《湖南的扇子》』、『牡丹江大学学报』第二九卷六号、二〇二〇年六月

第二節

「『芳秋蘭』の虚と実——横光利一『上海』における女性共産党員をめぐる——」、『横光利一研究』第一八号、二〇二〇年三月

第三節

「〈北京〉の女性像・女性的北京像における二重性——阿部知二『北京』を中心に」、『阿部知二研究』第二七号、二〇二〇年四月

第三章

第一節

The Image of "Chinese girl" in Japanese War Literature: Taking Tatsuzo Ishikawa, Ashihei Hino and Hiroshi Ueda as examples, Lifelong Education (Volume9 Issue5), 2020.9

第二節

The "Body" Caught between Two Fires: A Comparative Study of *The Demon of the Flesh* Written by Taijiro Tamura and the Images of Female Communists in Ding Ling's Literary Works, Journal of Social Science and Humanities (Volume2 Issue7), 2020.8

第三節

「日本看護婦に語られた中国「女傑」——武田泰淳「廬州風景」論——」、「論潮」第一三号、二〇二〇年七月

第四章

第一節

「阿部知二の〈上海もの〉における新女性——関露・田村俊子・雑誌『女声』との関連性を手がかりに——」、「阿部知二研究』第二六号、二〇一九年四月

謝辞

本博士論文の執筆にあたり、数多くの方々からご教示、ごアドバイスやご協力をいただきました。ことに、本論文のテーマや研究計画を首肯してくださった指導教官の中川成美教授には、心より敬意や感謝の念を申し上げます。入学以来、私はいつも中川先生の視野の広さに感服するとともに、先生のユーモアをまじえながら、包容や平等に基づいた姿勢に心を打たれてきました。

また、特別研究の授業において色々助言してくださった瀧本和成教授、花崎育代教授、田口道昭教授、授業外私の質問を優しく解答してくださった内藤由直教授、私の留学申請から論文のネーティブチェックまでずっと親切に助けてくださった、しかも阿部知二研究に関して重要な資料を送ってくくださった竹松良明教授に感謝の意を深く申し上げます。なお、田村泰次郎「肉体の悪魔」論について貴重なごアドバイスをいただきました三重大学の尾西康充教授、横光利一「上海」論についてご意見をいただきました大阪樟蔭女子大学の黒田大河教授や北京外国語大学日本学研究センターの秦剛教授、阿部知二の作品論についてご教示をいただきました清華大学の王成教授に心より感謝を申し上げます。

さらに、私の学会発表にあたり、いろいろお世話になりました阿部知二研究会の皆様、立命館大学日本文学会の皆様、阪神近代文学会の皆様、日本文学協会の皆様、占領開拓期文化研究会の皆様、日本比較文学会の皆様、横光利一文学会の皆様に深く感謝を申し上げます。皆様のご発表やご質問などはしばしば私に新たな刺激やヒントを与えてくださいました。それに、中川ゼミの皆様や博士後期課程の皆様にもお世話になりました。私の博士論文の完成にご協力いただきましたほかの方もいらっしゃるかと思存しますが、ここで改めて感謝の意をお表しします。

最後に、而立の年を既に過ぎた私を支えてきた、知識を尊重する両親にもお礼を申し上げます。とりわけ、仕事や生活の困難に積極的に立ち向かって、身をもって女性の独立の重要さを教えてくださいました母に感謝の意を申し上げます。

「人文学」という概念から「人」、「人間」の重要性が伺えますが、思いも寄らないコロナ禍以来「人」の脆弱性を痛感させられました一方で、「人文学」の意義に関しても考え直させられました。今後も「文学研究者」だけでなく、「人文学研究者」の自覚を持ちつつ、頑張っていこうと存じます。

二〇二〇年九月十三日